三冠牝馬が女性ジョッキーに転生する物語

ｎの者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三冠牝馬が人間の女の子に生まれ変わって、前世で主戦騎手だった調教師とともにがんばる物語です。騎手や調教師など、馬とホースマンたちの群像劇でもあります。

※この作品に登場する騎手、調教師、競走馬などは全て架空のキャラクターです。あらかじめご了承ください。

※ガバガバな部分もある自己満作品ですが、よかったらおとぎ話でも読むような気持ちで読んでください。よろしくお願いします。

目　次

サーチライト（天才が愛した三冠牝馬）――――1
リスターター（もう一度あなたと歩む道）――――10
※設定・キャラクター紹介（6／1更新）――――26
デイライトガール（彼と彼女の蹄跡を知る記者）――――29
アコガレノセンパイ（怪物女性ジョッキーの覇道）――――36
ドウキ（共に並び共に往く友）――――42
【競馬】リーディングジョッキーはやはりあの男・・・！【受賞コメントあり】――――52
ホタルミヅキ（葉流の英雄とその娘の物語）――――62
キングオブジョッキー（競馬ゲームにおける諸事情）――――75
パピヨン（闇に飛び去る翅のような）――――83
ベストチューナー（乗り替わりの悲喜の差配）――――87
センパイトセンパイ（時にはかしましく）――――93
フォーユアアイズ（輝きの向こう側の景色を、貴女に）――――101
ヌーベルベケット（懐かしい友と京都競馬場）――――117
【競馬】日本ダービー反省会（全3件）――――127
ポッピングサワー（初夏情緒微炭酸風味）――――132
クロニクル（青、水色縦縞、袖黄一本輪）――――138
ブレイブボーイ（微笑は雪解けのごとく）――――142
シーイズミラコー（ある意味現代競馬の常識に逆らう女）――――149
騎手会主催　ファンフェスティバル！――――154
フォビア（馬に乗るということ）――――164
イチダイジ（夏の競馬場）――――168
ワンスインアライフタイム（思い出の関屋記念）――――173

ワンデーエイト（郷田ひとみが止まらない）―――― 177
フォーアワーアイズ（代打騎乗！）―――― 182
シカノコサージュ（花道と花束）―――― 193
ロールロマンス（メリル・ミモザの冒険）―――― 200
小ネタ　女性ジョッキーが倒せない―――― 209
醒睡章―――― 214
夢名抄―――― 225
方情記―――― 234
探照光―――― 244
探照幸―――― 257
ホワイトページ（まっさらなページに描くもの）―――― 261

サーチライト（天才が愛した三冠牝馬）

夢の中で、末永長介（すえながちょうすけ）はビデオを見ていた。

厳密にいえばビデオではないのかもしれないが、テレビ画面に映し出される映像が過去の自分と彼女――「サチ」のレース集だったので、ビデオが回っているんだと、そういうふうに現状を把握していた。

自宅のソファに腰かけながら、淡々と蹄跡を振り返っていく。

ふと隣に気配を感じて視線をやると、高校生くらいの少女の姿があった。彼女もまた画面に釘づけになっていた。

見知った顔ではなかった。暗い茶色の髪の毛を後ろでまとめた少女の顔は、これまでの長介の記憶にはどこにもいなかった。だが、不思議と親類縁者あるいは友人のような、違和感のなさというか、気の置けなさを感じた。

改めて画面に視線を戻す。レースを見ていると、その時の場面がありありと思い出されてきた。その時の精神状況や、息遣いや、風を切る音や蹄の音まで蘇ってくるようだ。

走馬灯、そんな言葉がふとよぎった。

それならそれもいいか。長介が独りごちると、隣の彼女の丸い瞳が彼を射抜いていた。

ややあって、少女は微笑んで長介の胸元に顔を埋めてきた。長介もまたそれを受け入れて彼女の後頭部と後ろでひとまとめにされている髪を撫でた。

なんだか懐かしい感覚だった。

『チョーさん……』

あどけない少女の声が鼓膜を揺さぶった。

その直後、彼の意識は覚醒し、自らの手術が無事に終了していたのだという事実を知った。

※

晴駿１２月号　「名騎手が愛した名馬たち」より

天才と謳われた騎手を襲った突然の病、そして引退から幾つも月日が流れた。

彼の胸中を知るべく我々は取材を重ねてきた。
デビュー。初勝利。かけがえのない名牝との出会いと別れ。恩師。盟友――
これは本誌独占インタビューである。かねてから交流のある筆者に対して、彼は素顔で話してくれた。
天才と呼ばれながら三十歳という若さでステッキを置いた末永長介という人間がどのような道を歩み、どんな思いでターフに別れを告げたのか。
（中略）
――さて、それでは末永さんのキャリアを語るうえでは絶対に外せない牝馬の話に移りたいと思います。これは既に聞いたり文章になったりしていることではありますけど、サーチライトという競走馬の第一印象について聞かせてもらえますか。
『藤坂先生（故・藤坂寅一元調教師）から「いい牝馬がいる」と話を聞いていたので、どんな子なのかなと思って乗ってみたら確かにすごかったですね。だけど、この時はまだまだ子供という感じで、まさかトリプルティアラを獲れるなんて夢にも思っていませんでした（笑）』
――最初から特別な存在だったというわけではなかったんですね。
『ええ。ですけど、スピードに乗ったら誰も追いつけないんじゃないかと思うくらい速かったので、競馬を覚えたらいいところまで行けるかな、とは思っていました』
――藤坂調教師は「クラシックを獲れる」とおっしゃっていましたが、末永さん本人の手応えとしては？
『オープン入りはできると思いました。ですが、先生はあまりこういうことを言わない方なので「これはもしかしたらもしかするかも」とも思いました。実際は、まさに先生の言った通りになりましたね』
――デビュー戦は新潟の芝・一六〇〇メートルでしたが・・・
『どうにかなだめたかったんですけど、完全に場に呑まれちゃってたみたいですね。ゲート練習もだいぶしたんですけど、本番で成果が出ませんでした』
――ゲート難はその後も続きましたね。

『どうしても子供っぽいところがあったので、そのせいでしょうね。桜花賞くらいまではまだまだ子供という感じで、オークスの前くらいからようやく本格化してきたな、と感じました。その頃になるとゲートも克服してくれました』

※

「サチ、お前もやっと競馬を覚えてきたみたいだな」

たてがみを軽く撫でて、長介はそう語りかけた。もちろん返事などない。相手は馬なのだ。

輪乗りの最中、じっとりとした汗の感触を拭い去るように手綱を持つ手に力を入れた。

するとふいに彼女が脚を止めた。

何事かと思い手綱を緩める。顔を横に向けた彼女は、いたずら好きの子供のように舌をぺろりと出して片眼だけ瞬きをしてみせた。ちょうどウインクのように。

いつものやつか、と長介は相好を崩す。

これは彼女の、サーチライトの癖なのだ。調教の時もたびたびするもので「さあこれから走るぞ」というようなものだ。ある種、ルーティーンなのかもしれない。

長介の中でもこれは合図だった。彼の中に心地良い緊張とアドレナリンが走る。

※

末永長介が初めて重賞を勝利したのは四年前。彼がデビューした年だった。新人騎手の身でありながら卓越した技術と強心臓で六十近い勝ち星を積み上げて、最多勝利新人騎手の座を手にした。翌年、翌々年もまた前年を上回る勝利数を挙げ、減量特典も早々に返上、重賞勝利の数も増えていった。有力馬の騎乗依頼も多く舞い込むようになった。

ＧＩの騎乗依頼も来るようになったが、末永はそのチャンスをものにできずにいた。

惜しい二着こそあったものの、箔として「一番」と「二番」の差はあまりにも大きい。

焦っているわけではなかったが、このままでいいとは思わなかった。だからこそＧＩの舞台では気合いが入ったが、同時に力みもあった。

「末永は大舞台に弱い」と揶揄されたこともある。「不完全な天才」と呼ばれたこともあった。

サーチライトと出会った時、末永は「わんぱくな牝馬が来たもんだ」と思った。人懐っこい性格で、末永や厩務員が近くに来ると馬房からいなないたり顔を近づけてきたりした。リンゴを好んで食べ、馬の好物という印象の強いニンジンはむしろ嫌っていた。

一番人気と期待されて臨んだデビュー戦は、ゲートで失敗し終始最後方からの競馬になった。末永自身、スタート直後に落馬しかけるほどに体勢を崩したがなんとか持ちこたえてどうにか回ってきたという感じだった。レース後は藤坂調教師から「仕方ないね。これも経験」と声をかけられた。

気を取り直して挑んだ二戦目は、最速の上がりを叩き出して驚くほどあっさりと勝利を収めた。持ったままで四馬身差。

三戦目、四戦目もそこまで労せずに勝ち星を挙げることができた。この頃になると、調教師だけでなく末永自身もクラシックを強く意識するようになっていた。

迎えた桜花賞。二歳女王となった牝馬と人気を二分しての二番人気に推されたサーチライト。鞍上は若き天才。不安は彼女の気性だけだった。

だが、陣営の不安は的中する。パドックから激しくイレ込み、ゲート裏では切れた口から血が滲んだ。スタートは出遅れ、後方からの競馬を余儀なくされた。

それでも、サーチライトは我々の想像を遥かに超えた末脚でＧＩの座を射止めた。末永にとって初めてのＧＩ勝利でもあった。

――このＧＩ勝利は、サーチライトはもちろんご自身にとっても初めてのＧＩ勝利だったわけですが、どうでしたか？

『検量室に引き揚げてきたら、藤坂先生が泣いていて、それを見て僕も思わず……という感じでした。若手の先輩や、オーナー（故・

幸野松太郎氏（こうのまつたろう）からも「ついにやったな。おめでとう」と言っていただいて。感無量でした』

――本当の意味で末永長介が天才としての歩みを踏み出した瞬間だったかもしれませんね。

『GⅡ・GⅢは勝てるけどGⅠだと勝てない、というのは自分の中でも超えないといけない壁だったので、それがようやく超えれたかな、と』

――それから一か月後のオークスでは挑戦者ではなく女王としてライバルを迎え撃つという格好になりましたが、その過程で末永さんには気持ちの変化はありましたか？

『はい。ありました。先程言ったようにサチが精神的に成長してきたということが実感できたので、ある程度どんな形でも対応してくれるだろうと思うようになりました』

――おっしゃるようにオークスでは先行集団にとりついて上手く折り合い、直線で抜け出して優勝。最後のほうはわりと抑えめでした。このあたりで自信が確信に変わった、といってもいいんじゃないでしょうか？

『そう、ですね。彼女も、僕も、ひとつ精神的に強くなったことで余裕ができたのか、呼吸が合ってきた。それまではビッグレースになると「どういう作戦でいこうか？」って考えたりしてたんですけど、「自分達らしくやれば負けない」という自信が持てたというのが大きいですね』

（中略）

古馬になってからもサーチライトと末永の快進撃は続いた。春シーズンに三戦三勝（うちGⅠ二勝）を挙げると、凱旋門賞のプレップレースであるフォワ賞への出走が決まった。まだ二十代の若者であった末永は最高の相棒に大きな期待と信頼を寄せていた。

「サーチライトは間違いなく世界で通用すると思っていましたし、自分の腕がどこまで世界で通じるのかを試してみたかった」

しかし思わぬところで末永は試練に直面する。

騎手になってからはもちろん、生涯初となる海外遠征で、彼はコンディションを維持することができなかった。

「大変でしたね。水が合わないのか、食べ物なのか、気候なのかなんなのか……。下痢が続いて。来たばかりの時はひどかったです」

※

フランスで滞在している厩舎から調教場所である競馬場までの道のり。その道中、汗だくの長介の意識は朦朧としていた。前夜から続く高熱にうなされていたのだ。

跨っているサーチライトが頻りに脚を止めるので、そのたびに彼は前に行くように促した。だが、次第に手綱を握る手にも力が入らなくなってきた。

長介はとうとう馬から下りて、そのまま意識を失ってしまった。

――どれくらい経っただろう。

ぼんやりと瞼を開けると、黒鹿毛の馬体が真っ先に飛び込んできた。

眼が合うと、木にもたれかかるように座り込んでいる自分の胸元に鼻先をすり合わせるように顔を近づけてきた。馬房でよくやるアレだ。

ただ、薄く開かれた自分の目にはそれが古いフィルムの映像を見ているかのように思えた。現実味がない情景だった。

「あ……」

物憂げな彼女の表情に気がついて、小さく声を漏らした。

馬に感情があるのかどうか、長介にはよくわからない。ただ、少なくとも彼女に対しては、そういうものがあるんじゃないかと思っていた。人間においても感情の機微がはっきりしているタイプと、そうではないタイプがある。それで当てはめると恐らく彼女の感情の機微はわかりやすいほうなのではないか。喜怒哀楽がはっきりしている、表情豊かな女性になるのではないか、と。

何の気なしに取り留めのない妄想を膨らませると、思わず笑みがこぼれた。

「情けない騎手でごめんな……」

自嘲気味に言うと、彼女は否定するかのように首を振っていなないた。

「お前、馬のくせに人間味あるよな」

※

三冠牝馬で、凱旋門賞に挑むというプレッシャーは計り知れないものだった。

これまで日本の競馬が幾度も挑戦し、跳ね返されてきた巨大な壁。極東の小さな島国で「天才」と呼ばれた少年も、その重圧には苦しんだ。

しかし、フォワ賞での勝利が彼に落ち着きを与えることとなった。

着差こそ際どいものであったが、接戦をものにしたという感覚は彼らにとって確かな収穫だった。また、徐々に末永がフランスの風土に慣れてきたことも陣営に安堵をもたらした。

いよいよ初の凱旋門賞制覇か、と機運が高まるなかで迎えた凱旋門賞。

二番手の位置につけ、絶好の手応えでレースを進めるサーチライト。ただ、あくまで末永は無心でレースを進めた。

最終コーナー、壮絶な追い比べは写真判定にまでもつれた。

結果は二着だった。

――あの二着は、本当に惜しかったと思います。僅かな差でした。

『でも、ゴールした瞬間に「差されたな」っていう感覚はありましたね。フォワ賞の時もほとんど同じシチュエーションでしたけど、その時と違ってすぐ「負けたな」と思いました』

――あえて敗因を挙げるとするならば何でしょう。

『……敗因ということではないかもしれないですけど、人馬どちらもベストな状態で臨んで、あの着差だったので、もう「運」としか言い様がないですね。力の差はなかったと思いますよ。ベストレースでした』

陣営は失意に暮れることもなく、早くも翌年の凱旋門賞出走を宣言。リベンジを誓う。

しかし、その直後に突然の訃報が舞い込んでくることになる。

帰国後はジャパンカップへ向けて調整をする予定になっていた。しかし、日本に帰って来てから二日後、馬房で眠るように亡くなって

いるサーチライトの姿が発見された。心不全だった。
「大きな怪我もなく、ずっと頑張ってくれていた馬なので、とても驚いていますし、残念でならないです」
「最後まで夢を見せてくれた、馬主孝行な馬でした」
藤坂、幸野の哀悼の言葉とともに、末永も相棒との突然の別れを惜しんだ。
「信じられない、というのが率直な気持ち。僕にとってどこまでも特別な存在でした」
六つのＧＩタイトルと、凱旋門賞二着を置き土産に、名牝サーチライトは短すぎる生涯に幕を下ろした。
その後、末永にとって「名馬の条件」は、「彼女にどれだけ近づけるか」というものになっていった。
ダービー、天皇賞、有馬記念といった大レースにも勝利し、全国リーディングジョッキー、さらには騎手大賞にも輝いた。末永長介はまさに名実ともにトップジョッキーになったのだった。
そんな末永に転機が訪れたのは三十歳の時だった。脳梗塞を発症し、長期の療養とリハビリの日々を過ごすことになった。
しかし、実はその前から彼は「引退」を考えていた。
――引退を決断されたのはどの時期だったんでしょうか。
『実は入院する前から引退のことは考えていました。具体的な時期までは決めてなかったんですけど、「あと数年……ここらへんかな」と思ったんです』
――それは何故ですか？
『その前の年に怪我をしたり、色々なことがあったので、段々と引き際を考えるようになったんです。後は同期や後輩にも辞める騎手がいて、自分がどこまでやれるのかを考えたこともありました。なので早くから調教師に転向することは考えていました。で、病気になって「そういうタイミングなんだな」と、かえってすんなり決断できましたね』
（中略）
――末永さんにとってのサーチライトはどんな存在ですか。

『ちょっと……ひとことでは言えないですよ』

――様々な思いがあると思います。

『三冠や凱旋門賞といったキャリア的な意味でのターニングポイントでもありましたけど、それ以上に、彼女との日々を通して僕の中のホースマンとしての芯の部分が形作られていったと思います。技術だけでなく、競馬に対する向き合い方という面でも。嬉しいことも悔しいことも悲しいことも、いくつも与えてくれました。それが無かったら「末永長介」は今ここにいないわけですし。今でも彼女のようなサラブレッドに出会えたらと思っていますけど、きっともうあんな馬には出会えないとどこかで思っているんです』

――もし今、サーチライトに言葉をかけるとしたら。

『言葉、ですか……。まあ相手は馬なので会話はできないんですけど、やっぱり感謝の言葉を言いたいと思います』

リスターター（もう一度あなたと歩む道）

実力、人気ともに日本トップクラスだった長介の引退は大きなセンセーションを巻き起こした。影響は競馬界に留まらず、普段は競馬のニュースなど流さないような朝や昼の情報番組にも彼の名前が挙がるほどだった。

長介は、退院後も決して復帰は考えなかった。リハビリを重ねた今でも、右手に力が入らないのだ。予想していたよりも早くその時が来てしまったわけだが、きっとそういうタイミングだったんだと受け入れた。

調教師として再スタートを切った長介だったが、はじめの頃はだいぶ苦労した。「名選手、名監督にあらず」の言葉のように、騎手として優秀な成績を残した者が必ずしも名調教師になれるとは限らない。今でこそ厩舎から重賞を勝てる馬が出てきてはいるが、それでも「物足りない」と言われることがある。他ならぬ長介自身がそう感じることさえある。

ＧＩ勝ちの馬が出ないまま、とうとう長介も四十路に足を踏み入れていた。鏡の中を見れば、やせぎすの身体はそのままに、かつて天才と言われた若者の面影を持ったくたびれた男の顔がある。周りを見れば自分より一回り、いや、二回り近く年下の騎手達がレースに乗るようになっている。かつての恩師達の中には既に鬼籍に入ってしまった人もいる。教えられる側だった自分がいつしか教える側に回っていることに、いやでも時の流れを痛感させられる。そして、今年もそれに拍車をかける事柄があった。競馬学校で騎手を目指している学生たちへの講演依頼が舞い込んできたのだった。

※

「本当に私でよかったんでしょうか？」

今更ながらに長介は戸惑いの弁を口に出すが、職員の男性はまじめな顔で答えた。

「何を言ってるんですか。三冠もリーディングも獲得した元トップジョッキーで、現役トレーナーでもある末永先生の講演ですから、生

徒たちも楽しみにしているんですよ」
「そうですか」
開始の時間になった。
講演の行われる部屋の前にやって来て、ひと呼吸入れる。メディア対応でカメラや人の前に立つことはこれまで何度もあったが、講演という形で壇上に上がる機会はなかったので、心なしか緊張していた。リハーサルもとい練習はきちんとやって来たが、カンペや台本のようなものは持たなかった。あくまで場の空気を感じたうえで最適な講演にすればいい。騎手という職業は、万全の準備をしながら本番になってその全てが無になってしまうかもしれない仕事をこなさなければならない。勤勉さと臨機応変さが肝なのだと、長介は師匠から教わっていた。
ドアを開けると拍手が起こった。誰か一人、ひときわ大きな拍手を打っている生徒がいるようだったが、長介は毅然とした表情で壇上に立って、一礼をした。
「はじめまして、末永長介です」
顔を上げて、ざっと席を見回す。一面、坊主頭の生徒たちが見えた。
「そういえば俺も昔はこんな頭だったな」と一瞬思い出しつつ、最前列に違った色を見た。茶色が混じったような髪の毛で、長さも他の生徒のそれとは異なっていた。男子は原則として全員坊主なわけだから、坊主でない生徒がいるとしたらそれは女子生徒ということになる。
ここ十数年で女性騎手もかなり台頭してきた。かつては競馬の世界といえば、男の世界だった。しかし、女性騎手への減量の新たな規定が生まれたこともあり、競馬界にもジェンダーフリーの波が打ち寄せた。当初こそ「人気に対して実力が追いついていない」という女性騎手に対するステレオタイプを打ち破るには至らなかったものの、数年前にデビューしたひとりの女性騎手が平地ＧＩを制覇すると、保守的な人間たちも口をつぐんだ。
「こうやって講演をするというのは実は今日が初めてなので、拙い部分もあると思いますが、どうぞ最後までお付き合いお願いします」
そう言って頭を下げると、再び拍手が起こった。また大きな拍手の

音がした。その音の主が先頭の席に座っていた彼女であることが、今度はわかった。
「大きな拍手をいただけて、大変恐縮です」
照れたようにはにかむと、教室内に笑いが沸き起こった。例の彼女は、さすがに気恥ずかしくなったのか頬を染めている。
少女の顔を眺めて、長介ははっとした。
動揺や戸惑いが生まれたが、決してそれを生徒たちには気取られぬように振る舞い、彼は人生初となる講演をつつがなく成功させた。
プログラムが終了した後、僅かではあったが生徒たちとの自由交流の場が設けられた。簡単な自己紹介と、ひとり一つか二つか程度の質疑応答を交わす時間だ。
質問は技術的なことから、過去のレースのこと、現役時代の食生活やトレーニングのことにまで及んだ。
円形に並べた椅子に座る生徒たちの反応は十人十色だった。長介の現役時代をよく知らないという生徒も中にはいた。まあ、鞭を置いてから十年も経っているのだから当たり前にいるだろう。
「と、こんな感じでいいかな」
一通り質問に答え終え、長介は言った。
「じゃあ逆に質問してもいいかい？」
何でしょう、という生徒たちに向けて長介は尋ねる。
「この中でいちばん上手な子は誰？」
純粋な好奇心からの質問だった。もしかすると将来、この中にいる騎手の卵の中から自分と大きな仕事をやってのける騎手が現れるのではないかという、冗談めいたものでもあった。
「だったらサチだよな」
「ああ。馬乗りでサチに敵うやつはいないもんな」
ひとりの生徒がそう言うと、他の生徒もそれに同調した。サチ、という呼び方に長介は内心ぎょっとしたが、あくまで平静を保った。
君野佐知子（きみのさちこ）――伏し目がちだった少女に全員の注目が集まる。本人は照れているようでなかなか顔を上げない。
「どうしたんだよサチ、しおらしいなんてお前らしくもないな」

「こいつ、普段はこんなやつじゃないんですよ。どっちかっていうとうるさいほうで」
「憧れのチョーさんを前にしてテンパってんだよ」
「部屋にも現役時代の末永先生のポスター貼ってるんですよ」
　生徒たちの話を聞くに、紅一点の彼女は優秀な生徒であると同時にどうやら熱烈な長介のファンだったようだ。
「そうだったんだ。だけど、俺の現役の時って、君野さんはまだ五つか六つとかでしょ？　なんていうか、珍しいね」
「ずっと……見てたから……」
　消え入るような声で彼女がそう言った。まあ、今のご時世は動画サイトや、オフィシャルでレースのアーカイブを残しているようになった。そこでたまたま自分の存在を見知って、注目してくれるようになったのだと、長介は自分の中で解釈した。
「末永先生、そろそろ……」
　ここでタイムアップが来たようだ。職員に促されて、長介や生徒たちは椅子から立ち上がって最後の挨拶を交わす。
「あ、あのっ……！」
「どうかした？」
　彼女が切羽詰ったような声で何かを言いかけた。定まらない視線で、次の言葉が出て来ない彼女を前に、長介はじっと待った。
「えっと……その、なんでもありません……ごめんなさい」
　結局、彼女からそれ以上言葉は出なかった。

※

　長介の中に言い様の無い感情が湧き上がっていた。
　ただ、余りにも荒唐無稽で現実味のないそれを、信じようとは思えなかった。信じられずにいた。四十にもなったいい大人が、そんなことを信じるほうがどうかしていると切り捨てようとしていた。
『騎手課程の生徒の受け入れに関することなのですが』
　講演の後、教官から連絡をもらった長介に驚きはなかった。調教師の仕事も板についてきたところで、自分の厩舎に騎手を所属させてもよいと無理なく思えるようになっていたからだ。きっと講演のオ

ファーの裏には向こうのそうした思惑もあったんじゃないかと勘繰りそうにもなるが、あえて言葉に出すことでもなかった。長介は教官の話に応じた。
「いいですよ。どの生徒でしょうか？」
『君野さんです』
　その名前が出たところで、一瞬言葉に詰まった。が、気を取り直して会話を続けた。
「ええと、それは本人の希望でしょうか。それとも学校側の判断でしょうか」
『君野さんからの強い希望がありまして、学校としても検討を重ねました結果、こうしてお願いしようということになったのです』
　いや、しかし――という喉まで出かかっていた語をぐっと飲み込む。
　教官が続ける。
『彼女は模範的な生徒ですし、心配はないと思います。体力の面でも、精神の面でも、男子生徒に劣らないほどたくましい生徒です。飲み込みも早く、気配りや気遣いといった人間性の面でも申し分はないはずです』
「ですが、それほどの生徒であれば他の先生方からも引く手あまたなのでは？」
　ところが聞けばそうではないとのことだった。
　彼女の親族には競馬関係の職に就いている人間はおらず、いわゆるサークルの外の家庭で彼女は育った。
　幼い頃に競馬好きの叔父に連れられて東京競馬場でレースを見たことが初めての競馬体験だったそうだが、この時に彼女は競馬の世界の魅力に取りつかれたのだという。
　しがらみ、もといコネクションはない。オファーもない。ならば本人の希望と、講演した縁でどうか――そんな話だった。
　断る理由など、適当にいくらでも作れるはずだった。だが、長介の答えはあっさりとしていた。
「わかりました。ではまた日を改めて詳しいお話をうかがいます」

『よろしくお願いします』
電話を切った後で、長介は液晶が暗くなっていく様を静かに見ていた。
そこからはとんとん拍子に事が進んでいった。かくして三月から佐知子は末永厩舎の所属騎手となることが決まった。
※
競馬場ではどんよりとした雲が上空に漂い、昨夜降り続いた雨で芝はぬかるんでいた。
騎手課程の三年生たちによる模擬レースのゲート入りが着々と進んでいた。
午前のレースを終えて、自厩舎の馬の出番はメインである１１Ｒを残すのみだった長介は、彼らを見守っていた。さらにいえば、佐知子を見ていた。
現役騎手も参加している模擬レースだったが、観衆の注目はやはり佐知子だった。彼女は大外枠からの発走となっていた。キョロキョロと周りを見て落ち着かない様子の彼女を見て、長介の心中は穏やかではなかった。
「……集中しろ」
長介の声は届いていないようだった。
すると佐知子が舌なめずりのように舌を出して片目を軽く閉じてみせた。さながらアイドルの決めポーズのようだった。観衆が沸く。
長介は目を見開いた。
「こら君野、レースに集中しろ」
「あ、すみません」
傍らにいた教官に窘められ、申し訳なさそうに頭を下げた。
佐知子が、最後のゲート入りを済ませると発馬機のランプが点灯してスタートが切られた。
同時に、悲鳴がスタンドから上がった。
佐知子の馬が、ちょうどつんのめった体勢でスタートを切ってしまい、つまずいてしまったのだ。馬はすぐに立ち上がったものの鞍上にいた佐知子が振り落とされてしまったのだった。

もはや長介の関心は模擬レースの結果などでなく、ただ彼女の安否だけに注がれた。
「あ～～～～!!」
息を呑んで様子を見ていた長介の耳に、そんな声が聞こえてきた。
大の字になって天を仰いでいる佐知子の声だった。駆け寄ってきた教官に促されつつ、彼女は自力で立ち上がった。どうやら意識はしっかりしているようだった。

※

「あ、末永先生」
「彼女の具合はどうですか？」
「問題なさそうです。意識もしっかりしてますし、受け答えもちゃんとできています。気分が悪いとか、そういったこともないようですし」
医務室に向かう最中、すれ違った教官とそんな会話を交わした長介だったが、気が気でないといった様子で急いで医務室へと駆け込んだ。
「あ……」
「だ、大事ないか？」
「すみません……ご心配おかけして……」
ぺこりと頭を下げる佐知子。
「君ひとりか？　先生は？」
「ええと、先ほどの5レースで落馬があったみたいで、そちらのほうに向かわれました。終わり次第すぐ戻ると思います」
「そうか」
長介は立ったままで所在なさげに部屋の隅や、天井や、テーブルの上に置かれたリンゴなどに視線をうろつかせていた。どうも佐知子と目線を合わせることができないでいるようだった。佐知子のほうも、何を話せばいいのか迷っているようでうつむいたまま口を閉ざしていた。
しばらく――ほんの数十秒ほどの沈黙が数十分にも感じられるほど――して、長介が佐知子のある変化に気がついた。

つぶらな瞳から涙がこぼれている。佐知子本人はそれに気づいていないのか、雫を押し留めようとも拭おうともしないでいた。
長介はポケットの中を探って、やや迷ってから普段使いのハンカチーフを手渡した。対する佐知子は、その意図が伝わっていないのか長介の顔を見上げてきょとんとしている。
仕方なく長介は目元にハンカチを近づけてやった。そこまでするとさすがの佐知子も気がついたようで、慌てて小さな手で涙を拭い始めた。
「ご、ごめんなさい……！」
「あ、いや、別に」
「なんでもないんです……これは、その……落ちちゃったのが悔しくって……」
そう絞り出すと、さめざめと泣いた。なるべく声を出さないようにシーツに顔を当てるようにして。
長介にはどうしても目の前の少女が、あの日の夢に現れた生き写しのような少女と――そして、かつて彼が共に苦楽を分かち合った一頭の牝馬と――無関係とは思えなかった。
ファンであることにしても、発走直前のくせのことにしても。
ただ、そんな話をしたところで、自分がひどい妄想癖の中年男であるということを自ら暴露するだけだ。そうなる未来しか見えなかった。
だから、「こんな馬鹿げた妄想は胸に伏せて、そのまま忘れてしまうのがいい」「彼女とあの少女が似ていると思うのは、自分の都合のいい空想なのだ」と圧して、あくまで調教師として振る舞うと決めていたはずなのに。
長介は堪え切れずに彼女の手を取っていた。
顔を上げた佐知子の潤んだ瞳が、長介を射抜いた。
それは、やはりいつかの夢と同じ光景だった。彼女と同じ、どこまでも無垢な色だった。
そこで我に返った長介は慌てて手を離した。
だが、今度は彼女が手を伸ばして長介の手をつかまえた。

「握ってて、もらえますか？」
　その要求を、長介は押し流されるように受け入れることになった。自分よりも高い体温が彼女の手から伝わってくる。生の感覚が伝わってくる。
　言葉は交わさずとも、その微かな指の動きや体温から、彼女の意志が感じられるような気がした。
「先生……私、今からおかしなことを言います。たぶん変な子だとか、アブない子だとか、そういうふうに思われても仕方ないんですけど、だけど、私にとっては小さい頃からずっと思ってきたことで、ずっと誰にも――両親にも友達にも言えなかったことがあるんですけど、聞いてもらえますか？」
　少女は、周りを気にするようなぼそぼそとした喋り方で言った。
「ああ……」
「ありがとうございます……」
「誰にだって、言いたくても言えない、言ったところで誰にも相手にしてもらえないような話のひとつくらい、あるだろうさ。俺にだってあるんだ。君にもあったって不思議じゃない」
　長介の言葉に、佐知子はちょっと驚いた顔をした。
「リンゴ、好きなんだな」
「あ、その……はい。好きです」
「昔、俺の知り合いにもリンゴが好きなやつがいたんだ。ケンカした後なんかは拗ねたアイツのところにリンゴを持って謝りに行ったもんだ」
「……」
「もうだいぶ前に遠いところに行っちまったよ。嫁入りもまだだったのにな。……いい娘っ子だったよ」
「……そうなんですか」
「ああ、そうだよ。今でもたまに夢に見るよ。自分ばかりいい思いさせてもらって、結局あいつを本当に幸せにできたかどうかは自信がない。もしかしたら、俺のことを恨んでるのかもな」
　彼女を死なせてしまったのは自分ではないのか。そんな思いが長

介の中にはずっとあった。
　あるいは、最後の舞台を勝利で飾れなかったのは、自分のせいだったんじゃないか、と思うこともあった。
「そんなことない」
　はっきりとした口調で佐知子が言った。矢継ぎ早に続けた。徐々に語調が強まっていく。
「確かに途中でお別れすることなっちゃったのは悲しかったけど、それは、きっと、誰のせいでもない。きっと、そういう運命だったんだよ。だけど、少なくとも私は感謝してる。つらいことや苦しいこともいっぱいあったけど、それ以上に嬉しいことや楽しいことがあったから！　私は幸せだったよ！」
　敬語が抜けていることにようやく気づいたが、むしろこちらの口調のほうがしっくりくる、と長介は感じた。咎めることも指摘することもなく、彼女の話に耳を傾けた。
「だから、チョーさんを恨むはずない……と思います」
　思い出したように付け足した最後の言葉に、長介はなんだか面白くなってきてしまった。ふふっと笑いをこぼすと、佐知子は焦ったように手を振って主張した。
「あ、これは、その……その牝馬の気持ちになり切って言ったことであって、決して私がその子だったとか、そういうことじゃなくってですね……！」
「まだニンジン嫌いなのか？」
「そりゃ嫌いですよ。いいですか、私たちがみんなニンジンを好きと思ったらそれは大違いですよ。人間と同じで趣味嗜好はそれぞれ……って、違います！　今のは一般論です！」
「そうなのか」
「そうなんです！　だから私は、チョー……先生の、知り合いの方とは全く何の関係もありませんし、何の因果もないんです！」
　猛烈な勢いでまくしたてる彼女に対して、ぼそりと長介がつぶやいた。
「いや、俺はその「知り合い」が「牝馬」だなんて一言も言っていない

んだけどな」
「あっ……！」
　しまった、というように口を押さえる佐知子の姿を見ていると、やはり笑ってしまう。面白おかしくて、馬鹿げていて、とても現実に起きている出来事とは思えなくて、気が抜けてしまう。そして、感情も勝手にこぼれていってしまう。ぐちゃぐりゃに押し寄せてくる想いを我慢できない。
「は、ははは」
　佐知子は鼻頭を手でこすって、へにゃりと微笑んだ。
「ヘンなこともあるんだね……」
「ああ、ヘンだ」
「馬が騎手になるなんて、自分でもどうかしてると思った。頭おかしくなったのかなって思ったし」
「俺もお前も、頭のおかしいやつで決まりだな」
「えへへ、お揃いだね」
「はた迷惑だ」
　心地良い軽口の応酬に、長介は口元を緩めていた。
「……生まれ変わり、とでも言えばいいのか？」
「私も、それはよくわからない。生まれた時から前の記憶があったわけじゃないんだ。お父さんもお母さんも競馬に興味のない家でさ、叔父さんに競馬場に連れてってもらわなかったら、ずっと知らないままだったと思う。競馬場でファンファーレの音を聞いた時に、ぞぞぞって何かが湧き上がってきて、色んなことを思い出したんだ」
「そうだったのか……」
「うん。最初は自分でも処理しきれなくて大変だった。段々落ち着いてきてから、この記憶が正しいものなのか確かめたくて、本やネットで調べた。前の私のことも、チョーさんのことも、先生やオーナーのことも……」
　だが、藤坂や幸野は、佐知子と出会うことなく、既にこの世を去ってしまっていた。
「でもね、私、誰にもわかってもらえなくてもいいって思ってたの。

きっとこんなこと、家族にも友達にも、誰にも信じてもらえないと思ってたから……ずっと、本当の意味で「ひとりぼっち」なんだと思ってたから。だから、今こうしてチョーさんと話ができてるのが、まだ信じられないんだ」

佐知子はどこか寂しげな表情だった。長介は彼女の後ろで結わえた髪を軽く撫でた。

「俺もさ。俺も、自分がどうにかなっちまったんじゃないかと思って、だけど誰にも言えなかった。怖かった。あんな夢を見て、瓜二つのやつに出会って、いよいよトチ狂ったもんだと参ってたところだった。だけど、お前は、お前だった……やっぱり、「サチ」だった」

「うん……うん……!」

場内では、ひときわ歓声が上がっている。どのレースだろうか。

しかし、彼らのひとときにおいて、それは遠い世界の出来事でしかなかった。

「お前……どうして、騎手になろうと思ったんだ?」

「どうしてかな……きっと、そういう巡り合わせだと思ったんだ。ちょうどチョーさんが病気で引退することになった頃だったし」

「……お前も馬鹿だな。いいか、ここは甘い世界じゃねえぞ。それに、お前は人間だ。もっと、高校や大学に行くとか、結婚するとか、別の仕事に就くとか、そういう幸せを選ぶことだってできただろうが」

「知ってるよ。でも、だからこそ、私はここに帰ってくることを選んだ。チョーさんがいる、ここに」

歯を見せてはにかむ佐知子を前に、長介はそれきり何も言い返せなかった。

※

通常の年度方式にのっとれば、三月が卒業や退職のシーズンでして四月から新しい場所——職場や大学などに入社・入学するのだろうが、競馬界の暦ではこの時期が年度替わりだ。定年を迎える騎手や調教師、厩舎スタッフは二月を最後に別れを告げ、三月は新人がデビューする時期となる。

三月第一週の末永厩舎。中山競馬場でのデビューを控えた佐知子

は、調教師である末永と向かい合っていた。
「なあサチ」
「なに？」
「お前さ、夢とかあるか？」
　自分でも何を聞いているんだろう、と思ったが、佐知子は澱みなく返した。
「あるよ。メディア向けじゃないやつ、でしょ？」
　メディア向け、というのはあくまで一般大衆のファンに向けての抱負、プロフィール的なものだった。もちろんそこに書かれた「末永先生のようなジョッキーになりたい」というのも、本音ではあった。
「うん。二つ、かな。一つは、ちゃんと騎手を引退すること。もう一つは、うん。お嫁さんになること」
「デビューする前から引退の話とはな……」
「だからオフレコでお願い。新人のくせにこんなこと言ってたら思いっきり叩かれちゃうからね……あ～ネットって恐ろしい」
「でもまあ、お前らしいよ」
「うん。前は、どっちもできなかったからね……」
　佐知子はしみじみとつぶやいた。
「夢、か……」
「チョーさんの夢って何？」
　佐知子の問いに、長介はとぼけたように「……さあな」とぶっきらぼうに言った。
「ふぅーん……まあいいケド。それよりチョーさんも早く結婚しなよ。この職業で、しかも一回倒れてるんだから、老後のことも見据えていいヒト見つけておいたほうが絶対いいって」
「余計なお世話だ」
「でもでも、若い頃はウキナを流してたんでしょ？　アイドルやタレントと噂になったことだって一度や二度じゃなかったみたいだし」
「ネットの情報を鵜呑みにするんじゃねえよ。あんなのはデタラメだよ」
　長介のメディア嫌いは業界では有名だ。

若くして人気、実績を手に入れた長介。整った外見も相まって男性アイドル的な扱いを受けた時期もあったが、根が職人気質の彼はそうした形で持ち上げられることを嫌った。サーチライトが急逝してからは、さらにその傾向が強まった。悲劇や美談として書き立てるメディアに対して、強い語調で抗議したこともあった。

今では昔から親しくしている記者の取材以外は、基本的に受け付けないことにしていた。

「お前も気をつけろよ。週刊誌にあることないこと書かれるかもしれないから、怪しい連中と付き合ったり変な取材を受けたりしないように。まあ、そんなふざけた連中は俺が叩き潰してやるけどな」

「はーい」

笑顔で返事をする佐知子を見て、長介は苦笑いする。

（……こいつ、やっぱりかしましいやつだったんだなあ）

「あ！」

「どうした？」

「だったらさ、私が立候補してもいい？　ふっふーぅ、こう見えて結構尽くすタイプだよ？」

「馬は恋愛対象外だ」

「違うよ、元馬なだけだもん！」

「はいはいご苦労様です」

「ぶーぶー！」

不機嫌そうにブーイングする佐知子をよそに、長介はそれとなく尋ねた。

「なんだ……そのー、お前って好きなタイプっていうか、好みの芸能人とかいるか？」

そういうと彼女はかつて巧みな演技で日本アカデミー賞を取った俳優の名を出した。

「……渋いな」

長介と佐知子はリンゴをつまみながら、まるで父娘のような会話を広げていた。

「騎手だったら、そうだなぁー、王子さんかなあ」

「ブフッ！」
長介は思わず噴き出してしまった。
王子――王子進之助（おうじしんのすけ）といえば日本一有名なジョッキーといっても過言ではない人物だ。競馬学校では長介と同期で、デビュー後も「東の末永、西の王子」として火花を散らし合ったライバルでもあった、長介の引退後は長らくリーディングを守り続けているもう一人の天才騎手。
一方、甘いマスクの持ち主でたびたび女性関係でワイドショーを賑わせることもある人物だった。良くも悪くも、長介とは対照的な騎手だ。
「おいサチ、あいつは」
「わかってるってば。あくまで顔の話」
「ったく……」
あきれ顔の長介に向けて微笑みかけて、佐知子は最後のリンゴを頬張り、無邪気にウインクをしてみせた。
立場や、関係や、姿形こそ変わってしまったが、やはり自分にとって特別な存在には違いなかった。
「さーて、行こっか！」

※

スプリングタイムス電子版　２０ＸＸ年　３月○日
『君野佐知子騎手、初騎乗初勝利！』
中山３Ｒで１番リスターターが一着となり、君野佐知子騎手（美浦・末永長介厩舎）が初騎乗初勝利を挙げた。
競馬学校を首席卒業した君野騎手は、今年デビューの新人騎手の中で初勝利一番乗りとなった。
君野佐知子騎手
「勝つことができてホッとしています。とにかくスタートで遅れないことだけを意識して、あとは馬の力を信じて乗りました。ここまで支えてくれた方々にただただ感謝です。お世話になっている方々に少しでも恩返ししていけるように、これからも頑張っていきたいです」
末永長介調教師

「とにかくスタートを集中するように、とだけ言いました。幸先の良い、素晴らしいスタートを切ってくれたと思います」

※設定・キャラクター紹介（６／１更新）

◆競走馬サーチライト号について

サーチライト（英・Ｓｅａｒｃｈ　Ｌｉｇｈｔ）は日本の元競走馬。３歳時に牝馬三冠（桜花賞・優駿牝馬・秋華賞）とエリザベス女王杯を制してＧＩ四勝。４歳時にも春にＧＩを二勝。前哨戦となるフォワ賞を勝利し挑んだ凱旋門賞で二着に入った。凱旋門賞から帰国後、心不全により急死。

調教師は藤坂寅一（美浦）、馬主は幸野松太郎、デビューから全戦で末永長介騎手が手綱を取った。

◆君野佐知子騎手について

所属　　美浦
所属厩舎　　末永長介厩舎
初騎乗　　２０ＸＸ年　３月〇日　中山３Ｒ　リスターター（一着）
初勝利　　同上
重賞初騎乗　　２０ＸＸ年　９月◇日　新潟１１Ｒ　新潟記念　デイライトガール（三着）
重賞初勝利　　２０ＸＹ年　９月@日　中山１１Ｒ　セントライト記念　フォーユアアイズ
ＧＩ初騎乗　　２０ＸＹ年　１１月γ日　京都１１Ｒ　エリザベス女王杯　シカノコサージュ（十着）
家族構成　　父　母　妹
出身地　　東京
好きな食べ物　リンゴ

◆君野佐知子（美浦）

騎手。競走馬サーチライト号の生まれ変わりの少女。末長厩舎に所属。

明るい性格と類稀な競馬センスの持ち主。愛称はサチ。

◆末永長介（美浦）

調教師、元騎手。サーチライトの主戦騎手だった。
天才と呼ばれるほどのトップジョッキーだったが、３０歳の若さで現役を引退した。愛称はチョーさん。

◆その他の登場人物

・女性騎手

○郷田ひとみ（美浦）
佐知子の先輩。
若手女性騎手でありながらリーディング争いをしているトップジョッキー。男勝りな性格と剛腕の持ち主。

○八坂優花里（栗東）
佐知子、ひとみの先輩。べしゃりが得意なコテコテの関西人。

○小中美由（栗東）
佐知子、ひとみの先輩。派手な見た目だがＤＩＹ・落語鑑賞・苔など多彩な趣味を持つ。

○柊雪絵（栗東）
佐知子の先輩。平地・障害両方のレースに騎乗している。

○湖月美景（地方・葉流）
地方・葉流競馬所属の騎手。亡くなった父も葉流の伝説的ジョッキーだった。

○木津かれん（栗東）
佐知子の先輩。ネットで評判の超個性派ジョッキー。

○メリル・ミモザ（イギリス）
イギリスを拠点に活動する女性ジョッキー。弱気で怖がり屋。

○ハンナ・フランツィスカ・エーベルバッハ（フランス）
フランスを拠点に活動する女性ジョッキー。ドイツ国籍。

・男性騎手

○福盛田光（美浦）
佐知子の同期。競馬学校時代からの友人同士。

○王子進之助（栗東）

レジェンド天才騎手。競馬界を背負って立つ存在。
競馬学校で同期だった長介とは親友。現役時代は「東の末永、西の王子」といわれ、頂点を競い合った。

・その他関係者
○藤坂寅一（美浦）
元調教師。故人。長介の師匠。
○幸野松太郎
元馬主。故人。勝負服は「青、水色縦縞、袖黄一本輪」。
○野間雷蔵
競馬誌『晴駿』のライター。長介とは二十年来の付き合い。
○君野知恵
佐知子の妹。女子高生。愛称はチエ。
○大塚保夫（美浦）
ベテラン調教師。ひとみの師匠で、フリーになる前ひとみは大塚厩舎に所属していた。
○雨宮一恵
看護師。かつて長介のリハビリを担当した。
○ヌーベルベケット
サーチライトと同世代の牝馬。主戦騎手は王子。クラシック戦線での最大のライバルだったが、競走中に故障を発生し安楽死となった。
今は京都競馬場で女神をしている。愛称はヌー。

デイライトガール（彼と彼女の蹄跡を知る記者）

噂の彼女は、馬房の掃除をしている最中だった。
「あ、おはようございますっ！」
男社会、厳しい実力の世界に身を投じているとは思えないほど、屈託のない顔だ。掃く手を一旦止めて丁寧にお辞儀をする様から、人の良さがうかがえる。
「末永先生ならもうすぐ戻られると思いますよ。そうだ、お茶でもお出ししましょうか？」
律儀な子だ。厩舎のほうまで案内すると言ってくれた彼女の申し出を、私はやんわりと断った。
今日はチョーさんに用があって来たわけではないのだ。
「あれ？　そうなんですか？」
――今日は君野さんを取材しに来たんです。
「あー、そうだったんですね」
彼女はニコっと微笑んで、何事もなかったかのように再び掃き掃除に戻ろうとしている。
あれ？
拍子抜けしてしまうような反応だったが、あまりにも自然だったのでこちらもそのまま流してしまった。
あの……あなたですよ？
さて、彼女にどう声をかけようか考えていると、箒を持った彼女が勢いよく近寄ってきた。
「わ、わ、わ、私ですかっ!?」
目を見開いている彼女に、コクコクと首肯して答える。
「ほんとですか？　だってチョーさん……末永先生からはテレビや雑誌への露出は控えるように言われてますし、もし受けるにしても先生の許可が必要っていうことで約束してるんですけど……」
――大丈夫です。許可はもらってます。先生からお話も行っているはずだと思うんですが……
「そ、そうですか？　あれ、そうだったっけ？」

※

厩舎に戻ると待ち構えていたかのようにチョーさんこと末永調教師の姿があった。サングラスと同系色のキャップを被り、腕組みしながら仁王立ちでこちらを見ていた。

「お待たせ」

「はい、よろしくお願いします」

「あのっ、私お茶淹れてきますね！」

「あ、おい」

長介の制止する声も聞かず、彼女は奥の部屋へと入っていった。

「お手数かけてすみません。やれやれ。あの調子だと、取材の予定もすっかり忘れてたみたいですね」

彼女の師匠にあたる末永長介調教師――チョーさんとは長い付き合いだ。交流するようになって二十年近く経っている。

歳は五つほど離れている彼とは、同じ時期にこの業界に飛び込んだ。競馬学校を卒業した彼はジョッキーとして、大学を卒業した私は記者として。

新人だった私は彼の番記者に指名された。

若かった頃の彼はまだ受け答えもぎこちなかった。尖っていたのか、緊張していたのか、当初は目を合わせて喋ることもできなかった。

時間と共に打ち解けていき、次第に彼が熱い魂を胸に秘めて騎手という仕事に打ち込んでいるということがわかった。競馬に関わらずプライベートな話題についても気兼ねなく話せるようになったし、一緒に食事に行くことも増えていった。友人関係といってもいいかもしれない。

現状、末永長介がまともに取材に応じてくれる（踏み込んだ話をしてくれる）のは『晴駿』――ウチだけだ。調教師になった今も。

無論、彼がメディアを嫌いになった一件についても知っている。

それだけに、彼からこの「逆オファー」を受けた時には驚いた。

「どういう心境の変化？」

「色々あったんですよ。色々ね」

「ひょっとして親心みたいなもの？　高松宮記念を勝っていよいよ貫

禄が出てきたんじゃない？」
　君野佐知子のデビューからわずか数週間後、末永厩舎の管理馬から待望のＧＩ馬が出た。五歳になる牡馬ストラグルは、クラシック街道とは無縁の日陰を歩いてきたような馬だった。一時はダートを走っていたこともある。しかし、昨年末に転機が訪れる。末永長介の盟友であり日本競馬界の至宝と名高い「天才」王子進之助に鞍上が変わった。はじめて重賞を制覇すると、年明けの阪急杯も制して春のスプリント王に登り詰めた。血統的にも晩成型であり、全盛期を迎えた時に良いパートナーに巡り会う幸運にも恵まれた。天才と呼ばれた男が、もう一人の天才と呼ばれた男のメモリアル勝利をエスコートしたのだった。その晩は後輩の騎手や友人達も集まって盛大に食事会が催されたのは言うまでもない。
「まあ……そうかもしれません」
　笑みを浮かべた彼の表情は、どこか懐かしい雰囲気がした。まるで私達がまだ二十代の若者だった頃のようなノスタルジーがあった。
「お待たせしました！」
　湯呑みを持って彼女が戻ってきた。
　席に着いた彼女と相対し、私は取材を始める。ちなみにチョーさんは彼女の後ろで腕組みして立っている。さながら娘の授業参観に来ている父親のようだった、

※

「『晴駿』の野間と申します。じゃあ、取材のほういきましょうか」
「は、はいっ！」
　競馬界とは関わりのない、一般的な家庭に生まれた少女は、親戚に連れられて初めて競馬場へやって来た。その時の体験が彼女の中で原風景となった。
「ファンファーレを聞いた時に、全身の毛が逆立つような、ブルブルする感覚がしました。後は夢中でした」（まさか馬だった頃の記憶が蘇ってきました、なんて言えるワケないよね……）
　そして、彼女は騎手の道に進むことを決める。
　たびたび乗馬へ行くようにはなったものの、本格的な訓練を受け始

めたのは学校に入ってからだったという。
「お父さんとお母さん……両親には反対されると思ってたんですけど、あっさりＯＫが出ちゃって。『いいのー!?』と思いましたね（笑）」
　競馬学校時代、女子生徒は彼女一人だけだったが、持ち前の社交性と好奇心旺盛な性格からすぐに輪の中心になっていった。
「おしゃべりなだけですよ」（だってお話するの楽しいんだもん！）
　そう言うと、後ろのチョーさんがくすくすと笑った。
「こいつ、馬のことばがわかるんですよ。前世が馬なので」
「いやいやわかんないって！　そりゃ嘶いたり蹴ったり睨んだりして、なんとなく考えてることがわかったりするけど、ことばとか、人間みたいなコミュニケーションは馬には無いんだよ！」
「じゃあ、なんでパドックで馬に話しかけてるんだよ」
「それは、こう、お願いしますっていう感じ……向こうが考えてることはわからないけど、こっちが考えてることは伝えておいたほうがいいと思って」
「へぇー」
「ていうかチョーさんだって話してたじゃん」
「ああ。だけど馬の耳に念仏だと思ってたな」
　話が少々脱線しているようだったが師弟の、というよりもはや父娘か、兄妹のような微笑ましいやり取りだった。二人はどうやら普段から良い関係が築けているようだ。
　それに気づいたチョーさんが、こちらに軽く視線を向けた。
「すみません、邪魔しちゃって」
　――いえ、仲が良いようでなによりです。では、騎手になってからのお話についても。デビューしたばかりの頃と比べてレースにも慣れてきたんじゃないでしょうか？
「そうですね。学校では大体６～８頭立てのレースだったのが、フルゲート１８頭のレースもザラになりましたから、難しいところはありました。まだまだ未熟な点も多いですし、色々な経験を糧にしてもっと上手くなっていきたいです」
　――デビューから半年が経ち、中央・地方合わせてここまで２５勝。

もちろん今年デビューした新人では勝ち頭ですし、複勝率も優秀です。ご自身の中では、ここまで結果を残せている理由は何だと思いますか？

「……なんでしょう。良い馬に乗せてもらっている、から？」

彼女は確認するように上目遣いで視線を向けてくる。もしかしたら自分の中でも半信半疑なのかもしれない。

すると、控えていたチョーさんがおもむろに語り出した。

「もちろん有力馬への騎乗もあるでしょうが、女性特有の当たりの柔らかさだったり、馬と折り合いをつける技術に関しては、新人ではありますが高いレベルだと思います。力強さは物足りないですけどね。……あとは、プレッシャーに強いことですね。どんな相手に対しても物怖じせずに向かっていける度胸もありますし、相手が強ければ強いほど、大舞台になればなるほど燃えるタイプなんじゃないですか」（まあ、昔に何度も修羅場くぐってきたから、ちょっとやそっとのことでビビるようなやつではないな）

彼の言葉になるほど、とうなずく。

振り返ってみれば初騎乗初勝利の時点で、その片鱗は垣間見えていた。

初の重賞挑戦となった新潟記念でも１３番人気のデイライトガールを三着に突っ込ませたのだから、ここも当然狙っていたのだろう。

――新潟記念の騎乗も印象的でしたが、夏の間だけで勝ち星を１５個伸ばしましたね。

「はい。牝馬は夏なので！」（牝馬は夏なので！）

「牝馬って、お前……」

「あっ！　違うんです今のは……ごめんなさい今のところカットしてもらえますか」

頭を下げてお願いする姿はとてもユニークで愛嬌のある女の子だった。

それだけにひとたびレースになるとスイッチが入ったかのように真剣な眼差しになる彼女のギャップには目を見張った。

どうしてだろう……ふと、その昔デビュー戦から追いかけ続けて、

凱旋門賞挑戦の際にはフランスまで取材に赴いた牝馬のことを思い出した。人間――騎手に、調教師に、オーナーによく懐き、一方でレースになると女王の風格を漂わせて何物も追いつけない圧巻の走りを見せた牝馬。

もし、あの子が人間の姿をしていたら、もしかするとこんな感じになったのかもしれない。と、心の中だけでつぶやいた。

――それでは女性ジョッキーの話題についても少々お聞かせください。現在、中央競馬だけで6人の女性ジョッキーがいます。地方にも目を向ければさらに多く、また海外では各国のリーディング上位に女性ジョッキーがいることもザラになってきましたが、憧れの女性ジョッキーとかいるんですか？

「いますね。ひとみさん（美浦・郷田（ごうだ）ひとみ騎手）はやっぱり憧れですね。追い方も力強いですし、考え方もストイックで、私もあんなふうになれたらいいなと思います」

郷田ひとみ。今や全国リーディング上位に食い込むほどの実力派であり、女性ジョッキーとして平地ＧＩを初めて制覇した騎手だ。

そのストイックさは枚挙に暇がない。幼少期には空手で全国大会を優勝。競馬学校時代は、自ら男子と同じような坊主頭に刈った。デビュー後も一貫してベリーショートの髪型を保っている。納得いかないことがあれば先輩騎手であってもハッキリと自分の意見を言う。それでいざこざがあったという話も聞き及んでいる。

騎乗技術については間違いなく日本トップレベルといっていい。もちろん、男女混合のカテゴリで。歴代新人最多勝利を記録し、平地ＧＩを制し、色眼鏡をかけた識者たちを実力で黙らせた腕前の持ち主だ。その技術はさらに磨き抜かれている。現在のポジションは王子進之助に次ぐ二位だが、今年も既にＧＩ級を三勝（交流競走含め）するなど、虎視眈々と王位奪取の機をうかがっている。

「美浦の女性ジョッキーは私とひとみさんだけなので、色々と教えてもらったり、よくしてもらってます。怒られることもたまにありますけど、皆さんが思ってるほど怖い方じゃないんですよ？　アイス屋さんやカラオケにも一緒に行くので」

――そうなんですか。
「意外とかわいい歌とか歌うんですよ。あ、飲み物はお水ですけど。さすがストイックです（笑）」
「おい、あんまり言い過ぎると後で郷田にバレた時にまずいんじゃないのか？」
「えっ！　あ～～っ……すいません、できればここらへんもカットで」
――善処します（笑）
「本当に、本当にお願いしますよっ！」

※

「はぁ～～～」
取材を終えた野間が引き揚げていって、佐知子は大きくため息をついた。
「お疲れさん」
「インタビューって大変なんだね……学校でメディア対応の授業は受けたけど、いざ受けるとなったら頭が真っ白になっちゃった……」
「まあ仕方ない。何事も経験だ」
「……はっ！　バレてないですよね、私がサーチライトの生まれ変わりだって!?」
「どうだか……バレてるかもな」
「えええええええ!!」
「野間さんだって伊達に二十年以上記者やってないさ」
ムンクの絵画のように絶叫する佐知子に、長介はほくそ笑んだ。
「だけどこんな話、誰が聞いたってフィクションにしかならん。もしあの人が本を出したら、その時は印税で美味いメシでもおごってもらうか」
「美味しい、ご飯、ですか？」
佐知子の目の色が変わる。そういえばすっかり季節も秋めいてきた。花より団子だ。

アコガレノセンパイ（怪物女性ジョッキーの覇道）

糾弾だ。

「サチ……オマエこの（笑）ってのはどういうつもりだ？」

「えっ！　あっ、その部分はカットしてくださいってお願いしたのに！」

「おい、まずはアタシの質問に答えてもらおうか。そんなにアタシがカラオケで女性ボーカルのバラードをしっとり歌ったら面白いのか？」

「いやー、それは、その、話の流れといいますか、取材を盛り上げるためというか……」

「アァン？」

凄みながら、むにゅっとモチモチした頬をつまむ。ＲＰＧゲームのスライムモンスターよろしくぬっと伸びる。

「ご、ごめんなひゃい」

ちょっと面白い。先輩を話のダシに使った報いを受けてもらう。もうちょっとむにゅむにゅしてやろう。

「……」

「ひとみしゃん……」

「……」

「あの……」

無心で柔らかい頬に触れていると得も言われぬ多幸感が湧いてくる。

目の前のサチは小動物のように怯えている。コイツがハムスターかそんな生き物だとしたらアタシはなんだろう。やっぱりゴリラか？

ふと、自分の二の腕と彼女の二の腕を比べてみる。

サチもそれなりに筋トレで鍛えているが、まだまだほっそりとしている。女性の、少女の腕といってもいい。

対するアタシはどうだろう。ゴツイ。なるほど。「オトコ女」「メスゴリラ」というヤジが飛んでくるのも仕方ないといった貫禄だった。

もっとも、自分で望んでこうなったのだから悲壮感などない。あってたまるか。むしろ達成感に満ちている。男の騎手にも力負けしないパワーが備わったのだから。

「……」

「えっと、そろそろ……」

うおっ。

不意に我に返ってきた。にしてもこいつの頬はヤバいな。脳内麻薬だ。ある意味クスリに匹敵するかもしれない。

「ま、まあーアレだ。こういう時は一応断りを入れるとか、事後報告でもいいから誠意を見せとけってこった」

「はい」

「わかりゃいいんだ」

名残り惜しくも手を離す。代わりに頭を撫でてやるとこれまた小動物めいてニコニコとしていやがる。

※

アタシは騎手の中では「怖い系」のキャラだ。「怪物系」とも言われてる。もっとも、アタシ自身が望んでそうなったんだから願ったり叶ったりだ。

女だからという理由でナメられるのが嫌だったし、媚びるようなマネは絶対にしたくなかったからだ。

だから競馬学校では男子同様丸刈りにしていた。デビューしてからも徹底して女性らしさを排除し続けた。そうした女性らしさは「甘さ」、「弱さ」になると思っていた。デビューしたての時期は散髪代がもったいなかったので、週に一度髪を自分で切った。今でも髪型はベリーショートで、しょっちゅう男と間違われる。

元々体力には自信はあったが、トレーニングで身体もいじめ抜いた。食事もきっちりカロリー・栄養管理をして、常にレースに向けて準備をしてきた。

結果はデビュー年から出た。天才・王子進之助と末永長介が打ち立てた新人騎手の最多勝利記録を抜いて、重賞も制覇した。とはいえ、煩い外野の連中から散々文句やお世辞を言われた。3年目には平地

ＧＩ勝ちを収めると、さらにおべっかを使ってくるやつが増えたが、そういう連中の相手をするのは時間のムダだ。とにかくジョッキーとしての高みに登り詰めることがアタシの目標だ。

歳を重ねるにつれ、いつしかアタシも先輩という立場になった。まだ尻の青いような新人どもを、先輩として導くのもアタシの役割になっていった。

そんな時に、アタシはサチに出会った。

とにかく不思議なヤツだった。後輩にも女のジョッキーはいたが、みんな栗東所属でそこまで深く絡んだことはなかったから、アタシにできた初めての女後輩みたいなモン。

大概の新人は初対面でアタシの顔を見るなりビビっちまうんだけど、サチは最初からニコニコしていた。聞いてもいないのに馬のことや厩舎のことをべらべらと話してくるし、アタシに対してもあれこれ聞いてきた。

『うわっ！　すごい固い！　普段どういうトレーニングしてるんですか？』

『冬場ってインナー何枚くらい着てます？』

『ひとみさんって美人ですよねえ。背も高くて、クールで、まつ毛も長くて、モデルさんって言われても違和感ないですよ』

『カラオケ行きましょうよカラオケ！』

『リンゴ食べます？』

サチは忌憚なく、先入観なく、自分の意見を言った。昔通っていたフリースクールでの日々が自然と思い起こされた。

チャラチャラしたやつは男女問わず嫌いだが、女で嫌いなのはあからさまに媚びてくるようなヤツだ。だが、サチの言葉は違和感も嫌悪感もなくすっと入って来ることが多かった。

少なからずサチのことは嫌いじゃなかったし、どっちかっていえば、気の合うヤツだと思った。

そんなある日、とあるレースの後でシャワーを浴びに行った際、たまたまサチの姿が目に入った。

同じレースを走っていたのだが、サチは珍しい形で勝利を挙げてい

た。
一位入線した馬が直線で斜行し、二位入線した馬の進路を妨害したとして降着処分。繰り上がりで勝った馬に騎乗していたのがサチだった。
突然前にいた馬が目前にモタれてきたら、わりと経験のあるジョッキーでもビビる場面だろう。そこで諦めてしまうヤツもいるかもしれない。ただ、サチは冷静に進路を探し、最後まで追い続けた。
『怖くなかったのかよ?』
壁越しにそう尋ねてみた。
すると、サチはシャワーを止めて凛と答えた。
『怖くないことはないですよ。でも、馬がまだいけそうだったので、行かなきゃと思ったんです。手応えもよかったし』
事も無げにそう言ってのけるサチに、ちょっと呆気に取られた。
『結構伝わるんですよ、騎手の考えてることって。迷ってるな、とか、自信がありそうだな、とか』
そして、どこかで聞いたことのある話だということにも気付いた。
そうだ、末永先生のところの馬に乗せてもらった時だ。あの人も似たようなことを言っていた。
あの師匠にしてこの弟子あり、と言ったところなのかもしれない。
『馬が諦めてないのに、騎手が諦めちゃったらダメじゃないですか』
この次のレース。４コーナーでの落馬もあり、荒れたレースになった。最後の１００メートルで先頭にいたアタシの馬は、サチの馬にかわされてしまった。
祝福の言葉でもかけてやろうかと思ったが、それは憚られた。サチはレースになるとスイッチが入るタイプで、彼女はこの後のメインに自厩舎の馬で出走することになっていたからだ。普段から調教をつけている馬らしく、えらい集中していた。そして、サチはこの馬でこの日の３勝目を挙げた。
その日、アタシはちょっとだけこの後輩の底知れなさがおっかなくなった。

※

「ひとみさん！　ひとみさん！」
調整ルームの自室で明日の出走表を眺めていると、サチが部屋に飛び込んできた。
手には『晴駿』があった。表紙は……こっ恥ずかしいことにアタシだった。
確か上半期シーズンの総集編みたいな企画でインタビューを受けたヤツだ。だけど表紙だなんて聞いてねえ。
「ここに書いてあること、ホントですか？」
「ハァ？」
「だから、この『思い出のサラブレッドについて』ですよ」
あー、そういえば聞かれたな。インタビューの後の端のほう、アタシの簡単なプロフィールと一緒に載っている部分だ。
サーチライト、という馬。アタシが生まれて初めて観戦したＧＩを勝った馬の名前だ。
「そうだけど、そうがどうかしたか？」
「えっと、その、なんでこの馬が好きなのかな～と思いまして」
「別に大した理由なんてねえよ。ガキの頃に生でＧＩ勝つとこ見て、走る姿がカッコよかったから好きになったってだけ。牝馬だけど、男馬相手に退かねえでバチバチやり合ってるところとか、子供ながらスゲエと思ったよ」
「そ、そうだったんですねぇ～！」
「だから、死んじまった時はショックだったな……」
「……」
「だけど、やっぱり好きだよ。アタシにとって特別な一頭さ」
「ひとみさんっ……！」
急にどうした？
なんでオマエが照れてるんだ？
「なんだよ？」
「さあ、どうぞ！　私を、その……サーチライトだと思って飛び込んできてください！」
「……いや、別に」

なぜかサチが両手を広げて「来てください」と構えている。「コイツは何を言っているんだ？」という言葉が喉から出かかる。まあ、サチのド天然はいつものことなので軽めに流しておく。

するとサチのほうがアタシのことをむんずと捕まえに来た。抵抗するのも馬鹿馬鹿しいと思って、なすがままでサチに抱き締められる。

「私もひとみさんのこと好きですよ？」

「あー……アタシは、そこまで。そこそこっつう感じだわ」

「ぶーぶー！　それだと不公平です！」

「知ったことかよ！」

……これまで、こんな風にじゃれ合う相手なんていなかったな。アタシ自身がそういう道を選んできたってのもあるけどさ。

だけど、不思議と嫌な感じはしなかった。鬱陶しいと思うことは多々あれど、嫌いにはなれないヤツだった。そう言う意味じゃ、今は割と楽しく過ごせてるのかもな。

この日からさらに三割増しでサチがベタベタしてくるようになったが、実害は特になかったのでそのままにしている。

※

『晴駿』より「キシュのホンネ」　君野佐知子騎手について

「とても礼儀正しい。競馬に対する姿勢も真摯。聞いた話では某アイドルの歌と振付を完コピしているらしいので、是非騎手クラブの新年会でコラボしたい。」（栗東・中堅騎手）

「サッちゃんが来てくれたおかげで郷田が五割増しくらい優しくなった。ありがとう。」（美浦・ベテラン騎手）

「多分信じてもらえないだろうけど、この前調整ルームの脱衣所でサチと「キャッ」「あ、ごめん」ってイベントが発生した。マジで。

でもその時裸だったのは俺。サチじゃなくて俺。つまり「キャッ」って言ったのは俺。俺が「キャッ」って言った。フル〇ンで。俺が。　」（君野騎手と同期の新人騎手）

ドウキ（共に並び共に往く友）

中山６Ｒ　芝　外回り１６００メートル戦

『スタートしました。好ダッシュは４番サリー、気合いをつけていきました。

８番サムマイトセイがこれをかわしてハナに立ちます。１３番オールノヴァも今日は先行策。

一馬身差、外の四番手につけました１５番のナシオバレル。その後１番ミノベハローと１１番グローリーモーニンが並んでいます。

一馬身から二馬身開いて中団前につけた１０番ヒゲエレクトリック、ほぼ並びかけて２番ロールウィズイットです。

そこから二馬身開いて１４番のアクイーステック。直後に３番ウォールワンダー、１２番サヤケキがこれを追走。

３コーナーへ向かっていきます。残り１０００メートル通過しました。

二馬身差、中団後方７番バンクホリデイ。その外に９番ノーキャスト、ジワっと押し上げていこうという構え。

間もなく３コーナー。後ろは差が開いて５番のヘイナウと６番のアンタイトル、最後方に１６番タウンヨークという展開になっています。

既に８００メートルを切って先頭は４番のサリー、リードを一馬身。

４コーナー向かっていって二番手集団は固まっています。

８番サムマイトセイ、１３番オールノヴァ二頭が並んでいって先頭を奪いにいきます。この後ろからは１５番ナシオバレル。

好位馬群の外からは１２番サヤケキ、１１番グローリーモーニンが前をうかがいます。

４コーナーカーブから直線コースに入って、先頭はサリーがまだ粘っています。

並びかけるオールノヴァ、鞭が入った。二頭の間にはグローリーモーニン。先頭争いはこの三頭か。

ここでサリーが後退。２００を切ってオールノヴァが先頭。グローリーモーニンがそれを追う。二頭の競り合いになった。
激しい追い比べ、オールノヴァかグローリーモーニンか！
二頭がほとんど並んでゴールイン！
オールノヴァかグローリーモーニンか、前二頭最後は接戦となりました。
一着二着は写真判定。三着以下はすんなりと掲示板に表示されました。
三着は逃げ粘った４番サリー、四着に追い込んできた１０番のヒゲエレクトリックをわずかに凌いでいます。五着には１４番のアクイーステック。
さあ、判定のストップモーションが表示されていますが、これは微妙です。クビの上げ下げですが……ほとんど同時に見えます。
１１番グローリーモーニンが十番人気、鞍上は君野佐知子騎手。一番人気に推された１３番オールノヴァは、福盛田光（ふくもりたひかる）騎手。ルーキー２人によるデッドヒートとなりました。』
『お手持ちの勝ち馬投票券は確定までお捨てにならないようお願い致します』

※

まだ身体が震えている。馬の興奮がこちらにも伝わってきて、伝染したかのようにぶるぶると鳥肌が立っている。
レースの余韻の中、よく通る声がおれの名前を呼んだ。おれは、なんとなくそれを予期していた。
「光！」
「……どっちだ？」
「どっちかなあ」
「お前、差しただろ」
おれは、自嘲気味に笑っていった。本当のところ、どちらが勝ったかなんて、もう少し後に判定が出るまではわからない。当事者として、勝ったという確信もなければ負けたという確信もやはりなかった。それだけ、ギリギリのレースだった。

彼女は、にやりと口角を上げた。
「私はちょっと自信あるよ」
「だよなあ」
「でもね」
ゴーグルを外して、彼女は目を細めて笑った。
「光、カッコよかったよ」
艶めいた桜色の唇に動揺し、どきっと動きを止めていると、馬のほうが激しく首を振るった。おれは慌ててなだめすかす。
すると外から先輩騎手の茶化すような声が飛んでくる。
「光ー！　口説くんだったらもうちょっと場所を考えろ！」
「そ、そんじゃないっすよ！」
苦笑いしながら否定する。隣の彼女もくすくすと声を漏らして笑っていた。
「上手くなったじゃねえか、２人とも」
「ありがとうございます」おれたちの声が重なった。先輩は楽しそうにいう。「息ぴったりだ。こりゃ同着かもな」

※

スプリングタイムス電子版　１２月〇〇日　９：２０

一年最後。多くの中央のジョッキーにとって仕事収めとなる開催日。
ＧＩに昇格したホープフルステークス、２歳馬にとってクラシック戦線への試金石となるレースが行なわれる日。
成績については、既にほとんどの記録が確定しているといってしまっていい。
クラシック戦線における絶対王者がいなかった今年は、三つのレース全てを別の馬が勝利。これは牝馬に関しても同じだ。
古馬については中距離戦線で海外のＧＩと、国内ＧＩ２つを制した馬がいるので、その馬で決まりだろうというのが下馬評である。
一方、人馬のうち人については確定済みである。
平地競走の騎手部門は、王子進之助騎手（栗東・フリー）が最多勝

利騎手、最多賞金獲得騎手の２冠を達成した。前述の馬の３勝を含めてＧＩレースを４勝したレジェンドが、またしても新たな記録を打ち立てた。これで１０年連続１５度目のリーディング獲得となった。

最多勝率騎手は、郷田ひとみ騎手（美浦・フリー）。今年はＮＨＫマイルＣ、安田記念、朝日ＦＳの三つのＧＩを制覇し、全国リーディングも二位につけている。男女の枠を越え、既に「ポスト王子」の声も上がるほどの若手最有力ジョッキーは着実にステップアップしている。

フレッシュな女性ルーキーもタイトルに名を連ねる。昨日時点で３３勝を挙げて最多勝利新人騎手に内定済みなのが君野佐知子騎手（美浦・末永長介厩舎）だ。競馬学校卒業時もっとも優秀な生徒に贈られるアイルランド特別大使賞を受賞したルーキーは、デビュー戦初騎乗初勝利を挙げるなど前評判に違わぬ活躍を見せた。このままいけば郷田騎手以来２人目の女性の新人最多勝利騎手となる――

※

ホワイトボードの一着の欄には「１１」と「１３」が並んで書かれている。その下には「写真」の文字がある。

思い返してみても、サチはあの頃から規格外だった。

騎手になってダービー制覇、そんな夢を抱いて競馬学校の門を叩いたおれだったけど、現実は甘くない。

五時起床の寮生活。毎日の体重管理に、厳しいトレーニング。日を追うごとに自律神経がジリジリと削られていく感覚がした。寝ても覚めても競馬のことばかりで、普通の学生らしい楽しみはほとんどなかった。

入学直後は特にナーバスになっていた。一緒に入った同期がひとりふたりと辞めていった時、正直にいって、おれも辞めようと思った。

思いつめたおれは、もう家に逃げ帰ってしまおうと計画を立て、実行に移した。日が沈んでから、ひっそりとトイレの窓から外に出て、塀をよじ登って敷地の外へ出ようとした。

「！」

そこでおれは人の気配を察知した。

教官だ。
無我夢中で逃げようとしていたおれだったが、突然の出来事で身体が固まってしまった。そして、諦めて塀から敷地内へ戻ろうとした。
「福盛田くん……？」
だが、おれの予想は外れた。高い声だ。ぼそりとつぶやいたのは、君野佐知子――サチだった。
彼女は目を丸くしていった。
「何してるの？　もしかしてどっか行くの？」
「……」
やや考えてから、おれは答えた。
「ちょっと……腹が減ったから」
なぜウソをついたのか、自分でもわからなかった。
ただ、なんとなく彼女に後ろめたい気持ちがあったんだと思う。
「そっか。じゃあさ」
「……」
「私も行っていい？」
「……え？」
おれは、遅れて反応した。「マジ？」と聞き返そうとする間もなく、彼女はひょいと塀を登っていた。
灯りのほとんどない暗がりの道を、おれたちは歩いた。
おれの心はグルグルと迷宮の中をさまよった。逃げ出すのは日を改めるしかないか、と嘆息しながら。
サチは、同期の中でいちばん優秀な生徒だった。学校全体の中でも、とにかく優等生だったといえる。女性特有の柔らかさとしなやかさを備えたフォームは、無駄が無かった。全身が固いおれの不器用なフォームとは雲泥の差だった。
落ちこぼれだったおれは、彼女のズバ抜けた素質を見るたびに、自分の不出来さを思い知らされて自己嫌悪に陥った。
寮の中でもムードメーカーで、中心的な存在だった彼女に、おれが壁をつくっていたのは、そんな劣等感からくるものだったのだろう。
おれの胸の内を知ってか知らずか、サチはたくさん話をしてきた。

小さい頃に競馬を見に行った時に騎手を志したこと。競馬にのめりこんでから末永長介の大ファンだということ。食べ物の好き嫌いのこと。妹のこと。目標にしている騎手のこと。

ニコニコと語る彼女に相槌を打つ作業をしてくると、罪悪感がわいてきた。

数十分行き過ぎると、自動販売機の明かりが灯っていた。その前で彼女は立ち止まった。

「あった！」

探し物を見つけたような彼女は、ジャージのポケットから小銭を取り出してボタンを押した。ガコンと音がして、取り出したのはリンゴジュース。

「福盛田くんも、何か買う？」

「えっと……あっ！」

ポケットをまさぐって、初めて気がついた。財布を忘れてきた。

やれやれ、どれだけおれはテンパっていたんだろうか。

途方に暮れていると、サチが「貸してあげるね」と小銭を自販機に投入した。「いや、でも……」と遠慮したかったが、結局「どうぞ」と促されるままにボタンを押した。炭酸飲料。冷たい缶の感触が、一気におれを現実世界に引き戻していくみたいだった。

自販機にもたれかかりながら炭酸飲料を一気飲みした。泡の弾ける感覚が口から喉まで広がって、なぜかじんわりと涙が出た。

そして、言葉がぽろぽろと口からこぼれた。

「……君野みたいなできるやつにはわかんないだろうけど、おれ、やっていける自信がないんだよ。小学校から乗馬やってたけどさ、学校入ったらおれより上手いやつはたくさんいるし、これ以上やって本当に上手くなれるのかって……」

「……」

「ここでやっていけるのか、とか、卒業してちゃんとジョッキーになれるのか、不安なんだよ。おれ、ダメかもしれない……」

サチは黙ったままじっとおれのほうを見ていた。と思う。おれがずっとうつむいたままだったから、実際はどうかわからないけれど、

彼女の視線は強く感じた。
また涙が溢れた。
なんか情けないな、と思った。こんなの、カッコ悪い。
自販機の灯りが、弱々しい俺を糾弾するかのように煌々と照っている。
このまま続けていける自信は無い。だけど、逃げ出してしまえばここまで積み上げてきたものを自分で全部否定しているような気持ちになるだろう。それが、怖かった。もしかすると、おれは脱走しかけたところを目撃されて安心してしまったのかもしれない。
おれは、どっちつかずのチキン野郎だった。
目の前を、ゆるい風の音が通り抜けていった。
「そうだったんだ……」
サチは、おれの背中をさすっていた。手つきはやさしく、人肌のぬくもりが確かに伝わってくる。しばらく嗚咽していたおれが落ち着いた頃、彼女は言った。
「私は福盛田くんのフォーム、好きだよ」
「……よせよ」
「ううん。本当だよ。確かに、見てくれはちょっと悪いかもしれないけど、必ずしも教科書通りのフォームがいいわけじゃないから、騎手が十人いたら十通りのスタイルがあるわけだし。私がいいなって思ったのは、福盛田くんの一生懸命さが伝わってくる感じだよ。馬っていうのは賢くてね、乗っている人がどんなことを考えているか、わかるんだよね。頭のいい馬なら、人の見分けもつくし、喋ってることも覚える」
サチはしゃべり続けた。
「私、大事なのは人と馬の信頼関係だと思ってる。だから福盛田くんの一生懸命さが伝われば、きっと馬も応えてくれるんじゃないかな」
「ウソつけ、そんな都合のいい話があるかよ」
卑屈に溺れ、やさぐれている自分が、ひどく子供っぽく思えた。
サチは照れくさそうに舌を見せて笑った。
「かもしれない。でも私、福盛田くんがこれまで頑張ってきたことは

ウソじゃないと思うよ」
「……」
「もし、騎手の道をやめても、別の道に行っても、ここまで頑張ってきたことは糧になると思う。もし福盛田くんが、違う道に進むことになっても、私は応援するよ。もちろん、騎手を目指し続けるっていうなら、それも応援する。だって、せっかく友達になったんだから」
屈託なく微笑むサチの顔を見て、おれは何かが許されたような気がした。そして、おれはおれのことを許してもいいんだと思えた。こんなにちっぽけで、優柔不断なやつを。
おれはサチに答えたくて、声を振り絞ろうとした。だが、泣いて喉が渇いたせいか、かすれて上手く声が出ない。
「あ、飲む?」
サチから飲みかけのリンゴジュースを飲ませてもらって、おれは喉の調子を整えてからいった。
「あ、ありがとな……」
「いいっていいって!」
リンゴと同じ赤色に染まる彼女の頬を見て、おれは急に彼女との距離が恥ずかしくなった。姉三人の末っ子長男ではあるが、サチの雰囲気はどの姉のそれとも当てはまらない。
「どうしたの?」
長いまつ毛。まん丸い瞳。甘酸っぱいにおいは果実のそれに似ていた。無意識に意識して、思わずどきりとしてしまう。
「あ、いや、なんでもない」
「そっか」というと、彼女はさっきおれが口をつけたリンゴジュースを飲み干した。おれは何かを言いかけたが、満足そうな彼女の顔を見て口をつぐむことにした。
それから帰り道の数十分、今度はおれがサチに自分の話をする番だった。ダービージョッキーに憧れていること。好きな競走馬のこと。姉たちのこと。体重制限が厳しすぎてトイレで吐いたこと。好きなマンガやゲームのこと。
サチはつぶさに反応してくれた。しゃべること、コミュニケーショ

ンが好きなのが彼女の性格らしい。行きに比べると、遥かに楽しい時間を過ごせた。
寮の前まで戻ってきた。
「君野はさ――」、こんなふうによく抜け出したりしてるのかと問いたかった。
「あ、『サチ』でいいよ」
そうして彼女はウインクを送ってきた。
「それで、私も『光』って呼んでいいかな？」
言わずもがなおれはうなずいた。
「じゃあまた明日ね、光」
「ああ、おやすみ、サチ」
おれが寮を抜け出したのは、この日が最初で最後になった。
後検量の検量室は、ＧＩレースの前にも関わらず賑やかなムードに包まれていた。騎手をはじめとした関係者たちによる拍手までわき起こっていたほどだ。
ボードには「同着」の文字が書かれていた。
※
スプリングタイムス電子版　１２月○○日　１６：０１
■フリップフロップ無傷でＧＩ制覇　ホープフルＳ
年内最後のＧＩホープフルＳが中山競馬場の２０００メートル芝コースで行なわれ、短期免許で来日中のＴ．アザール騎乗の二番人気フリップフロップ（水戸雄二厩舎所属）が優勝。デビュー３戦３勝、無傷のＧＩ制覇となった。勝ちタイムは２分１秒８。
■ルーキー同着Ｖ　君野騎手３４勝でフィニッシュ
中山６Ｒは１１番グローリーモーニンと１３番オールノヴァが同着Ｖ。新人勝ち頭の君野佐知子騎手（美浦・末永長介厩舎）と、同期の福盛田光騎手（美浦・野々口徹厩舎）による同着優勝となった。君野騎手はこれで今季３４勝、福盛田騎手は１３勝。
※
写真の中、別々の勝負服を纏った佐知子と光が肩を並べている。佐知子のほうは光の肩に右手を回してもう片方の手でピースサインを

作り、光のほうはぎこちない笑みをしながら控えめにピースをして、もう片方の左手は所在なさげに虚空に漂っている。表彰式の時に気を効かせた記者のひとりが撮った写真を厩舎宛てに送ったのだ。
佐知子はコタツの中に足を突っ込んでぬくまりながら大晦日のテレビ番組を見ていた。
「お姉、こっちの男のひとって誰？」
「ん、あー、それは光。競馬学校の同期だよ」
「ふーん。かっこいいじゃん」
「そうかな？」
写真をまじまじと見ていた妹からそう言われ、佐知子はあまりピンとこなかった。普段の競馬に臨む姿は確かにかっこいいと思うが、こういう風にじっくりと静止画で見るとまた違う印象があるのかもしれない。
お菓子を頬張りながら、妹は続けた。
「でも、お姉より勝ててないってことはまだまだだね」
「そんなことないと思うけど……」
「ダメ。男ならもっと強さを渇望してなくちゃ。引かぬ！媚びぬ！省みぬ！っていう感じの男じゃなきゃ認めないよ」
「えぇ……」（それはあなたの趣味じゃないの……？）
「まあ、まだ一年目だしこれからかな。がんばれよ小僧」
（〝小僧〟って言った！　今この子〝小僧〟って言った！）

【競馬】リーディングジョッキーはやはりあの男・・・！【受賞コメントあり】

中央競馬の全日程が終了した。

リーディングジョッキーには王子進之助（栗東・フリー）が最多勝利と最多獲得賞金の二冠に輝いた。最高勝率騎手は郷田ひとみ（美浦・フリー）が初めて獲得した。

また、最多勝利新人騎手は３４勝を挙げた君野佐知子（美浦・末永長介厩舎）が受賞している。

■受賞コメント

王子進之助　騎手（最多勝利騎手・最多賞金獲得騎手）

「今年もこの賞をいただくことができて光栄です。１レース１レース丁寧な騎乗を心がけ、小さな努力の積み重ねがこうした結果につながったのだと思います。関係者の皆さまに心から感謝いたします。また次もこの賞をいただけるように頑張ります」

「（今年の目標について）これまでと同じです。常にベストを目指して、トライ＆エラーを繰り返して、１勝をたくさん積み重ねていきたいです」

郷田ひとみ　騎手（最高勝率騎手）

「全国リーディングは初めてなので、本当に嬉しいです。キャリアハイも更新できましたし、自分の中でイメージしている騎乗に近づけた手応えもありました。それもひとえに関係者の皆さまにたくさん声をかけていただいたおかげだと思っています。ありがとうございます」

「（今年の目標について）一年を通じては、コンスタントに結果を出していきたいです。リーディングも当然狙ってます。レース単位でいえば、ダービーを獲りたい」

君野佐知子　騎手（最多勝利新人騎手）

「これだけ勝てたのは関係者の方々のバックアップのおかげです。今

年は応援してくれる皆さんの期待に応えられるように、昨年よりも成績を伸ばせるように頑張ります」

1　名無しの競馬好き
いつもの
七冠：鬼畜王子
六冠：絶好調
五冠：好調
四冠：普通
三冠：不調
二冠：絶不調
一冠：引退間近
今回は四冠（最多勝利・最多賞金・ＭＶＪ・関西テレビ放送賞）なので平常運転の模様
2　名無しの競馬好き
＞＞1
ちなみに
最多勝利・最高勝率・最多賞金獲得・ＭＶＪ・フェアプレー賞・関西テレビ放送賞・ベストジーニスト・ベストドレッサー賞で八冠獲ったこともあるぞ
3　名無しの競馬好き
＞＞2
最後２つでワロタ
もはや王子じゃなくて王だな
4　名無しの競馬好き
郷田ネキ全国リーディング初ってマ？
5　名無しの競馬好き
＞＞4
マジやで
関東リーディングは数年前から獲ってるけど
6　名無しの競馬好き

＞＞５
意外だわ
７　名無しの競馬好き
郷田ネキって安定感ヤバいよな
勝率だけじゃなく連対率・複勝率も１位だし
８　名無しの競馬好き
＞＞７
わかる
ＧＩは毎回馬券に絡んでる印象ある
９　名無しの競馬好き
＞＞７
ネキは負けて強しの競馬も多い
逆に王子は負ける時はあっさり負けるし寄る年波で結構取りこぼしも増えた
１０　名無しの競馬好き
＞＞９
名前は王子でも中身は４０代のおじちゃんだから仕方ないね
１１　名無しの競馬好き
＞＞１０
普通の４０代のおじちゃんならもう引退しててもおかしくないんだよなぁ・・・
１２　名無しの競馬好き
いよいよ世代交代ありそうやな
１３　名無しの競馬好き
昔はリーディングといえば西の王子か東の末永だった
末永が引退してから完全に王子一強が続いてたけど今年はどうなるか
１４　名無しの競馬好き
そういや高松宮記念ストラグルで同期タッグＶしてたな
１５　名無しの競馬好き
＞＞１４

王子と末永の二人で４５００勝してるとか普通にヤバいわ
１６　名無しの競馬好き
＞＞１４
あれは胸熱だったわ
しかも厩舎初ＧＩ勝利とか出来すぎやろ
１７　名無しの競馬好き
＞＞１４
スプリンターズも香港も惜しかったな
１８　名無しの競馬好き
＞＞１７
男王子、阪神ＪＦを蹴ってストラグルのラストランの鞍上へ
１９　名無しの競馬好き
末永といえば佐知子きてからやたらとニコニコするようになって
て草
２０　名無しの競馬好き
＞＞１９
メディア嫌い無愛想おじさんから完全に娘を見守るお父さんに
ジョブチェンジしとるな
２１　名無しの競馬好き
＞＞１９
隠し子かな？
２２　名無しの競馬好き
＞＞２１
チョーさん未婚やろ
まあ公表してないだけかもしれんが
２３　名無しの競馬好き
女性騎手の新人最多勝利は史上二人目（一人目はもちろん郷田兄貴
姉貴）
２４　名無しの競馬好き
＞＞２３
ということはサッちゃんもメスゴリラ系ジョッキーになってまう

ん？
２５　名無しの競馬好き
＞＞２４
両方美浦だからもしかしたら・・・ｗ
２６　名無しの競馬好き
＞＞２４
ならねーよｗｗｗ
郷田って新人の時からあんな感じだったしｗ
２７　名無しの競馬好き
＞＞２４
フツーに無理やろ
ネキは突然変異もいいとこ
どのスポーツの世界に行っても余裕でチャンピオンなれるで
２８　名無しの競馬好き
素朴な疑問なんやがなんで佐知子はこんな勝てたん？
２９　名無しの競馬好き
＞＞２８
折り合いつけるのがめちゃくちゃ上手い
まあズブい馬を動かす能力は並以下だけど
３０　名無しの競馬好き
＞＞２８
メンタルがタフすぎる
・落馬した直後のレースで勝つ
・１番人気飛ばした直後のレースで勝つ
・ヤジに対してウインク返した後に勝つ
・たまに末永調教師を「チョーさん」と呼ぶ
・キレてる郷田ネキに話しかける
３１　名無しの競馬好き
＞＞３０
これは草
３２　名無しの競馬好き

>>30
鋼メンタルっていうより天然入ってるなw
33　名無しの競馬好き
「史上初のリーディング女性騎手」って言われても郷田ネキだとコレジャナイ感すごいわ
34　名無しの競馬好き
>>33
「性別：郷田」だからしゃーない
35　名無しの競馬好き
>>33
この前「女に生まれてよかった。男だったら鞭を入れたら馬が失神してる」とか言ってて爆笑したわ
36　名無しの競馬好き
なんでや！郷田ネキかわいいやろ！
競馬の時バーサーカーになるだけで素顔は普通に美人やぞ
37　名無しの競馬好き
>>36
顔は整ってるしメークアップして髪型変えたら印象変わると思う
38　名無しの競馬好き
>>36
半ギレインタビュー正直すき
インタビュアーになってなじられたい
39　名無しの競馬好き
サッちゃんほんまかわいい
バラエティとか出たら間違いなく人気出るやろ
40　名無しの競馬好き
>>39
いや普通にブスやろ
41　名無しの競馬好き
>>40
末永「お前を○す」

４２　名無しの競馬好き
＞＞３９
師匠がチョーさんだからバラエティ系は全部断っとるらしい
出れるとしても「王子の部屋」くらいやろ
４３　名無しの競馬好き
＞＞４２
まあ女の乗り役ってだけで人気が先行しちゃうやつは結構おるからな
賢明な判断でしょ
４４　名無しの競馬好き
＞＞４３
佐知子は実力伴っとるほうやろ
これで重賞勝ったら郷田までとは行かなくとも歴代女性騎手の中でも相当上位いけそう
４５　名無しの競馬好き
勝利数ランキング
１位　王子
２位　郷田
３位　シンガー
４位　ハリス
５位　梁田
ぶっちゃけ王子郷田と外人プラス梁田買ってれば当たるわ
４６　名無しの競馬好き
ワイ未来から来たけど将来佐知子はリーディング獲るで
４７　名無しの競馬好き
＞＞４６
無理だゾ
４８　名無しの競馬好き
＞＞４６
重賞は勝てる
ＧＩもたぶん勝てる

ただリーディングは絶対ムリ
勝ちすぎて性転換疑惑が出るほどの郷田がいる限り不可能
４９　名無しの競馬好き
＞＞４６
肉体改造してネキレベルになればワンチャン
５０　名無しの競馬好き
＞＞４９
それただの郷田ネキやん！ｗｗｗ
５１　名無しの競馬好き
１年前「女ジョッキー？どうせパンダやろ」「チョーさんもトチ狂ったか」
現在「サッちゃんがんばえー！」
５２　名無しの競馬好き
＞＞５１
コイツ手のひらクルックルやな
５３　名無しの競馬好き
＞＞５１
ワイかな？
５４　名無しの競馬好き
佐知子なんてかわいくて明るくてそこそこ勝てて穴開けるくらいしか能がない騎手
５５　名無しの競馬好き
＞＞５４
十分すぎ定期
５６　名無しの競馬好き
＞＞５４
１年目でこれだけやれたら満足や
５７　名無しの競馬好き
佐知子は今年乗鞍増えるだろうし普通に楽しみだわ
５８　名無しの競馬好き
＞＞５７

夏のローカルが狙い目かな
福島新潟あたりでサラッと重賞勝ちそう
５９　名無しの競馬好き
＞＞５７
ＧＩ初騎乗初勝利とかやりそう
６０　名無しの競馬好き
俺、ひとみが今年のダービー勝ったら結婚するんだ・・・
６１　名無しの競馬好き
＞＞６０
唐突な死亡フラグ
６２　名無しの競馬好き
＞＞６０
ネキはダービー何乗るんやろ
６３　名無しの競馬好き
＞＞６２
どう考えてもフォーユアアイズやろ
朝日杯の勝利コメントで３冠狙ういうてたし
６４　名無しの競馬好き
＞＞６２
王子　ドリームメイカー（京都２歳Ｓ優勝・２戦２勝）
ネキ　フォーユアアイズ（朝日杯ＦＳ優勝・３戦３勝）
シンガーｏｒハリス　フリップフロップ（ホープフルＳ優勝・３戦３勝）
現時点での有力馬はここらへん
６５　名無しの競馬好き
＞＞６０
勝ったらダービー初制覇か
６６　名無しの競馬好き
佐知子新人にしてはポジション取りとかうますぎや
絶対二周目プレイやろ
６７　名無しの競馬好き

＞＞６６
前世は騎手か馬か
６８　名無しの競馬好き
郷田も佐知子もやっぱり首席で卒業しただけあるな
将来的にはＧＩで女性騎手ワンツーとか見たい
６９　名無しの競馬好き
強い牝馬だけじゃなく強い女性騎手も増えてきたな
７０　名無しの競馬好き
郷田ネキとサッちゃんはおめでとう
王子は流石としか言いようがない

ホタルミヅキ（葉流の英雄とその娘の物語）

ホタルミヅキは私の大好きなサラブレッドだ。

地方の葉流（はながれ）競馬場で競走馬としてのスタートを切ったホタルミヅキは初めから活躍を約束された血統ではなく、デビューから6、7戦目まではどこにでもいるような地方馬の一頭に過ぎなかった。

転機は二勝目を挙げた後。ホタルミヅキは怪我のために放牧に出された。そして、放牧を終えての復帰戦で彼は見違える走りを見せた。連戦連勝を重ね、葉流でのナンバーワンホースを決めるグランプリ競走で他の有力馬をちぎってみせた。

葉流の王となった次は、南関東や岩手、名古屋などへ遠征して他の競馬場の馬と鎬を削った。そこでも葉流の王者に相応しい走りを見せて、好成績を残していった。

かくして、ホタルミヅキは中央ＧＩへ挑戦した。東海Ｓを勝ち、東京ダート１６００ｍフェブラリーＳ。地方所属馬の中央ＧＩ制覇はこれまでたった一頭。地方の雄として中央馬に挑むホタルミヅキには大きな期待が寄せられ、それは単勝２番人気という形で表れた。

だが、史上二頭目の栄誉には輝けなかった。惜しくも二着に終わり、それがホタルミヅキの中央ＧＩ成績のキャリアハイとなった。

ただ、以後も葉流を中心に地方でのレースに勝ち続け、地方競馬において最優秀４歳以上牡馬に選ばれるなど、中央・地方の競馬に少なくない影響を与えたサラブレッドだといえる。

ホタルミヅキを語る時に、ほとんど同時に語られるのが主戦騎手を務めた湖月久（こづきひさし）だ。デビュー後の数戦を除いて地方の雄者の手綱を取った男は、若くして葉流のグランプリジョッキーの栄冠を掴み、長年その座を守り続けてきた。スタージョッキーと聞かれたら、大抵の人は中央の名手――たとえば王子進之助などを挙げるだろうが、幼い頃から葉流の競馬に慣れ親しんできた私にとってのスタージョッキーは、間違いなく湖月久だ。

葉流での勝利数は歴代一位。絶対的チャンピオンとなり、他の競馬場へ遠征に行く機会が増えても、彼は葉流グランプリには欠かさず出

続けた。勝利インタビュー。気さくな性格の彼は、人懐っこい笑顔でいうのだ。
「今年も特別な日になりました。私はこの町のにおいが好きです。私はこの町の景色が好きです。そして、馬たちが砂を蹴り上げる音が大好きなんです。葉流を、競馬を、これからも応援よろしくお願いします」
彼は生まれ育った町を、心から愛していた。中央へ移籍する話が来ても、彼は固辞し続けた。「おれは、葉流に骨を埋める。ここの馬で日本一になりたいんだ」
彼は４０を前にして現役を引退し、調教師となった。騎手として叶えることができなかった中央制覇の夢を、今度はトレーナーという立場から叶えるためにスタートを切った。
しかし、彼の夢は突然終わりを迎えることになった。

◆

『２００の標識を通過して先頭はシカノタイヨウ！
内からはサイゴウライオン迫る！　間を突いてセブンスドッグ！
そして大外から…来た来た来たホタルミヅキが飛んで来たーッ！
葉流の英雄が先頭に立った！　あと１００メートルだ！
シカノタイヨウは伸びない！　ホタルミヅキだ！　ホタルミヅキだ！
あぁ！スペクターオウルが突っ込んで来たーーッ！
最後は二頭並んでゴールイン！
さあどっちだ！
地元の夢と期待を背負った蛍か？
それとも最後に飛び込んで来た梟か？』

◆

自分は騎手になるんだという想いが芽生えたのはいつだったか。もう覚えていない。
だけど、父が毎年のように葉流グランプリを勝ってスタンドに向かってガッツポーズする姿が誇らしくて、ずっと憧れていた。
地方競馬教養センターに行きたいと伝えたら、父は喜んだ。どうや

ら父のほうも満更でもなかったらしい。
父が亡くなったのは私が教養センターに行く1ヶ月前。未明の馬房で倒れ、そのまま亡くなっていたと聞いている。
あの頃の私は、誰にいうでもないことを、ずっと胸の奥で、頭の隅で、唱えていた。
――ずっと、あの人と一緒にいられるものだと思っていた。
私にとっての競馬は、葉流だ。中央じゃない。他のどこの地方の競馬でもない。人口は8万人程度の町のちょうど真ん中あたりにある、大きな湖のすぐそばの、競馬場。お世辞にも綺麗とはいえないけれど、楽しそうな声と蹄の音がする、あの場所。
卒業して騎手になったら、あの場所で、あの人が着ていた勝負服を着て、あの人が管理する馬に乗って、レースに勝つ。
そして、いつか中央の貸服を纏って、GIレースに出て、勝つ。あの人の夢といっしょに。
温めていた青写真は、二度と手に入らない理想の遺影になってしまった。
母や近しい人たちは、慰めてくれた。自分たちだってつらいだろうに、私に気を遣ってくれた。
そんな人たちの不安や心配を少しでも取り除くため、あるいは自分の喪失感を紛らすため、私は競馬に打ち込んだ。冷たい炎の上で走り続けるような日々で、表情筋はすっかり固くなった。感情をあまり表に出さなくなった。
トップの成績で卒業し、父と親しかった調教師の方の厩舎から私はデビューした。もちろん勝負服は、あの人と同じ柄。ずっと待ちわびてきた衣装だったけれど、袖を通したくないと思う自分もどこかにいた。『もう、父ちゃんはいないんだ』

◆

デビューから自分でも出来すぎだと思うほど順調に勝ちを重ねて、とうとう父と同じ葉流グランプリジョッキーの栄誉を手に入れた。
この頃にはもう『もし、父が生きていたら』などという妄想は捨て去っていた。もう私はプロの騎手で、葉流を代表するジョッキーの一

人なのだから甘く温い感傷に浸る暇などはない。
私にはいつの間にか『葉流の若き天才』なんて二つ名がつくようになった。
史上最年少、さらには初の女性騎手としてのグランプリジョッキーの誕生は、経営不振に落ち込む地方競馬にとって格好のカンフル剤になる。市・県や関係各所からのキャンペーンやタイアップの話が次々舞い込んでくるようになった。
中央では郷田ひとみという化け物のような女ジョッキーが旋風を巻き起こしていた。（歴代新人最多勝利や史上初平地ＧＩ制覇などをやってのけた彼女のことを、語弊を恐れずあえてこう表現させてもらう）。「競馬界に舞い降りたニューヒロイン」なんて具合に、マスメディアはこぞって彼女を取り上げた。だが、彼女は究極的にストイックだった。「女」というだけで持て囃したがる連中に、中指を突き立てるような発言・対応は私自身胸がすく思いで見ていた。彼女は成績を伸ばし続けた。自分には決して真似できないような郷田ひとみの追い方は、女子格闘技を見ているかのようだった。余談ではあるが、彼女に憧れて騎手を目指すようになる十代の少女たちが増えていると聞いた。私は、なにか勘違いしているような輩が競馬の世界に来るんじゃないかと内心危惧していた。怪我への恐怖も知らず、覚悟も無しにこの業界に入って来るのではないか、と。だが幸いなことに、今のところそういう騎手はいないそうだ。まあ、競馬学校や教養センターでの生活に耐えれないような子を篩い落とすのは自然なこと。取り越し苦労だったようだ。
郷田ひとみと私の違いはなんだろう。
きっとこうだ。私は『記号になること』を拒まなかった。
私は『葉流競馬を盛り上げる』ためなら手段を選ばなかった。テレビ・ラジオ出演、雑誌、イベント、施設訪問。地下アイドルじみた安っぽい衣装での撮影もしたし、幹部や議員なんかが集まる楽しくもないパーティーにもよく行った。町を歩けばそこかしこで私の写真が使われた広告を目にする。
葉流は崖っぷちの競馬場だ。かつての活気は失われ、人口減少も歯

止めが効かない町で、大きな予算を食いながら業績回復が見込めない競馬場の廃止が検討されたのは一度や二度ではない。ホタルミヅキや湖月久のようなヒーローはもういない。私がデビューする直前まで、段階的な廃止計画がほとんど決まりかけていたほどだ。

そんな時に私がデビューした。志半ばで旅立った地元の英雄の娘――笑顔を振りまく愛嬌は無いけれど、落ち着いた佇まいで雰囲気がある女性ジョッキーが、崖っぷちの地方競馬を廃止から救う、という、そんなシナリオ。

私は己――湖月美景（こづきみかげ）という存在を、恐ろしく客観的に見ていた。大衆の理想を演じる自分と、その自分をプロデュースする自分が別々にいるような気がしていた。

騎手はギャンブルの駒だというが、私は独楽でもあるだろう。回り続けて、最後の止まる時まで、見ている人を楽しませる。それが私に課せられた使命に思えてならなかった。

私は、張りぼてのヒーローでよかった――可愛いだけのお人形さんで。いつも、自分にそう言い聞かせていた。

父との思い出の場所を、失くしたくなかった。

◆

「美浦の末永長介厩舎からやって来ました、君野佐知子といいます。よろしくお願いします！」

そう名乗る少女が葉流に来たのは、去年のことだった。デビュー一年目、ピカピカの一年生の彼女の目は、きらきら煌いているように見えた。

女性同士なわけで、私が彼女の面倒を見るのは決まっていたような流れだった。

君野佐知子は愛らしい容姿で、それらしい衣装とメイクを施せばもしかしたらアイドルでも通用するんじゃないかと思う。

私は最初、少しだけ彼女の元気の良さに手を余していたが、こちらが黙っていても彼女のほうから喋りかけてくれるので余計な気苦労をせずに済んだ。どうやら社交性は高いようだ。

「葉流の砂って、東京や中山とも南関とも違う感じで独特ですね」

「テキからは『当たって砕けろ』と、ありがたい言葉をいただきました……大丈夫かな？　ま、なるようになるか」
「まだまだ覚えることが多くて大変です。はぁ、これなら自分で走るほうが楽ちんだなぁ……。ほぇ？　な、なんでもないですっ！　アハハ！　アハハハ！」
「フルーツが名産ってことは、それを使ったスイーツとかもあったりしますか？」
「葉が流れるって書いて葉流。なるほど、確かに湖や川がありますもんね。あ、そういえば湖月さんも『湖』ですね！」
次から次へ話題が変わる。掛かり気味の若駒のようでさえある。
ふと、彼女がこういった。「テキから聞いたんですけど、湖月さんのお父さんも葉流のジョッキーだったんですよね」
「そうです。湖月久です」
私はこともなげに返した。
湖月久という名を、今の若い人たちはきっとそこまで知らない。葉流での知名度は高いが、それも所詮小さな輪の中の話。フェブラリーSで二着になったのは昔の出来事。熱心な競馬ファンでもなければ、湖月久の名前もホタルミヅキも速い流れの中を過ぎていくだけのものになる。
無垢な瞳が、私を覗き込むように見ていた。
「私がセンターに行く少し前に亡くなりました」
「そう、だったんですか……」
一瞬にして彼女が勢いを無くし静かになる。萎れた花のようだ。
私は伝える。「昔のことです。……別にいいですよ。聞いたらNGってわけでもないですし、全然話しますよ」
「じゃあ、ひとつ聞いてもいいですか」
私は少しうなずいた。
「お父さんはどんな方でしたか？」
表情ひとつ変えずに答える。
「あの人は永遠に私の目標です。だから、絶対に届くことはないし追いつけもしない。たとえ届いても追いついても――懐かしむことし

か、今はもうできないんです」
　その昔、まだ父が現役だった頃の話。
　幼かった私に、あの人は色んなことを教えてくれた。
　その中でもこれは多分、私のいちばん古い記憶で、いちばん明確に残っている記憶でもあった。
「ほたるって、どうしてひかるの？」
「オスがメスにプロポーズするため、だったっけ？　ごめん、ちょっと自信ないけど、確かそうだったはず」
「『ぷろぽーず』ってことは、父ちゃんと母ちゃんみたいな？」
「そうそう」
「『こうはい』ってこと？」
「うーん、まあ間違いじゃないけど、もうちょっとロマンチックだよ」
「どういうこと？」
「うん、おれと母ちゃんの話なんだけど――」
　もう二十年以上前の話。父が湖のほとりで母にプロポーズをしたのだ。ちょうど蛍の飛び交う時期の、満月の晩だったそうだ。
　湖面に映った月の上を無数の光が飛び回っているという幻想的な情景を前に、父は母に指輪を渡した。
「ちょっと前までは、夏になれば湖や川のまわりでは、そこら中蛍が飛んでたんだ。わざわざ保護活動なんかしなくっても、いっぱいいた。だけど、どんどん蛍も減っていっちゃったんだ」
「なんで？　なんでほたるへっちゃったの？」
「なんでかなぁ。きっと、ここよりいいところを見つけて、そっちに行っちゃったんじゃないか」
「はながれ、いいところだよ。けいばじょうあるし、みずうみも、おみせも、なんでもあるよ」
「そうだね。でも」
「どうしたらいいの？」
「……」
「父ちゃん……？」
「おれも、美景に蛍でいっぱいになる湖を見せてあげたい。ほんとう

に綺麗な景色だったからな」それは、寂しそうな横顔だった。どんなレースで負けた時にも、そんな表情をしたことはなかったと思う。
「だけど、ほんとうに大切なのは――」
そこから先の言葉を聞く前に、父は厩舎の先生から呼び出されて出ていってしまった。結局、あの言葉の続きを聞けず終いだ。それとなく尋ねたことはあったが、父は『忘れた』と返すばかりだった。
その日、君野佐知子は葉流での初勝利を挙げることは叶わなかった。
追い方に迫力は感じられなかったが、レースを重ねるごとに何かを掴んだのかポジション取りが的確になっていった。
その晩、私は彼女と共に食事をすることになった。
そして、私は盛大に失敗をした。醜態を晒した。
「だ、大丈夫ですか？　湖月さん？」
「……佐知子、馬って話通じると思う？」
「えっ！　えええええ!?　ななな、何の話ですか！　一体、何のことやら……」
「……私はよく話しかける。とはいえ一方的に私が話すだけだから、馬が何を考えてるかは解らない。何を言ったところで言った通りに走ってくれるわけもない。じゃあなんで話しかけるか？　解る？」
「え、ええーーっと、ゲン担ぎ、とかですか？」
「……そう。父ちゃんがよくやってた。音楽を聞かせた野菜が美味くなる、ってハナシがあるだろう。似たようなもので、話しかけたら馬が速くなるって。私は信じてないけど。だけど、今更やめるわけにもいかないからやってる。ああ……なんか返事してくれればいいのに」
「そうなんですねぇ……ほっ」
「ん？　どうした？」
「あ、いえいえなんでもないです！」
「ちょっと美景ちゃん、君野さん困ってるから。ほら、水飲んで落ち着いて」
厩舎のスタッフからお冷を受け取る。
私は普段から酒はあまり飲まない。はっきりいって苦手だ。宣伝

でもアルコール関係のものには出ないと決めている。
だけど、この日はお偉いさん方に勧められた手前、断る事もできずに強めの酒をだいぶ飲まされた。そのお偉いさんは、間近で見た中央の可愛らしい騎手に満足して帰っていった。気儘な連中だ。
君野佐知子は、ギリギリ未成年だということでアルコールを摂っていない。そして、彼女は親切にも私の相手役を務めてくれている。今時めずらしい良い子だと思った。それなら私は今時どこにでもいる面倒な先輩だろう。
グラスの水を飲み干して、私は立ち上がった。「風に当たってくる」
そして、すたすたと――もとい、ふらふらと、店の戸を開けて外に出た。ひんやりとした夜風が熱とともに鬱屈した感情も冷やしてくれるようだ。
慌ただしい店内から「私がついていきます！」と声がして、彼女が飛んで来た。私が振り向くと、彼女は困ったように笑って舌を出した。
私は君野佐知子を連れて、湖畔にある公園のベンチに腰を下ろした。湖がちょうど一望できる。月明かりなどなく、薄い照明灯の光だけだ。
ほぼ無意識に言葉を吐いた。
「馬が何考えてるか解らないのは当たり前だけど、人間だって同じ。相手が何考えてるかなんて、解らないもの」
「ですよね。ちゃんと口で言って行動で伝えて、っていうことは大事だと思います」
「葉流、どうだ？　住みたくなった？　それとも帰りたくなった？」
「その……いいところだと思いますよ。なんていうか、においが好きです」
「におい？」
「なんていったらいいんだろう？　競馬場のある町独特のにおい、みたいなものです。『あ、ここには競馬場があるぞ！』って感じの」
「……面白いな」
それから、私はどうしてか、彼女にあれこれと話をした。とりわけ、

葉流競馬の現状だ。
　ほとんど初対面の彼女に、なぜ。いや、むしろ初対面の彼女だからこそ、そんな風に話せたのかもしれない。
「たぶん、いや、間違いなく、葉流の競馬は終わる。もう段階的に廃止する方針で何年前からか動いてる。まあ今は、私が居るからな。これまでの負債をいくらか取り戻せると踏んで先延ばしにしてるだけだ。でも、それも長くない。私だって自分の商品価値が長くないことは知ってる。目新しさが無くなれば、大衆の注目は別のアイコンに移る。
　知ってるか？　蛍は、光りながら飛び回るのはオスだけ。メスは弱い光を出してオスを待つ。でもどっちにしろ、蛍の成虫の寿命じゃ夏は越せない。結局、私ひとりじゃどうにもならない」
　すると、彼女は真剣な表情になった。レースで集中している時のようだ。
「――だったら」その声を私は遮った。
「いいんだ佐知子。これはもう、誰が悪いとかどうすれば回避できるかとか、そういう話じゃない。好意は嬉しいけど、これは結局この町の人間の問題だから。
　……移籍の話ならもちろんあった。南関からも、中央からも、それ以外からも。でも、終わりの時に、目を背けたいからといって他所に移るなんてしたくない。大好きな場所だからこそ、最期の時もきちんと見届けてやりたい。だから、私はここで騎手を続ける。続けたい。それが『葉流のジョッキー・湖月美景』の生き様だ。たとえ何を失くしても、最後の一人になったとしても、私はここに立つ。立つとも」
　これまで、母親か師匠くらいにしか言ったことのなかったような言葉を、どうして彼女に言ったのか、うまく説明はできない。
　きっと、酔った勢いというやつだ。そうに違いない。
「失くならないです」
　流れる水のように澄んで通る声が、夜の畔に響いた。
　ハッとして、私は顔を見上げた。その瞳は穏やかな光を灯していた。

「大丈夫です。湖月さんの大切なものは、失くならないです。」
「そうかな……？」
「そうですよ。ここにはステキな人たちがたくさんいるはずです。大切な人たちと過ごした思い出っていうのは、失くならないんです」
「……そうか」
——思い出の場所を失くしてしまったら、その思い出まで消えてしまうのだと、ずっと思っていた。
だけど、そうじゃない。そうじゃなかったんだ。
ほんとうに大切なものはもう既に手に入れていて、それはどこかへ行ったり消えたりはしない。たまにちょっと、見えにくくなってしまうだけで。
彼女は真っ直ぐな眼をこちらに向けている。
「湖月さん」
「佐知子……」
「ふぃ」
「……ふぃ？」
「ふぃーーっくしょん！」
いきなり彼女は大きなくしゃみをした。そういえばだいぶ話し込んでからそろそろ肌寒くなってきた、と思い出す。
打って変わって縋るように私を見てくる彼女の姿に、私は思わず噴き出してしまった。
「あ、笑った！　っくしょい！　って、またぁ!?」
「ふふっ、ふふふ」
気の抜けるようなくしゃみの連発に、普段働かない表情筋が働き者に変わり身している。面白い。
「ええ……湖月さん、ティッシュかハンカチって借りてもいいですか？」
「はい」と私はハンカチを差し出していった。「美景でいい。葉流で湖月っていったら父ちゃんのことだからさ。あと、なんとなく窮屈そうだから敬語も要らない。よろしく」

◆

『――さあ、先頭は6番のサイレントナイト！　追う1番スウィートホリデイとは身体半分差！　内から迫るのは5番のワンダーゾーン！

サイレントナイトが突き放してリードが二馬身から三馬身開く！

二番手スウィートホリデイ！　ここで外から追い込んできたのは2番のノーチェンジ！　スウィートホリデイをかわして単独二番手！

三番手争いはスウィートホリデイかワンダーゾーンか、しかし先頭は突き抜けました！　サイレントナイト！

一着は6番のサイレントナイト。二着に2番ノーチェンジ、三着争いは内5番のワンダーゾーンと外1番スウィートホリデイですが、ワンダーゾーンがやや優勢でしょうか。

勝ち時計は1分16秒6。上がり3Fは40秒8と表示されています。

サイレントナイトの鞍上は、葉流競馬所属の湖月美景騎手。なんと今日三勝目』

『すごいですね。昨日もダイオライト記念をユメミヅキ――あのホタルミヅキの孫で制覇していますから、まさに絶好調といった感じなんじゃないでしょうか』

『そうですねえ。葉流の天才騎手の血を受け継ぐ若き才能が、今日もここ船橋競馬場で躍動している模様です』

◆

「うぇーい」

「うぇーい！」

佐知子とハイタッチをする。いつもやってるわけじゃないし、特に深い意味はないけど、なんとなく。

私は葉流や南関が主で、佐知子は中央が主。一緒のレースに出る機会は少ないけれど、会うたびに刺激を受ける存在だ。

あれから私はユメミヅキという素質馬で葉流グランプリを優勝し、明けてダイオライト記念も制した。当面の目標は夏のダート王を決める帝王賞だ。

佐知子は佐知子で昨年新人最多勝利騎手に輝き、着実に勝ち星を積み上げている。

変化のひとつとして、私はメディアへの露出を抑え目にしたというのがある。記号になることは自ら納得したことではあったが、やはり自分は馬に乗るのが第一だという原点に立ち返ってみることにした。葉流競馬は、今のところは存続という形になっているけれど、いつ廃止に舵が切られてもおかしくない状況に変わりはない。でも、前ほど焦燥感はない。1レースを噛みしめ競馬ができることへの感謝の念を深いところで感じれるようになった。「その時」はやがてやって来るだろうが、悲壮感と責任感に囚われて次に続く道を見失うことはなさそうだ。

思い出は大切ではあるが、思い出だけで人は生きていけない。振り返ってばかりではダメだ。

未来は解らない。だが、未来が過去になる前の今にしか得られない喜びもあると気づいた。

それからもうひとつ変化があった。私としては、これはもうほんとうにびっくりな変化である。

「――そしたらチョーさんもハマっちゃって」

「ふふっ、楽しそうだ」

なんでもないようなことで笑うようになったのだ。

キングオブジョッキー（競馬ゲームにおける諸事情）

タイトル：キングオブジョッキー４
平均☆　４．３
『実在の競走馬、騎手、調教師なども登場する、ジョッキーシミュレーションゲームの王道！
プレイヤーはデビューしたての新人ジョッキー。競走馬に騎乗し勝ち星を増やしていき、大レースで勝利し、世界Ｎｏ．１ジョッキーを目指します。
ご要望に応えて国内レースだけでなく、海外のレースや障害レースも実装。
レースでは本物の競馬さながらの臨場感を意識しつつ初心者にも楽しめる操作システムを確立しました。
中央で、地方で、トップジョッキーを目指すもよし。
年代を選択し、あの名馬や名騎手と対戦するもよし。
オンラインで全国のユーザーと対戦するもよし。
楽しみ方は自由自在！
競馬会のキング、王子進之助騎手も太鼓判！
パッケージ版、ダウンロード版に加え、アプリ版も絶賛配信中！
あなたも今日からジョッキーライフ！』

※

調教を終えて美浦の寮に戻った佐知子は、妹から連絡が入っていることに気づいた。
数回のコール音の後に、妹は開口一番言った。
『お姉、朗報だよ』
「どうしたの？」
『〝キングオブジョッキー〟って知ってる？』
「うん。競馬のゲームでしょ」
『そう。パッケージ版ダウンロード版に加えてスマホで手軽に遊べるアプリ版も絶賛配信中のアレだよ』
「それがどうかしたの？」

『この間大型アップデートがあったの。去年の成績をシステムに反映させたりデータを追加したりしたんだけど、なんと、新しく実装された騎手の中に……お姉がいたんだよ！』
「お、おお～！」
『さっすが新人最多勝！　ちなみに去年デビューの新人の中で実装されたのはお姉だけだよ。ちなみにあの福神漬だか福笑いだかいうヒトはいなかった。格の違いを見せつけたね！』
「福盛田、だよ」
『まあなんでもいいや。てなわけで是非ともお姉にも始めてもらいたいと思ってさ、招待しといたからダウンロードして始めてね』
「私が？」
『当たり前じゃん。いい？　騎手の中にはね、競馬ゲームでイメージトレーニングをしているヒトもいるんだよ。ていうかいるよね？』
「永吉さん、とかかな」
『でしょ？　ということでこのゲームを通して騎手としての腕を磨いてほしいんだ』
「……本音は？」
『石が欲しい！　ガチャ回したい！　今しか手に入らない限定ＳＳＲが来とるんじゃあ～！』
「はぁ、そんなことだろうと思った」
『あ、でもねでもね、これほんとに面白いから息抜きにちょうどいいんじゃないかなーと思ってね。あ、あと似た感じのゲームでね――』
「わかったわかった」
『ほんと!?　あぁ～ありがたや～！　お姉あいしてる！』
「まったく、調子いいんだから。あ、でも私ゲームあんまり得意じゃないよ。知ってるでしょ？」
『うん。スマ〇ラでボコボコにしまくったの覚えてるもん。まあ、飽きたら削除しちゃってもいいから、よろぴくー』
「はいはい。夢中になるのはいいけどほどほどにね」
『わかってるって。じゃあねー』
「うん、またね」

※

「また負けた……」
「ど、どうした？」
昼時、ズーンという効果音が鳴りそうなほど項垂れる佐知子に、長介が思わず声をかけた。
佐知子は持っていたスマートフォンの画面を向けた。〝2着〟の文字が表示されている。
「ナシオボトルネック、うちの管理馬だった馬か」
「はい……」
長介はナシオボトルネックのことを思い出す。あれはユニークな競走馬だった。
調教師としてスタートしたばかりの時分に任せられた牡馬だった。とにかく気性が荒くなだめすかすのに苦労した。
彼の経歴をざっというと、ダートの新馬戦から3連勝して挑んだ初重賞では壁に跳ね返されて大敗。以後は低迷する時期が続き、勝利が遠ざかった。そして元いた厩舎の解散に伴って長介の厩舎にやって来たのだ。転厩してしばらく経ったある日、彼は久々に勝利を収めた。そこからはどうしてかキレのある走りを取り戻し、重賞で立て続けに2着3着と好走。かと思えば次のレースではあっさり負けるなど、好走と凡走を繰り返すようになった。結局、4勝のままで引退したが、7歳までしぶとく走り続けラストランの重賞でも掲示板をきっちり確保していた。重賞未勝利ながら獲得賞金額は結構なものになったはずだ。
「お前がゲームやってるなんて意外だな」
「私だってゲームくらいするよ。あんまり得意じゃないケド」
キングオブジョッキーでは史実馬に乗ることもできる。かつて無敗で三冠を達成した歴史的サラブレッドや、マイル界の絶対王者、恵まれない血統を撥ね退けて血を遺したグランプリホースなど。『もしあの馬に乗ることができたら』と挙げ出したら枚挙に暇がないだろう。
その中でいえばナシオボトルネックは実績も知名度も劣る。重賞

勝ち無しのダート馬をわざわざ好んで育成する理由は、その馬が長介の管理馬であることに他ならなかった。
「みてみてチョーさんのグラフィック、そっくりだよね」
「いうほど似てるか？」
ゲームの世界は膨大な『もしも』を実現する。
キングオブジョッキーに関していえば、『もしあの名馬がケガをせずに走り続けていたら』『もしあの馬同士が対戦したら』『もしあの馬が海外レースに挑戦していたら』『もしあの騎手があの馬に乗ったら』などを叶えることができる。
「このゲームだと私、凱旋門賞二着した後にジャパンカップ走って、有馬記念走って、結局引退しちゃうんだよね」
現実では、凱旋門賞で惜敗した直後に陣営は来年の凱旋門賞へ意欲を見せた。もっとも、サーチライト号が急死したことでその夢は果たされなくなっていたのだが。
「もしあのまま走ってたら、ジャパンカップいって休養だろうな。明けたら海外のレース使ってから凱旋門賞行くつもりだったって幸野さんは言ってた」
「……行かせてあげられなくてごめんね」
「いいって。気にすんな」
もし、サーチライト号が翌年の凱旋門賞に出走していたら。もし、無事に引退して繁殖入りできていたら。その仔に自分が乗れることができたら。そんなことを考えたこともあった。
すると佐知子はスマホを手から離した。
「もうお終いか？」
「うん。ゲームは一日一時間って決めてるから」
「えらく節制できてるじゃないか」
「えへへ」
長介は考える。もし自分が騎手を続けていたらどうなったのだろうか。八大競走を制覇し、リーディングジョッキーになり、絶頂ともいえる時期に、彼は己に騎手としての――人としての在り方を問うた。そうせざるを得ない〝事件〟が起きたからだ。

『私に言わせれば、先輩は騎手に向いていません。絶対的に、絶望的に、希望的に。ですから、別の職業に就くことをお勧めしますよ。ほら、言うじゃないですか、転職するなら早いうちに越したことは無いって。年を取ってからの転職は大変ですからね。え？　ああ、そうですね。ですけど１０００勝しようが２０００勝しようが、本当に騎手という職業に向いているかどうかなんてこれっぽっちも解らないじゃないですか。向いていなくても１０００勝や２０００勝できるジョッキーもいるかもしれないじゃないですか。え、〝そんな人はこれまでいなかった〟？　はあそうですか、でもこれから先、そういう方が現れるかもしれないじゃないですか。『いない』と言い切れないからには、『いる』可能性を捨て去ることはできないんですよ？』

このゲームに彼女の名前はどこにも無い。『いない』と定められた、存在を許されない者に『もしも』は無いのだ。

「チョーさん？」
「……ああ、どうした？」
「大丈夫？」
「少し考え事をしていただけだ。お前の騎乗依頼を捌くのは、なかなか骨が折れる」
一年目でそれなり成績を残し、二年目の佐知子には前以上に依頼が来るようになった。見た目での華がある女性ジョッキーを乗せて注目を浴びたいという馬主もいるが、彼女の力量を信頼している馬主もいる。また、かつてトップジョッキーだった長介と縁のある馬主や調教師からはよく依頼が来る。長介がＧＩを勝たせて種牡馬入りした馬の産駒に佐知子が乗ることもしばしばあった。
もし騎手を続けていたら、長介は王子のような競馬界のレジェンドになっていただろうか。ゲームの中の長介のように。
それは本人にも解らなかった。

※

場面転換。

佐知子がキングオブジョッキーを始めた影響か、美浦の若い騎手の間でこのゲームがちょっとしたブームになった。
「光もやってるんだよね？」
「ああ。でもこれでサチにまた差つけられたな」
「どんなもんだい。っていっても、ステータスは最弱だけどね」
「でも特能は1コついてるじゃん」
「特能？」
「特殊能力のこと」
ゲーム中、騎手の基本パラメータ（脚質適性、パワー、折り合いなど）は1～100までの能力値によりS～Fのランクに格付けされる。それとは別に特別な効果を発揮できる特殊能力が存在する。大レース、クラシック、道悪、新馬、イン突き、コーナーリング等々。ちなみに大騎手・王子進之助はほとんどの特殊能力をコンプリートしている。
佐知子は、夏の活躍が「夏女」という特殊能力で反映されていた。
「あ、それならチョーさんは「牝馬」「クラシック」「海外レース」「大レース」とかついてるんだよね」
「あれだけ活躍したら、そうだろうな」
「ふふーん」
上機嫌になった佐知子を見て、光は頬を緩めた。
「そうだ。光はどんな騎手でやってるの？」
「ああ、俺は――」
と、スマホをタップしたところで、彼は手を止める。なにやら汗をかいている彼を、佐知子は不思議に思った。
「どうしたの？」
（……サチでゲームしてるって言っていいのか？　どうなんだろ？　いや逆の立場だったら俺はまあ嬉しいけど、サチはどうなんだろう。もしかしたら引かれるかな……）
ぶつぶつと脳内で唱える光をよそに、佐知子は自分のプレイデータを見せた。
「じゃじゃーん！　エディットで光つくったんだ」

「……え？」
「妹が光の名前をぜんぜん覚えてくれないから、ちょっと悔しくってね。見返してやりたくて」
「サチ……」
「まあオンライン対戦ではボロボロに負けちゃってるけどね。あっ……迷惑だったかな？」
光は首を大きく左右に振った。照れくささはあったが、素直に嬉しかった。
「――お互い様だね」
「なんか、恥ずかしいな」
「あはは、でも気持ちは分かるよ。私もチョーさんでプレイしたデータあるし」

※

後日、佐知子は再び妹と通話をしていた。
「かくかくしかじかなんだ」
『まさかそんなにバズるとは思わなかったわ……ちなみにウチのお姉は三冠ジョッキーになったぜ』
「すごいなぁ」
『まあ楽しんでもらえてるようで何よりかな。てことで本題なんだけど』
「なに？」
『またまたオススメの競馬ゲームがあるんですよ』
「またまた来たね」
『というわけでタイトル、ドン！』
タイトル：Kガールズ！～ボーイ・ミーツ・ヒロインジョッキー～
平均☆　3．5
『競馬＋学園恋愛シミュレーション＋リズムゲーム。
女性だけの騎手養成学校に唯一の男子生徒としてやって来た主人公。個性豊かなクラスメイトたちとレースで切磋琢磨し、トップジョッキーを目指すというのがシナリオモードの骨組みです。
ヒロインたちの好感度やレースでの成績による多数のルート分岐

があります。
一定以上の好感度でヒロインとのレースに勝利して告白をするルート、
学内でリーディングを獲得してハーレムを築くルート、
主人公がケガのために騎手を諦め、ヒロインを支えるために厩務員を目指すルート、
突如宇宙から襲来した競馬星人と戦うルート、などなど。
多種多様なストーリーが楽しめるのが魅力です。
物語を彩るヒロインジョッキーたちには豪華声優陣を起用！
今なら無料１０連ガチャをプレゼント！
〝ステッキを振るって、恋は走り出す。〟
Ｋ（ケイバ）ガールズたちとのスクールライフをご堪能あれ！』
「おお……これはまた、なんというか」
『ちなみにジャンルは音ゲーだよ』
「そうなの!?」

パピヨン（闇に飛び去る翅のような）

王子進之助と末永長介が覇を競っていた時代。まだ長介が藤坂寅一厩舎の所属だった頃。

長介の所属する藤坂厩舎にひとりの女性騎手が所属することになった。

これに対して『俺は反対です』と長介も師匠である藤坂に進言したが、それでも藤坂は彼女を所属させた。まだ当時の競馬界は圧倒的な男性優位の世界であり、「乗り役が男がするもの」という意識が根深く、女性騎手の数はほぼゼロ、いたとしても今のように多く勝てる時代ではなかった。ファンやマスコミの目を惹きたい、話題を集めたい、という目で見られることも致し方ない。長介もそうした視点を持った騎手だった。初対面の時からなだめすかした態度でそりが合わないだろうと彼は思っていた。

しかし、いざ馬に跨った彼女を見たら、その偏見は覆された。乗り難しい馬を乗りこなし、勝ちあぐねていた馬をあっさり勝たせた。彼女は騎手として天賦の才を備えていた。

デビュー年、当時の女性騎手としては史上最多の新人勝利を挙げた。

翌年から長介は厩舎を出てフリーになったので、同じ厩舎にいたのは一年足らずだったが、その後も彼女にはよく世話を焼いた。馬乗りの才能と引き換えにしたのかは不明だが、彼女はやや性格に難があった。

彼女の考え方は徹頭徹尾自分本位だった。

『いいですか先輩。騎手になろうとする人間なんて、みんな自分が大好きな連中なんですよ。俺を見てくれ。私を見てくれ。そんな具合に。まあ、親や親戚がやってるからという理由でなる方もいるんでしょうけれど、基本的に皆さん英雄願望を持ってると思うんですよね』

彼女は、何かが欠落していた。何かは恐らく長介にとっては当たり前すぎるもので、彼女にとっては身に覚えのないものだったのだろ

う。
『究極的にいうと、私はどうでもいいんですよ。勝とうが負けようが。他人にどう思われようが。私が興味あるのは「私」だけなので』
言い方はいつも極端だった。その舌禍で馬主や他所の調教師と揉め事を起こしたのは一度や二度ではなかった。そのたびに藤坂先生が相手に頭を下げにいった。長介が苦言を呈すると、
『負けさせて文句を言われるなら解りますが、勝たせて文句を言われる理由は解りませんね。もしかして私の方が馬より目立ってしまうからでしょうか。馬7人3なんて言いますが、走らせる人がいない裸馬は馬券になりませんし、賞金も入りませんからね。感謝されることはあっても非難されることはないでしょう。
おや、どうしました先輩？　私、間違ったことを言っていますか？　なら逆に問いましょう。あなたは私の発言を咎め糾すだけの〝正しさ〟をお持ちですか？　何者にも、何事にも、揺るがぬ〝正しい言葉〟をご存知ならば私にご教授ください。この愚かな後輩をどうかお導きください。
――なんて言われても仕方ありませんよね。
私は確かに駒ですが、小間使いではありません。言い方がこまごまとしていますが、困ったことに、騎手なんですよ』
といった。
そうした性格のせいで、彼女にはなかなか有力馬の騎乗依頼が集まらなかった。それでも、彼女は人気薄の馬を勝たせていった。
そして彼女にチャンスが回ってきた。なんと無敗で三冠を達成した馬の騎乗依頼だった。
デビューから乗っていた主戦・王子進之助が海外でのレースに騎乗することになり、代打としてGⅠレースへ出走することになった。
無敗の三冠馬の突然の乗り替わり。しかも大レースでの実績のない女性騎手。マスコミからは疑惑の目を向けられた。ゴシップ誌がこぞって『今回の乗り替わり劇は彼女がオーナーと寝たからだ』『主戦の王子を籠絡したからだ』『競馬を私物化』などと書き立てた。
『おーおー、元気なことですね。皆さん好き勝手書いてくれてるよう

ですけれど、これでもし私があっさり勝っちゃったらどうするんでしょうかね。

自信？　もちろんありますよ。普通に乗れば普通に勝てます。ごめんなさいね、先輩。ですが、ここは後輩の節目の勝利を気持ちよく祝福してくれると私としては嬉しい限りですがどうでしょう？　まあ、どっちでもいいですけど』

そして迎えたレース、三冠馬は終始悪くない手応えだったが、直線に入ると急に失速を始めた。そして、セーフティリードと思われていた差が徐々に詰まり、最後の最後で長介の馬にかわされてしまった。王者の、初めての敗北だった。レース後、その馬が競走中に骨折していたことが判明し、同馬はそのまま現役引退を余儀なくされた。鬼の首を獲ったようにマスコミのバッシングが始まった。薬物疑惑、八百長疑惑、枕営業疑惑、人格さえ否定するかのような文言が並び、中傷は彼女の周囲にも及んだ。

そして――

彼女の名前は競馬界から消え去った。

競馬界において、彼女の存在はタブーとなった。最早誰も、好んで彼女の話題を出そうとはしない。忌避する。テレビにも、本にも、ゲームにも、彼女の名前は上がらない。

彼女と仲が良かった――少なくとも自分ではそう思っている長介もまた、口を開くことはない。開いたところで、彼女は帰って来ない。開いたところで、真実は日の目を見ない。開いたところで、古い日の傷口がじくじくと膿み返すばかりなのだ。

ただの〝トップジョッキー〟としてなら、この出来事も割り切れただろうが、長介は〝後輩想いの先輩〟だった。思い返せば彼女のことが好きだった。彼女とは男女の仲などでは無かったが、危なっかしい非人間的な振る舞いの中に垣間見える人間らしさが好きだった。長介は自らの在り方を問い、惑い、悩んだ。脳梗塞を発症したこととの直接の因果関係は定かではないが、一概に無関係と決めつけることはできないだろう。

彼女がどこにいるのか、誰といるのか、何をしているのか、生きて

いるのか死んでいるのか、それすらも解らない。
『チョーさんだけに、蝶の話でもしましょうか。腸よりは蝶のほうがいいでしょうし。
先輩は蝶と蛾の違いって解りますか？
はいはい――ふむふむ――ほうほう。
成る程。確かに一般のイメージでいえば、そうなりますよね。ですが、昼行性の蛾もいますし、夜行性の蝶もいます。同様に、胴が細い蛾もいれば、胴が太い蝶もいるんですよ。翅の模様の美醜なんて、結局はニンゲンの価値観や主観によるもので個人差もありますよね。
実は生物学上では、蝶と蛾は同じ「鱗翅目」の虫なので区別が難しいんですよね。日本では蝶と蛾と呼び分けていますが、外国では同じ言葉で表現されている場合もあるんです。たとえばフランスでは〝ｐａｐｉｌｌｏｎ〟と。呼び分けが必要な時は〝昼のｐａｐｉｌｌｏｎ〟、〝夜のｐａｐｉｌｌｏｎ〟と言い分けるそうですが、さっきも言ったように夜行性の蝶もいるんですよねえ。
ですが、しかしながら、それもこれもどれも、とどのつまりは人間の理の話です。虫の世界では――虫に世界があるかは知りませんが――自分を蝶だと思い込んでいる蛾もいれば、自分を蛾だと思い込んでいる蝶もいるでしょう。そんな風に、切に信じている〝ｐａｐｉｌｌｏｎ〟もいるんじゃないですか？
胡蝶之夢も、もしかしたら実際は蛾になった夢を見た男の話だったのかもしれません。彼自身が、蝶だったと、信じ込みたがっているだけで』
彼女は、蝶と呼ぶには余りにも毒々しく、蛾と呼ぶには余りにも繊細すぎた。
時々発作のように彼女の言葉が蘇ってくる。寝苦しい夏の夜に見る、何かに追われる夢のように。

ベストチューナー（乗り替わりの悲喜の差配）

『中山５Ｒ三歳芝の未勝利戦１８００メートル。一着は６番ミナトサキタマ３番人気、クビ差の二着に１番ダイチャンス１番人気、二馬身離れて三着７番オーノーブラザー４番人気でした』

（クビ差か……５戦走って未勝利……ここいらかなぁ）

騎手の交代――乗り替わりの理由は様々ある。

お手馬がかち合う、当日に海外でのレースに出る、騎乗停止、怪我などの騎手の事情。

馬主からの要望。

調教師の判断。

乗り替わりによって才能が覚醒する馬もいれば、成績が落ち込む馬もいる。

騎手との相性もある。馬の特徴や癖を知っているから能力を引き出せるケースもあれば、逆に馬への先入観がないことで新たな才能を開花させるケースもある。

かつては厩舎所属の騎手にレースでも騎乗させる気風もあったが、厩舎に所属しないフリー騎手が増え「エージェント」――騎手の騎乗依頼を仲介する人物――が台頭するようになってからは、いい騎手に強い馬が集まるという風潮が強まっている。

「テン乗り」というのは、乗り替わりに際してある騎手がその馬に初めて騎乗することを指す。

成績が悪くても同じ騎手を乗せ続けるケースもあるが、結果を出せない騎手が替えられるのは致し方のないことなのかもしれない。

「ダイチャンスは乗り替わりだ」

「だよね」

長介から鞍上交代を告げられた佐知子は淡々としていた。

ダイチャンスは騎手時代から長介と縁の深い馬主の馬であり、出走するレースや騎手については長介に一任されていた。新馬戦から日々の調教においても、佐知子が乗り続けてきた馬だ。現役リーディ

ングサイアーの血を継いでいる。
　この馬を乗るにあたり、「４、５戦して結果が出なかったらヤネを替える」と長介は宣言していた。年が明けて春を迎えるまで、春のクラシックに乗り込めるか否かはここが正念場となる時期だ。佐知子はチャンスをフイにしてしまった格好だった。
「だが、新馬の頃に比べたら格段にいい走りができるようになった」
「そうだね。たぶん、次で勝てると思うよ。誰乗るの？」
「大江に乗ってもらうよ」
　長介は美浦のベテランジョッキーの名を挙げた。
「まあ、また次頑張ってくれ」
「うん」
「それでもうひとつ話がある」
「まだなにかあるの？」
「今度は逆にお前に乗り替わりで騎乗依頼が来てる。土曜中山９Ｒ四歳１０００万下、コースは芝の１６００。牡馬で、名前はベストチューナー」
「永江先生のところの馬ですね」
「そうだ。郷田が他の馬とかち合っててな。お前に回ってきた」
「ひとみさんだったんですね」
「郷田が乗ってただけあって動きはいい。とりあえず思うように乗ってみろ」
「はい！」
　佐知子が追い切りに乗ってみた感じ、ベストチューナーは確かにいい馬だった。
　反応もよく、終いの脚もよく伸びた。
　調教助手によればゲートでチャカつくこともあるそうで、前走で負けたのはそれが理由らしい。
（枠にもよるけど、前で進めたほうがいいかも。……もしかして逃げるのもアリ？）
　そしてレースの時が来た。
『少し風が出てきました中山競馬場。９Ｒは芝１６００メートル十頭

立てで行われます。最後に一番人気、現在二連勝中のボーンペップが収まりました。

スタートしました。

７番のスノーウォーマーが少し出遅れ、それ以外は揃ったスタートを切りました。

内から押して押して１番ベストチューナーが先頭に立ちます。３番のアカイマンネンヒツがその外につけて二番手。ここで各馬外回りの二コーナーへ向かっていきます。

三番手が６番リトルグラス。その内側半馬身後ろに２番のゴールアトムも前へ。その直後９番ヒゲスラックスマンが馬群の中。

インコースには１０番ボーンペップ一番人気、内をすくって徐々に押し上げて今四番手まで上がってきました。

先頭から六頭目には５番ダイナミックサブ、８番サラバ、４番ブックマークと続いて、最後方追走が７番スノーウォーマーという展開になっています。先頭との差は十馬身程度。ペースは緩みなく流れています。

先頭はベストチューナー、二番手に一馬身差をつけて逃げています。これに迫ろうかというリトルグラス。さらにアカイマンネンヒツも差を縮めています。

四番手以降はひとかたまりになってきました。内にボーンペップ、外目につけてヒゲスラックスマン、そして間からはサラバ。

４コーナーから直線に向かって先頭は最内１番のベストチューナー、並んで６番リトルグラス、３番アカイマンネンヒツほぼ横一線。外に持ち出してボーンペップ、ヒゲスラックスマンも追い上げ体勢。

残り１００メートル、先頭は内ラチ沿い粘るベストチューナー。ボーンペップがこれを捉えにいく。

ベストチューナーがもうひと伸び。ボーンペップは決死の追い込み届くかどうか。三番手争いはアカイマンネンヒツが一歩抜け出した。

先頭は、ベストチューナー！　ゴールイン！

一着はベストチューナー、二着ボーンペップ、三着がアカイマンネンヒツという順番です。
勝ったのはベストチューナー、鞍上は君野佐知子騎手、乗り替わりでの勝利となりました』
ひとみが騎乗した一番人気ボーンペップを退け、ベストチューナーは勝利を収めた。
『サチにやられた。お手馬に手を噛まれた気分だぜ』とひとみは佐知子を称えた。佐知子はジュースをおごってもらったという。
だが後日――
『ええー、なんで勝ったのにお姉が乗り替わりになるの？』
「そういうものなの」
電話口の妹の声は不満げだった。
テン乗りで結果を出したからといって続けて騎乗できるかどうかは分からない。
特に、ベストチューナーは一口馬主による大手クラブの馬なので騎手起用に関してはシビアだ。それは佐知子も長介も承知の上だった。
次走には関東リーディング上位の松崎騎手が乗るとのことだ。
「そう言われたわけじゃないけど、元々今回だけの代打騎乗っていう気持ちで乗ってたからね」
『でもさ、なんていうか、ヤじゃないの？』
「別に、かなぁ。私ってまだ二年目で実績なんかあるわけじゃないし、特典付きの女性騎手っていうので割増してもらってる部分もあるし」
『なんだかなぁ……じゃあ例えば、デビューからずーっと乗ってずーっと勝ち続けてる馬が、ＧＩの前にいきなり他の人が乗るってなったら悔しくない？』
「うーん、自分が乗れないっていう意味じゃ悔しいかもしれないけど、そういう経験ないしなぁ。でも、私だけの馬じゃないから。自分が関わった馬が勝っていってくれたらそれは嬉しいよ。自分が鞍上じゃなくってもね」
『……』
「乗る私たちもプロだし、乗せる人たちもプロだからね。それに騎

手って依頼をもらってはじめて乗せてもらえる立場なわけで、乗せてくれる人がいなくなったらご飯食べていけないんだよ。だから、乗り替わりに関してはわりと割り切ってるね。また機会が巡り会うことだってあるかもしれないし」
『……そういうものなのかなぁ……いや、理屈は分かるんだけども――』
妹は乗り替わりについて、最後まで納得できない様子だった。
確かに一昔前は、同じ騎手が乗り続けて大レースを勝つような名馬も少なくなかった。一度や二度の騎乗ミスがあっても寛大な心持ちで乗せ続ける個人馬主もそれなりにいただろう。
『もっとさ、「この人にこの馬」みたいな、名コンビが出てきてほしいんすよ！』
長介とサーチライト号も、やはり古くからの気風がまだ強い時代のコンビだった。調教師の藤坂と馬主の幸野は古くからの仲であったし、サーチライトが秋華賞のトライアルレースで敗れた時も『色々言われてるようですが、サーチライトには末永でいきます』と力強く後押ししてくれた。
もちろんそうした気風が完全に失われてしまったわけではない。現代においても、そうした話はある。
『それでいったらやっぱり今年のクラシックはフォーユアアイズを応援したいな。ひとみさんに女性初のダービージョッキーになってほしいし』
「うん。そうだね」
『弥生賞も楽勝だったし今のところ不安要素は無いね。いけるでしょ』
郷田ひとみとフォーユアアイズはここまで四戦四勝。２歳で朝日杯ＦＳを制し、皐月賞トライアルでも一番人気に応えて勝利を収めた。現状、牡馬クラシック戦線最有力のサラブレッドだ。
鞍上を務めるひとみがフリーになる前に所属していた厩舎の所属馬であり、かつての師弟がタッグを組んだ馬でもある。
「『女性の乗り役に乗ってほしい』って感じで、たまに調教で乗せても

らってるんだけど、あれはすごい馬だよ。今までで乗った馬でいちばん乗り味がすごかったかも！」
『お姉のお墨つきいただきました！　ということはダービー当確かな～！』
「どうだろうね。こればっかりは走ってみないとわかんないから」
『いやいや、フォーユアアイズ軸はカタいでしょ。他にもいい馬はいるけど、そこまで信用できるかっていったら不安残るし。ドリームメイカーはいくら鞍上王子っていっても初関東だしこれまで勝った相手もそこまでじゃん。フリップフロップはホープフルＳから直行でしょ？「ぶっつけで大丈夫？」ってなるし。それだったら輸送パスして共同通信杯でいい脚使ったモミノキが上位に来ると思うんだけど――』
　高校生の妹が饒舌に皐月賞の予想をまくしたてるのを聞いて、佐知子は尋ねた。
「チエ……いちおう確認なんだけどさ」
『なに？』
「馬券買ってないよね？」
『あはは、お姉ったら心配性だなあ。勝馬投票券の購入は二十歳になってから、そんなの常識じゃん！　予想してるだけだってば』
「だよねー」
『あ、そうそう。私将来馬主になるつもりだから』
「ウソぉ!?」

センパイトセンパイ（時にはかしましく）

土曜中山のメインレースはダービー卿チャレンジトロフィー。サラ系四歳以上のハンデキャップ戦。

汗取り――体重調節のためにサウナに入っていたアタシの耳に、陽気な関西弁が響いた。

「おお！　先客がおるやん！」

続いてのんびりとした声。

「ひとみちゃんだぁ～」

アタシにとって先輩にあたる二人の女性ジョッキーが入ってきたのだ。

「うっす、どうも」

「今日も絶好調やなあ。フェブラリーS勝って、宮記念も三着やろ？　ちょっとでええからおすそ分けしてほしいわぁ。あやかりたいわぁ。せや、拝んどこ。ナムナム」

「……」

「ナムナム」

「……あの」

「ナムナム」

「えっと……」

「はよツッコんで！　ボケたらツッコむ、当たり前のことやん！　パス出したらシュート打つ、ピッチャー投げたらバッター打つ、それと同んなじくらい常識やで！」

「あ、スンマセン……」

「まったくもうアンタは、何べん言わすねん。もうええ、帰らしてもらうわ！」

「あ、あの……」

入って来たばかりなのに立ち上がってスタスタと去って行く彼女の姿を見る。

すると彼女は途中で振り返って「止めてぇーな！　あたし何しに来てんねん！」と勢いよくツッコむ。関西人のノリがよく分からないア

タシは、しどろもどろ苦笑いを浮かべるほかない。
「あっはは～」
　隣ではけらけらとした笑い声がする。アタシたちすっ裸で何をやってるんだろう、と思わなくもない。
「牡馬なぁ、去年は若葉ステークスでギリギリいけたけど……今年はアカンかった、滑りこまれへんかったわ」
「わたしもダメだった。くやしいなぁ～」
「いやいやアンタぜんぜん悔しそうやあらへんやん！　血の滲むような悔しさが微塵もないやん！」
「まぁ～、競馬は時の運だからねぇ。あんまりカリカリしちゃダメだよゆかりん」
　関西弁を話すのが八坂優花里（やさかゆかり）先輩。おっとりした口調なのが小中美由（こなかみゆ）先輩。どちらも関西のジョッキーだ。
「でも優花里先輩、牝馬はいけるじゃないっすか」
「そらなぁ。これでも伊達に牝馬クラシック勝ってないっちゅうねん！」
「困ったことに馬も人も、男にはモテないんだけどねぇ」
「うっさいわ！」
　優花里先輩はアタシが女性初となる平地ＧＩを優勝した後にＧＩレースを制した、史上二人目の女性ＧＩジョッキーだ。お父さんは地方競馬の元騎手で現在は調教師。中央競馬の騎手では現役最年長。
「ゆかりんももう三十だっけ～？」
「違うわ。まだギリッギリでピチピチの二十代や」
「う～ん。デビューしたての頃は可愛くってアイドルみたいだったのに、すっかり新喜劇みたくなっちゃったねぇ」
「お笑いなのは元からや！　それに今やって結構カワイイ……カワイイはさすがに無理あるか……び、美人やっちゅうねん！」
「ゆかりんカワイイ～」
「やめーや！　撫でんな！　これでもあたしのが先輩やぞ！」
　コテコテの関西人らしい性格で、明るく面倒見がいい。中央に六人いる女性騎手の中ではまとめ役だ。

短距離・マイルに強いジョッキーで、関西の競馬場では鬼のような強さを見せる。一方で、関東のレースでは信じられないほど成績が低調。本人曰く「呪われとるかもしれんね。お祓いせな」とのことだが、お祓いに行ったとも効き目があったとも話は聞いていない。

「いーい？　美人っていうのはぁ、ひとみちゃんみたいな女性のことを言うんだよ？　ねーっ」

「あっ、いや、ちょっと分かんないですけど」（――アタシなんてゴリラみたいなモンなんで）

「ほーら、本当に美人な人は、自分でそう言わないものなんだよぉ？」

のんびりした口調で話す美由先輩。染めた髪に、丁寧に塗られた鮮やかなネイル。見た目だけでいえばアタシとは真逆な、ちょっとギャルっぽい派手な雰囲気の女性だ。会話のリズムや喋り方も独特。

そんな彼女の競馬観・騎手観は「いかに馬に負担をかけない乗り方をするか」。その信条は彼女の整った騎乗フォームにも表れている。正確な体内時計の持ち主で、聞いた話では寝ぼけながらでも計ったようにラップを刻めるそうだ。大局観に優れ、時に閃きと天才的なセンスで大胆な騎乗をすることもしばしば。感覚型のジョッキーともいえる。重賞をいくつも勝っているが、GI勝ちはひとつもない。不思議に思って聞くと『なんだろ。ガツガツしてないからかなぁ～』と笑っていた。

「ねーえひとみちゃん、苔って興味ある？」

「こ、苔っすか？」

「そっ。わたし、テラリウムでね、育ててるんだけど、眺めてるとなーんか癒されるんだよねぇ。緑色のほのぼのした感じがいいんだよ～」

そんな美由先輩は、多趣味だ。しかも、派手な見た目に反して、かなり古風な趣味だ。

これまで聞いたのは茶道だったり、落語だったり、釣りだったり。DIYにも凝っているらしくこの前はお手製の棚をインスタグラムにアップしていた。

残念ながらアタシにはそういった趣味はなかった。しいて挙げれば筋トレとスポーツ観戦くらいか。

そうこうしていると、サチがやって来た。今日中山競馬場に集まった女性騎手は四人だからこれで全員だ。
「お邪魔しまーす！」
「邪魔するなら帰ってぇー！」
「あ、はい。じゃあ失礼しまーす」
「あ、ちょいちょい待ちぃや！」
サチは優花里先輩とのやり取りを難なくこなしていた。順応力を見るに、きっとサチは栗東に所属していても上手くやっていけただろう。
「えへへ」
「サチコはノリ良くてええわぁ～。まあ、郷田は郷田でカワイイところあるんやけどなぁ。もっとも、新人の頃はホンマ『触るもの皆傷つけ』って感じやったけども」
「『ナイフ』って感じだったよねぇ～」
「うっ」
デビュー当時の郷田ひとみ、つまりアタシはかなりスレていたというか尖っていたというか。そんな感じで、過剰に女扱いされるのを拒んでいた。今でこそある程度折り合いをつけられるようになったものの、当時は相当酷かったと我ながら思う。そうした時期に世話を焼いてくれた先輩二人には頭が上がらない。
「その節は……申し訳なかったッス」
「ええねんええねん！　人間誰しも若い頃はツッパるもんや！　アンタの気持ちも分からんでもないし」
「そうそう。こうやって次の子たちに受け継がれていくものだからさ～」
「そうですよ！」
「なんでサチまで得意げにいうんだよ？　アァン？」
「ごめんなひゃい」
「どわっはっはっは」
サウナが笑い声で包まれた。

※

『皐月賞有力馬・想定騎手・戦績・前走・評価』
フォーユアアイズ／郷田
牡３　美浦　（４．０．０．０）　弥生賞１着
評価　Ｓ
４戦４勝の二歳王者、皐月獲りへ体勢万全
ドリームメイカー／王子
牡３　栗東　（３．０．０．０）　きさらぎ賞１着
評価　Ａ
重賞連勝中、名手の手綱さばき光る
フリップフロップ／シンガー
牡３　栗東　（３．０．０．０）　ホープフルＳ１着
評価　Ａ
もう１頭の２歳王者、休み明けも問題ナシ
シンプルプラン／井浦
牡３　美浦　（２．１．１．０）　スプリングＳ１着
評価　Ｂ
中山は２戦２勝、得意の舞台

※

１２Ｒまでが終了した。
ダービー卿チャレンジトロフィーにはアタシと優花里先輩と美由先輩の三人が出たが、全員掲示板には絡めなかった。
「ひとみさん、美由さん、優花里さん、お疲れ様でした」
「他につられて行きたがっちまったな。ノーチャンスだ」
「勝った馬が強かったね。まぁ、こういう日もあるよねぇ～」
「ど、どうや！　参ったか！　今日はこのぐらいにしといたる……ぐはぁっ！」
「あはは。あ、そういえば、皐月賞の想定出てましたよ。ちょっと気が早いかもですけど」
サチに言われて確認すると、一番初めにフォーユアアイズの名前があった。
「体勢万全か……まあその通りなんだけど、負けらんねえな」

一年前。
師匠――フリーになってからも目にかけてもらってる大塚先生の計らいで、ある二歳馬に乗せてもらった。その背中があんまりにもしっくりときて、乗り味がハマったもんだから、すぐさまアタシは頼み込んだ。『頼む、おやっさん！　コイツに乗せてくれ！』
先生は『乗ってもらいたいからお前を呼んだんだ』といった。
デビューは東京の新馬戦で、出足は悪かったものの大外を回して直線だけで勝つ競馬をやってのけた。二戦目の重賞では好スタートから好位につけて直線抜け出して押し切り勝ち。初ＧＩの朝日杯ＦＳで他馬をちぎった時にはクラシックを確信した。図抜けた才能と能力。三冠も夢じゃなかった。
もし、皐月賞へ向けて障害があるとするならばそれは「獅子身中の虫」――アタシ自身に他ならなかった。
勝負度胸は備わっているつもりだったが、初めてダービーに乗った時には完全に雰囲気に呑まれてしまった。ダービーの日のあの場所は、あまりにも特別だった。
そして、恐らくというよりも間違いなくフォーユアアイズは一番人気になる。これだけの人気を背負ってクラシックの舞台へ臨むというのは初めてだ。新馬から一度の乗り替わりもなく、一度も負けることなく、王者として挑戦者を迎え撃つというシチュエーションも未経験。未知の領域だ。
――この不安に決着をつける方法を、アタシはひとつだけ知っている。
優花里先輩がアタシの肩に手を置いてつぶやく。
「頼むで郷田。皐月獲って、ダービーも獲ってや。女のダービージョッキーなんてあたしらにとっても悲願やねん。これまではあっこに乗せてもらえるだけでも夢物語やったのに、今はすぐそこまで近くに来とる」
「優花里先輩……」
「アンタは控えめにいうても『バケモン』やしな。せや、朝日杯でボコボコにされた恨みはキッチリ返したるから、とっととてっぺん三つ

かっさらって待っとれ！　……ま、気負いすぎたらんようにな！」
「そうそう。ゆかりちゃんってマジメすぎるところがあるよねえ。でも、それがいいところでもあるんだけどねぇ」
「あ、郷田！　また仏頂面でインタビューなんかしたらアカンで！　ウチらも客商売なんやから、露骨に嫌そうな受け答えは御法度や。もっとあたしのように――」
「ゆかりんのインタビューねぇ。なんだか面白いこと言おうとして変な感じになっちゃってるからぁ、気をつけましょうね～」
「ギクッ！」
「そういえば優花里さん、表彰式でもコケたりしてますよね」
「ちゃうねん……血が騒ぐんや……関西人としての血が……」
「優花里先輩――」
「どしたん？」
――勝つことだけだ。
「アタシ、勝ちます。勝って、証明してきます」

※

スプリングタイムス電子版　４月□□日
郷田旋風！２歳王者でまず一冠目！
　現在リーディング首位に立つ郷田ひとみ騎手の勢いが止まらない。
　今年最初のフェブラリーＳをアルクサラウンドで制すと、高松宮記念ではレトロオネスティで三着、大阪杯では８番人気のアペンドアンドレアで二着に食い込んだ。牝馬ＧＩクラシック第一戦の桜花賞でもウィスタリアを二着にエスコート。まだ四戦とはいえＧＩの舞台では脅威の安定感を誇る。
　中山で行われる牡馬クラシック皐月賞。郷田騎手は朝日杯ＦＳを優勝したフォーユアアイズで挑戦者たちを迎え撃つ。追い切りでも充実した走りを見せ、管理する大塚保夫調教師は「弥生賞の時より状態が良い」と手応えをのぞかせる。
　昨年以上の勢いを見せる郷田騎手。もはや『女性』という枠を飛び越えた活躍を見せる彼女に、女性初のダービー制覇を期待する声も多い。

当日の単勝オッズ一倍台が予想される世代最強馬とのコンビで『まず一冠目』を狙いにいく。

※

皐月賞だった。

中山競馬場がいつになく異様なムードに包まれていることは感じ取っていた。

だけど、それは予想した範疇。

普段通りの競馬ができれば取りこぼすことはない。

普段通りの競馬ができなくとも、地力はこちらの方が上だ。

馬の力を信じるだけだ。

高らかに響くファンファーレを聴きながら、

アタシは、大丈夫と思っていた。

理想通りとはいかなくとも、何百何千通りあるうちから「最悪のケース」を引くことだけは無いと思っていた。

もしかしたら、考えないようにしていたのかもしれない。

ゲートに入り、深く息を吸い込もうとしたのだが、呼吸が落ち着かない。

――そして、ゲートが開いた。

フォーユアアイズ（輝きの向こう側の景色を、貴女に）

スプリングタイムス　２０ＸＸ年　４月△◇日
フォーユアアイズ１４着惨敗　郷田「自分のミス」
朝日杯ＦＳ勝ち馬にして皐月賞一番人気に推されたフォーユアアイズがまさかの大敗。
スタートで出遅れ後方からの競馬を余儀なくされ、終始外々を回り、直線追い出してからも前に迫れず馬群に沈んだ。
前日の雨により渋った馬場も影響したのだろうか。
最初の一冠は見せ場なく終わり、無敗三冠への夢はあっけなく途絶えた。
郷田ひとみ騎手は「馬の力を引き出してあげられませんでした。自分のミスです」と絞り出すのが精一杯だった。
次走は日本ダービーに進む予定。

※

ダービーを勝てたら辞めてもいいという騎手がいた。
ダービーを勝って燃え尽きてしまった馬がいた。
誰かが言った。
『ダービーは他のレースと違うんですよ。勝った後、街で「よっ、ダービージョッキー」って声かけてもらえるようになったんです。もちろん知らない人です。そんなの初めてでした。これまで他のＧＩを勝ってもそんなこと一度も無かったのに。それくらい格別でしたよ』
父が掴んだ栄光を子が――
父が果たせなかった栄光を子が――
意地と誇りがぶつかり合う頂上決戦の火蓋が、間もなく切って落とされる。

※

東京優駿（ＧＩ）東京芝・左／２４００メートル
サラ系３歳オープン　（国際）牡・牝（指）（定量）
①　１　フリップフロップ　牡３・栗東　５７　シンガー
皐月賞３着（３．０．１．０）　先行

①　2　ストロングケミカル　牡3・栗東　57　清水段　皐月賞8着（2．2．2）　差し
②　3　ヒゲパウダー　牡3・栗東　57　星　プリンシパル1着（2．2．2．3）　差し
②　4　ヴァンダーファルケ　牡3・栗東　57　ハリス　皐月賞5着（3．0．1．3）　先行
③　5　ペンサールテック　牡3・美浦　57　立石　青葉賞2着（2．2．1．1）　逃げ
③　6　モミノキ　牡3・栗東　57　梁田　皐月賞2着（3．1．1．1）　先行
④　7　マゼンダマーチ　牡3・美浦　57　芦名　皐月賞13着（3．0．0．2）　先行
④　8　クリアウォッチ　牡3・美浦　57　松崎　NHKマイル3着（3．0．1．1）　差し
⑤　9　ブエンウモール　牡3・美浦　57　伊福部　皐月賞15着（2．3．0．3）　逃げ
⑤　10　ミズサキテラー　牡3・栗東　57　御法川　京都新聞杯1着（3．0．1．4）先行
⑥　11　ドリームメイカー　牡3・栗東　57　王子　皐月賞1着（4．0．0．0）　差し
⑥　12　トランジスタ　牡3・美浦　57　内川　青葉賞1着（2．1．1．3）　差し
⑦　13　フラジールソング　牡3・栗東　57　和久　皐月賞4着（3．0．0．3）　追込
⑦　14　シンプルプラン　牡3・美浦　57　井浦　皐月賞6着（2．1．1．1）　先行
⑦　15　モトム　牡3・美浦　57　関　NHKマイル12着（2．1．1．3）　追込
⑧　16　ミセリコルディア　牡3・栗東　57　清水諭　京都新聞杯2着（2．2．1．2）先行
⑧　17　プロセニアムアーチ　牡3・栗東　57　永吉　毎日

杯1着（3．1．0．0）　差し
⑧　18　フォーユアアイズ　牡3・美浦　57　郷　田　皐月賞14着（4．0．0．1）　差し
単勝オッズ上位
11　ドリームメイカー　3．1
6　モミノキ　5．7
1　フリップフロップ　6．3
17　プロセニアムアーチ　8．8
18　フォーユアアイズ　9．0
12　トランジスタ　12．5
『本命一番人気はドリームメイカー。皐月賞ではライバルのフォーユアアイズとフリップフロップを抑えての貫禄勝ち。デビュー4連勝で初GI制覇。無敗の王者、府中の舞台へ。鞍上の王子進之助は6度目のダービー制覇へ視界良好』
『本命ドリームメイカーを追うのはモミノキ。皐月賞ではドリームメイカーに食い下がりGIの銀メダルを手に入れた同馬。最高の舞台で目指すは黄金の輝きのみ』
『皐月賞3着の雪辱に燃えるフリップフロップも上々の仕上がり。絶好の枠を引き当てて運も向いてきた。ブルーノ・シンガーの手綱さばきに注目』
『プロセニアムアーチが4番人気に支持された。毎日杯からのローテーションも、ダービー制覇へ自信。豪脚は炸裂するのか』
『まさかの大敗を喫した皐月賞。今回は人気を落としたものの地力は間違いなくメンバー上位。郷田ひとみとともに不退転の決意で復活を期す』
『青葉賞勝ち馬トランジスタは東京コースで3戦2勝二着1回。地の利を活かして大物食らいへ』

※

『五月晴れの東京競馬場。今年も世代の頂点を決める東京優駿――日本ダービーの日を迎えました。
天候は晴れ、芝・ダート共に良のコンディション。

本日の実況は、私坂本謙一。解説は小野田マサヤさん、ゲストには現役時代に三冠馬シンレミゼラブルでダービーを制覇した元騎手で競馬評論家の工藤優吾さんにお越しいただいております。それでは小野田さん、工藤さん、今日はよろしくお願いします』

『よろしくお願いします』

『よろしくお願いします』

『えーそれでは、工藤さんにお聞きしますが、シンレミゼラブルでダービーを勝利された時は一番人気で、しかも無敗で皐月賞を勝ってのダービーの舞台だったわけですが、その時はどんな心境だったのでしょうか？』

『そうですねぇ。とにかくすごい馬で、一番強いんだと信じて疑わなかったので、もうここまで来たら、後はやるだけだという気持ちでしたよ。ハイ』

『今年はドリームメイカーが土つかずで皐月賞馬となってこのダービーを迎えたわけなんですが、王子進之助騎手の心境というのも、その、工藤さんと似ているんでしょうか？』

『いやあ、そんなそんな。彼は僕よりよっぽどダービーを勝ってるし、きっと楽しんで乗ってると思いますよ。なんてったってお祭りですから』

『そうですね、今日の入場者数は発表によると十四万人。ダービーの大一番を見ようと多くのファンが東京競馬場に集まっている模様です。

そして王子騎手はこれまで五度、ダービージョッキーの栄冠に輝いています。そんな天才、最強の人馬に挑むのは、皐月賞二着のモミノキ、同三着でＧＩ馬のフリップフロップ、毎日杯１着のプロセニアムアーチといった顔触れですが、なんといっても注目はフォーユアアイズですねマサヤさん』

『ええ、女性初のダービージョッキーが誕生する瞬間を見れたら、それはすごいことですよね。前走はちょっとね、馬場も渋って１００パーセントのパフォーマンスじゃなかったですけど、今日はきちんと修正してきてると思います』

『はい。無敗の三冠という目標を掲げ、弥生賞を制し、大本命に挙げられた皐月賞では悪夢の１４着惨敗。今日も大外枠の１８番からのスタートと、条件は有利とはいえません。しかし、陣営、そして郷田ひとみ騎手のダービーにかける強い想い。一部では騎手の交代も噂されていましたが、やはり鞍上は郷田ひとみ。不退転の覚悟で臨みます。

東京優駿――日本ダービー、間もなく発走です』

※

――皐月賞大敗後、

「アタシをアイズから降ろしてください」

ひとみは迷いなく言った。

「皐月賞はアタシの騎乗ミスです。三着までならまだしも、二桁だったら言い訳のしようもありません」

ＧＩ馬とは思えない体たらくの大敗。単勝一倍台に推されながら、皐月賞では期待を裏切る結果となってしまった。

フォーユアアイズを管理する大塚保夫は、神妙な面持ちで彼女の言葉に耳を傾けた。数年前にフリーとなったものの、この二人の関係は『師弟』そのものだった。

「この馬は、負けちゃならない馬だったんです。皐月なんか序の口で、三冠を勝てる馬だったんです。でも、アタシが戦績に傷をつけちまった。このままじゃ、オーナーにも、おやっさんの顔にも泥を塗っちまう」

「スジ、通そうってのか？」

ひとみは黙ってうなずいた。

並の馬ならまだしも、高い能力と素質を秘めたサラブレッドだ。義理堅い性格の彼女は、不義理を働くような自身の騎乗が許せなかった。

皐月賞後、彼女自身もトンネルに入ったかのように成績が落ち込んでいた。

「最後、決めるのはオーナーとおやっさんですけど、アタシは、フォーユアアイズは別の騎手が乗ったほうが良い結果を残せるんじゃない

かと――」
「ナマ言ってんじゃねえよ小娘」
「――！」
　腹の底から響くような低い声。ひとみは背筋をピンと伸ばした。
「なにがＧＩ勝っただ、リーディングだ。俺に言わせりゃお前なんざまだまだガキだ。いい馬に乗せてもらって勝てるようになって、いい気になってんじゃねえよ。乗るか降りるか、お前ごときが決めれるワケねえだろ」
「……」
「お前が乗らねえってんなら誰を乗せりゃいいんだ？　王子も外人も埋まってんだ、空いてる騎手なんてたかが知れてる。それともサチでも乗せるってのか？」
「それは……その……」
「ダービーはお前で行く」
　大塚は力強く宣言した。その目にこもる炎のような意志を、ひとみは見た。
「オーナーには俺から言う。だけど、これっきりだ。お前が言う通り、アイズにおいそれと敗北は許されねえ。ダービーで勝てなかったら俺からはもう何も言わねえ。菊もアイズに乗りてえんだったら死にもの狂いで勝て。それだけだ」
「おやっさん……いいのかよ？」
「いいも悪いもあるか。俺は調教師として、ダービーを勝てる最善の方法を選ぶだけだ」
　かつて騎手だった大塚が届かなかった頂。彼は、その夢を託すのだ。白髪頭で定年間近の老兵が、一頭の夢を、一人の男勝りな弟子に。
　大塚は目を細めた。
「いい馬にいい女。俺たちの時代とはすっかり変わっちまったが、案外悪くねえや。勝てよ、ひとみ。お前ならやれるさ。伊達に大塚厩舎の門を潜っちゃいねえんだからよ」
「おやっさん……」
「お前はいい乗り役だ。俺が保証する。思いっきりぶちかましてこ

い」
　ひとみは、その言葉に応えることができずに、小さく涙声を漏らした。大塚は、目に入れても痛くない――愛娘に向けるような優しげな眼差しを向けて笑っていた。

※

『スタートしました。１８頭揃った良いスタート。
　先行争いは４番ヴァンダーファルケが行きました。続いて５番のペンサールテック。気合いをつけて９番のブエンウモールもハナを争います。
　一番人気のドリームメイカーは馬群の真ん中あたりにつけました。１コーナー回って行きます。
　先頭は５番ペンサールテックと立石智弘、リードは二馬身。二番手は９番ブエンウモールと伊福部元樹がいきました。三番手４番のヴァンダーファルケ鞍上はエヴァン・ハリス、早めの競馬。外は６番のモミノキ、梁田初幾は２年連続のダービージョッキーへ静かに闘志を燃やす。ここで各馬第２コーナーカーブ。
　１番フリップフロップとブルーノ・シンガー手綱をしっかりと持って皐月賞三着馬も好位の一角。京都新聞杯勝ち馬１０番ミズサキテラーが半馬身差で続きます。内目を通っては７番マゼンダマーチと芦名勝、悲願のダービー制覇なるか。そしてここにいました皐月賞馬１１番ドリームメイカーと王子進之助、抑えて七、八番手。無敗ロードは淀へと続くのか。スプリングＳを勝利した１４番シンプルプランと井浦がそれを追います。半馬身切れて１６番のミセリコルディアは清水諭、インコースに２番清水段ストロングケミカルと兄弟で続いています。青葉賞馬１２番トランジスタと内川秀樹は後方から。
　１０００メートル通過タイムは６０秒７と表示されています。
　外目１７番プロセニアムアーチと永吉真琴も末脚に賭けます。皐月賞四着１３番和久とフラジールソングがその後ろ。そしてピンクの帽子フォーユアアイズはここです。１８番フォーユアアイズと郷田ひとみは後方から３、４番手の位置につけました。３番ヒゲパウダー、１５番モトムがそれを追う。最後方が８番クリアウォッチと松

崎卓篤。こういった展開で、前から後ろまで十馬身程度。先頭代わってブエンウモール。二番手にはヴァンダーファルケがつけました。王子進之助の手はどこで動くのか。フォーユアアイズはまだ後方、直線勝負に打って出るのか』

※

『優勝、郷田ひとみ選手』
『うわ、ゴリラが来たぞー』
『ひとみちゃん、お願いだからわたしたちのグループに入ってこないでね』
小さい頃から力――腕力は強かった。空手の大会で優勝できるくらいに強かった。
両親からは、自分の為だけに力を振るわないように教え込まれた。アタシはその言いつけを守った。
そして、力による暴力よりも言葉による暴力のほうが、相手に深い傷を与えるのだと思い知った。
『ぼくたちは、確かに世の中からはみ出してるかもしれない。だけど、はみ出したところで、それが間違いかどうかなんて誰にも分からない』
『ひとみがどう思ってるかは知らないけどね、ぼくたちのことを決めれるのは、ぼくたちしかいないんだよ』
環境が変わって、色んな考えを持つ友人に巡り会えた。
見てくれも、中身も、ありのままを、対等に受け入れて接し合えることがただただ嬉しかった。
馬に出会ったのも、この時期だった。
プロの競馬の世界に飛び込んで、何度も壁にぶつかった。
『女の乗り役はね、本質的に競馬をナメてるんですよ』
『ゴラァ！　危ねえじゃねえか！　どこ走ってやがる！』
『ヘタクソー！　もう二度と来るんじゃねえ！』
『女はいいよなぁ、イロイロと』
心無い言葉を言われる度、頭に血が上った。
悔しかった。不甲斐なかった。

ただ、言葉で何を言っても、何も変わらない。騎手なら結果を出すしかない。
『郷田ひとみ、平地ＧＩ初制覇！　重たい扉が、とうとう開かれました！』
『グランプリ制覇ー！　郷田ひとみが、また一つ新たな歴史を創った！』
悔しさを糧に、ひたすら乗り続けた。
『そこいらの甘っちょろい女とは違うようだが、俺は特別扱いしねえぞ。馬房の掃除でもしてろ』
『なんだ、上手くなったじゃねえか』
『フリーになろうがなんだろうが、またいつでもウチに来い、しごいてやるからよ。はっはっは』
『お前が結婚する時が来たら読んでやるよ、祝辞。楽しみにしてるぜ』
頑固な師匠だった。
いつしか、実の父と同じくらいかけがえのない人になっていた。
『ひとみさんは、私の目標です。いつか私もＧＩを勝てる騎手になります。なってみせます！』
『郷田騎手は日本を代表する素晴らしい騎手で、ライバルです。前時代的な価値観は、彼女には不要ですし、邪魔でしかないと思います。ボクも、彼女に負けないように来年もリーディングを守れるように頑張ります』
『先輩の威厳に関わるから、あたしももっと勝たなアカンね。ま、なんにせよ郷田はこの程度で収まる器やない。もっともっと上を目指せるヤツやねん！』
色んな騎手と出会った。色んなホースマンと出会った。色んな馬と出会った。
皆、絶えず変わり続け、絶えず成長し続けるのだと知った。
アタシは――郷田ひとみは、どこまで行けるだろうか。
そのひとつの答えが、この二分三十秒とちょっとにあるはずだ。
フォーユアアイズは、まだ、その時に備えて力を溜めている。はじけるのは、もう少し先だ。

※

『三・四コーナー中間、大欅を通過して先頭は依然としてブエンウモール、リードは一馬身。徐々に後ろとの差が詰まってきました。二番手はペンサールテックと外を突いてヴァンダーファルケ。ドリームメイカーはまだ中団で前をうかがう。フォーユアアイズ郷田上がってきた、前を捉えられるか。

４コーナーから直線コース。先頭ブエンウモールほとんど差が無くなって競りかけるペンサールテック、ヴァンダーファルケも並んでくる。

追い上げるフリップフロップ前三頭に接近。モミノキも脚を伸ばしてくる。

先頭代わってフリップフロップだ！　並びかけるモミノキ！　坂を登る！　泣いても笑ってもあと２００！

ドリームメイカーが来た！　鞭が入って王子進之助六度目のダービーへ飛んできた！　先頭に立った！

しかし大外から！　大外からここでフォーユアアイズ！　先頭まで二馬身、一馬身、かわしたかわした！

フォーユアアイズ後続との差を広げる！　二馬身、三馬身！　突き抜けたフォーユアアイズ！

今！　日本競馬の歴史が変わる！　史上初、女性騎手がダービーを制した！　フォーユアアイズ、一着でゴールイン！

勝ったのはフォーユアアイズ！

今日は！

競馬の歴史が大きく動きました！

郷田ひとみダービー初制覇！　２歳王者が、皐月賞での悪夢を振り払う圧巻の走りを見せました！

ダービーの――三歳優駿の頂点に輝いたのはフォーユアアイズ！

続く二着には一番人気ドリームメイカー、三着には最後追い込んだフラジールソングが食い込んできました。四着争い以下は写真判定で１番フリップフロップ、６番モミノキ、８番クリアウォッチ、１７番プロセニアムアーチが横一線で入線しています。

ですが一着から三着までは１８、１１、１３とすんなり表示されました。タイムは２分２３秒７。

道中じっくり脚を溜めて、直線追い出してからは一頭段違いの末脚。王子進之助の六度目のダービー制覇を打ち砕いたのは、リベンジに燃える若き闘魂の持ち主でした。世代最強の座、そしてダービー馬の称号を見事に手にしました。

……工藤さん、遂にこの日が来ましたね『

『来ましたね。……もう、お見事な競馬ですよ。前走が前走なだけにプレッシャーも、あったと思うんですけど、大したものですよ。馬の力を信じて、自信を持って乗ったんじゃないでしょうか。ええ……もう、ケチのつけようがない勝利だと思います』

『前走大敗、大外の１８番。不安要素もあった中での勝利でした。マサヤさん感想はいかがですか？』

『大外でしたけど、郷田騎手は慌てずにレースしてましたよね。終いの脚を生かせるっていう展開も向いたんじゃないでしょうか。それにしても、すごいですよね。二着のドリームメイカーも、たぶん理想通りのレース運びができたと思うんですよね。ロスなく回って最後も伸びてきましたし。だけどね、それでもその上を行くっていう、圧倒的な強さがフォーユアアイズにはありましたね。しっかり強さを見せる勝ち方でした』

『東京競馬場には大歓声がわき起こっています。

さあ、ダービー馬フォーユアアイズとダービージョッキー郷田ひとみ、歓喜のウイニングランです。

女性として、騎手として、これまで様々な記録を打ち立ててきました。新人ながらあの王子進之助を抜いて新人最多勝利の歴代一位の記録。デビュー三年目にして平地ＧＩを勝利、長い日本競馬の歴史において、女性としては史上初めての平地ＧＩ制覇でした。昨年はＧＩ三勝と、初めての全国リーディング最高勝率騎手も獲得しました。

皐月賞後は、彼女自身苦しい時期が続きました――天皇賞とＮＨＫマイルＣを二桁着順で連敗し、先週のオークスで二番人気に推されたウィスタリアの五着がＧＩでの最高着順でした。今日は、この１ヶ月

の悔しさを晴らすような勝利。
フォーユアアイズの大塚保夫厩舎に、郷田騎手はかつて所属していました。師である大塚調教師に初めてのダービートレーナーの栄誉をプレゼントしました。
今、噛みしめるようにガッツポーズ。ゴーグルの奥、その瞳には大粒の喜びの涙が浮かんでいることでしょう。
ゴーグルを外して……やっぱり涙が隠せません。普段気丈な郷田騎手も、感情を抑え切れません。場内からは大きな歓声と拍手が送られています。
あ、今笑顔で、笑顔で地下馬道へと引き上げていきます。今年のダービーを制したのは、フォーユアアイズと郷田ひとみ――』

※

日本ダービー　レース後コメント
1着フォーユアアイズ（郷田ひとみ騎手）
『道中はすごくいい手応えでした。前走は期待を裏切る結果になってしまったので、勝てて本当に嬉しいです』
『（女性初のダービージョッキーについて）女だということで、これまで色々言われたりもしたんですが……これまで積み上げてきたものは間違いじゃなかったんだと、今は胸を張って言えます。
フォーユアアイズは能力の高い馬で、さらに今日は本当にデキが良かったので、自分がヘマしなければ勝てるという自信がありました。師匠やスタッフをはじめ本当に多くの方に支えてもらって、ここまで辿り着けたと思います。感無量です』
1着フォーユアアイズ（大塚保夫調教師）
『愛弟子がやってくれました。前走はちょっと不完全燃焼でしたけど、府中は向いていると思ったし、距離の不安もあまりなかったのでやれると思った』
『（厩舎初のダービー馬について）もう、獲れないで辞めるものだとばかり思っていたので、とても嬉しいです。こうなると「また来年も」という気持ちになってくるから、人間って不思議なものですよね。郷田騎手はずっと頑張っている姿を見てきたので、なんとか獲らせてあげ

たいと思っていました。強い勝ち方をしてくれました』
『（今後について）放牧に出して休ませます。秋は、現時点では菊花賞を目標にしています。鞍上はもちろん郷田騎手で』
２着ドリームメイカー（王子進之助騎手）
『状態も良く、レースもイメージ通りに運べました。リズムよく直線まで運べて頑張ってくれましたけど、今日は勝った馬が強かったですね。負けはしましたが力は出し切れたと思います』
『（今後について）ボクとしては淀の３０００はちょっと長いんじゃないかなと思います。力はありますし、目指すなら（秋の）天皇賞がいいかもしれません』
３着フラジールソング（和久耕希騎手）
『パドックではチャカチャカしてたんですが、ゲートに入る時にはだいぶ落ち着いてくれました。道中もリラックスして走らせることができて、直線でも伸びてくれましたが、前二頭には迫れませんでした』

※

涼しげな風に吹かれて黄昏るひとみは、佐知子を待っていた。
（長かったような、あっという間だったような……不思議な感覚だぜ……まだ残ってるし）
手に広がるのは得もいわれぬ感覚。
プロスポーツ選手は競技中に「ゾーンに入る」ことがあるといわれるが、最後の直線のひとみが、まさにそうだった。
進路も、鞭を入れるタイミングも、他馬との間隔も、全てが手に取るように分かった――そんな感覚。
（ガキの頃にイジメられて不登校になってたやつがダービージョッキーか……世の中には不思議なことがあるもんだな。
もっとも、アタシの力だけで勝てたわけじゃないけどさ――）
パシャ、という音がして、慌ててひとみは目を剥いて音のした方向を向いた。
スマートフォンを掲げてニヤリと笑う後輩ジョッキーがそこにはいた。
「ダービージョッキーの侘しげな横顔、いただきました！」

「なぁに勝手に撮ってやがる」
立ち上がって佐知子に詰め寄る。佐知子はひい、と小さな悲鳴を上げた。
ひとみは軽くため息をついた。
「まあ、今日くらいはいいか」
「い、いいんですか!?」
「ああ」
「ありがとうございます」
「……？　おい、何操作してるんだ？」
手際よくスマホをタップする後輩の姿に、ひとみが尋ねる。ピロンと音がした後、「何って、写真をジョッキー女子会のグループにあげたんですよ」
「ハァ？　グループ？」
「ひとみさんはラインやってないですけど、こういう、みんなで参加できるチャットみたいなやつで」
「チャット??」
ぴんと来ないひとみに佐知子は画面を向ける。そこにはフキダシのメッセージが並んでいる。機械が苦手なひとみにはしっくり来ない様子だ。
「メールじゃダメなのか？」
「うーん。まあ今はみんなわりとラインで済ませるんじゃないですか？」
「へえ、便利な時代になったもんだなあ」
感心したようにうなずくひとみに、佐知子が質問した。
「で、私に頼みたいことって何ですか？」
「ああ。ちょうどそのケータイについてなんだけど、アタシのケータイ壊れちまったみたいで」
「ほんとですか？」
「ああ」
ひとみがガラケーを取り出す。見た目には壊れている様子はなさそうだ。開いてみると、大量の着信やメールが届いていた。

「何百って届いててよお。知らねえやつからも。なんかの間違いなんじゃねえかと思ってな。これって、壊れちまったのか？」
「違います。壊れたワケじゃないです」
「……ハァ？」
「全部、ちゃんとしたメールですよ！　内容はダービー優勝のお祝いで、騎手の皆さんや、馬主さんや厩舎の方、牧場の方、あとは……なんだかスゴい人からも届いてるみたいです！」
「……マジかよ。ハハハ」
　ひとみは思わず笑っていた。
　何百というお祝いのメッセージ全てに返信するとしたら、一体何時間かかることやら。いや、一日で済まないかもしれない。
「これもダービージョッキーの宿命か」
「ひとみさん、カッコいいです。あ、そういえばウチの妹からもお祝いのメッセージありました。生で見てたらしいんですよ」と、佐知子はその文面を読み上げ始めた。
「えっと、『郷田騎手ダービー制覇おめでとうございます。魂が震えるようなレースで、とても感動しました。前走での敗北のせいで一番人気は譲る形になりましたが、私は頭固定してました――』」
「……サチ、妹って未成年だよな。馬券買ってねえよな？」
「もちろんです。馬券はハタチになってからです！」
「お、おう」
「続けて『同じ女性として、とても勇気をもらえる勝利でした。きっと郷田騎手とフォーユアアイズに勇気づけられた人は、私以外にもたくさんいるんじゃないでしょうか。本当におめでとうございます。サチの妹、君野知恵より』だそうです」
「……ああ、嬉しいもんだな。そうだ、今度サイン書いてやるから持ってってくれよ」
「ほんとですか！　うわあ、絶対喜びますよ！
　チエ――私の妹も、実はちょっと騎手に興味持ってた時期があったんですけど、中学になって一気に背が伸びちゃって、諦めたんです」
「そうだったのか……」

「私も嬉しいですし、チョーさんもちょっと機嫌良さそうでした」
「ああ、そうだよな。末長先生にも世話になってるし、ちゃんと挨拶しとかねえと……ああ！　休みなんかバーッと潰れちまいそうだぜ！」
――まったく、サイコーだよ！
歯を見せ、少年のように笑うひとみに、佐知子はいった。
「私からも改めて――ひとみさん、ダービー優勝おめでとうございます！」
「ありがとよ！」

※

後日談。
佐知子がグループに載せた写真を美由がインスタにアップ。ひとみの普段とは違う表情に、多くのいいねを集めてネット上で話題となり、ちょっとしたニュースになった。
無断で写真をＳＮＳへ投稿――この一件を受けて美由と佐知子は、ひとみから説教を受けることになった。
「ごめんねえ。次からはちゃーんと言ってからアップするからぁ」
「なんで私まで～！」
「うるせえ」

ヌーベルベケット（懐かしい友と京都競馬場）

『晴駿』特別コラム

「三冠牝馬サーチライトのライバル――ヌーベルベケット号の物語」

文：野間雷蔵

その牝馬は、三冠馬の父に、アメリカン・オークス覇者の母を持つ、超良血馬だった。セレクト・セールでは高値で取引されて関西の有名調教師の厩舎に入厩した。

良血のお嬢様は、早くからその片鱗を見せる。まず新馬戦。鞍上は天才・王子。単勝人気は1倍台。ここで格の違いを見せつけ、他馬を子供扱いする走りで圧勝。二戦目のファンタジーSでも、持ったままで完勝。

三戦目はいよいよGIだった。阪神ジュベナイルフィリーズで圧倒的支持を集めた彼女は、レースレコードで二歳女王の座に輝いた。

桜花賞トライアルレースでも勝ち、桜の舞踏会の主役（プリンセス）は彼女だった。（この時点でサーチライトはまだ対抗）

だが、レースでは最後方から飛んできたサーチライトの末脚に屈して二着。

続くオークス、王子進之助は『サーチライトに勝つための競馬』で臨んだ。道中マークし、最後の追い比べに挑んだが、ここでも二着に敗れた。

サーチライトに二冠を奪われ、陣営は背水の陣で最後の一冠を狙いにいった。

トライアルに選んだ紫苑S、サーチライトの二番人気に甘んじたが、レースではこれまでの鬱憤を晴らすかのような豪脚を披露。春に女王へと駆け上がったライバルに五馬身もの着差をつけて勝利。この日もレコード勝ちだった。

秋華賞制覇――二歳女王の、二度目のGI戴冠はすぐそこまで来ていた。

しかし、ここでアクシデントが彼女を襲う。

調教中に脚部不安が起こり、彼女は出走取消となってしまったの

だ。
大事には至らなかったものの、結局サーチライトに三冠達成を許してしまった。陣営は砂を噛む思いだった。
雪辱に燃えるヌーベルベケット陣営はエリザベス女王杯に進んだ。単勝一番人気は――なんとヌーベルベケットだった。三冠牝馬を抑えての一番人気は異例中の異例だが、そこには紫苑Ｓでの勝ちっぷりに加え、古馬も寄せ付けないような迫力と、スタッフの乾坤一擲の仕上げがあった。
レースも、彼女のペースで終始進んでいった。
絶好の位置で４コーナーに差しかかったところで、ヌーベルベケットの様子がおかしくなった。鞍上の王子も戸惑いを隠せない。外ラチへ向かってぎこちない脚を進めていく。興奮の大歓声と、悲鳴が混じったようなどよめきが京都競馬場にこだまし た。
レース後、４つ目のＧＩタイトルを手にしたサーチライトの藤坂調教師はこうコメントした。
「最初にゴール板を通過したのがウチの馬だっただけで、今日のチャンピオンはヌーベルベケットでしょう。完敗でした」
余りにも早すぎる別れだった。

※

全戦で彼女と戦った王子は、彼女のことについてあまり語らない。滑らかな語り口でマスコミや記者たちに気の効いたコメントを提供する彼らしくない姿だ。
一度だけ、彼は自身のコラムの中で、彼女についてこう述べている。
――なんでしょうね……いつか、言える時が来たら言いたいんですけれど、おいそれと言葉で、引きずったままの気持ちで言ってしまったら、彼女と築き上げてきたものが崩れていってしまいそうで……僕自身怖いんだと思います。

※

年明け1月のとある週、佐知子は珍しく京都競馬場にいた。ここで行われる重賞に出走する馬の騎乗依頼が来たからだ。その馬主は長介とは現役時代から親交のある人物で、その縁で佐知子に依頼が回っ

てきたのだった。普段が関東またはローカルの競馬場を主としているだけに、佐知子は騎手としてはほぼ初めて訪れることになった。
佐知子はというと、おろおろとしていた。重賞は日曜だが、佐知子は金曜の夕方には京都入りしていた。前乗りの格好だ。
今は東京・京都・中京の三場開催だ。ひとみをはじめ顔なじみの美浦の騎手は軒並み東京でのレースに騎乗。優花里は騎乗停止中で、美由は中京へ行っている。残る二人の女性騎手もそちらに行っているので、現在京都にいる女性騎手は美浦所属の佐知子だけだった。
(普段一緒なひとみさんも、関西にはいつもいる優花里さんもいない……すごく不思議な感じ)
(京都競馬場かぁ……)
「やあ、サッちゃん」
「お、王子さん!」
王子進之助。
新人最多勝利・日本人の海外GI初制覇・三冠ジョッキー・通算3000勝・10年連続全国リーディング、その他も多くの記録を打ち立て、同時に多くの人々の記憶に残るレースで勝利を挙げてきた、日本競馬における生ける伝説だ。
「なんだか緊張してるね」
「はい……京都で乗るのはほとんど初めてなので……」
流石に『前世では二回ほど走ったことがあるんですけど』とは言わなかった。
競馬界の看板にしてスターともいうべきジョッキー。しかし彼の柔和な笑顔がそうさせるのか、威圧感はそこまでない。
白い歯をのぞかせ、王子は思い出したように告げた。
「そうそう、サッちゃんが重賞初Vを決めたら、みんなでお祝いにジュースをおごろうって決めてるんだ」
ご祝儀である。大きなレースでは、しばしば騎手たちが各々小金を出し持ち寄って、優勝したジョッキーに飲み物などをプレゼントするという慣習があるそうだ。
佐知子は肩をすくめた。

「いやあ、私なんかまだまだですよ」
「だけど末永先生のほうは、相当気合い入ってるみたいだよ？」
　王子は長介――竹馬の友のことを、冗談交じりに「先生」と呼んだ。佐知子は思わず笑ってしまった。
「謙遜しておいて、あっさり重賞をかっさらってく。現役の時のチョーさんもそんなんだったからなぁ。もしかしたらサッちゃんもそうなんじゃないかと思ってね」
「似てないですって。チョーさ……テキは、あれですよ。元からあんまり口数多くないですし」
「うん。で、俺のほうは口数多いから、より際立つんだよね」
「王子さんはテレビにもたくさん出てるから、比べちゃダメでしょ」
「だよね。なにせ俺、自分の番組持ってるから」
　王子の影響力は競馬界だけに収まらない。競馬を知らない一般人でも王子進之助の名前は知っている。それくらいの有名人だ。
　親交のあるタレントのバラエティ番組に出演したり、馬事文化の普及や発展のために、テレビ・書籍・イベント開催など様々な企画を打ち立てたりしている。
「あ、よかったらサッちゃんも『王子の部屋』出てくれない？　きっと視聴率すごいことになるよ」
　彼の冠番組『王子の部屋』。衛星放送で、毎回親交のあるゲストを招いて王子が騎乗したレースや競馬にまつわるトークをする番組だ。必要以上にマスメディアの前に出るのを嫌う長介は、これまでオファーを全て断っている。ただ、なぜか本人不在にも関わらずたびたび話題に上がるようだ。
　佐知子は答えに困った。
「えっと、その」
「チョーさんを通してこの話をしたら絶対握りつぶされちゃうだろうから、直接お願いしたかったんだよね」
「お誘いはとっても嬉しいんですけど……」
「あ、返事はいつでもいいよ」
「ほぇ？」

「気が向いたらでもいいし、１００勝とか初重賞制覇とかの節目でもいいよ。郷田さんと一緒とかでもいいかもね。俺が五体満足で乗れてるうちは打ち切りになることはないから」
　サラリと言ってのける王子の口ぶりは、佐知子の緊張を解きほぐす。どこまでも彼はスマートだった。
「あ、ありがとうございます」
「よろしく。でも、サッちゃんが出るって言ったら、チョーさんも一緒に出るって言いそうだね」
「あはは、そんな気がします」
「俺が何度誘っても断固として出なかったんだけどなぁ。変われば変わるもんだ」
「素直じゃないですね」
　王子は「ほんと、変わったよね」と続けた。
「ストラグルの、高松宮記念の祝勝会の時もそうだったなぁ。アイツ、サーチライトのことなんて何年も口にしたことなかったのに、急に話し出したんだよね」
　ゴクリと佐知子は喉を鳴らした。長介が牝馬三冠を達成したサーチライトのことは、つまり佐知子の前の生のことだ。
「何かあったのかなぁ……サッちゃんは何か知ってる？」
「いやあ……わからないです」
「あぁー、そっか」
　ドキドキしながら佐知子が答えると、王子はしみじみとつぶやいた。
「なんか、ちょっと羨ましかったんだよね。
　俺達騎手ってさ、長くやってると、乗ってた馬のことでどこかやり切れないとか引きずってるのが、ひとつふたつあるもんだからさ。チョーさんも、サチの時はすごいショックだったと思う。良い馬だったから尚更ね……」
　愛馬との突然の別れを、王子もまた、経験している。
「たぶん、サッちゃんを弟子に取ったことで吹っ切れたんじゃないかな」

「王子さん……」
佐知子の心象を察したのか、王子は先程までの気配を拭って明るく言った。
「まあ、一期一会だね。あ、ぜんぜん話変わるんだけど、二十歳になったら良いお酒贈るね。白ワインとか飲めそう？」
「えぇ？　あ、大丈夫だと思います。その、飲めるかわからないんですけど――」

※

床に就き、佐知子は、かつての記憶を紐解いていた。
京都競馬場で走った秋華賞とエリザベス女王杯。
前者は牝馬三冠を達成したレースで、思い出深い。
後者もまた、決して忘れることのできないレースだ。
牝馬クラシック戦線のライバルだった二歳女王ヌーベルベケット。
血の誇りと気高さ――真紅の勝負服。
あの秋に関してだけいえば、間違いなく彼女のほうがサーチライトより上だった。
もし彼女があのまま何事もなくレースを勝利していたら、当時の牝馬戦線の勢力図は変わっていただろう。そう言えるほどに、その後のサーチライトの馬生に大きな影響を与えた鮮烈なサラブレッド。
目を閉じ、何か言いたげだった王子の顔が浮かんだ。

※

『――のよ――きなさい――さいったら！』
誰かの声がする。
初めて聞く声だったか、なぜか親近感がわいてくる。
『サチ――起きなさい！』
自分の名前を呼んでいるようだ、と佐知子は思った。ぼんやりと覚醒しない意識の中で、彼女は目をこする。
『起きないと――噛むわよ』
「！」
物騒な文言に、佐知子はバタッと飛び起きた。
そこには一人の少女の姿があった。

気の強そうな吊り上がった目。艶やかな髪。端正な目鼻立ち。美少女といってなんら差し支えない美貌の持ち主だ。
まるでこれからどこかのパーティにでも行くような赤い――紅いドレスを纏った彼女は、サチに向かって指差した。
「久しぶりね、サチ」
「……」
「まさかアンタが人間になって、しかも騎手になるだなんて、面白いこともあるのね。神様がいるのだとしたら相当な物好きだわ」
友達にいうように、彼女は佐知子に向かって話しかけてくる。
「新人最多勝利？　おほほほ！　アタシの宿敵ならそのくらい軽くやってもらわなくちゃ困るわよ！　とはいえ、アンタなんか進之助の足元にも及ばないんだけどねっ！」
確信はなかったが、佐知子は自然とその名前を口にしていた。
「ヌーちゃん……？」
「そうよ。アンタを――サーチライトを負かした女王――末永長介が愛した牝馬がサーチライトなら、その永遠のライバルたる進之助の最高のパートナー（牝馬限定）はこのアタシよ！　あ、『GI勝ち鞍一つだけじゃん』とか野暮なこと言わないでよね。まあ、何にしても、アタシがアンタの永遠のライバルであることは――」
途中まで言って、紅い少女は目の前の佐知子の様子に気がついた。身体を震わせ、目には涙を浮かべている。
「ヌ〝ー〝ち〝ゃ〝あ〝あ〝あ〝ん〝」
「えっ、あっ、なになに？　なんなのよもー！」
「う〝わ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ん〝」

※

「落ち着いたかしら？」
「……うん。ごめんね」
「気にしなくていいわよ。そりゃびっくりするわよね。こうして化けて出てきたら」
「まさか、こうやって話ができるなんて思ってなかったから……」
「アタシだってそうよ。自分でもいまだに半信半疑なんだから」

言い切ってヌーベルベケットは笑った。可憐な笑みからは気品が滲み出てくる。
「アンタも、つらかったわね……最後まで走り切れなくて」
「ヌーちゃんだって、そうでしょ？」
「アタシはいいの。老いぼれて死ぬのはまっぴらご免だったもの。それにターフの上が最期の場所だなんて、ロマンチックじゃない？」
「……」
「……サチ？」
「……」
「……ごめんなさい」
悲しそうに押し黙る佐知子を前に、彼女はちっぽけなつよがりを捨てた。
「……アタシも、やっぱりつらかったわ。オーナーや先生にも親不孝しちゃったし、色んな人に迷惑をかけた。何より進之助――あの人と、最後には笑顔で終わりたかったのに、あんな終わり方になっちゃったんだもの。哀しくて、やりきれなかったわ」
「そうだよね……」
「でもね、あの人が今もアタシのことを覚えてくれているなら、それはとてつもない喜びよ。アタシにとってあの人は特別だけど、あの人にとって特別なのはアタシだけじゃない。所詮は数多くいる中の一頭――そんなことは言われなくても分かってる。それでも、何千何万って、生まれては消えていく馬たちの中で、あの人の記憶に留まることができる。想ってもらえる。それってとても幸せなことだと思わない？」
甘美な諦めと、厳かな矜持が、彼女の瞳の奥にあった。
ヌーベルベケットはひとつ咳込みをしていった。
「湿っぽい話ばっかりになっちゃったわね。それじゃあ本題に移りましょ」
「え？　今のが本題じゃないの？」
「当たり前よ。昔の話ばっかりしてても仕方ないじゃない。進之助の言葉を借りれば『振り向いてもいいけど、最後まで歩みを止めてはな

らない』。切り替えは騎手の基本よ」
「さすがだなぁ王子さん。本当にプロフェッショナルだね」
「なーに当たり前のこと言ってんのよ！　おーほほほほ！」
　そして彼女は腕組みをして自慢げに語った。
「聞いて驚きなさい。今のアタシはいうなれば京都競馬場の守り神なの。守り馬といってもいいかしら」
「おお！　それはすごいね！」
「まだ銅像は立ってないけどね。ほら、崇めなさい！　拝みなさい！」
「ははー！　ありがたや～！」
「ふふん。で、アンタって京都での実戦は初めてなんでしょ？」
「うん。一応、騎手の先輩方やチョーさんからアドバイスは受けてるけど」
「じゃあ今日はここでの競馬について、アタシが直々に色々と教えてあげるわ。この淀の女神様がね！」
「ほんとに!?」
「ええ。それに変に乗ってケガとかされても困るし。二年目っていってもアンタはまだまだ――」
「ありがとうヌーちゃん！」
「ちょっ、ちょっと！　……引っ付くんじゃないわよバカ！」
　抱きついてきた佐知子を慌てて引き剥がす。
　そして、ヌーベルベケットはニヤリと微笑んだ。
「じゃあいくわよ。メモの用意はいいかしら？」
「はーい」
　果たして夢の中でメモを取ったところで、意味などあるのだろうか。
　佐知子はヌーベルベケットから京都競馬場の極意について学び――
　――土曜最終レースで、佐知子は王子が騎乗する一番人気の馬を差し切ってハナ差で勝利を収めた。
　その日の晩のこと。再度、懐かしい顔が佐知子の夢に現れた。
「あーもう！　なにしてくれてんのよサチ！　親切を仇で返すなん

て、もう許さないんだから！」
「しょうがないじゃん勝負の世界なんだから……」
「口応えするんじゃないわよ！　サチのくせに！　この、おたんこなす！　スットコドッコイ！　三冠牝馬だからって調子のるんじゃないわよ！　アンタなんか出禁よ出禁！　もう二度と京都に来ないで！」
「ヌ、ヌーちゃん落ち着いて」
「もう決めた！　アンタを呪うわ！　サチなんて明日の重賞でシンガリ負けすればいいのよ！」
「過激な守り神だなぁ……」
「勝つのはもちろん王子進之助！　進之助なのよ！」
「ヌーちゃん、王子さん明日は東京だよ」
「あっ……」
その一言で雷に打たれたように彼女の身体がくずおれる。彼女は苦々しげにつぶやく。
「ぐぬぬ……もう重賞は全部京都でやればいいのよ」
「さ、さすがにムリがあるんじゃない？」
「分かってるわよそんなこと！」
以後、佐知子は京都に来るたびにこの懐かしい友人が夢枕に立つようになった。
重賞はというと、佐知子の騎乗馬は発走直前に歩様の異常が見つかり競走除外となった。
呪いが効いたのかは定かではないが、馬のほうは幸いにも大事に至ることなく、復帰後も長く走り続け、無事に引退を迎えることができたという。

【競馬】日本ダービー反省会（全3件）

【フォーユアアイズ】郷田ひとみ日本ダービー祝勝会会場

1　名無しの競馬好き
おめでとうございます
2　名無しの競馬好き
女性騎手によるダービー制覇は史上初
これって…快挙ですよ？
3　名無しの競馬好き
フォーユアアイズつよすぎｗｗｗｗｗ
4　名無しの競馬好き
＞＞3
皐月の大敗はなんだったのか
5　名無しの競馬好き
＞＞4
馬場でしょ
6　名無しの競馬好き
ちなみに現在リーディング首位
名実共にトップジョッキーですね
7　名無しの競馬好き
散々乗り替わりだなんだ言われてたけどワイは信じとったで！
8　名無しの競馬好き
ウイニングランで泣いてるの見て、ネキも女の子なんやなあって・・・
ダービー制覇オメシャス！
9　名無しの競馬好き
＞＞8
ダービー後に小中のインスタにあがった写真のネキが美人すぎてびびったわ
10　名無しの競馬好き
＞＞9

ワイもドキっとした
もっとオフショットのネキが見たい…見たくない？
１１　名無しの競馬好き
大塚先生の馬でダービーＶだからな
期するものがあったんだろう
１２　名無しの競馬好き
控えめにいって関東の騎手じゃ１番男前だと思う
１３　名無しの競馬好き
＞＞１２
女性のファンも多いらしいな
１４　名無しの競馬好き
ネキは怪物っていわれてるけど努力の人だよな
１５　名無しの競馬好き
＞＞１４
制裁点０（５月終了時点）
酒・タバコやらない
趣味はトレーニング
海外でのレースに向けて語学勉強
栄養士からアドバイスをもらって徹底した食事管理
ストイックすぎる
１６　名無しの競馬好き
逆に今まで勝ってなかったのが不思議なくらいだわｗ
菊はフォーユアアイズ一強やろ
１７　名無しの競馬好き
この勢いで安田記念と宝塚記念も勝ちそう
１８　名無しの競馬好き
ひとみ、結婚しよう
１９　名無しの競馬好き
＞＞１８
求婚ニキ登場ｗｗｗｗ
２０　名無しの競馬好き

＞＞１８
郷田「アタシより弱い男には興味ない」
２１　名無しの競馬好き
＞＞２０
誰も結婚できなくて草

【定期】八坂師匠、ｎ回目の東京進出失敗
１　名無しの競馬好き
目黒記念　ピスタチオハンド　９着
郷田ひとみの偉業達成の影で無事連敗記録を更新
２　名無しの競馬好き
関東の重賞絶対勝てないウーマン
３　名無しの競馬好き
お約束を忘れない芸人の鑑
４　名無しの競馬好き
なぜ東京に来てしまうのか
５　名無しの競馬好き
レース前「もろたで郷田！」
レース後「今日はこれくらいにしといたるわ」（９着）
６　名無しの競馬好き
府中２５００でゆかりん買うとかツッコミ待ちかな？
７　名無しの競馬好き
でも「その次の関西の重賞はあっさり勝っちゃう」までが師匠の持ちネタだから・・・
東京もマイルなら全然チャンスありそうなんだけどなぁ
８　名無しの競馬好き
競馬界の七不思議
９　名無しの競馬好き
平場では勝ってたやんかｗ
１０　名無しの競馬好き

すべらんなぁ～

【郷田激怒】インスタグラマー小中、後輩に説教される
1　名無しの競馬好き
無許可で郷田ひとみ騎手の写真を投稿した疑い
君野佐知子騎手ともども叱られたご様子
2　名無しの競馬好き
＞＞1
この一件でネキが美人であると世間が認識したという事実
3　名無しの競馬好き
これはやってしまいましたなぁ
4　名無しの競馬好き
佐知子とばっちりｗｗｗ
5　名無しの競馬好き
小中さんのインスタ話題の幅広すぎ
6　名無しの競馬好き
＞＞5
簡単ＤＩＹ講座いいよな
7　名無しの競馬好き
＞＞5
この前は浅草演芸ホールに出没してたらしいね
8　名無しの競馬好き
＞＞5
小中さんのインスタ見て苔はじめました
9　名無しの競馬好き
＞＞5
お手軽レシピがマジで手軽すぎて自炊はかどるわｗｗｗｗ
10　名無しの競馬好き
見かけからして郷田のほうが先輩っぽいｗ
11　名無しの競馬好き

なお、この後仲良くジョッキー女子会でネキの祝勝会を行なった模様

ポッピングサワー（初夏情緒微炭酸風味）

無駄の無いスイング。
快音が響き、白球が飛んで行く。
打球の行方を確認し、彼女がこちらを振り向く。
髪をポニーテールにまとめ、白のキャップを被っている。暖色系の薄手のパーカーと、動きやすいショートパンツ。
彼女は舌を少し出して軽くウインクをしてきた。「どんなもんだい」という口の動きから、彼女の手応えが伝わってくる。
ボールがティーにセットされ、再び彼女は集中モードへ。ボールをじっくりと見て、スイング。背骨を中心にした回転力を生かしたフォームから繰り出されたボールは真っ直ぐ伸びていく。
満足そうにうなずいて、彼女――君野佐知子は休憩用の椅子に腰かける。
「上手いなお前。やっぱり経験者は違うな」
「へへへ。まあ、小さい頃に何回かやった程度だけど」
運動神経がいいのか、それともセンスがいいのか。あるいはその両方か。相変わらずサチのハイスペックぶりには舌を巻くばかりだ。
休日、おれはサチと打ちっぱなしに来ていた。
休日といっても――普通の学校や会社は土日が休みだけど、おれ達ジョッキーは土日が働く日だ。休息の日は大体月曜で、火曜からは調教とトレーニング。金曜の夜までに各競馬場の調整ルームに入り、土日がレース。基本的にそれの繰り返し。中央競馬は一年中開催してるから、中央の騎手は夏休みも冬休みもない職業だ。
なぜおれがサチとこうして休日を共にしているかというと――
競馬関係者にはゴルフ好きの人間が多い。
昔から騎手会のコンペがあったり、厩舎関係者や馬主さんとのコンペがあったり、また、ジョッキーの中には趣味がゴルフという人もけっこういる。
かくいうおれも、先日とある先輩から『福盛田くん、ゴルフ興味ない？』と誘われた。初心者だったけど、いい息抜きになればと思い二

つ返事で了承すると、たまたまそこを通りかかったサチが話を聞きつけ、一緒に参加することになった。しかし、直前になって先輩から急に行けなくなったという連絡が来た。日を改めて行きましょうか、と提案したが『サッちゃんはそこそこできるみたいだから、二人で行ってきなよ』と勧められ、今日この日を迎えこの場にいるわけだ。
「じゃ、今度は光の番だね」
「ああ、いってくる」
「がんばって！」
サチがおれの肩を叩いて送り出してくれた。
ゴルフクラブを手に取るのは7番アイアン。クラブにも色々種類があるらしい。プロゴルファーは状況によってかなり使い分けるそうだが、ずぶの素人おれにはなかなか見分けがつかない。とりあえずここで使うべきはパターではないということぐらいしかわからない。
サチに教えてもらった握り方で、グッと力を込める。
はっと気づくと、隣で打っていたオヤジがおれの方に視線を向けていた。おれと目が合うと、すぐに目を逸らして快音を響かせていた。
ボールに意識を集中させる。大きく息を吐いて、グラブを振り上げる。
頂点までいったところで、今度は強く振り下ろす。
――スカッ。
「あ」
快音は鳴らず、代わりにサチの声が聞こえた。
「あわわわわ」
勢いをどこにも逃がすことができず、ホームラン狙いのバッターみたく豪快に空振りしたおれは、そのまま尻もちをついてしまった。
おれは天を見上げる。そこにあるのは無機質な天井だ。
心配したサチを声をかけてくる。
「だ、大丈夫？」
「あ、いや、うん。ぜんぜん」
「そっか。ま、まだまだこれからだよ」
サチのエールに応えなければ。

おれは立ち上がって、もう一度仕切り直す。さっきのはナシと考えて、今度は慎重に……
――スカッ。ポロッ。
「あ」
「……」
思わず身体が固まり、なんとも言えない時間が流れる。
あちこちからは小気味良い音が絶えず聞こえてくる。
嫌な汗が一気に噴き出す。
(な、情けねえ～～～～！)
おれは心の中で叫んだ。

※

打ちっぱなしを終えて、おれ達は近くにあったアイスクリーム店に入った。打ちのめされた心に、甘く冷たいアイスがよく沁みる。
「はぁ……」
「まあ最初はみんなこんなもんだって。それに、最後のほうはちゃんと当たってたじゃん」
「当たってた、かぁ……」
そこまでハードルを下げられないといけないという事実に、またため息をつく。
誘ってくれた先輩には申し訳ないが、この調子だとコンペの誘いが来ても断ったほうがよさそうだ。
「お前のスイングを見た後だと……完膚なきまでに叩きのめされた気がして……」
「あ～、でも私より上手い人なんてゴマンといるよ。美由さんなんて女子プロばりのスコアで回るし」
「小中さんか……あの人ほんとに趣味が多彩だな」
「ひとみさんは男子プロばりの飛距離で飛ばすし」
「郷田先輩なら、まあ……」
「優花里さんは腕前もだけど、相手に花を持たせるのが上手」
「分かる。ゴルフそっちのけで喋ってそうな気がするな」
「ふふっ。実際そうみたい。ミスショットのたびに『アカーーン！』っ

て言ってるんだって」
「めっちゃ言いそう」
「光もやってみたら『アカーーン！』て」
「人の持ちネタ盗っちゃダメだろ」
「あ、ちなみに十回に一回くらい『オカーーン！』ってフェイク入れてるらしいよ」
「誰に対してのフェイクだよ」
サチとの会話を楽しんでいると、徐々に傷も和らいでくるようだった。
デビュー二年目。おれは嬉しいことに、だいぶ乗れるようになってきた。前と比べて何が良くなったのか、明確に「これ」というものは言えないけど、勝負の感覚を掴めてきた気がする。
昨年は勝ち星でサチにダブルスコア以上の差をつけられたが、今年春の時点までいえばそこまで差は開いていない。
まあ、夏にまた水をあけられそうな気がしないでもない。が、重賞を勝ったことがないという点については横一線だ。
もうすぐ上半期の総決算、グランプリ宝塚記念がやって来る。それが終われば夏競馬だ。三場に騎手が分散するため、若手の騎手にもチャンスが回ってきやすい。
おれは密かにサチより先に重賞を勝ちたいと思っている。とはいえ初重賞で二桁着順だったおれに対し、サチはのっけから三着に食い込んできた騎手だ。勝負強さでは敵わないだろう。
――そんなことをぼんやりと考えていると、サチの丸い瞳と目があった。
「何考えてるの？」
「別に……今年の夏は涼しくなってくれないかなー、って」
「そうだねー」

※

帰り駅までの道すがら。
「こうして歩いてるとさ」
「うん」

「なんか、『内に寄せなきゃ』とか『外に進路開いてる』とか、脳内で認識されちゃうんだよね」
「マジで？」
「うん。後ろから追い抜かれたら『差された』って感じるし。そういうのない？」
「ないない」
「うーん。私だけなのかなあ」
そんな会話をしていると、ふとサチの目がある店の看板に釘づけになった。ゲームセンターだった。
「サチ？」
店内の一角、とあるクレーンゲームの台を凝視したかと思うと、スタスタと店内へ入っていって、その台のガラスに張りつくようにして景品（プライズ）を眺めていた。
ウマなのかウシなのかヤギなのかよくわからないデフォルメされたゆる～いキャラクターのタオル。
「チエの言ってたやつだ……いいなぁ」
「欲しいの？」
「うん。あー……でも、私ってこういうのド下手だから無理かなぁ……」
物欲しいそうに眺めるサチに、おれは思いがけずいった。
「おれ、取るか？」
「え？　……いいの？」
「ああ。これなら多分――」
おれは小銭を何枚か取り出して投入。アームの幅や動きを確認して、少しずつ景品をずらしていき、何枚目かを投入したところであっさりと謎の生命体タオルはおれ達の元へやって来た。
「すごいすごい！　うわーありがとう光！」
「いやそんなでもないよ。このタイプの台だったらけっこう取り慣れてたから」
「はぁ～っ、えへへ！」
サチの幸せそうな表情を見て、今日はカッコ悪いことも見せちゃっ

たけど、やっぱり来てよかったと素直に思えた。
すると、サチは何事かを神妙に考えるような顔つきになって、ぼそりといった。
「……こうなってくると私も取りたいなぁ」
そして、彼女は、君野佐知子は――
まるでこれからＧＩレースに臨むかのような真剣さで――
「光先生」
「お、おう」
「私にこのゲームの攻略法を教えてください！」
――そういったのだった。

※

で、結論だけいうとサチはダメだった。
競馬やゴルフのセンスのよさはどこへいってしまったのか。彼女は、折角景品の位置をズラしたのに、それをまた元の位置に戻す→ズラす→また元の位置に戻すという動きを連発していた。
最終的にはおれが二つ目のタオルをゲットすることで収支のバランスを保ったが、サチは心底悔しそうだった。
タオルは二つともサチにあげた。二つ目に関しては拒んでいたが、おれがもらっても仕方がなかったので、なんとか受け取ってもらった。すると調教で末永厩舎に行った時に末長先生がそのタオルを持っているのを見て、なんともいえない気持ちになりました。
と、まあ、なんとも小学生の作文じみた結びになってしまったけれど、実際そうだったのだからしょうがない。
後日、誘ってくれた先輩からは『サッちゃんとのデートどうだった？』と冗談半分で尋ねられた。空振りしてコケました、と答えると『ガンバレ』と慰めの言葉をいただいた。

クロニクル（青、水色縦縞、袖黄一本輪）

青、水色の縦縞、袖に黄色の一本輪。
サーチライトをはじめとするＧＩ馬を送り出した幸野松太郎氏の勝負服である。
調教師の藤坂寅一氏とは旧知の仲であり、所有馬の多くを藤坂厩舎に預託していた。
彼は馬主を「一代限りの道楽」としていたため、彼の死後、その勝負服を競馬場で見かけることは無くなった。

※

火曜日。トレセンの一週間が始まる。
「チョーさん」
「野間さん、どうも」
昼下がりの末永厩舎に顔を見せたのは長介と親交の深いライターだった。
「君野さん、いるかな？」
「今はちょっと外してますけどすぐ戻ってきますよ」
「あ、そうか。じゃあ、ちょっと待とうかな」
「どうしました？　もしかして、突撃取材ですか？」
「いやいや、そうじゃない。別の厩舎を回ってきて、今日の仕事は終わり。取材するんだったら事前にチョーさんにお伺いを立てとかなきゃいけないからね」
「……じゃあ、どういったご用で？　あ、中どうぞ」
大仲――厩舎の休憩所には香ばしい香りが漂っていた。野間は長介にいった。
「いい匂いがするね」
「はい。実はそのサチが作ったんですよ」
中央に置かれたテーブルの上には、アップルパイがあった。取り皿と切り分けるナイフも傍らにあり、パイは既に１／３を残す程度に小さくなっていた。
野間は感心したようにつぶやく。

「これはなかなか……おいしそうだねえ」
「よかったら召し上がってください、野間さん」
不意に、上機嫌そうな声が野間の耳に聞こえてきた。振り向くと、当の佐知子が後ろで手を組みながら立っていた。
野間は質問する。
「あの、これは？」
「実家からリンゴをたくさんもらったので、厩舎の皆さんにもおすそ分けしようと思って作ってみました。あ、味のほうは食堂のキヨさんからも『いいね！』をもらったので、大丈夫だと思います。甘いのが苦手じゃなかったらぜひどうぞ」
「そうなんですか。じゃあ、ひとついただこうかな」
「はいっ！」
丁寧な手つきで佐知子が切り分けたパイを、野間は口に入れた。出来てからいくらか時間は経っているだろうが、リンゴの甘みと酸味をいっぱいに味わえた。
しっかりと咀嚼して、飲み込んでから野間は感想をいった。
「おいしいです。温かみのある味、という感じで、好きですね」
「ありがとうございます！」
「君野さんって、普段から料理されてるんですか？」
「はい。時間があればなるべく作るようにしてます。小さい頃からよくしてましたし、お菓子も作ってました。これも、食堂のオーブンを特別に借りて作らせてもらいました」
――サッちゃんが来てくれたらあたしらも安心して引退できるよ。いい旦那選びなよ。
食堂で勤めている女性にそう言われた佐知子は、照れ笑いしきりだったそうだ。
「それで、私に用というのは？」
「ああ、そうでした。実は先日自宅の倉庫を整理してたら、懐かしいものが出て来まして――」
野間はバッグに入っていた紙袋の中からあるものを取り出した。
青地に水色の縦縞。袖に黄色の一本輪。

サーチライトのオーナーだった、今は亡き幸野松太郎の勝負服だった。
わっ、と佐知子が声を上げる。長介はなるほどといった具合にうなずいている。
「だいぶ昔に、幸野オーナーからいただいたものです。レプリカですが状態はかなり良いですよ。なので、もしよかったらこれを」
「……わ、私に？　いいんですか？」
「はい。私が持っているよりも、君野さんが持っているほうがふさわしいと思ったので、受け取ってもらえれば」
「あ……それって……」
「ええ」
眼鏡の奥のにっこりとした目は、佐知子を見つめた。佐知子は思わず目を逸らした。
「サーチライト号の熱心なファンだというあなたにこそ、持っていてほしいんです」
「あ、はい……ですよねー」
（私が自分（サーチライト）のファン……、そう言われるとすごい変な気分だなぁ）
その後、長介に促された佐知子は、その勝負服を着て長介と写真を撮った。長介が『いつかコイツがうちの馬でＧＩを勝ったらスチルにでも使ってください』というと、野間も『楽しみにしてます』と答えた。
野間が帰った後で、佐知子はいった。
「似合う？」
「ああ。俺より似合ってるよ」
ふたりはくすくすと笑いながら顔を見合わせていた。

※

日曜日。上半期の東京開催も残り少なくなった。
「へえ、そんなことがあったんだ。いいなぁ。俺もサッちゃんの焼いたパイ食べたかったな。追い切りの日だったら食べれたのになぁ」
「運が悪かったな」
「あ、そういえば前に小中さんが打ったお蕎麦を食べさせてもらった

ことがあるよ。お店で食べるのと同じくらい美味しかった」
「小中は、相変わらず多芸だな」
ＧⅢ・エプソムＣの発走が目前に迫っていた。
「それじゃ末長先生、よろしくお願いします」
「進之助……まったくお前ってやつは……まあいい、こちらこそよろしく頼むよ」
「今日はどう乗ったらよろしいでしょうか？」
「だからやめてくれ、その口調は」
「ハハハ。じゃあチョーさん、今日も前目でいいかな？」
「ああ。メイチで仕上げたから最後は流してもいい」
「ほんと、大した自信。頼もしい」
「……頼んだぞ」
「頼まれました。それじゃ、いってくる」

ブレイブボーイ（微笑は雪解けのごとく）

『――生垣障害を全馬クリア。向こう正面に出て行きます。先頭は２番ベルグホック、五号の竹柵障害を飛越しました。その後遅れて７番のフィールソーグッド、４番のシャカッチもこれはクリア。馬群は縦長です。外目につけて５番トネール、半馬身切れて８番ブレイブボーイはここです。９番アカイサプライズ、３番ミネイロジギルが続きます。

先頭ベルグホック、七号の生垣障害を飛越しました。３コーナーカーブに差しかかって、徐々に後続との差が詰まってきたでしょうか。逃げを打ったベルグホックを追いかけるフィールソーグッドとシャカッチ。その後ろの集団が一団といった具合です。

生垣障害を飛越して、十五馬身くらいあったリードが今は五、六馬身程度といったところでしょうか。４コーナーカーブして上がって来たのは８番のブレイブボーイ。今二番手集団をとらえようというところ。

ベルグホックがダートコースを横切って、最後の直線芝コースへと出ます。スタンドからの拍手に応えて先頭ベルグホック！　ブレイブボーイが前をとらえて今、単独の二番手！　三番手にはフィールソーグッド。さらにシャカッチ、トネールと大きく広がった！

最後の障害を、飛越しました！　ベルグホック、ちょっと体勢を崩したか。残り２００の標識を前に、先頭はブレイブボーイだ！　二番手追い上げるフィールソーグッド！　離れた三番手は１０番タッチワンスローが追い込んできています！

先頭はブレイブボーイ！　ゴールイン！

二着にはフィールソーグッド、やや離れた三着はタッチワンスローです。

Ｊ・ＧⅢ東京ジャンプＳ、制したのはブレイブボーイ。鞍上は柊雪絵騎手です――』

※

――放送席、放送席。東京ジャンプＳをブレイブボーイ号で見事に

制しました、柊雪絵ジョッキーです。柊ジョッキー、おめでとうございます。
『ありがとうございます』
――道中は逃げ馬、そして二番手集団を見るように中団につけ、直線で逃げるベルグホックをとらえて差し切りました。ご自身の中で手応えはどうでしたか？
『そうですね……鎧袖一触です』
――えー……飛越のほうも、今日は良い手応えだったんじゃないでしょうか。
『はい。頑張って跳んでくれました』
――そして、柊ジョッキーにとっては今年最初の重賞タイトルが障害競走、この東京ジャンプSとなりましたが、平地競走の時と比べて意識している点は何かありますか？
『長丁場なので、ペース配分は気に掛けています』
――当然平地でのタイトルも狙っていると思います。今年は郷田ジョッキーがダービージョッキーとなりましたね。
『そうですね。素晴らしかったです』
――柊ジョッキーもダービーをはじめ、GIのタイトルを狙っていると思いますが、他の女性ジョッキーへの意識というのはどうしょうか？
『……はい？　もう一度お願いできますか？』
――えーと……女性ジョッキーの中での競争意識であったり、そういった部分で何か思うところがありますでしょうか？
『女性だからどう、ということはありませんが？　それが何か？』
――はい……
『女性ということで注目されるのは分かっていますが、レースに出れば全員が横一線です。性別も年齢も些末なことじゃないでしょうか？』
――ありがとうございます。……それでは、最後にファンの皆さんにメッセージのほうをよろしくお願いします。
『ブレイブボーイを、これからも応援よろしくお願いします。……あ

りがとうございました』

※

柊雪絵は栗東に所属する女性騎手である。

女性ジョッキーの中では唯一、平地だけでなく障害競走にも騎乗している。

実は中学時代までは有名なお嬢様学校に通っていたという経歴の持ち主であり、馬術競技経験者。かつては馬術のジュニア選手権で上位入賞を果たしたこともある。

騎手としてデビューした年にはプロのレベルの高さに苦しんだが、二年目からは安定し、成績を徐々に伸ばしている。昨年は平地と障害の重賞を勝ち、二刀流女性ジョッキーとして人気を集めている。

性格は物静かで大人しいが、レースになると積極的な騎乗で泥臭く勝ちに行く姿勢を見せる。「彼女は想いを行動で表現する」とは、彼女の師匠である調教師の言葉だ。

冷や汗をかいたインタビュアーが質問を打ち切って、勝利ジョッキーインタビューが終わった。

引き揚げてきた柊雪絵を、ジョッキーたちが出迎える。賑やかしの一人が「やっぱり『雪の女王』やね」とからかうと、雪絵は顔を赤くして否定した。

「そんな……そういうつもりじゃないんです」

「アナウンサーもタジタジやったね」

「まぁええんやない。それも雪絵ちゃんの味やし」

「……いえ、もっと、上手く喋れたらいいんですけど……」

彼女の悩みは「怒ってる？」「もしかして機嫌悪い？」と、よく人から聞かれることだ。

本人に全くその気はないのだが、周囲の人の目にはそのように映るらしい。

彼女の「集中したり考え事をしたりすると人の言葉が耳に入らなくなる」「注目されると緊張して硬くなる」性格が、そうした拍車をかけている。

とりわけ大勢の人がいたりカメラが回っていたりするような場所

は苦手だった。
そうした言動――彼女の中の切り取られた一部分――から、『高潔で冷血なお嬢様』『雪の女王』などと一部ファンの間では認識されるようになってしまった。
これについて彼女も戸惑っていた。新人騎手の中にはこうしたイメージのために雪絵に対して「近寄りがたい」「怖い」というイメージを持っている者もいる。（ひとみも「怖い」部類に入るが、これは彼女が若手の教育係として「叱り役」を買って出ているという事情もある）
彼女の交友関係は狭いほうだ。よく話すのは、障害レースに出る騎手と、同期の騎手、加えて女性騎手。同じ競馬場で乗る機会の少ない関東の騎手には「ジョッキールームで雪絵が喋っているところを見たことがない」という騎手もいる。
ポンと肩を叩かれて、雪絵はビクッと身体を震わせた。
「よっ。おめっとさん！」
振り向くとプロテクターを着込みヘルメットを被ったひとみがいた。雪絵は丁寧に一礼してから返事をする。
「郷田先輩……ありがとうございます」
「ジョッキールームすごかったぜ。みんな声出して見てたよ」
「そうだったんですか」
「サチなんか直線で叫んでたからな『雪絵さん！雪絵さあぁぁぁん！』って勢いで」
「君野さんが……」
雪絵にとって佐知子は後輩にあたる。東西の違いはあれど、ローカル開催でよく一緒になることがあった。そのたびに、雪絵は佐知子のコミュニケーション能力の高さに感服していた。彼女が来ただけでパッと場が明るくなる。その様は雪絵とは正反対だった。
「そうそう、今日のインタビューはなかなかよかったんじゃねえか？」
「いえ……今日も、全然です。上手く受け答えできなくて、インタビュアーの方を困らせてしまいましたから……」
終わった後にフォローを入れたものの、インタビュアーは「自分の力量不足です」と項垂れていた。

「でもよお、言いたいことちゃんと言えるようになったじゃねえか」
「……そうでしょうか？」
「ああ。『はい』と『そうですね』だけだった頃に比べたら、サマになってきたな。まあ、慣れだ。……アタシも昔は酷かったから」
ひとみは苦笑した。雪絵は照れながら「ありがとうございます」と小さく返した。

※

土曜の開催が終わり、佐知子と雪絵は夕食を共にしていた。
「いやあ、ホントにおめでとうございます！　雪絵さん！」
「君野さん……ありがとうございます。……あの、ついてますよ」
「え？」
「ええと、ここです」
雪絵は口元を指差して、ハンカチを差し出した。
「あ！　ありがとうございます！」
「いえ」
「それにしても今日が雪絵さんかぁ。先週のマーメイドSが美由さん。鳴尾記念が優花里さん。ひとみさんがダービージョッキー。なんだか、みんな絶好調ですね！　……私も勝ちたいなぁ」
現在は三場開催。そして明日の宝塚記念が上半期の中央開催の総決算であり、翌週からは夏のローカル開催が本格的に始まる。
女性騎手で宝塚記念に騎乗するのはひとみ、優花里、美由の三人。中でもひとみと優花里は人気上位の馬に乗ることが決まっている。
そのためひとみは１２Ｒが終わってすぐにタクシーに乗って新幹線の駅へ向かっていた。
「あの、今日は……ありがとうございました」と雪絵は蚊の鳴くような声でつぶやいた。
「え？　私なにかしましたっけ？」
「いえ……その……一緒にお食事してもらって」
「あ、いえいえ。私のほうこそありがとうございます。その……お話しながらご飯食べると楽しいですから。それに、雪絵さんとお話するの、好きですし」

あっけらかんと言う佐知子の真っ直ぐな視線に耐えれず、雪絵は目を逸らした。
「あ、食事といえば、今度のジョッキー女子会の集まりが宝塚記念の祝勝会になればいいですね～」
「そうですね……」
ジョッキー女子会。中央競馬に所属する六人の騎手で構成されるグループだ。最近では地方の葉流競馬に所属する湖月美景も参加に興味を示しているらしい。
ここで佐知子が話題を転換した。
「そういえばこの前オススメしてもらった小説読みましたよ」
「ど、どうでした？」
雪絵はドキドキしながら尋ねた。
「面白かったです！　表紙とタイトルだけ見たら、ちょっとカタいのかなって思ったんですけど、読んでみたらあっという間に読めちゃいました」
その言葉に、雪絵はほっとしたような表情を見せた。
「……良かったです。君野さんなら、きっと気に入ってもらえると思っていたので」
雪絵は大の読書家だった。騎手の道に進む前には文筆業で身を立ててていきたいと思っていた彼女は、今では競馬雑誌に不定期で短文を寄稿している。関係者内でもなかなかの評判だった。
「また、何かオススメがあったら教えてくださいね」
「はい。そうですね……それでしたら、読みたい作品の方向性などを教えていただければ、何かご紹介できるものがあるかもしれません」
「あ！　じゃあ言ってもいいですか？」
「ええ、どうぞ」
慈愛に満ちた微笑を浮かべて、雪絵は佐知子の言葉に耳を傾けた。
『晴駿』「キシュのホンネ」　柊雪絵騎手について
「障害に乗れる若い騎手は少ない。彼女は上手いだけじゃなくて研究熱心。華もあるし、障害レースも盛り上がってくれたらいいよね」（栗

東・ベテラン騎手）

「本を読んでいる姿が画になる。品がある」（栗東・中堅騎手）

「この前、夜ご飯食べに行った時なんだけど、ストローと間違えてマドラー吸っててかわいかったぁ～」（栗東・女性騎手）

シーイズミラコー（ある意味現代競馬の常識に逆らう女）

その女は、おおよそ騎手という職業に向いていない女である。

元子役で、某動画サイトでの配信が趣味だった少女が、まったくの乗馬素人が、ノリと勢いで競馬学校の門を叩いてしまったのは、たぶん競馬の神様が悪ふざけか何かだったのだろう。厳しいトレーニングや体重管理に何度も音を上げまくった彼女が、どうにか競馬学校を卒業して騎手になれたことは奇跡としかいいようがない。奇跡でないとするならば、何か大きな力が作用して彼女をジョッキーにさせたとしか思えないのだ。

センス、バランス感覚、運動神経、馬を走らせるテクニック。現代競馬において、求められるような資質を、なんと、驚くべきことに、信じられない話ではあるが、彼女はまったくといっていいほど持っていない。形容しがたい不格好なフォームから繰り出されるド素人レベルの騎乗は馬券購入者の精神力と残金を大きく削ることしか能が無いのだ。デビュー戦ではド派手に放馬。年間勝利数は一桁。そのくせやたらと自信家でビッグマウス。加えてトラブルメーカー。ことあるごとにＳＮＳでは炎上を繰り返している。

そんな彼女が騎手として乗り続けていられる理由は……

・厩舎による寛大なバックアップ（リーディング常連の名門厩舎）

・なぜか気に入られた大物馬主からの絶大支援（ＧＩ馬多数輩出）

・鉄人級に頑丈な身体（無事是名騎手）

また、超が１００個くらいつくほどの豪運の持ち主でもある。

重賞初騎乗となったレースは、落馬負傷の乗り替わりで急遽騎乗が決定した。しかもその馬が超良血の実績馬であり、単勝オッズは２番人気。だが、乗り替わりが決定した途端にオッズが跳ね上がったのは有名な話だ。レースでは大外に回す騎乗を見せ、短期免許で来日中だったアザール騎手（凱旋門賞ジョッキー）との叩き合いを制して、なんと重賞初騎乗にして初Ｖを決めてしまった。入線後には馬に振り

落とされ、さらに鞭の使用について制裁を受けて過怠金を受けるおまけつきだ。
多くのファンと多くのアンチを抱え、身体を張って競馬界に一石を投じ続ける女性ジョッキー。
木津かれん――現代競馬の常識に逆らう女である。

※

「いいかい。競馬っていうのはエンタァテイメントなんだよ。ただお馬さんを走らせるだけだったら、そんなの勝手にどっかの草っぱらでも走ってりゃいいんだ。だけども、ぼくたちは違うだろ？　見に来てくれたファンの方々にね、感動や熱狂を提供しなくっちゃならないんだよ。いったらぼくたち騎手ってのは、稀代のエンターテイナーなワケだよ。いかに魅せる勝ち方をするかっていうのが、ぼくらの仕事なんだ。分かるゥ？」
本日の阪神競馬場。グランプリ宝塚記念があるということでスタンドは超満員だった。多くの観客たちに、木津ジョッキーはその勇姿を見せつけることができるだろうか。
木津ジョッキーは、意気揚々と本日の一鞍目に向かった。三歳ダート未勝利。ゾンビデンジャラス号は、前走前々走と大敗が続いていた。荒すぎる気性が原因だった。
しかし、そうした馬であっても木津ジョッキーは冷静だ。
ゲートが開くと同時に内の馬へ思いっきり競りかけていってハナを奪い切ると、とにかく飛ばしまくる。
お気づきの方もいるかと思うが、終始かかりっぱなしなのである！
１４頭中１４着。１４番人気の期待に応える騎乗であった。
「競馬は時の運というからねぇ。まあ、こういう時もあるよ。ハイハイ、切り替えていこう！」

※

続いての騎乗は４Ｒ三歳未勝利、芝のマイル戦だ。なんとここで木津ジョッキーは４番人気。超有力馬へ騎乗することになっていた！
オマエジャナイ号。懇意である有力馬主から依頼を受けた、前走三着前々走二着という力のある馬。今回の相手を見ると、この馬と張り

合うほど力のある馬はいないため、ほぼ確勝レベルの馬だ。本来なら断然の一番人気になっていてもおかしくないのだが、そこはこの鞍上。何が起こるか分からないのだ。鞍上が木津というだけで私たちは馬券を買うのを躊躇ってしまう。

そして事件は本場馬入場で起きた。

放馬である。

彼女は内ラチに手をかけながら、自分の元を離れた馬の走る姿をぼんやり眺めていた。その姿はさながら一枚の絵画のようだった。

オマエジャナイ号は競走除外となった。

「これがねぇ、競馬ですよ。競馬は奥が深い。ときどき深すぎて分からなくなるね。ぼくだって今週も落とされると思ってなかったよ」

木津ジョッキーにとって二週連続となる放馬劇だった。

※

その後の７Ｒでも息をするようにシンガリ負けをしてみせた木津ジョッキーだったが、悲壮感はまったくといっていいほどない。

そう、微塵もないのだ！

ジョッキールームでジュースを飲みながらスナック菓子をつまみ、呑気な表情でゲームに興じる姿は、とても惨敗を喫したジョッキーには見えない。気持ちの切り替えは騎手の基本。まさにそれを体現している！　などというと方々から「ちげーよ」と声が聞こえてきそうだ。

「あら～永吉さんヘッタクソですね～！　そうじゃないんだよなぁｗ」

共にプレイしていたのはリーディング上位のジョッキー。しかし、相手が年上であっても煽る煽る！

この女、馬を操縦するのは苦手だが、ゲームを操作するのは大の得意なのである！

※

迎えた最終１２Ｒ。メインレースの時から降り出した冷たい雨が身体に打ち付けるというコンディションの中、木津ジョッキーは不満をぶつぶつと述べていた。

「ぼくはさ、言ってやりたいんだよ。雨降ってもね、雪降ってもね、風吹いてもね、同じように乗せられるってのは、おかしいんじゃねえのかと。だったら槍とか矢が降って来ても同じように乗れってのか？

別に、止めろっつってんじゃないのよ。さすがに雷だ台風だっていったら中止になるし。なんだろうね、こう、気遣いが欲しいんだ。『寒いなかよく頑張ってくれました。これはほんのばかりのお気持ちですが……』っていうさ。そこをぞんざいに扱われちゃったらさ、やる気なくしちゃうんじゃないの？　『こちとら人気女性ジョッキー様よ？』ってね。　いやいや、ぼくに限った話じゃなくてね（笑）」

内心、早く済ませて帰りたいという気持ちが出てきた木津ジョッキー。

宝塚記念の熱気収まらぬ中で始まった最終レース。ポッカリと開いたインに進路を取った木津ジョッキーは良い手応えのままコーナーを回り、直線の入口では先頭に立っていた。

『――これはセーフティリードだ！　強いっ！　シーイズミラコー！

一着でゴールイン！

低評価を覆す圧巻の走り！　他馬を寄せ付けませんでした！』

「見たかオラァーー！」

『鞍上の木津かれん騎手、大きく大きくガッツポーズ！　これが今季3勝目です！』

彼女にとってはＧＩ宝塚記念も自身の劇的勝利の前座に過ぎない。本人もびっくりの手綱さばきで、三連単が数百万円という大荒れのレースを演出した。勝因は本人にも解らない。

何万人の観衆を前に、乾坤一擲の走り。大舞台に強いジョッキーというのは確かにいるにはいるが、それにしたって木津ジョッキーは極端である。

宝塚記念を見に押し寄せた競馬ファンたちに『木津かれんここにあり』と見せつける勝利となった。

開催終了後には『クッソ寒い中見に来てくれたみなさん、楽しんでいただけたかな？』とツイート。パワフル系アルコール飲料を飲みゴキゲンとなったところで、今度は騎手の待遇改善を要求するツイート

をしたところ無事炎上。郷田騎手から教育的指導が入った。
――現役時代はクラシック三冠をはじめとした数々のレースを勝利した名騎手で、現在は競馬評論家の工藤優吾氏は語る。
「競馬に絶対は無い、というのは、彼女を見ているとまさにそうだと感じる」

※

木津かれん騎手　６月※日の騎乗成績
２Ｒ　ゾンビデンジャラス　１４頭中１４着（１４番人気）
４Ｒ　オマエジャナイ　１６頭中　放馬　競走除外（４番人気）
７Ｒ　ガナビーストラング　１６頭中１６着（１１番人気）
１２Ｒ　シーイズミラコー　１６頭中１着（１５番人気）

騎手会主催　ファンフェスティバル！

スプリングタイムス　２０ＸＸ年　６月※日
チュウザイフロール雨に泣く７着　八坂「勘弁して」
宝塚記念（ＧＩ・芝２２００）で、３番人気に推されたチュウザイフロールは、スタートでの遅れを取り戻せずに７着に終わった。
予報外れの雨だった。
気象台の発表によれば関西全域では快晴が予想されていたが、グランプリの大一番を前に突然の雨。思わぬコンディションの変化に馬も鞍上も戸惑いを隠せなかった。
雨の降りしきる中での発走、出足のつかなかったチュウザイフロールは後方からの競馬を余儀なくされた。
「切り替えて内々を回ることにした」と八坂。しかし、同じ女性騎手である小中美由騎乗のアカシヤスターダムが絶妙な逃げでペースを緩ませない。息の入れどころがないまま最終コーナーを回ることになり、「終いの脚がつかんかった」と語るように伸びきれず。１０番人気ながら３着に逃げ粘った小中と明暗が分かれた格好だ。
「ちょっと……今日は……ほんまに勘弁して」と、いつになく口数少なく立ち去った八坂だったが、勝利ジョッキーの島田騎手に「勝ったんやったら飯奢れ」とジョークを飛ばす姿も見られた。
関連記事
お祭り男島田　真髄発揮グランプリ４勝目！
アペンドアンドレア惜走また２着　郷田「力のある馬だけに悔しい」
アカシヤあわやの逃げ　秘策はヨガの呼吸法だった!?

※

ファンフェスティバル～開幕～
あの雨雲はどこへやら。雲一つない晴天でございます。
先日の宝塚記念の活気も冷めやらぬ中、今年もこの日を迎えまし

た。
ジョッキーとファンとの一大交流イベント、ファンフェスティバルでございます。
普段は垣間見ることのできないジョッキーたちの素顔や、趣向を凝らした企画が、今回もメジロ押しであります。
本作品の読者の皆さま、お初お目にかかります。
このたび、第四の壁を飛び越えまして、ジョッキーとファンとの交流を特別に実況させていただくのは、競馬を追いかけて続けて５５年、私、馬坂杉之丞でございます。
それでは早速参りましょう。
「さちこおねぇさ～ん！」
「はぁーい！　みんな元気ー？」
「はぁーーい!!」
「それじゃあ今日は一緒にお馬さんにニンジンをあげたり、背中に乗ってみたりしようねー！」
「はぁーーい!!」
「ルールを守って、楽しくお馬さんとふれあおうね！　おねえさんとの約束だよ！」
さあ、まず登場して参りましたのはご存知君野佐知子ジョッキーであります。こちら「こどもふれあい広場」であります。お子さま向けのエサやり体験やポニー乗馬体験などができるコーナーの中心で、笑顔の花を咲かせております。デニムのオーバーオールにキャスケットという、教育番組のお姉さんルックであります。よく似合っております。
さあさあ佐知子おねえさんは大人気であります。子供の心をがっちりと掴んでおります。これがかの三冠牝馬にしてアイドルホースたるサーチライト号の貫禄といったところでございましょうか。隙あらば高い高いや肩車で子供たちを楽しませている模様です。
「あの、次の方どうぞ」
こちらは柊雪絵ジョッキーです。こうして人前に出るのが苦手な彼女にとって、子供を相手にこうしたふれあいをするというのは、な

かなか難しいものかと思います。まだ表情にぎこちなさはありますが、一生懸命子供たちと接している姿は、見ていて応援したくなります。がんばれ雪絵おねえさん、といったところでありましょうか。

あっと、子供がひとり転んでしまったようです。

「大丈夫……怖くない、怖くないよ」

雪絵おねえさんがすぐさま駆け寄って傷を見ています。痛みをこらえている男の子の手を優しく握ります。加えて適切な処置を施していく姿は、まさに白衣の天使――フローレンス・ナイチンゲールもかくや、といった具合でありましょう。今、無事に男の子を親御さんの元へ送り届けることができたようです。

「痛っ、痛い！　キミたち、スネにチョップするんじゃありませんっ！」

「いけーっ！　やれー！」

「クッッッソ！　ガキどもが調子に乗りやがって！　大人の怖さってのを思い知らせてやる……血祭りだァーー！」

「あはは、逃げろーっ！」

さあこちらはでは大捕物が始まった模様です。

木津かれんジョッキーこと、かれんおねえさんがドサンピンのチンピラめいた台詞とともに蜘蛛の子を散らすように逃げて行った悪童を追います。

名もなき少年たち、けれん味たっぷりの逃げであります。

「逃がすかー！　って、おりょ、おりょりょりょりょー!?」

「コケたぞー！　みんなかかれー！」

「あっ、ちょっとタンマタンマ！　ご、ごめんなさい！　許してください！」

ここで転倒。まったく期待を裏切らないかれんおねえさんであります。

大人の威厳はどこへ行ってしまったのでしょうか。かれんおねえさんは遥かに年下の児童たちにこれまたド三流めいた命乞いをしている模様です。

一斉に飛びかかる子供たちは、一糸乱れぬ兵隊のごとし。なす術も

ありません。無邪気な子供たちほど恐ろしいものはない、ということの証左をまざまざと見せつけられているといっていいでしょう。
「みんな、こっちおいで～！」
「はぁ～い！」
ここで九死に一生を得ました。佐知子おねえさんの呼びかけに悪ガキどもは立ち去っていきました。
ボロボロになったかれんおねえさんに、雪絵おねえさんが声を掛けています。
「木津さん、大丈夫ですか!?」
「……ハッ、このくらいどうってこたぁないよ。ぼかぁね、子供相手だろうと全力で楽しませることを忘れないもの。まあ、なんていうか、大人の余裕っすわ。ハートはアツくても、頭は冷静ですよ」
「そ、そうですか」ホッ
「ただし、あの指示出してたガキは絶対ゲンコツ食らわしてやるッ！」
「大人気ない！」ガビーン!!

そんなこんなで大盛況のファンフェスティバルでありますが、食べ物の屋台も多く軒を連ねております。
予算は度外視して、来てくださったファンの方々にお腹いっぱいになってもらおうという太っ腹さ。腕を振るうのはもちろん歴戦のジョッキーたちであります。
「安いよ安いよー！　焼き立てやでー！　ほらそこのおっちゃんたこ焼き買うてってや！　笑いと粉モンにうるさい関西人のあたしが作ったんやから、味は保証するで！　そっちのべっぴんなお姉さんも、ほら食うてみて。ほっぺた落ちるで！　いやいやシャレやのうて！」
商売文句をマシンガンのように飛ばして売り子をしているのは、八坂優花里ジョッキーであります。慣れた手つきで商品を渡す姿は、言われなければジョッキーだと気づかないほど板についております。商売繁盛、行列が出来上がっております。
それでもここは一等地にして激戦区。彼女もまた向かい側のライ

バル店とシノギを削り合っております。
　向かいにあるのが瀟洒な看板と小気味良いジャズ・ソングをバックグラウンドミュージックにした、最先端屋台の様相。メニューはタピオカジュース、クレープ、デニッシュ、キッシュといった横文字が並んでおります。
　店主はもちろん小中美由ジョッキー。若者向けかと思いきや、和菓子や日本茶などのメニューも取り揃えるあたり、彼女の趣向の幅広さを改めて思い知らされます。
「はぁ～い。めずらしい食べ物もありますからぁ、ぜひ食べてみてください。おいしいですよ～」
「ちょい待ちぃ！　アンタぁ、ウチらの客奪っとるやないか！」
「えぇ～？　でも、自由競争が基本じゃないのぉ？」
「じゃかしいわ！　ショバ代のひとつも払っとらへんやないかゴラァ！」
　これはこれは、Ｖシネマ俳優さながらの凄味を見せる八坂師匠であります。
　これを見た小中ジョッキーは、店先からオススメのチキン＆トマトデニッシュを持って参ります。寄進しようといったところでしょうか。
　ライクア三下、といった顔つきで八坂ジョッキーはデニッシュを検めます。
「なんやなんや、こんなけったいなモン売れるかいな。屋台いうたら粉モン、わたあめ、カキ氷って相場が決まってんねん！」
「はい、あぁ～ん」
「あぁ～ん」
「お味はどお？」
「……モグモグ……ングッ！
　んまぁ～～～い！
　なんやこれ、この下味がついたチキンの食感、おまけにトマトの酸味と果肉の感じが口いっぱいに広がって、噛むごとに旨味が持続するやんけ！　なんやったっけこれ、チキン＆トマトデニッシュ？　チキ

ン&トマトデニッシュ！　ほほー！　こらぁエエもん教えてもろたわー！　あたしも後で買って帰ろっと」
「というわけで、皆さんよろしくお願いしまぁーす！」
さすがの師匠。プロレスも食レポもマッチポンプもお手の物でございます。
このようにして経済はますます活性化していくものと思われます。

さらに外へ目を向けますと、大規模なステージが設置されているのが分かります。
そして、そこで行われているのは「ジョッキーボーイズコレクション」であります。ときめき☆イケメンパラダイス開催中です。
見目麗しい男性ジョッキーたちが、半ば強制的にエントリーさせられ、この晴れの舞台に臨んでいます。
『エントリーナンバー1番、福盛田光ジョッキーです！』
『一等賞はボクのもの。キミのハートを、一人占めだよ』……よ、よろしくお願いしまーす！」
『光くん、照れちゃダメよー。これ、カッコいいとこ見せて女の子からキャーキャー言われる企画なんだから』
「すいません……でも、やっぱり恥ずかしいですよ」
トップバッターを務めた福盛田ジョッキーですが、顔を真っ赤にしております。こういう役回りは若手ですから仕方ありませんね。後で先輩からからかわれることでしょうが、これも人生の冥利。酸いも甘いも噛み分けて大きな人間になっていってほしいものであります。
福盛田ジョッキーからさらに数人のジョッキーが登壇しましたが、決定打――特大ホームランで女性たちのハートを射止めるジョッキーはおりませんでした。
とうとう残るはあと一人となりました。
『最後はこの方！　なんと唯一の女性ジョッキー！　郷田ひとみジョッキーです！』
「……」
なんということでしょう。男物のウイッグをつけて、ブレザーを纏

い、俯き気味に佇む御姿は少女漫画に登場する憧れのヒトと見紛うほどであります。
大きなどよめきがわいた後、一瞬の静寂が訪れ、
『バカ、よそ見すんな。オレだけ見てろ』
一気に、これぞメローイエロー（？）これぞ黄色い歓声だと言わんばかりの女性の声、声、声。興奮と驚嘆とエモみ。あちこちでため息と拍手も起こっております。
「ども、郷田ひとみです」
『いやー、これはなんというか……ちょっと俺、オトコとして自信なくなってきたわ』
「いや、そんなことないでしょ（笑）」
『和久さんどうですか？　この郷田ジョッキーに勝てますか？』
「無理ですね。もう、ボクが女になります」
『（笑）』
男性騎手の盛り上げ隊長である和久ジョッキーからも太鼓判をいただき、これはもう郷田ジョッキーの圧勝ということで相成るかと思われましたが、最後の最後に登場した生ける伝説・王子進之助ジョッキーが大人の魅力による貫禄勝ち。見事に捲ってみせた次第であります。
このようにフェスティバルは大盛況でありました。
こうした騎手とファンとの交流を通して、競馬に親しんでもらうということに、大きな意味があるといえるのではないでしょうか。
さてここで、今回のお話の中入りに差しかかって参りました。私はお役御免、といったところであります。
というわけで読者様方、ここまでお付き合い有り難うございました。またどこかでお会いしましょう。実況は馬坂杉之丞でございました。

※

～閉幕～

日も沈み、所変わってとある料理店。
「カンパーイ！」
優花里の音頭で全員がグラスを掲げた。
そう、女子会である。
上半期を締めくくり、夏競馬から始まる後半戦も頑張っていこうという決起集会的な意味合いは薄く、比較的ワイワイやってるだけのただの飲み会である。
首魁たる優花里がグビグビとビールを飲み干して、プハァーっと声を上げる。
「宝塚、これだけ言わせて……なんでいきなり雨降ってくんねんドアホ！」
「あれはスゴかったねぇ～大変だったなぁ～」
「大変やったらあんな逃げカマすなやー！　もー勘弁して！」
「ぼくはさすが優花里さんだと思いました。ここに来て、雨。やっぱり、持ってるモノが違うな、と」
「おいコラどういう意味や」
「またまたぁ～ゆかりんったらぁ～」
「うち先輩やぞ！　撫でんなし！」
「優花里さーん、これツイッターにあげてもいいですか（^^）」
「やめーや！　あたしを炎上に巻き込まんといてぇ！」
早くも二杯目に入っている優花里、洒落たカクテルを手に笑う美由、好物のパワフル系アルコール飲料を飲むかれん。
関西所属の賑やかし3人が盛り上がる一方で、
「とりあえず串何本か頼んでおきますね。ひとみさんはサラダもあったほう良いですよね」
「ああ、悪いな、助かる」
「……」
「雪絵さん？」
「……あ、ごめんなさい。あまりこういうお店には来ないので、どういうものを頼めばいいのか……」
「食いてえモン食えばいいじゃねえか。肉食え肉」

「ちょっとひとみさん、その言い方は乱暴ですよ」
「う……ごめんなさい」(・_・;)←後輩に叱られるリーディングジョッキー
「はい。ふふっ、そういう素直なところ好きです」
「えっと……じゃあ……」
「雪絵さん、こっちにオススメのメニューもありますよ。お魚なんかどうですか?」
「あ、いいですね……じゃあ、これでお願いします」
佐知子、ひとみ、雪絵のノンアルコール組もノンビリと宴会を楽しんでいるようだった。
徐々に酔いも回り良い気持ちになってきたところで、優花里が箸を置いてこんなことを口にした。
「あたしらン中でいちばん早く結婚すんの誰やろなぁ?」
「んん~どうなんっすかねぇ~。まぁ優花里さんが一番最後なのは確定として」
「木津ゥ! アンタほんまアレやな! ビシバシくるなァ!」ビシィ!
「ぶべらぁ!」
「美由さんは彼氏さんとはどうなんですか?」
「んふふ~、まだそういうハナシはないかなぁ~。なんて言って何年も経っちゃってるんだけどもねぇ」
「え……小中さんってお付き合いしている方がいらっしゃったんですか?」
驚く雪絵に対して、顔を赤らめて美由は答えていた。
「そおそお。同業者でねぇ。付き合いはもう二十年くらい……あ、私の家って競馬の家系で、その人も競馬のお家の人なの。だから、ずーっと家族ぐるみの付き合い」
「い、意外です……」
「ゆきぽんはそういう人いないの?」
「あ……すみません。そういった類の話には縁が無くて……それに、今は競馬に集中しないといけませんし」

「甘いでぇ！　そんなん言うてたらあっちゅう間に時間過ぎて気づけば３０や！　競馬と恋愛が両立できんっちゅうのは先入観やねん！」
「は、はい……」
「ぼく思ったんですけど、優花里さんは両立できてない側ですよね」
（火の球ストレート）
「ぐはぁ！」
結果的に自らが投げたブーメランにより撃沈する優花里。
その会話を聞きながら、ひとみが不意に小さな声でひとりごちる。
「競馬と恋愛の両立、かぁ……」
――ひとみがどう思ってるかは知らないけどね、ぼくたちのことを決めれるのは、ぼくたちしかいないんだよ。
ふと、懐かしい声が蘇ってきた。
それが、今、どんな意味を持つのだろうか、とひとみは考える。考えるが、まとまることのない想いは、グラスの中の氷のようにいつの間にか溶けてなくなってしまう。
「どうなんだろーな」ぽつりと、誰に言うでもなくつぶやいた。
言葉が耳に入ったのか、佐知子がひとみに声を掛ける。
「ひとみさん？　どうしました？」
「いや、なんでもねえ」
一気に、ひとみはグラスの中身を空にした。

フォビア（馬に乗るということ）

「今回も、特に異常はありませんでした。ほんの少し視力が落ちていますが、問題無いでしょう」
「そうですか」
「はい、お大事になさってください。いつも応援してますよ」
「ありがとうございます」
医師に軽く会釈をして、長介は診察室を後にした。
脳梗塞を発症して以降、長介は年に数回病院へ行っている。何の仕事においても身体は資本だ。長く馬と接するためには、何より先ず自分が健康でなくてはならない。これは師匠である藤坂寅一調教師が口酸っぱく言ってきたことだ。長介は、病に倒れ、その言葉の重みを身をもって痛感した。
軽く飲み物でも飲んでから帰ろうかと、玄関口の自販機で買ったブラックコーヒーを手にベンチにもたれかかっていると、不意に声をかけられた。
「末永さん」
「雨宮さん、ご無沙汰しててすみません」
「いえ、私のほうも、なかなかご連絡を差し上げることができなくて、申し訳ありません」
振り返るとナース服の上にパーカーを羽織った女性が立っていた。
雨宮一恵。彼女は、長介がかつて倒れた時のリハビリや治療を担当していた看護師だ。付き合いはもう十年近い。優しい性格で、入院時に心身共に弱っていた長介と真摯に向き合い、寄り添ってくれた女性だった。
「今から休憩ですか？」
「はい。末永さんはすぐに戻られるんですか？」
「いや、ここで一杯やってから行こうと思ってました」
※
蒸し暑い空気を裂くように蝉の声が聞こえる。ふたりはベンチで

肩を並べていた。
　長介はリラックスした雰囲気で会話を弾ませた。
「そういえば、君野さんの体調はどうですか？　夏バテとかしてません？」
「アイツに夏バテなんてものはありませんよ。むしろ夏になって調子が上がってきてます。正直、うるさいくらいです」
「うふふ。元気なことはいいことです」
※君野佐知子の近走重賞成績
６月東京　ＧⅢ・ユニコーンＳ　７番人気１５着
６月福島　ＧⅢ・ラジオＮＩＫＫＥＩ賞　１４番人気１０着
８月新潟　ＧⅢ・レパードＳ　９番人気４着
佐知子は、確かに夏になって調子を上げてきていた。
　特に次の重賞、関屋記念で騎乗するイチダイジは、かなりの素質馬だ。三歳春にはＮＨＫマイルＣを目標にニュージーランドトロフィーで三着と好走した馬だったが、直後に怪我が見つかり、春は全休となった。その後も弱い体質のせいもあって思うような成績が残せずにいたが、春先から走りが安定。前走ＯＰ戦でレースレコードに近い走りを見せて快勝、いよいよ本格化か、といったところだった。
　恐らく当日の単勝オッズは一番人気となることだろう。
「サチはやってくれるでしょう」
「そうなるといいですね。職場にも、君野さんを応援してる方がけっこういらっしゃいますし。もちろん、私も応援してますよ」
　笑顔を見せた雨宮だったが、「でも」と付け足した。
「でも……やっぱり無事に回ってきてくれるのが、いちばんです」
　しみじみと言った彼女の目は、どこか遠くを見ているようだった。
「もちろん、勝負の世界だということも、騎手の方はレースで結果を出さないといけないということも分かっています。でも、やっぱり心配なんですよね。ここにも、怪我をしたトレセンの方が運ばれてくることもありますし、レースで落馬した騎手の方が大怪我に遭われたというニュースも耳にします。落馬事故で亡くなった方も……」
「……」

彼女の言葉に、長介は一人のジョッキーのことを思い出す。
石井正嗣という騎手がいた。末永、王子という二人の天才を輩出した『黄金世代』の一員だ。競馬学校時代から、真面目で一本気な男だった。
デビューしてから長らく重賞と縁のなかった彼が、やっと重賞タイトルを手にしたのは３０を間近に控えた時だった。石井は所属厩舎の馬で見事に重賞タイトルを掴んでみせた。入線後、彼は涙を流してガッツポーズをしてみせた。乗鞍が少なくなり、一時は騎手を辞めようかと考えていた男に訪れた歓喜の瞬間だった。そのレースの後に王子が言い出して、近いうちに同期だけで祝勝会をしようということになったのを長介はよく覚えている。
だが、その祝勝会が開かれることはなかった。
初タイトルを射止めたわずか数週間後、あるレース中に騎乗馬が故障を発生し、石井は落馬。病院に運ばれたものの、後続馬に頭や身体を蹴られた彼は帰らぬ人となってしまった。重賞を制覇した馬でのＧＩ優勝を目標にしていた矢先の悲劇だった。
傍目には華やかに見える舞台だが、競馬は常に危険と隣り合わせだ。騎手には落馬のリスクが付きまとう。厩舎スタッフもまた、いつ馬が暴れて蹴ってくるかわからない中で仕事をしている。
長介もそれは承知の上だった。だから、常に細心の注意を払い、危険を察知したらすぐに最も被害の少ない選択を即座に取るようにしていた。
馬に乗ることが怖くなったら乗り役を辞めるべきだ、という者もいる。だが長介は同時に、果たして何の恐怖も無しに馬に乗り続けていられるものだろうか、とも思う。
なんと返したらいいのか戸惑った長介は、謝っていた。
「すみません。ご心配をおかけします」
「いえ、いいんです。皆さん、懸ける想いがあって乗っていらっしゃるんですよね。それは、もう、分かってますから」
※
「……」

「あ、末永さん、いいですか？」
「ええ、はい」
何か思い出したように、彼女はそっと右手を差し出してきた。長介はそれに応じ、右手を差し出す。手を取り、彼女の肌の温もりがじんと伝わってくる。
リハビリの時から、二人がよく行なっていたやり取りだった。後遺症により上手く動かない右手だが、彼女が力を入れるとすぐに感覚が伝わってきて、温かさを覚える。
しばらくして手を離し、空になった缶コーヒーのラベルを眺めながら、長介が言った。
「あの……よかったら、またお食事でも行きませんか？」
「いいんですか？」
「はい。お世話になってるのに、なかなかお礼もできませんで……」
長介が自嘲気味に笑うと、雨宮は穏やかな笑みを浮かべた。
「じゃあ、楽しみにしてます。ご連絡、お待ちしてますね」
そう言うと、彼女は立ち上がって病院の関係者出入り口へと歩いていった。長介は、ぼんやりと自分の手のひらを太陽にかざしていた。

イチダイジ（夏の競馬場）

新潟競馬場はうだるような暑さだった。
ジョッキールームには究極にラフな、ある意味だらしない格好の騎手もいた。
それは女性ジョッキーも同じことだった。さすがに上半身裸というようなジョッキーはいないが、上はシャツ一枚の格好になっていた。
「蒸し風呂やんなぁ」
「今日は汗取りする必要ないわな」
「にしても今日、えらい人入ってますね」
モニターを見ながら雑談していた騎手たちに、優花里が割って入って来た。
「そらそうよ。サチコの重賞初勝利を見んと、ぎょーさん集まってんねん。
「一番人気がサッちゃんで二番人気が雪絵ちゃんやろ？　そら客入るわ」
「せやな。ま、サチコには悪いけど勝つのはあたしやな！」
「またおもろいこと言いよるなぁ。八坂、新潟の成績どないやっけ？」
「関西ほど良くは無いけど、関東ほど悪くは無い。まあ、トントンやな」
「いうてチョーさんメイチで仕上げてきてんやろ。佐知子も抜かりないやつやし、そうそう取りこぼさへんやろ」
「甘いわぁ。ハチミツにメープルシロップかけたくらい甘いわぁ。ええか、サチコなんてまだデビューして二年目の新人や。いくら新人で最多勝獲ったいうても、いつまでもそんな勢いが続くわけあらへん。二年目のジンクスや。去年は夏に成績グンと伸ばしたわけやけども、今年もそうなるとは限らん。見てみぃ、夏に入ってからのサチコの成績。去年ほど成績伸ばしとるか？　ん？」
『――今、一着でゴールイン！　マグノーリア快勝！　この勝利で君野佐知子騎手は新潟リーディングの松崎騎手に並びました！』

「伸ばしとるなぁ」

※

美浦の中堅厩舎所属の2歳牝馬、マグノーリアのデビュー戦を勝利で飾った。翌年のクラシックも視野に、調教から乗せてもらってきた馬の勝利で、手応えは大きかった。

そんな佐知子だったが、頭はすでに次のレースのことへ切り替わっていた。

勝負服を着替えてすぐさま次のレースへ向かう。3歳以上５００万下。ダートの１８００。テン乗りだ。関西の厩舎の馬で、単勝人気は真ん中くらい。脚質も中団に控え、馬群の真ん中から後ろあたりで競馬をする馬だった。

パドックではかなりイレ込んでいたようで、跨った時も振り落とされそうなほどの勢いだった。どうにかなだめすかして、馬場入場の時には落ち着いて歩けるようになり、ゲートに収まった。

スタートを絶妙なタイミングで飛び出した。真ん中くらいの枠だったが、押し出されるように先頭に立っていた。この馬の脚質からいって、未知の領域だったが、長手綱で持って佐知子はそのまま行かせた。

向こう上面で二番手の馬が競りかけてきたので、佐知子は譲ろうと思ったのだが、馬のほうはそうもいかない。抜かせまいと脚を前に出して、ハナを譲らなかった。

そのまま４コーナーに入り、徐々に後続との差がなくなり、二番手の馬とほぼ並ぶ形になった。肩鞭を入れて合図を出すと、馬もそれに応えたが、外の馬の手応えはまだ余裕そうだった。直線に入り、二番手の馬がスルッと抜け出すと、あとはそれに追いすがるのみだった。最内で粘り込みを図る。

「いけー!」「そのままー!」と、鬼気迫る声がスタンドから飛んでいるのも気にせず、佐知子は追い続けた。前に二頭の馬がいるのを確認し、最後のゴール前でグイと首を押した。どうにか三着を確保した。

レース後、管理する調教師は佐知子に言った。

「お任せとは言うたけど、驚いたわ。よう前でやれたね」

「スタートが良かったのでそのまま行きました。途中で勝ち馬につつかれちゃった分、最後伸びませんでした」
「いやあ、それでも大したもんや。いつもはゲートで後手踏むんやけど、今日はサッちゃんのおかげかな」
「ありがとうございます。いい馬なので、また機会があればぜひ乗りたいです」
「せやな。考えとく。ありがとう」

※

そして再び着替えて次のレースへ。それの繰り返しだ。
今日は鞍数が多く、メインの関屋記念までの１０レース中８レースで騎乗予定があった。
「おーいサチコ、倒れんなや。ほら、アメちゃんやで」
着替え途中、優花里が佐知子のもとへ姿を見せた。佐知子にペットボトルの水と塩飴を手渡す。
「ごめんなさい優花里さん」
「ええねんええねん、あたしなんて今日はメイン乗るためだけに来たようなもんやし」
本日二鞍の優花里が笑う。今の開催の三場（新潟、小倉、札幌）で、新潟に腰を据えているのは佐知子とかれん。優花里、美由、雪絵は小倉。ひとみは札幌をメインに騎乗している。今日は女性騎手６人のうち５人が新潟に集まっていた（ひとみは札幌で重賞エルムＳに騎乗）。
喉を潤し、佐知子は元気良く礼を言う。
「助かりました。これでまだまだやれます」
「ほんまにアンタは頑張るなぁ。そいや、さっき一瞬だけ新潟リーディング並んどったみたいやで」
「はぇ？　そうだったんですか？」
夏競馬――福島での成績は低調だったものの、新潟に来てからグッと成績を伸ばし、先週のダート重賞レパードＳでも四着に食い込むなど活躍を見せていた。
「さっき松崎さん勝ったおかげで二位に逆戻りやったけどな」

「ていうか、二位なんですか私？　そんな勝ってましたっけ？」
「イヤミか貴様ッッ！　ま、あれやな、自分の勝ち星くらい把握しときーや」
「えへへ、終わったら次のレースに気持ちが入っちゃうので、あんまり気にしてないです」
「やっぱりアンタは大物やなあ。でも、今日のメインはもらうでー！　覚悟しとき！」
「はい！　よろしくお願いします！」

※

メインレースの頃にはパドックもスタンドもぎゅうぎゅう詰めも状態になっていた。
観客の熱気にあてられ、場内もヒートアップしていった。しかし、佐知子は冷静だった。少なくとも、長介の目にはそう映った。
「落ち着いてるな……」
「そうだね。イックンは大丈夫そうだよ」
「いやいや、馬じゃなくてお前のほうだ」
「そう？　まあ、人気のある馬に乗るのは結構あるし。あと、これでもアイドルホースだったから」
「自分で言うか、それ？」
「世間一般の評価だよ。へへ、言われて悪い気はしないかな」
舌を出してウインクをしてみせる、佐知子のいつものくせ。もっとも、こいつはプレッシャーも楽しめるようなやつだからな、と長介は思う。
彼は右手の拳を佐知子の前に出して、いった。
「重賞初勝利のチャンスだ。サチ、狙っていけよ」
佐知子もその拳に応えるように、右拳を出した。
「うん。いってきます」
サーチライト号としてのデビュー戦と同じコースで、佐知子と長介は重賞へ臨む。

※

新潟　芝・良　天候・晴

ＧⅢ関屋記念・女性ジョッキー騎乗馬単勝オッズ
１５　イチダイジ　４．０（佐知子・１番人気）
１１　ケモノミチ　４．５（雪絵・２番人気）
０２　ストレイカメレオン　２７．２（優花里・８番人気）
０３　デキチャウモン　４１．５（かれん・１０番人気）
１６　レモンダンサー　１４１．８（美由・１６番人気）

予想

某デスク「状態万全のイチダイジ、新潟リーディング松崎騎手騎乗のガストンロジャーは外せないですね。この二頭は絡めたほうがいいでしょう」

某競馬評論家「柊さんのケモノミチ。前走からの上積みも見込めますし、パドックでも非常に艶があって良かったですね」

某女性タレント「女性ジョッキーの三連単５頭ボックスでいきます！みんながんばれー！」

某競馬番組ＭＣ「１４番のキャットブルース。ハリス騎手とのコンビで、いよいよ本格化してきたなという感じです」

某逆神「デキチャウモンですね。間違いありません。木津ジョッキーを信じましょう」

君野知恵「馬連⑮―②④⑤⑨⑪」

ヌーちゃん「関屋記念？　別に？　進之助の出ないレースなんか興味ないわ。まあ、そうね。せいぜい頑張りなさい」（こっそりイチダイジのがんばれ馬券１００円ずつ買っている）

ワンスインアライフタイム（思い出の関屋記念）

『サマーマイルシリーズ第二戦、関屋記念です。

スタートしました。最内1番サイバーロードラン出遅れ、最後方からの競馬になりました。7番のミノベソルファもダッシュがつきません。さあまず出て行くのは、外から16番レモンダンサーと小中、スーッと上がっていって先頭に立ちます。その後ろにつけましたのが8番のオマージュ。続いて三番手に2番ストレイカメレオン、6番のサーファークインも前目。その直後に11番のケモノミチと柊雪絵はこの位置。半馬身切れて内に4番ユウダチ。外には10番のツバキロマンティカがいて、中団馬群インコースに3番デキチャウモン。12番のヒゲミッシング、14番キャットブルースと続きます。9番ガストンロジャーと松崎卓篤がその後ろ。一馬身離れて1番サイバーロードラン。内に二頭、13番ブギウギセレナーデ、15番イチダイジ並んでいます。君野佐知子の手はどこで動くのか。その後5番のトビウオバタフライが虎視眈々。最後方が7番ミノベソルファ別所。こういった隊形で第3コーナーから4コーナーへ、一団になって進んでいきます。

先頭は依然としてレモンダンサー。追いかけるオマージュ以下、徐々に進出を開始しています。

長い長い直線コースに入って、先頭はレモンダンサー。各馬広がってきました。外に持ち出してケモノミチ、柊雪絵が勝負を仕掛ける。ストレイカメレオンも追ってきた。インコースではユウダチ。

イチダイジはまだ後方！　ガストンロジャーはちょっと前が開かないか苦しいか！　ここでレモンダンサー後退！　先頭代わって緑の帽子、ケモノミチだ！

残り200を切って追い込んできた！　イチダイジ、一気に前をとらえるとらえる！　ケモノミチとイチダイジ、二頭の競り合い。

イチダイジかわしたか、ゴールは目の前だ！　ここでなんと大外からサイバーロードランが突っ込んできた。飛び込んで、わずかにサイバーロードランだ！　ゴールイン！

一着はサイバーロードラン。長い直線、最後のひと伸びで、二歳以来、二度目の重賞タイトルを掴みました。鞍上は福盛田光ジョッキー。嬉しい重賞初勝利です。

二着は写真判定のようです。11番のケモノミチと15番のイチダイジが横一線。四番手でゴールしたのが内4番ユウダチ。五着に9番ガストンロジャーでした』

※

福盛田光は馬上で呆然としていた。

無理もない。敗戦に直結しかねない出遅れをしでかし、夢中で馬を追い続けていた彼には、現在の光景はにわかには信じられない。一瞬のように感じられた一分三十秒と少し。直線に入ってから無心で追い続け、前で競り合っていた二頭を、わずかにアタマひとつ分かわしたゴール板前。

早まる鼓動とともに震えが止まらない。重賞は、昨年初めて騎乗して以来一度も連対はなし。初優勝が、こんな形で巡ってくるとは。

心ここにあらずといった様子の彼は、自分の名を呼ぶ声に気づいた。

「光！　光――！」

「サチ……」

並ぶように近寄ってきた佐知子とイチダイジ号。ゴーグルを外した佐知子は「おめでとう」と言って、手を伸ばしてきた。光は半信半疑ながらも、その手にタッチした。

佐知子の目は笑っていた。清々しさもあった。尋ねるまでもなく、彼女は心から自分を祝福してくれている。サチはそういうやつだ、と。

それだけに、光は自分の涙腺が緩みそうになるのを必死にこらえていた。同期で一番上手いと言われた佐知子に対し、同期で一番下手だと自覚していた光。

やっと、ほんの少しだけでも、自分はサチに追いつけたんじゃない

か、と光は思えてきた。
「光くんおめでとう」
「福！　やったな！」
関東の先輩ジョッキーたち――有力馬に騎乗していた内川や伊福部といった面々も、馬上から祝福の言葉をかけた。光は馬上から礼を返した。
激走で自分に初めての重賞タイトルをくれたサイバーロードランのたてがみを撫でる。彼は『ピークを過ぎた馬』と言われ、1年以上勝利から遠ざかっていた。彼に勝利をプレゼントできたこともまた、光にとっては嬉しいことだった。
検量室前に引き揚げてからも、光は多くの祝福の言葉を受けた。
オーナーや関係者はもちろんのこと、サイバーロードランを管理する調教師だけでなく、師匠である野々口調教師や日頃世話になっている調教師からも、「おめでとう」と声をかけられた。
騎手仲間からも改めて声をかけてもらった。関東の騎手を中心に、関西の騎手たちも、彼を祝った。優花里からは「ようやった少年！インタビューびしっと決めてきーや！」と背中をバシーンと叩かれた。
もっとも熱烈だったのは佐知子だった。検量室で感極まって抱擁してきた彼女を、光は拒むこともなく応じた。「感動した」「すっごく嬉しい」と興奮気味に語る彼女を見て、光はちょっと冷静な気持ちになっていた。そのため、インタビューや表彰式は思いのほか落ち着いて臨むことができた。

※

その日の晩、佐知子とひとみの電話。
「ということで、負けちゃいました」
『惜しかったなー、でも、良い騎乗だったぜ』
「はい。私も届いたと思ったんですけど、ダメでした……」
『にしても福盛田も大したヤツだよなー。あんな腹くくって乗れる若いやつが何人いることやら』
「はい、自慢の同期です」

『オマエ、なんか嬉しそうだな』
「そうですか？」
『ああ。顔が想像できるよ』
「えへへ、かもしれません」
『サチも頑張れよ。いいか、チャンスの前髪はガシっと掴まなきゃいけねえ。毟り取るつもりでいけ』
「……ひとみさんが言うと、チャンスの神様がちょっと可哀想ですね」
『アァン？』
「な、なんでもないでーす！」

ワンデーエイト（郷田ひとみが止まらない）

夏競馬が終わりを迎えた。

秋のクラシック、そして古馬ＧＩ戦線へ向け、各陣営がいよいよ本格始動する９月に入った。

そんな中にあって、絶好調な騎手がいた。

郷田ひとみである。

初めてダービージョッキーの栄冠を手にした天才女性騎手は、夏の間にさらに調子を上向かせていた。

それを圧倒的に裏付ける日があった。

９月２週目の土曜開催。中山に舞台を戻しての競馬で、郷田はリーディングジョッキーとしての貫禄を見せた。

※

２Ｒ（二歳未勝利　芝・１６００）を二番人気の馬で差し切り勝ち。続く３Ｒ（三歳未勝利　ダート・１２００）では一番人気に応え、二番手抜け出しの押し切り勝ち。５Ｒ（メイクデビュー　芝・２０００）では再び二番人気の馬で、直線抜け出して勝利。６Ｒ（三歳未勝利　芝・１６００）では三番人気に推されたが、直線最後で先頭の馬を捕まえられずに二着。だが、８Ｒ（三歳以上５００万下　ダート・１８００）では６番人気の馬で、好スタート好ダッシュからの逃げ切り勝ち。

ここまで五度の騎乗機会で全て連対、四勝を上げていた。

この成績を受け、残る４レースでは彼女の乗る馬に人気が集まった。

９Ｒアスター賞（二歳５００万下　芝・１６００）では午前の時点で三番人気だった馬が一番人気に。そして、その馬で見事に勝利を収め五勝目。

１０Ｒ鋸山特別（三歳１０００万下　ダート・１８００）でも一番人気が続き、後方待機から直線一気の競馬で勝利。六勝目である。

こうなってくると、もう勢いは止められない。

１１Ｒは三歳牝馬重賞の紫苑ステークス。

乗るのは春のクラシックロードからの相棒――桜花賞二着、オークス五着のウィスタリアだ。残る一冠、秋華賞へ向けての前哨戦。彼女はもちろん一番人気だ。

こうなってくるとひとみは「集中モード」に入る。目を閉じ、無心になり、集中力を高める。だが、彼女のことをあまり知らない騎手からすれば「話しかけたらコロス」オーラに見えるらしいからアラ不思議。

そんなひとみに声をかける者がいた。無謀者？　いいえ、佐知子です。

「ひとみさんひとみさん」

「……ん？　サチか？」

「今日チラッと見たんですけど、ウィスタちゃんかわいかったですよー。髪を編み込んでもらってて」

「へえー、洒落たことするなあ。それで速くなってくれりゃあいうことなしなんだけどよ」

「もー、ひとみさんはまたそういうこと言って……」

「悪い悪い。でもよ、ちゃんと秋華賞への切符は獲ってくっからよ。……ま、賞金額あっからたぶん行けると思うけど」

「ウィスタちゃん、とってもいい子なので是非連れていってあげてください」

「おうよ」

佐知子は、ひとみが乗っている馬に調教も乗せてもらうことが多い。このウィスタリアや、ダービー馬のフォーユアアイズがそうだった。

調教師曰く『普段も女性が乗っていたほうが、馬も違和感が少ない』とのことだった。これは東西どちらでもそうした傾向があったが、特に美浦では女性騎手は二人しかいないため、佐知子にこうした話が回ってきやすいのだ。

※

紫色の勝負服に身を包んだひとみは馬上で思う。

ウィスタリアは一生懸命な馬だ。どんな状況下でも、どんな相手でも、必死に走ってくれる。パドックでも元気の良い姿を見せていた。
それだけに春のクラシックでチャンスをものにしてやれなかったのが悔しかった。とりわけハナ差で逃した桜花賞が悔やまれた。
「よろしくな」
たてがみを優しくさすり、ひとみは微笑んだ。
春がどうであったとか、今日これまで何勝したかなど、余計なものを全て置き去って、ただウィスタリアとの対話だけに全神経を研ぎ澄ませ、ゲートに入った。
（……ッ！　焦んな焦んな、こっからだ）
気合いが裏目に出たのか、ゲートで出遅れた。
しかし、ひとみは冷静にウィスタリアを導いた。内々を回って脚を溜めていく。
遅い流れ――彼女の体内時計はそう反応していた。速すぎて前が止まらない展開だけは避けたいところだった。馬群は一団。願ったり叶ったりだ。
（そろそろ行くぜ！）
３コーナーから４コーナーで、徐々に手綱を動かし始める。中山の直線は短く、急坂が待ち構えている。
直線を向いても、まだ鞭は入れない。じっくりと、その時を見定め、馬群を捌いていく。
（今ッ!!）
ひとみの合図とともにウィスタリアはエネルギーを爆発させ、坂を一気に駆け上がった。先頭との差はあっという間のなくなり、先頭に踊り出たウィスタリアはそのまま何物にも並ばれることなくゴールへ。
本日七勝目にして、初めて小さくガッツポーズが出た。
「ありがとな」

※

１２Ｒ（三歳以上５００万下　芝・１２００）でも一番人気の馬で

アッサリと勝利を収めたひとみは、ワンデーエイト――1日に八勝という記録をやってのけた。これまでに中央競馬では二人しか達成したことのない記録だった。

『常に勝てるとは思っていないが、常に勝ちたいとは思っている。今日の成績がまぐれだと言われないように、明日も集中して乗ります』

彼女の口調は淡々としていた。

それでも佐知子に促されて、「8」本指を立てて笑顔でポーズを取っていた。

ちなみに翌日も彼女の勢いは止まらず、日曜にも五勝を上げた。二日で十三勝。リーディング独走である。もはや『二位の騎手があと何勝で追っている』ではなく、『どこまで勝ち星を伸ばすか』に注目が集まってくる。

ひとみは木津かれん騎手が一年かけて積み上げるような勝ち星を、たった一日で稼ぎ出したのだった。『半分でいいんで分けてください』

※

ひとみが十三勝の荒稼ぎをした後、休みを挟んで再びトレセンが動き出していった。

次は三連休の三日間開催。重賞――阪神では障害の阪神ジャンプSと三歳牝馬によるローズSが、中山では菊花賞トライアルのセントライト記念がある。ひとみはダービーを掴んだ相棒であるフォーユアアイズとセントライト記念に臨む予定だった。

(ん……なんだコリャ?)

朝、目が覚めてひとみは違和感を覚えた。妙に寒気がするような感じだ。

いよいよ秋まってきたのか、とぼんやり考えながら、顔を洗って歯を磨いていく。

だが、シャワーを浴びる頃には、違和感が悪寒に変わっていた。

(頭が痛えぞ……おい……)

「あ……」

声も掠れてガラガラになっていた。

浴室を出て、どうにか服を着る。空咳が出る。全身がだるさで覆われているような感覚だ。考えがうまくまとまらない。

「ちくしょう、マジかよ……」

天井を見上げながら、口惜しそうにつぶやいた。

※

スプリングタイムス　9月某日

郷田まさかのダウンで騎乗見合わせ　フォーユアアイズ乗り替わりへ

絶好調のリーディングジョッキーが思わぬ形で――

郷田ひとみ騎手（美浦・フリー）がマイコプラズマ肺炎と診断され、今週の中山での騎乗を取り止めることになった。

これにより全鞍乗り替わりとなり、セントライト記念に出走予定のフォーユアアイズには君野佐知子騎手（美浦・末永長介厩舎）が騎乗することになった。

フォーアワーアイズ（代打騎乗！）

大塚保夫調教師から依頼を受けた時はなにかの間違いだと思ったが、そうではなかった。

――現役のダービー馬に自分が乗る。

佐知子はいつになく緊張していた。

夜の調整ルーム。佐知子は小さなおむすびを静かに食べていた。

「はぁ……」

「サチ、それで足りるのか？」

「ん……あんまり喉通らなくてさ」

「大丈夫かよ？」

「うん。気持ち悪いってわけじゃないから。ただ、なんとなく食べれる気がしなくてね」

向かい側に座る光が心配そうに佐知子の顔を覗き込む。普段の彼女ならば「そんだけ食べて検量パスできんのかよ」と言いたくなるほど旺盛な食欲を見せているだけに、光は心配であった。

再び、サチが大きくため息をつく。

「乗り替わりは何度も経験あるんだけど、今回はさすがにプレッシャー感じるね……」

「いや、でもわかるよ。郷田先輩のお手馬だし。もしおれが乗れって言われても、めちゃくちゃ緊張すると思う」

フォーユアアイズ。

新馬戦から郷田ひとみが手綱を取り続けてきたダービー馬。朝日杯ＦＳと日本ダービーという二つのＧＩタイトルを獲り、クラシック最後の一冠・菊花賞の大本命とされている馬。当然、世間の注目度も高い。

「期待されてる馬だから下手には乗れないし……かといってケガさせちゃったら、それこそ顔向けできないよ。うぅ……ひとみさんに怒られる……」

サチの想像の中のひとみ『いいかサチ？　アイズは〝ダービー馬〟で、アタシの〝相棒〟だ……そのアイズに恥かかせたってことは……

分かるよなァ？　おい、今すぐ自分サイズの棺オケをもってこい……二度と目覚めないようにしてやるからよォ～～！』
「ひ、ひぃぃぃ!!」
「いや、そこまではされないと思うけど……」
ガクブルしている佐知子に、呆れながらツッコミを入れる光。
さすがにそんなことはされないだろうが、これだけの実績馬――しかも現役で、まだ強くなっている途上の馬に実戦で乗せてもらえる機会など、滅多にない。それにひとみは尊敬するジョッキーで、いつも面倒を見てもらっている大好きな先輩でもある。彼女のフォーユアアイズにかける想いも、佐知子は知っていた。それだけに今回のレースに向けて迷い、悩んでいたのだった。
「おれのゼリーやるよ。こういうのなら喉通るだろ」
「……いいの？」
「いいよ」
「ありがと」
「あんまり無理すんなよ。っていっても、今回ばかりは仕方ないか」
光は関屋記念を勝利した後、好調を維持し続けた。新潟でさらに勝ち星を上げ、今では佐知子の勝ち数をわずかに上回っている。重賞勝利で殻を破り自信を持って騎乗できるようになったことで、成績が上昇してきたようだ。
光からもらったゼリーを食べながら、あることに気づいた佐知子は思わず笑った。光の口元にソースがついてヒゲのようになっていたのだ。
「ふふっ、光、ヒゲついてるよ」
「へっ？　ヒゲ？　えっ、ここ？　取れた？」
佐知子がうなずくと、光は照れたように頭を掻いた。

※

（うーーん……）
夜。
寝床に入ったものの、佐知子はやはり不安を拭い去れなかった。
一頭のサラブレットには、騎手や調教師、馬主、生産者、厩務員な

ど何人もの人間が関わっている。しかし、レースの時――ゲートが開いた時に馬を導くことができるのは騎手だけだ。騎手はその背に、たくさんの人々の想いを背負わなければならないのだ。
フォーユアアイズには調教で何度も乗せてもらっているが、彼と実戦に挑んだ経験はもちろんない。実戦時の彼の背中を知っているのは、世界中でひとみしかいない。
彼の鮮やかな流星を思い出す。凛々しい顔立ち。その瞳は勇気と優しさが見て取れる。
「うーん……すぅ……すぅ」
やがて微睡みの中へ旅立った佐知子は、ある夢を見た。
そこで彼女はひとりの少年と出会った。

※

「あれ？　ここどこ？」
佐知子は無人の競馬場にいた。観客も馬も騎手も、誰もいない競馬場。
ジョッキーである彼女にとって、普段は見る事のないスタンドからの景色だった。異様な光景ではあったが、そもそも自身が不思議な存在であるだけにこういった不思議体験にも動じない。
すると、場内に設置された大型ディスプレイ――ターフビジョンにレース映像が流れた。
『強い！　一頭段違いの強さを見せてデビュー戦を飾りました！　フォーユアアイズ、鞍上は郷田ひとみ騎手です！』
フォーユアアイズのデビュー戦だった。入線後、水色と白の勝負服に身を包んだひとみが、無事に完走した彼を労わるようにその首を撫でていた。
その光景をぼんやりを眺めていると、ふと隣に人の気配を感じた。
「キミは……？」
見れば、フォーユアアイズの勝負服を着た少年が座っていた。年は自分より幼く、妹の知恵と同じくらいだろうか、と佐知子は思った。
佐知子と目が合った彼は、白い歯を見せてにこりと微笑みかけると、ビジョンを指差した。

指差す先を見ると、今度はフォーユアアイズの別のレースの映像が流れていた。右回り――阪神競馬場で行われた朝日杯フューチュリティステークスだ。

『直線に入って、早々と抜け出したフォーユアアイズ！　リードは一馬身！　外からモトム！　シカノグレゴールも追い込んでくる！　しかし突き放すフォーユアアイズ！　その差を広げにかかる！　後続を振り切って、今、ゴールイン！　無傷の二歳王者が誕生！』

初めてのＧＩタイトルを掴んだレース。

佐知子は隣にいる少年を見る。艶やかな髪を後ろで結い、前髪の一部は染め抜いたように白くなっていて、まるでサラブレットの流星のようだった。

晴れやかな笑顔を見るに、相当に彼らの――ひとみのファンなんだろうな、ということを佐知子は直感した。

しかし、その表情が一転して暗くなった。

映し出されたのは中山競馬場。曇り空の競馬場は、今度行われるセントライト記念と同じ場所だった。

『先頭はモミノキ懸命に頑張っている！　しかし外から、外からやっぱりドリームメイカー！　坂を登って先頭に立った！　フォーユアアイズはまだ、フォーユアアイズはまだ来ない！　ここで突っ込んできたのはフラジールソングだ！　しかし、先頭はドリームメイカー！　無敗の皐月賞馬だ、ゴールイン！　勝ったのは、ドリームメイカーと王子進之助！

――１番人気のフォーユアアイズは伸びを欠きました。今日をもって、三冠の夢は儚く散りました。果たして、今の郷田騎手の胸中たるや……』

先程までの晴れやかな表情はどこへやら、少年は目を潤ませながら握り拳を両膝の上で震わせていた。佐知子は自然と彼の背中をさすっていた。

彼の瞳が『ごめんなさい』と謝る子供のように、揺れていた。

「大丈夫……？」

「……」

彼は袖で目元を拭って、再びターフビジョンに顔を向けた。
高らかなファンファーレが鳴り響いた後、ゲートから１８頭の優駿が飛び出した。三歳サラブレットの頂点を決める大レース、日本ダービーだ。
『ドリームメイカーが来た！　鞭が入って王子進之助六度目のダービーへ飛んできた！　先頭に立った！
しかし大外から！　大外からここでフォーユアアイズ！　先頭まで二馬身、一馬身、かわしたかわした！
フォーユアアイズ後続との差を広げる！　二馬身、三馬身！　突き抜けたフォーユアアイズ！
今！　日本競馬の歴史が変わる！　史上初、女性騎手がダービーを制した！　フォーユアアイズ、一着でゴールイン！』
歓喜の瞬間だった。少年は立ち上がって大きく拍手をしていた。その表情は、これまでで一番喜びに満ちていた。
ふと、佐知子は、彼の胸元に光るものを見つけた。それは二つの黄金色に輝くバッジだった。
美少年、と呼んでなんら差し支えない彼の横顔を眺めながら、佐知子は何の気なしに尋ねた。
「ひとみさんのこと、好きなんだね」
少年は目を輝かせて何度もうなずいた。興奮気味の彼は、佐知子にギュッと抱きついてきた。「やられた～」とふざけたように笑いながら、彼女は少年の身体を抱き留めた。
温かな体温を感じながら、佐知子は彼に核心的な質問しようとした。
「ねえ、聞いてもいいかな？　キミは、ひょっとして――」
しかし、その問いは遮られた。
聞こえてきたのは、泣き声だった。小さな身体が小刻みに震えていた。
佐知子は、本能的に彼の頭を撫でた。
（そっか……不安だよね。そうだよね）
姉のように、あるいは母のように慕うひとみが競馬場にいない。そ

れは、彼にとってどんな出来事なのだろう。
サチ――サーチライトは、幸運なことにデビューからラストランまで、全レースで長介が手綱を取った。一度もコンビを解消することなく、共に歩み続けてきた。
今時、デビューからラストランまで、ただの一度の乗り替わりもなく同じ騎手とコンビを組める馬がどれだけいるだろう。
ひとみはしみじみと言ったことがある。『アイズはアタシをダービージョッキーにしてくれた馬だ。これからずっと恩返ししていかなきゃならねえ。これからも一緒に走り続けたいし、できることならアイズの子供に乗ってまたダービーを勝ちたい』と。今回の乗り替わりについても、きっと、その背中を他の誰にも譲りたくなかったというのが本音だろう。
佐知子は、少年の顔を見て、その目元に浮かんだ涙を指でやさしく拭いてあげた。
不安そうな彼の表情に、「私も、光の目にはこういう風に映ってたのかな」と胸の中でひとりごちた。
そして、確かな口調で、語りかけた。
「一緒に戦おう」
今の自分たちにできることは、それだ。
「大丈夫。ひとみさんも一緒だよ。3人で、みんなで、一緒にいこう」
大塚調教師をはじめとした厩舎スタッフやオーナーも、彼らの味方だ。
暫時、佐知子を見つめていた彼は、大きくうなずいて拳を強く握った。その瞳は闘志に満ちていた。

※

セントライト記念。
芝２２００メートルで行われる今日のレースは、菊花賞の優先出走権をかけた戦いでもあった。春――皐月賞やダービーで苦渋を飲んだ馬や、夏に一気に急成長した上がり馬が顔を揃えるなか、フォーユアアイズは単勝オッズ1倍台という圧倒的人気だった。
佐知子は、同馬を管理する大塚調教師と、最後の打ち合わせをして

いた。
「馬場はどうだ？」
「内外であんまり差はなさそうですけど、直線は内がちょっと荒れ気味かもしれません」
「そうか。なるべく前から離されないように頼む。マークもきついと思うが、多少外を回っても慌てずにいけよ。俺からはそんなところかな」
「はいっ、よろしくお願いします！」
「あと、ひとみから伝言だ」
「ひとみさんから？」
「ああ。『アイズを信じろ』と『楽しんでこい』だ。一つ目に関しちゃ俺も同じ意見だよ」
大塚は、笑って付け足す。
「二つ目は厳しいだろうと思ったが、今のお前を見てると、なんだか本当に楽しんできそうな気がするよ」
「そうですか？」
「ああ」
佐知子はきょとんとしながらも、大塚に一礼した。
いよいよフォーユアアイズに跨る。
厩務員が引いていた時はやや落ち着かない部分もあったが、佐知子が乗ってからの周回はスムーズだった。
返し馬。休養明けだったが、彼の走りに硬さはなかった。むしろ、夏の間の成長分がきちんと現れているような力強い走りだった。
（あとはスタート。何が何でも出遅れだけは避けなきゃ）
フォーユアアイズがゲートに収まる。馬番は７番、１５頭立てのちょうど真ん中あたりだった。
外枠に何頭か逃げ・先行馬がおり、発馬直後に寄って来られる可能性があったので、佐知子は外目から進出してこようとする馬の動きには特に注意していた。
そして、ゲートが開いた。
「あっ！」

佐知子は思わず声が出た。外ではなく内、隣の６番の馬がいきなりモタれて馬体が接触したのだ。外に押し出され、フォーユアアイズは両隣の馬に挟まれるような格好になってしまった。

スタートダッシュがつかず、出鼻を挫かれた。

しかし、佐知子は恐ろしく冷静だった。距離ロスの少ない経済コースに入って、レースを進めるようにシフトチェンジした。

（私は……アイズを、信じる！）

※

『――１番人気のフォーユアアイズは後方から三、四番手の位置につけています。１０００メートルを通過して、タイムは５８秒後半から５９秒といったところ。

先頭は依然として１４番ペンサールテック、二馬身から三馬身の逃げ。二番手追走が１番イチネンホッキ。ここで後ろから動いていったのは１０番のクラウスヴィグラス。押し上げていって、今、三番手に並んでいきました。ここで３コーナーのカーブです。ジワっと進出してきたのは４番ラーメス。一番人気７番のフォーユアアイズはまだ後方。２番トランジスタもまだ後ろで、人気の二頭はまだこの位置。最内を通って先頭はペンサールテック。二番手に上がってきたのは５番のアオバノウタ。ここで君野佐知子の手が動いた！

フォーユアアイズ大外に持ち出して勝負をかけます！

４コーナーカーブして直線コース！　先頭はペンサールテック二馬身リード、懸命に粘っています！　追いすがるアオバノウタ！　外からはフォーユアアイズ一気に追い上げてきた。さらにその外からトランジスタも来ている！

残り２００を切って、先頭代わってアオバノウタが前に出た！　クラウスヴィグラスも来ている！　外からフォーユアアイズだ！

フォーユアアイズ！　その外から追い上げるトランジスタ！　しかし届きそうにない！　二番手争いまで！

先頭はフォーユアアアイズ！　一着でゴールイン！

フォーユアアイズが、ダービー馬の貫禄を見せつけました！　鞍上は君野佐知子騎手、急遽の騎乗でしたが、見事に、フォーユアアイズ

の大事な大事な秋初戦を勝利で飾りました。
そして君野佐知子騎手は、これが、中央・地方合わせて初めての重賞制覇！　去年デビューした騎手の中では、福盛田光騎手に続いて２人目の重賞勝利ジョッキーとなりました。
最後の二番手争いはアオバノウタ、クラウスヴィグラス、そしてトランジスタが並んで入線。これは、非常に際どい接戦になりました――』

※

「サチ……」
テレビの前で愛馬と後輩のレースを観戦したひとみは、どこか安堵したようにつぶやいた。
スタートでの不利を食らった時は肝が冷えた。どれだけ実績があって能力の高い馬であっても、こうしたアクシデントは起こり得る。
ひとみは、最悪、無事に二人が回ってきてくれさえすればいいと祈っていた。佐知子にプレッシャーのかかる役目を負わせてしまったことに、負い目もあった。故に、その負担を少しでも和らげてやろうと、彼女は『楽しんでこい』と伝言を頼んだのだった。
そして、彼女の願いは臨んだ以上の結果となって返ってきたのだった。
そうしていると、佐知子の勝利インタビューが始まった。
――フォーユアアイズ号でセントライト記念を見事に勝利しました、君野佐知子ジョッキーです。本当におめでとうございます。まずは今の率直なお気持ちをお願いします。
『とにかくホッとしています。プレッシャーには強いほうなんですけど、今日だけはちょっと違いました』
――ダービー馬の背中の感触はいかがでしたか？
『普段も調教で乗せてもらってはいたんですけど、レースではやっぱり違いますね。ダービーを勝った馬に乗って競馬ができるというのは、とても特別な体験でした』
――今日のレース、スタートで不利を受けるという場面もあったん

ですが、今日の騎乗を振り返ってどうですか？
『今日は、運も向かなかったですし、私も、あまり上手く乗れたなという感じはしません。最後直線追い出してから、本当に馬が頑張ってくれたという感じです』
――君野ジョッキーは、今回が嬉しい重賞初勝利となりました。今のお気持ちをお聞かせください。
『嬉しいです。あ、でも……あまり実感は無いですね（笑）　今日も、自分の力で勝ったというより、勝たせてもらったという感じだったので……。でも、期待に応えることができてよかったです』
――それでは最後に一言、ファンの皆さまにメッセージを。
『今日はフォーユアアイズという本当に凄い馬で重賞を勝つことができて、最高に幸せです。えーと、今日は私の未熟な騎乗のせいで苦労をかけてしまった部分もあったんですけど、菊花賞ではひとみさんが帰って来るので、大丈夫だと思います。今日乗ってみて思ったんですけど、やっぱりアイズにはひとみさんが乗るのが一番だと思いました。なので、フォーユアアイズとひとみさんのコンビを、これからも応援よろしくお願いします！　あ、あと私も頑張ります！』
――ありがとうございました。君野佐知子ジョッキーでした。

画面の向こう、水色と白の勝負服を着た後輩は弾けそうな笑顔だった。
――本当に、大したやつだ。
彼女に向け、ひとみはつぶやいた。
「サチ……ありがとう」
いつの間にか、ほろりと涙がこぼれていた。

※

およそひと月後、京都競馬場。
ひとみとフォーユアアイズは、菊花賞の舞台にいた。
単勝オッズは一番人気。絶対的な『一強』として、人々の注目を一

身に浴びていた。
パドックで「止まれ」の合図が出て、ひとみはフォーユアアイズの元へ向かった。ひとみが駆け寄る途中、振り向いた彼と目が合った。ひとみは一瞬だけ頬を緩ませた。
「待たせてごめん。よろしくな」
首を軽く撫でて跨ると、一気に身体と気持ちが引き締まる。お互いの息遣いがハッキリと聞こえてくる。
「さあ、行こうぜ。アタシたちの走りを見せてやろうじゃねえか」
ひとみがつぶやくと、フォーユアアイズは応じるように小さくいなないた。
――その日、フォーユアアイズは菊花賞を制し、クラシック二冠を達成した。

シカノコサージュ（花道と花束）

エグゼクティブＫＥＩＢＡニュース

【女性騎手】君野佐知子騎手、ＧＩ初騎乗＆二週連続騎乗へ

君野佐知子騎手のＧＩ初騎乗が決まった。

初ＧＩレースは京都競馬場で開催されるエリザベス女王杯。コンビを組むのはシカノコサージュ（牝８）となった。

オークス三着、秋華賞二着の実績を持つ牝馬の花道を飾ることができるだろうか。

また、関屋記念で二着に入ったイチダイジ（牡５）でマイルチャンピオンシップに挑む予定でもあり、二週連続でのＧＩ騎乗となる見通し。

関連記事

・〝迷〟コンビ誕生!?　天皇賞・秋二着ジーニアス＆木津コンビ継続で有馬記念

・ユメミヅキ　チャンピオンズＣ出走で中央ＧＩ制覇へ

・〈騎手見聞録〉外国人女性ジョッキーが来る！

※

シカノコサージュ。

佐知子にとって初めてのＧＩ騎乗馬だ。

母は阪神ＪＦを制したコサージュマリア。クラシックでの活躍を嘱望されたが三歳で故障し、そのまま繁殖へ上がった。

三歳になってからデビューしたシカノコサージュは、フローラＳを制して、母が立てなかったクラシックの舞台に立った。

オークスは三着。以後、彼女はＧＩレースへの出走を重ねた。

秋華賞二着、ヴィクトリアマイル四着。彼女は牝馬限定戦で、好走を続けた。

豊富なスタミナを生かしたロングスパートが持ち味の、美しき青鹿毛の持ち主。

しかし、ＧＩ馬の称号を得ることはできないまま、歳月が過ぎた。

時間は残酷なまでに現実を突きつける。
最後の勝利は二年以上前のこと。ここ一年は二桁着順が続いていた。
佐知子が初めて騎乗した前走・府中牝馬ステークスも最下位。
シカノコサージュは、これがラストランとなる。
※
「コサージュ……次が最後だよ。も少しだけ、がんばろうな」
馬房には老いた男がいた。
くたびれた格好で、ボロボロになったキャップからはみ出ている髪は真っ白である。顔に刻み込まれた皺の数、欠けた前歯、第一関節から先が曲がらない右手の薬指、首筋に垣間見える手術痕。それら全てが、これまで厩務員として彼が歩んできた道程の長さと険しさを物語っている。
鼻頭を撫でてやると、シカノコサージュは目を閉じて心地良さそうな顔になった。
すると、小さな声がした。
「ヨシさん」
男が振り返ると、そこにはライトブルーのジャージを着た佐知子が立っていた。
「サッちゃんか」
「はい、コサージュに挨拶しておこうと思って」
「そうか。ほら、コサージュ、サッちゃんが来たよ」
目を開けたシカノコサージュはぼんやりと佐知子に視線を向けた。佐知子がはにかむ。しかし、彼女は興味を示していないようで、頭を老いた厩務員の胸元へ近寄せた。
「まったくおまえは」
「あちゃ。私、もしかして水差しちゃいましたか」
佐知子は困ったように笑った。
ヨシさんと呼ばれた男は、長く美浦で厩務員をしてきた男だった。
彼はシカノコサージュの母の担当厩務員でもあった。彼は、母娘二代に渡って世話を焼いてきたのだ。母は気性が荒く、蹴られたり踏ま

れたり、そうしたことが何度かあった。とにかく、気の強い女性だった。一方で娘は母に似ず、おっとりとした性格だった。調教を終えたら――たとえそれがどれだけハードでも――飼葉を食べてのんびりと昼寝をするくらいの神経の太さがあった。

それでも、彼は娘の目の中に母の面影をよく見ることがあった。ふとした時に見せるしぐさが、似ているのだ。また、艶やかな青鹿毛はまさに親から譲り受けたそれだ。

「本当に綺麗な毛並みですね」

「ああ。この子のお母さんと同じ色だよ。」

「お母さんとお揃いかぁ……なんかいいですよね」

「性格は真逆だけどね。お母さんよりこの子のほうがよっぽど素直だ」

「そうなんですか？」

「お母さんが良い反面教師になったのかもね」

「へえ～、あっ」

ふと、シカノコサージュが首を引っ込め、馬房の奥へと行ってしまった。

男はこともなげに話す。

「いつも通りさ。馬には、次が最後のレースかどうかなんて分からないからね。賞金がかかっていることも関係ないし、究極的にいえば誰のいうことも聞く必要がない」

「あ……はい……そう、かもしれないですね」

「どうかした？」

「いえ、なんでもないです！」

男は少し不思議そうな表情で佐知子を見たが、そのまま続けた。

「テキからは何か言われた？」

「”コサージュの思うように走らせてやってほしい”って言われました」

「そっか。そうだよね。これで、最後になるんだからね……」

「はい。前走と同じ、中団後方待機になるかなー、と。私も、できるならあまり無理させたくないです」

馬房の奥で光る眼に視線を向けて、彼はつぶやいた。
「無事で、帰ってきてくれたらそれでいいんだ」
「それだけで、いいんだ」

※

最後のパドックだ。
今まで何度も周回してきた道は、今日も何も変わらない。変わり映えなどしない、当たり前の光景が、今日で終わりになるのだ。
男は、なるべく平静を保って歩こうと決めていた。
空は、彼女の最後の舞台を祝福するかのような晴れ空だった。
シカノコサージュの名前が書かれた応援幕が目に入った。
蹄鉄の音と共に、これまで彼女と過ごしてきた日々が蘇ってきた。

『末脚一閃！　フローラS！　オークス行きの切符を掴んだのは！　シカノコサージュです！　母が立てなかったクラシックへの挑戦権を手に入れました！』
――最後の望みのつもりで出走したトライアルレースで豪快な差し切り勝ち。時計も良かったから、オークスのダークホースとして名前が挙がったんだよなあ。
『シカノコサージュ最後方から一気に追い上げ！　届くかどうか！』
――オークスでは緩みないラップでなし崩しに脚を使わされた。最速の上がりを見せたが、健闘及ばずの三着。それでも手応えはあった。
『3コーナーから一気にシカノコサージュが上がっていった！　先頭集団に追いつこうかという位置まで来ています！』
――秋華賞はスタミナを生かして捲り気味にいった。普通の牝馬ならとっくに脚が上がっているだろうが、彼女なら大丈夫だと信じた。実際、直線に入っても脚色は衰えなかった。
『シカノコサージュ届くか!?　届くか!?　届いたか～～～～!?』
――ハナ差の二着だった。ジョッキーはこの上ない騎乗をした。仕上げも完璧といえるデキだった。だが、わずかに届かなかった。

――どうしてこんなに頑張っている子が勝てないんだ……！　私は天を恨めしく思ったさ。

『ヴィクトリアマイル四着のシカノコサージュでしたが、ここは相手が少し悪かったですね』

――宝塚記念では牡馬との力の差をまざまざと見せつけられた。

『雨中の死闘！　激闘と呼ぶにふさわしい戦い！　シカノコサージュ、一番人気に推されましたが、惜しくも敗れました！』

――トライアルを勝って臨んだエリザベス女王杯で、一番人気になったこともあったなあ。０．１差の五位という大接戦は、雨に泣かされた。もっとてるてる坊主を作っておくべきだったか。

『八歳牝馬、まだまだ元気。１０番シカノコサージュです』

――気づけば同じ年にデビューした馬は周りにほとんどいなくなっていた。あの子は淋しがっていないだろうか。そんな余計なお節介は、胸の中だけに留めた。

ふと、真横の顔と目が合った。

――あっ……ダメだ。

彼は、鼻の奥にかすかな痛みを感じた。鼻をすすって、必死に込み上げてくるものをこらえる。

勝たせてあげたい。

無事で帰ってきてほしい。

この二つの想いが渦を巻いている。

彼は、一度だけ袖で目元を拭った。

「まだ泣くわけにはいかないね」

長く連れ添った彼女に語りかけ、男はまた鼻をすすってはにかんだ。上手く笑顔を作れた自信はなかったが、みっともない姿を見せるわけにはいかなかった。

――今日は、この子の最後の舞台なのだから。

※

（えっ？）
ゲート直後、佐知子は違和感を覚えた。
シカノコサージュは年齢もあってズブい馬だ。押しても押しても反応が悪い。エンジンのかかりも遅い。
しかし、この日は前進的な姿勢があった。前走とは全く違う感覚だった。
位置取りは後方二番手だが、この日の彼女の雰囲気はただならぬものがあった。
『さあ、各馬坂の上りに差しかかるところです。ここで後方からシカノコサージュが動いていきました、最後方はリフレッシュタイムに代わりました。シカノコサージュが、一気に上がっていこうかという構え、三番手集団の一角をとらえて、そのまま先頭に並びかけようかという勢いです！　場内からはドッと歓声が上がります』
鞭を入れたわけでもなければ、促したわけでもない。シカノコサージュが自発的に、進出をしたのだった。それは、かつて秋華賞の時に見せた――魅せたやり方と同じ。
（コサージュ！）
佐知子は、無事に彼女の最終レースを終わらせることこそが使命と思っていた。ＧＩ初騎乗初制覇などという色気は出さず、シカノコサージュの引退劇を無事に終えることが正しいことであると。
しかし、彼女は、シカノコサージュは違っていた！
長年連れ添った父であり、兄であり、師といえる男が流した涙に、何も思わないはずがなかった！
競走馬としては年老いた身ではあるが、その闘志は、出走馬の中で誰よりも静かに滾っていた。それを、ここで、最盛期さながらのまくりで爆発させようというのだ！
『４コーナーから直線コースへ！　先頭に並んだシカノコサージュ、内からはロングポート。ウィスタリアも外から前をとらえようというところ。ハナビヨリが一歩抜け出したか。ハナビヨリ先頭。ハナビヨリ。ブリリアントベリーも来ている。ハナビヨリだ。ハナビヨリが先頭だ、ゴールイン！』

しかし、シカノコサージュの躍進も4コーナーまでであった。直線入ってすぐに失速。そのままズルズルと後退してしまった。
終わってみれば十着。最後の最後も二桁着順であった。

※

「コサージュ……コサージュ！」
シカノコサージュが無事に帰ってくると、男は大きな声を上げて出迎えた。最後の任を終えた彼女の瞳に、光るものが見えたのは、恐らく目の錯覚ではないはずだ。
勝てはしなかった。しかし、最後の最後に、彼女らしい走りを見せてくれた。それだけで、彼の胸は否応なく熱くなっていた。
調教師が佐知子に尋ねた。
「あのまくりは、サッちゃんの判断かい？」
「いえ、コサージュが自分から行きました。止めようと思えば止めれたと思うんですけど、彼女の走りたいように走らせようと思ったので、そのままいきました」
「そうだったのか……それは驚きだな、まるで昔のコサージュを見てるようだった」
目を丸くする調教師の傍ら、長く連れ添った牝馬の労をねぎらう老兵を見ながら、佐知子は思った。
（競馬って、やっぱり凄いな……）
引退レースだったシカノコサージュに向け、温かい拍手が送られた。それは、佐知子がこれまで体験したことないものだった。
――私もちゃんと引退できてたら、あんな風になってたのかな？
こうして、シカノコサージュは無事に引退を迎えた。

ロールロマンス（メリル・ミモザの冒険）

◆ＴＨＥターフ情報

マイルＣＳ現時点の想定馬と想定騎手は以下のとおり。

アンカーテック　星
イチダイジ　君野
エンターミッション　久保
クリアウォッチ　松崎
ケイシートールキン　永吉
ケモノミチ　柊
サイバーロードラン　福盛田
シクロクロス　シンガー
ズマーニャ　別所
チュウザイビート　八坂
トビウオバタフライ　内川
ハブサウンズ　清水諭
ブレーキンラルゴ　ハリス
プロセスリード　金田一
ミカドセイバー　土井垣
モノノケクロニクル　王子
ロールロマンス　ミモザ
ワイズマン　郷田

※

「……誰だろう？」

美浦トレセン。

いつものように調教を終えて末永厩舎に戻ってきた佐知子は、厩舎の前でおろおろしている人影を見つけた。

白いジャンバーを羽織った、金髪碧眼の女性だった。これまで見たことのない人だ。

（チョーさんの知り合いかな……？）

佐知子は考えを巡らす。

見たところ外国人だ。
お世辞にも佐知子は英語が得意ではない。元々頭の良い雪絵、海外での騎乗のために勉強しているひとみと比べれば、英語力は遥かに劣る。
だが、恐らく末永厩舎に用のある人物のはずだ。客人を外で待たせるというのは良くない、と佐知子は思った。
ふと、先輩である優花里の言葉を思い出す。
『外人さんと話す時に大事なんは、ノリとハートや。使てるコトバが違うだけで、同じ人間なんやしなんとかなるやろ』
佐知子は意を決して、
「は、ハワユゥー？」
「ヒェエエエエ!!」
中学生レベルの英語で話しかけてみた。
すると金髪の彼女はビクッと身体を震わせて悲鳴を上げた。そして、
「ゴメンサナイ！　ゴメンナサイ！」
とすごい勢いで頭を下げてきた。
佐知子は面食らった。
「ど、ドンビーアフレイド……」
かろうじて佐知子はそう絞り出したのだった。
長介がやって来るまで、佐知子はボディランゲージと簡単な英語を駆使して彼女をなだめた。

※

「ワタシ、メリル・ミモザといいマス……ｔｗｏ　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ、２年前にも美浦に来ましタ」
「ということで、ウチでしばらく面倒を見ることになるミモザだ。イギリスでは相当やり手の女性ジョッキーで、ＧＩも勝ってる。今年は本家ダービーにも乗ったそうだ」
黒いキャップにサングラス姿の長介が客人の人となりを紹介した。
長介がミモザに質問する。
「今日はｉｎｔｅｒｐｒｅｔｅｒ――通訳は来ていないのか？」

「ハイ……チョット、スケジュール良くなくて、来れないみたいデス」
「そうか」
「……ゴメンナサイ」
「いや、ミモザが謝ることじゃない。こういうことはたまにある」
「ハイ……」
　短期免許で日本に来ることができるのは、各国で優秀な成績を残したジョッキーに限られる。彼女もまた、世界の女性ジョッキーの中でもかなり上位に位置する存在だ。
　ミモザは手を組んだり、目線をあちこちに向けたりと、落ち着かない様子だった。
　どうしたんだろう、佐知子が尋ねると
「あの、ミモザさん」
「ヒエ！　な、なんでショウ？」
「えっと、その……」
「……」ブルブル
　急激に涙目になってしまった。
　長介が苦笑しながら、佐知子に説明する。
「彼女は人見知りなんだよ。二年前に来た時も大変だったな。別にお前を怖がってるわけじゃなくて、まあ、ちょっと緊張してるだけだ」
「そ、そうなんだ……」
「ああ。二年前は、初めての日本での騎乗ってこともあって、だいぶナーバスになっててな。思うような結果が残せなかったんだ」
　繊細の心の持ち主なのだろう。
　もし自分が同じように異国の地にほぼ単身で乗りに行くということがあったら相当な不安やストレスを感じるだろうな、と佐知子は思った。
　佐知子の目を見て、長介がいった。
「前回は二週間程度だったが、今回は年末までウチにいることになった。そこで佐知子、お前に彼女のチューターを頼みたい」
「チューター？」
「日常生活の手助けをしてやったり、日本語を教えてやったり、お世話

係みたいなもんだ。――ということで、ミモザ。この佐知子が今日からお前の世話係だ。そうだな、お姉さんだと思ってガンガン頼ってくれていい。佐知子、お前も自己紹介だ」
お姉さん、という言葉に、佐知子の中で母性に似た――姉性なるものがいかんなく呼び起された。持ち前の明るさをもって、佐知子は新たな友人に自己紹介をした。
「はいっ！　マイネームイズ、キミノサチコ！　プリーズコールミー”サチコ”！　アイライクアップポー！　ナイスチューミーチュー！
ということでミモザさん、よろしくお願いします！」
「よろしく、お願いシマス……」
佐知子が笑顔で右手を差し出す。ミモザは恐る恐るシェイクハンドに応じた。

※

佐知子とミモザはトレセンからほど近い喫茶店にやって来ていた。
「ワァ……！」
「ミモザさんはイギリスの方なので、紅茶でブレークタイムしたほうがいいかなと思って」
「Ｔｈａｎｋｓ……ありがとうございマス……サチコ」
「喜んでもらえたら何よりです。って熱っ！」
「だ、ダイジョブですカ!?」
「えへへ、大丈夫です。ノープロブレムノープロブレム」
「ほ、ホントに？」
「イエースイエース！」
佐知子は無邪気に微笑む。
お茶菓子をつまみながら、佐知子はミモザと色々な会話をした。
天真爛漫な佐知子と接していくうちに、徐々にミモザの緊張は解れていった。
「ファザー、お父さんもジョッキーだったんですね？」
「Ｓｕｒｅ――そうデス。１０００ギニー、２０００ギニー、ゴールド

C、色んなＧＩ勝ちまシタ。凱旋門賞にも、出たコトありマス」
「すごい方なんですね」
「ハイ、ワタシの憧れ。いつかダービージョッキーになって、ｄａｄと喜びたいデス」
「二年前に来た時はどうでしたか？」
「二年前……ウッ、頭ガ……」
「あ！　ごめんなさい！　ソーリーソーリー！　なにか嫌な思い出でもありましたか!?」
「Ｎｏ……チョット、ワタシが上手くフィットできなくて……」

～ミモザの回想～
ミモザ（ハァ……さっきのレースは不利もあったけど、あんまり良くなかったなぁ）
優花里「ヘーイ、ミモザ！　ドンマイドンマイ！　そんな暗い顔したらアカンで！」
美由「そおそお。次で取り返そうねぇ～。テイクイットイージーだよ～」
ミモザ「シショウ、ミユ……ありがとうございマス」
（そうだ、次で挽回しよう……ん、アレは――）
ひとみ『テメエ、なんださっきの騎乗はァ!?』
後輩『すいませんしたっ！』
ひとみ『誰も怪我しなかったからよかったけどよォ……初めて日本で乗るヤツもいるんだから、次から気をつけて乗れ』
後輩『わかりましたっ！』
ミモザ（ジャ、ジャパニーズケジメ!?　ってことは……ワタシも、もしかして”ＯＨＡＮＡＳＨＩ”――）
雪絵「Ｅｘｃｕｓｅ（すみません）ｍｅ…」
ミモザ「ヒッ？」
雪絵「Ｍａｙ（お話し）Ｉ（してもいい）ｔａｌｋ（です）ｔｏ（か）ｙｏｕ？」（精一杯の笑顔）
ミモザ「ヒェエエエ！　ゴメンナサイゴメンナサイ！」ピュー!!
雪絵「あっ……」

雪絵（行ってしまいました……海外の女性騎手の方とご一緒する機会は少ないので、お話できればと思ったのですが）ガックリ

～回想終わり～

「ニホンのジョッキーいい人たくさんデス。けど、ヒトミと、ユキエ……チョット怖かったデス……」

「あ～、なるほど～」

なんとなく場面が想像できた佐知子は、腕組みをしてうんうんとうなずいた。

佐知子が来て、ひとみはだいぶ丸くなっている。雪絵も、徐々にではあるが交友関係が広がってきている。今ならば、同じような事態は起きないだろう。

「でも、本当は二人とも優しいんですよ。確かに、その、最初はちょっと難しいかもしれないですけど、絶対仲良くなれます！」

「うぅ……できるカナ……？」

「私も協力します！　ネバーギブアップです！」

「サチコ……！」

※

それからも、佐知子はミモザと積極的にコミュニケーションを取った。

長介をして”人たらし”と言わしめた佐知子が、彼女と仲を深めるのにそう時間はかからなかった。

「ミモザさん、リンゴでデザートを作ってみました。どうぞ召し上がってください」

「い、いただきマス……」パクリ

「……」ワクワク

「ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ……おいしい！」

「わぁー！　よかったー！」

通りすがりの騎手Ｙ（ゆかり）「ウマーーーーイ!!」

通りすがりの騎手Ｋ（かれん）「やっぱ佐知子くんの・・・リンゴスイーツを・・・最高やな！」

「これが、ジャパニーズセントウ……気持ちいいナァ」
「タオルは湯船につけないのがマナーなんですよ」
「な、なるほど……」
通りすがりの騎手M(みゅ)「異文化交流〜。後でコーヒー牛乳飲もうねぇ〜」
「いってラッシャイ。いってきマス。おかえりナサイ。おつかれさまデス。オフロにする？　ゴハンにする？」
「そうです。グーですよメリルさん！」
「そうデスか？」
「うん！　上手になってます！」
「サチコのおかげデス。頼りにしてマス！」
「えへへー」
追い切りにきた王子進之助「仲良くやってるみたいだね」
長介「ああ。ミモザも、二年前に比べたらかなりリラックスしてるよ」
「そりゃ何より。あ、そういえばチョーさんごめんね、天皇賞クロニクル乗れなくて」
「気にするな。クラシックからのお手馬なら仕方ない。同じ状況だったら、俺でもそうしたさ」
「ありがとう。それじゃ、マイルＣＳは末永厩舎の馬でワンツー獲っちゃいますか」ニッコリ
「頼りにしてるよ」

※

そして、ミモザにとって二年ぶりとなる日本での競馬開催日のために、彼女たちは京都競馬場へ向かった。
「それじゃあ、ひとみさんと雪絵さんのところへ挨拶しにいきましょうか」
「う、ウン……がんばってみる」
「おっ、サチ……と、ミモザだったか？」

「ピッ！」
いきなり現れたひとみを前に、ミモザは身を竦めた。なんとか口を開こうとするが、蛇に睨まれた蛙のごとく何も話せなくなってしまう。
口をパクパクとさせるミモザを見て、ひとみは軽く笑う。
「サチに面倒見てもらってるんだってな？」
「……ひゃい」
「仲良くやってっか？」
「……良くしてもらってマス」
「そりゃあよかった。……ごめんな」
「えっ？」
急に頭を下げられたミモザは驚きの声を出した。
「別に怖がらせるつもりとかは無えんだけどよォ、ちょっと熱くなっちまうことがあってな。だから、その、悪かった」
「い、いえ、そんなコトは」
「まあ、困ったコトがあったらアタシも力になってやっからさ。サチみたく気軽に、ってのはさすがに難しいかもしれねえけど、頼ってくれたら、嬉しいな」
「ヒトミ……」
「美浦にいるんだろ？　よかったらメシおごらせてくれよ」
「……アノ……ソノ」
「どうした？」
「ご、ごっつぁんデス！」
「……はははは っ！　なんだそりゃ!?　サチから教わったのか？」
「えっ！　なにかおかしいデス？」
顔を赤くするミモザと、いたずらっ子のように舌を出す佐知子と、大笑いするひとみ。
彼女たちの和気藹々とした雰囲気を、陰からそっと見守る人物がいた。
（盛り上がってますね……私が行ってもいいのでしょうか……かえって迷惑になりそうな気が――）

「あ、雪絵さーん！」
佐知子に発見され、雪絵は緊張しながらミモザの前に立った。顔が強張っていやしないだろうか、と雪絵は不安になった。
雪絵を前にして、口をもごもごさせていたミモザだったが、とうとう意を決して口を開いた。
「サチコからイッパイ話聞きマシタ……雪絵は、ちょっと怖く見えるヒトですネ」
「そ、そうですか……」
怖いという文言を受けて、雪絵は肩を落とす。しかし、慌ててミモザが続ける。
「ああっ！　でもでも、ホントは優しいし、頭も良いし、カッコいいデス！」
「ミモザさん……」
「あと、ワタシと似てるトコロもあるって。ワタシも、あまりインタビュー得意じゃナイ。あと、ワタシも読書好きデス。だから、話してみたいデス！」
「えっと……その……」
「Birds of a feather flock together.」
「”類は友を呼ぶ”……ですか」
「だから、その、ゴメーワクじゃなければ……」
「……Your Japanese is so good.
In fact, I am also thinking the same
”I want to talk to you”」
「ユキエ……！」
雪絵が穏やかな笑みを浮かべて言うと、ミモザもパァっと明るい表情になってそれに応えた。
「ひとみさん、二人が何喋ってるかわかります？」
「まあ大体な。似た者同士っつーところだ」
「はぇ～」（……もうちょっと英語勉強しよう）
そんなこんなで、仲良くなりました。

小ネタ　女性ジョッキーが倒せない

『京都競馬場は7レースまで終了しています。それでは残りの予想に役立つ情報として、本日のジョッキーの成績から狙い目を探ってみましょう。

今日は、八坂優花里騎手がここまで3勝してます。先週のマイルチャンピオンシップの勢いそのままに今週も絶好調です。

そして郷田騎手が2勝、こちらも今年素晴らしい成績を残しています。

さらに短期免許で来日中のミモザ騎手とエーベルバッハ騎手もそれぞれ1勝しています。

ということで、今日は7レースまで来ましたが、全レース女性ジョッキーが勝っていますね。どうですか神谷さん?』

『10年前ならちょっと信じられないような話ですけど、今は全然不思議じゃないですね。今年は郷田騎手がダービージョッキーになりましたし、世界的に見ても、凱旋門賞で有力馬に騎乗する女性騎手も出てきましたから。時代の変化でしょう』

『はい。本日京都には先程名前の挙がった騎手の他に小中騎手と木津騎手もいる模様です』

女性騎手がレースを席巻。

この事態にジョッキールームの男性騎手の幾人かは危機感を覚えていた。

「ここは男の意地を見せたらなアカンな」

「そうやな」

女性騎手には通常の見習騎手の減量特典とは別に、減量特典がある。一般競走に限り、永久的に2キロ減の恩恵が与えられるのだ。

この恩恵に加え、本年の郷田ひとみの活躍により、女性騎手への騎乗依頼が増えたのはいうまでもない。見た目の華やかさもある彼女

たちのファンであると公言している馬主もいるようだ。
自らの意地とプライドにかけて彼らは、戦いへ臨んだ。

8R

『郷田ひとみ、これで今日3勝目を上げました。京都競馬場はここまで女性ジョッキーが8連勝中です』
「ダメやったな……」
「ああ。郷田は……アレはどうにもならん。今年はちょっと手がつけられへんね」
「いやいや、次は止まるでしょ。郷田は次は出ぇへんのやろ？」
「ミモザが出るわ」
「アカンなぁ」
引き揚げてきた男性騎手たちが肩を落とす。そんな彼らの前に二人の外国人ジョッキーが現れた。
「ココハ、任セテクダサイ」
「ワタシタチガ、止メマス」
「おおっ！　ハリスにシンガー！　そうや外国人ジョッキーの先輩としての格の違い見せつけたれ！」
そういって、日本で通年免許を取得した外国人ジョッキー達は意気揚々とレースへ向かっていった。

9R

『メリル・ミモザです！　イギリスからやって来た女性ジョッキーが本日2勝目！』
「勝テナカッタヨ」
「ゴメンナサイ」
「リーディング上位の2人をもってしても止められへんとは……」
「これはもうアカンかもしれんね」
敗戦ムードが漂ってきた中、遂にあの男が立ち上がった。
「俺が行こう」
「王子さん！　やっぱり王子さんや！　お願いします！」

通算３０００勝を誇る生けるレジェンド。今年は成績こそひとみの後塵を拝している状況ではあるが、勝利数は全国２位。
王子進之助はヘルメットとステッキを手に颯爽と決戦の舞台へと向かった。

１０Ｒ

『まんまと逃げ切り勝ち！　小中美由がしたたかに、したたかに、レースを進めました！　これで女性ジョッキーが１０連勝となりました！』
「ダメだったね」
「もうだめだぁ……おしまいだぁ……！」
「いやー、みんな強いわ。敵わない」
あっけらかんと笑う王子。最後の希望は、潰えた。

１１Ｒ

『直線の攻防、ゴール前！　接戦だ！　ビデオバグルス先頭！　サオリヘンドリクスとらえる！　ハイウエイ来た！　ハイウエイ来た！　サオリヘンドリクス粘る！　サオリヘンドリクス！　サオリヘンドリクスか！　今、ゴールイン！
大激戦のゴール板前、真っ先に飛び込んできたのはサオリヘンドリクス！　京都２歳ステークスを制しました！　鞍上は、ハンナ・フランツィスカ・エーデルバッハ騎手！　日本に来て初めての重賞制覇です！
２着はわずかに遅れてハイウエイと八坂優花里。その後ビデオバグルスと小中美由が３着に来ています。
このレース、なんと３着まで全て女性ジョッキーというレースになりました』

メインレースを終えて、王子など一部を除いて肩を落とす男性ジョッキー達。
対照的に、女性ジョッキーたちの一団は笑顔だった。

「わははは！　１１連勝やで１１連勝！　これは大したことやで！」
「Ｄａｎｋｅ（ありがとう）．　これでまた勲章が増えるな」
「アンタもようやるわぁ！」
「シショウもスゴかったデス！」
「いや～それほどでも！　褒められるんは気分ええな～」
「わたしも褒めて褒めて～」
「ミユもヒトミも、みんなすごいデス！」
「うむ。これはフランスでもなかなかお目にかかれるものではないな。日本の女のジョッキーはハイレベルと聞いていたが、ここまでとはな。面白い……面白くなってきたじゃないか！　ハハハハハ！」
「このまま最終レースも勝って、女性騎手旋風起こしたろうやないか！」
「あれ……？　ヒトミとカレンは……？」
　一方、ひとみは美浦の後輩にあたる光と、東京で騎乗している佐知子のことについて話していた。
「福、キャピタルＳどうなった？」
「芦名さんらしいです。人気上位で決まったみたいで」
「そうかぁ……まあ力差かな。仕方ねえわな」
「ですね」
　ひとみは、なんだかんだいって可愛い後輩のレースが気になるのだった。
　ちなみにこの日はメインが最後の騎乗だった。
「サチのレースがじっくり見れるぜ。えーと、東京１２Ｒは……お、暉峻先生のところの馬か。イケるんじゃねえかなぁ」
「じゃ、じゃあおれ最終行ってきます」
「おう、頑張れよー」

　その日、女性ジョッキーは１２レースで１１勝を上げたのだった。
　最終レースは光が勝利し、女性ジョッキーの完全制覇とはならなかった。
　ちなみに佐知子は東京１２レースで勝利を収めた。『光、空気読も

う！　なーんて冗談だってば。カッコよかったよ！』

この日未勝利に終わった木津は小中とミモザに慰めてもらったという。『ぼくはまだ本気出してないだけ』（顔真っ赤）

醒睡章

（いや、さすがにこれは派手すぎるかな）

福盛田光が、店内に丁寧に陳列されたアクセサリーとにらめっこを続けて約一時間が経過しようとしていた。

彼が行なっているのは、同期であり友人でもある佐知子への誕生日プレゼントの選定だ。

１２月生まれの光と、1月生まれの佐知子。誕生日の近い２人が互いにプレゼントを贈り合うようになったのは競馬学校時代まで遡る。佐知子の提案をきっかけに、ここまで毎年欠かすことなくプレゼント交換が続いている。品物は、馬具だったり洋服だったり時計だったり、年によって異なっていた。なお、交換は概ね佐知子が誕生日を迎えた後に行なわれている。

普段入店することのないような店の雰囲気にふわふわとした感覚になりながら、光は佐知子との会話を思い出していた。

『今年も気付いたらこの時期になっておりましたなあ光サン』

『そうだな』

自身初となる重賞制覇を果たした2人。さらに秋競馬では天皇賞、エリザベス女王杯、マイルチャンピオンシップ、阪神ジュベナイルフィリーズなどのＧＩへの騎乗もあった。騎乗数・勝ち星を着実に伸ばし、若手騎手の中でも大躍進といえる活躍を見せていた。

『今回はちょっと奮発しちゃおうかな』

『マジか。じゃあ、おれもちょっと考えないといけないな』

『あ、奮発っていっても、なんかこう、高価な箱に入ってる感じのものじゃないやつにしようかなーって思ってるんだ。シンプルな感じ』

『シンプル、かぁ』

『うん。後は使い勝手がいいやつ！』

『……中途半端なものは贈れないな』

光はこれまでの佐知子からもらったものを頭に浮かべる。

馬具のほか寝具、家電、洋服。なるほど生活に密着しているものが

並んでいる。現在も使っているものばかりだ。
『あのさ、前にも聞いたかもしれないんだけど、聞いてもいい？』
『いいよ』
『な、何もらったら嬉しい？』
『えへへ。それは光が自分で考えなよ～！』
『ですよねー』
『ふふ。でもね、これまで光からもらったプレゼントは、どれも嬉しかったよ。あ、だからといってなんでもいいってワケじゃないからね。女の子ってこういうところを気にするから、女の子に何かを贈る時って結構気を遣ったほうがいいんだよ。あ、ここテストに出るからね～！』
『はいはい。分かりましたよ』
（確かに実入りはかなり良くなったし、相応のものを考えないとな……）
『それじゃ、ちょっと期待しちゃうよ？』
相手のプレゼントの『格』に見合うものを用意しなければいけない。光は悩んだ。
すると、ある先輩騎手が「サッちゃんだって女性なんだからキラキラものの一つや二つ欲しがるモンだろうよ」と笑って言った。その時は光自身も笑って聞いていたが、徐々にそういうのもアリかもしれないと光は思うようになった。確かに佐知子がそういった類のアクセサリーを身に着けているのを見たことはないが、先輩の郷田と極稀にそういった類の話をしているような話を聞いたことがある。（郷田は取材の撮影などでそういった衣装を着ることがあるらしい。）
あいつの驚く顔がちょっと見てみたい、そんな気持ちもあり、光は美浦から都心までやって来て慣れないアクセサリー選びに四苦八苦していた。
「どなたかへのプレゼントですか？」
「えっ、あっ、はい」
不意に声をかけられ、慌てて声の方を向くと1人の女性が立っていた。店員ではない。白を基調とした、品のある装いに身を包んだ妙齢

の女性だった。シルバーフレームの眼鏡をかけていた。
　常連らしい彼女からは、なんとなく親しみやすい感じがした。これも何かの縁と思って、光は口を開いた。
「そのぉ、職場の同僚で、友人に贈るんですけど、あまりこういうのを選んだことがなくて……」
「そうなんですか」
「はい」
「……素敵ですね」
「はい？」
　光が素っ頓狂な声を上げると、女性はにこりと微笑んだ。そして、そっと左手を見せた。
「この指輪、主人がここのお店で選んでくれたものなんです。あの人、不器用な人で、どの指輪を贈ろうか悩んで悩んで、プロポーズが半年以上も遅れてしまったみたいなんですよ」
「は、半年もですか!?」
「ふふふ、信じられます？」
「い、いやぁ……それはなんというか……」
「でも」
　女性は柔和な笑みを浮かべて、楽しい思い出を振り返るように語った。
「すごくあの人らしいと思って、なんだかおかしくなって、笑ってしまいました。そして私は、あの人のああいう真っ直ぐなところに惹かれたんだって、改めて思ったんです」
「……」
「ごめんなさい、昔話をしてしまって」
「いえ、そんなことは――」
　言いかけて、店のドアが開く音がした。スーツに中折れ帽子を被った男性が入って来るのを見て、女性は手を小さく上げた。
「すみません。主人が来たので、私はこれで」
　そして、光に軽く会釈をして「彼女さん、きっと喜んでくれると思いますよ」と去り際にささやいた。

一組の夫婦を見送った光は、再びアクセサリーの列に目をやった。すると今度は、ほとんど無心であるにも関わらずまるで吸い寄せられるかのように、あるネックレスに手が伸びた。リングネックレス。シンプルなデザインは普遍性があり、フォーマル／カジュアルどのような場でつけても違和感のないものだった。

（これだ）

光には、佐知子がこのネックレスをつけている姿を容易に想像できた。そしてその柔らかな微笑みが、自分に向けられているのならどれだけ幸せだろうか、と甘く夢想して、ため息をついた。

（彼女さん、か……）

醒睡章

年が明けて佐知子はデビュー3年目のシーズンを迎えた。

昨年は、初めて重賞を制覇し、ＧＩへの初騎乗も果たした。乗鞍も増え、勝利数も昨年の成績を上回る結果となった。女性初のリーディングジョッキーに輝いた郷田ひとみをはじめ、昨年は女性ジョッキーが大躍進を成し遂げた。当然、佐知子もそのひとりである。騎手稼業が軌道に乗ってきたともいえる。２年目のジンクスもどこへやら、という雰囲気だった。

新年最初の開催となった中山競馬場。

１Ｒの未勝利戦を勝利し、幸先の良いスタートを切った佐知子は、新馬戦に臨んだ。

騎乗するのはホワイトページ。

能力は高いのだが、気性に難のあって、デビューが遅れていた牡馬だった。それは極度の怖がりともいうべき性格である。入厩したばかりの頃は近くに他の馬がいるだけで逃げ出してしまうほどで、長介はなんとかレースに出走できるまでに仕上げるのに四苦八苦したのだった。

こうした事情を考慮して、取るべき戦法――いや、もはや取れる戦法は逃げることくらいである。佐知子と長介の共通認識であった。

だが、勝算はもちろんある。マイペースで走らせてやればいい時計が出るのだ。素質は十分だった。どうにかこの気性を克服して競馬を覚えていってくれれば、重賞レベルで通用するだけのポテンシャルのある馬だ。

しかし、案の定パドックでは激しくイレ込んだ。他の馬の存在が要因のひとつなのだろうが、大勢の観衆の前に出るということも初めての経験であった。ホワイトページにとってはストレスであったのだろう。どうにか厩務員や佐知子がなだめかかるものの、うまく呼吸を整えることができないまま、発走の時間がやって来てしまった。良血馬で能力も高い馬なのだが、この日は１６頭立ての６番人気に留まった。気性が災いした形だ。

ゲート内で、佐知子は優しく語りかける。

「大丈夫だよ。こわくないよ」

騎手の不安や迷いは馬にも伝わる。故に、そうした素振りはなるべく見せず、逆に馬の不安や迷いを取り除いてやるように振る舞う。長介からの教えを、佐知子は忠実に守る。もっとも、前世がサラブレッドだからといって、佐知子は馬と会話ができるわけではない。馬がことばを発して何かを伝えてくれることはない。しかし、何も聞いていないわけではない。それを佐知子は知っていた。

佐知子は新馬戦に乗る時は、ひときわ丁寧な騎乗を心がけていた。それは、他のレースでは丁寧でないという意味ではない。一度も競馬を経験したことのない、まっさらな、デリケートな馬たちに対しての、心遣いだ。血統や気性だけに目を向けて、可能性を潰してしまうような騎乗は避ける。これから始まる馬たちのキャリアの第一歩目、それはなるべく次につながる形で無事に走らせてやりたい、という気持ちだ。

だがしかし、競馬など、思い通りに事が進むことの方が少ないのだ。

ホワイトページと佐知子はスタートで立ち遅れてしまった。佐知子は押して押して位置取りを上げた。外枠だったのが幸いした格好だった。

２コーナーを回ったところで、完全に単独の逃げに持ちこめた。し

かし、一瞬たりとも気は抜いていられない。向こう上面から3コーナーにかかる直前に一瞬だけ後ろを向いて他馬との位置関係を確認した。二番手の馬とは約二馬身、そのから三、四馬身離れて三番手集団以下が団子になっている。

直線までに後続に脚を使わせれば、急坂のある中山なら逃げ切れる可能性も十分ある。

3コーナーカーブに差し掛かる。このあたりで徐々に後続の蹄音が大きくなってくる。そして、二番手につけていた馬の気配をすぐ直後に感じるようになった。

（もちこたえてっ！）

軽く肩鞭を入れる。だが、既に二番手の馬が並びかけてくるのが視界の端に入った。

その瞬間、ホワイトページが急にふくれ、ヨレてしまった結果、二番手の馬にぶつかってしまった。さらに悪いことに、接触したことに驚いた馬が今度は内ラチに向かって大きく体勢を崩してしまったのだ。

佐知子はなんとか手綱を握りしめてこらえようとしたが、バランスを失い、つんのめるようにして馬上から放り出されてしまった。宙に浮きあがった彼女はラチに頭から激突し、空中で回転するようにして芝の上に落下し、地面で二度ほど転がって、動きを止めた。場内から悲鳴が上がった。

この落馬を目の当たりにして、他のジョッキーたちは佐知子に視線を送った。だが、それは一瞬だけだ。彼らは一番でゴール板を駆け抜けるために必死で追う。それが騎手としての宿命であり、矜持である。

（あぁ……やっちゃった……）

全身に走る痛みの中、かすむ視界から佐知子は空を見ていた。身体は思い通りに動かない。動かそうとしても動いてくれない。

口の中には血の味が広がる。いやな感覚だった。

遠ざかっていく蹄鉄の音とは別に、ゆっくりとした歩様の足音が聞こえる。残された力を振り絞って佐知子は寝返りするように頭の位

置を外ラチへ向けた。
鞍上を無くしたホワイトページが、やや離れたところからぐったりとした佐知子の姿を不安そうに見ていた。
（怖い思いさせちゃったなぁ……ごめんね……）
新馬は、いわば小学一年生の子供のようなものだ。三つ子の魂百まで、ではないが、初戦での経験は後のレースにも少なからず影響を及ぼす。
佐知子は、サーチライトとしての最期の時をぼんやりと思い出していた。
病に倒れ、寝藁を枕にして、旅立っていった時のことが、頭の隅に浮かんでは消えていく。考えが上手くまとまらない。駆けつけたレスキュー隊員が何か喋っているようだったが、それも遠い世界の出来事にしか思えなかった。
（たくさんあやまらなきゃ。チョーさん、ひとみさん、ゆかりさん、みゆさん、あとは、えーっと……）
（あ、チエにもおこられるんだろうなぁ……ゆるしてくれるかなぁ……）
（それ、から……）

※

（酷いことになったな）
長介は頭を抱えていた。
騎手にとって最も重要な技能のひとつともいえるのが落馬の仕方だ。騎手になるまでの課程で、受け身の取り方に関する指導も受ける。落馬しないに越したことは無いのだが、騎手という職業と落馬は切っても切り離せないのだ。自分の安全、そして馬や他の騎手への安全を確保するためにも、落馬の仕方は重要だ。
佐知子は、比較的落馬の少ない騎手だ。加えて『落ち方』も上手い騎手だ。
しかし、それでもこういう事態は起こり得る。そして実際に起こっ

てしまった。騎手としての宿命とはいえ、長く見てきた〝彼女〟の痛々しい姿を目の当たりにすれば心中穏やかではいられなかった。もっとも決してそれを表情に出すことはなかったが。

病院に担ぎ込まれた佐知子の容態について、付き添いの関係者から逐一連絡が入って来る。

不幸中の幸いで、佐知子は比較的安定した状態に入ったようだった。

だが、怪我の詳細についてはまだ情報が入ってきていない。

（ひと月、いや、ふた月か……）

佐知子は前年の活躍により騎乗依頼がさらに増えた。それが落馬負傷で乗れなくなったとあれば、方々への影響は並大抵のものではない。

明日のレースにしても、全て乗り替わりだ。代わりの騎手のメドはどうにか立ったものの、翌週の騎乗依頼も全てキャンセルせざるを得ない状況だ。

佐知子にとっていうなればお手馬と呼べる馬も、恐らく乗り替わりを余儀なくされるだろう。

怪我の程度にもよるが、安田記念を見据えて放牧中のイチダイジはもとより、阪神ＪＦで好走したマグノーリアへの騎乗も危うい。３歳クラシック戦線には、ほとんど乗れないという可能性も有り得る。

だが――

（もうこんな時間か）

いくら考えようとも、今すぐにどうにかなるわけでもない。

既に日を跨いで長針が何周かしていた。ほとんど寝ずに明日の――今日のレースに向かわなくてはならないな。そうひとりごちて、長介はスマートフォンを充電コードにつないで、着替えもせず寝床へ向かった。疲労が押し寄せてきたのか、長介はあっという間に睡魔に押し切られて浅い眠りに落ちた。

※

目が、醒めた。
いつも通りの朝だった。
良く眠れた、という感覚はしないが、途中で目が醒めてしまった、という感覚も無い。適度な睡眠を、的確に取ることができたように思う。
床についたまま肩を上下させてみて、可動域を確認してみる。
ベテランのアスリートの常套句として『年齢とともにイメージ通りの動きができなくなった』という言葉が引退に際して出ることがある。
もっともだと思う。
スタメン出場のフル出場でなければ現役を続ける意味がない、という選手もいる。
これについては、競馬とは勝手が違うので共感しにくい部分も少なからずあるが、気持ちは分かる。
だが、自身の加齢や衰えに対して『折り合いをつける』ことに関しては、セルフマネジメントできていると自負している。そりゃあ俺だって騎手の端くれだよ、と。
さすがに1日に12鞍乗ることはできなくなったが、その分1レース1レースに集中力を高めて臨めるようになったのではないか。
そんなことを、末永長介は思う。
時間の経過とともに徐々に意識は覚醒し、一人の騎手が、仕事場へと赴く準備をひとつひとつ整えていく。
そして彼はいつものように、二十余年そうしてきたように、馬に跨った。
『さあ残り２００メートルを切って、先頭はエンドエターニティ！
２番手、差は縮まらない！　縮まらない！　末永のムチが入ってもうひと伸び！　ゴールイン！』
『フェアリーステークスを制したのは末永長介！　四十路もなんのその、東の天才いまだ衰えず！　今年最初の重賞制覇は中山での鮮やかな逃げ切り勝ちです！』

――末永ジョッキー、おめでとうございます。
『ありがとうございます』
――レース前はゲートだけが不安、とおっしゃっていましたが、スタートの手応えはいかがでしたか。
『悪くなかったです』
――エンドエターニティにとっては初めて逃げる形でのレースになりましたが、道中はどのような気持ちでしたか？
『他の馬が行くと思ったんですが、誰も行かなかったので。ハナを切るのは確かに初めてでしたけど、これまでも前目でのレースをしてきましたし、自分でペースを創るだけのポテンシャルもある馬なのでそこまで不安はありませんでした』
――新年早々、昨日の王子ジョッキーの京都金杯に続いて、同期ジョッキーの重賞制覇になりました。お二方とも既にベテランの域に達しているわけですが、四十代を迎えてもなおトップで戦い続けれていられる理由はなんでしょうか。
『なんでしょうね……そういうのは彼に聞いたほうがうまい答えが出ると思うので、そっちに聞いてみてください。まあ、若い頃に比べてフィジカル面での衰えは隠せないですけど、経験値という点では今のほうがずっと引き出しあるので、そういうところなのかなと思います』
――馬にとっては初の重賞制覇ですね。
『はい。スピードのある馬なのは確かですけど、まだ子供っぽいところもあるので、そういった部分を詰めていって、大きな舞台でもっと力を発揮できるようにしてあげられたらと思います。これからも応援よろしくお願いします』
――ありがとうございました。フェアリーステークスを制したエンドエターニティの末永長介ジョッキーのインタビューでした。

騎手である長介にとって、それはあまりに自然なことだった。
ただひとつの違和感も、喪失感も、疑問も、矛盾も、何もなく、新年最初の開催が終わった。

自宅に帰ると、玄関の一番目立つところに飾ってあるフォトフレームが真っ先に目に入ってくる。
長介の騎手人生において、もっとも特別なサラブレッドの写真だ。
長介に初めてのＧＩ勝利をもたらし、クラシック三冠を獲得し、世界最高峰のレースである凱旋門賞でも2着という成績を残した。帰国後に発症した屈腱炎により現役引退を余儀なくされたものの、彼女が競馬界にもたらした影響は大きかった。
繁殖牝馬としての役目を終え、故郷の牧場へ帰った彼女はのんびりと余生を過ごしている。年に一度、長介は必ず会いに行っているが、高齢となった今でもなお馬体は引き締まり毛艶が良いので、出走させれば重賞の1つや2つ勝ってしまいそうだった。
昨年撮った四角の中には、はにかむ長介と一頭の牝馬。
その馬の名はサーチライト号。
今や王子進之助と並んで競馬界の生ける伝説と呼ばれるジョッキー・末永長介を真の『天才』にした馬だ。

夢名抄

「美味しい？」
「はい。ソースと焼き加減が良くて、そのぉ、美味しいです」
千里の問いかけに、光はドギマギしながら答えた。フォークとナイフを手から離して紙ナプキンに手を伸ばす。触れてみれば、その質感さえも高級そうに感じられた。チェーン店のファミリーレストランに置かれているそれとはまったく異なるしっとりとした感触。それがまた、光の心を脇腹をくすぐっているようだった。
向かいの席に座る彼女は、顔を綻ばせた。
「よかった」
「こういうお店、普段から食べに来たりしてるんですか？」
「ううん。仕事関係の付き合いで食事する時は、もっと広くて賑やかなお店の方が多いかしら。でも、本音を言うと、賑やかすぎる雰囲気って得意じゃないのよ」
「へぇ、そうだったんですね」
「得意そうに見えた？　まあ、私も芸能界に身を置いてるわけだから、そういう風に見られても不思議じゃないわね」
千里はそういうとロゼワインの注がれたグラスに口をつけた。少し熱っぽく朱に染まっていく彼女の頬は、どこか艶めかしい。それにしてもどの表情を切り取っても絵になるヒトだ。カメラの前に立つという職業柄なのだろうか。
大人の女性、そう呼ぶにふさわしい。光は改めて思った。
彼らが付き合ってから既に2か月が経過していた。
千里はとある芸能事務所に所属するタレントだ。いっぱしの読者モデルに過ぎなかった彼女だが、今ではテレビやドラマ、イベントの司会、ＣＭ出演などその活動は多岐にわたる。そして彼女のメインの仕事のひとつが、競馬番組『馬Ｔｉｍｅ』のアシスタントＭＣ兼リポーターだ。
光が千里と出会ったきっかけもまた、言わずもがなその番組の企画、新人騎手のインタビューの際だった。インタビューに緊張気味

だった光をリラックスさせようと千里が、あれこれと話題を振って、互いに好きなマンガや映画などの話で盛り上がった。この時に連絡先を交換したこともあり、2人はその後もプライベートの場で何度か食事をするようになった。

千里はしっかりとした女性だった。欲望と誘惑があちこちに張り巡らされ、生き馬の目を抜く世界である芸能界に身を置きながら、ハッキリとした芯の強さとそれを柔らかく包み込む優しさを持ち合わせていた。騎手としても人間としても未熟な光に対しても、真摯に接してくれた。仕事や競馬、趣味、そして恋愛の話題についても2人はよく語り合った。光が競馬で失敗をすれば、千里は彼を慰め、そして前を向かせた。

『光くんはいつか素晴らしいジョッキーになれるわ。私は信じてる。ずっと応援してるから』

その度に光は千里との価値観の近しさと心地の良さを感じ、惹かれていった。光は仕事の付き合いの延長ではなく、一組の男女としてもっと親しい関係になりたいと思うようになり、次第にその想いは強くなった。だが、自分にその資格があるのか、何度となく悩んだ。彼女にはいつも支えてもらっているが、自分は彼女を支えていけるだけの男になれるのだろうか、と。

そして、昨年の関屋記念で初めて重賞を制したことによって、彼の中には確かな自信が生まれた。この時の勝利を千里は自分のことのように、いや、自分のこと以上に喜んでくれた。その顔を見て、光は改めて決意を固めた。

サイバーロードランで挑んだ秋の天皇賞では惜しくも勝利を逃したものの、堂々たる走りを見せた。

そして、光は千里に告白した。

『本当はＧＩ勝って、カッコよく言いたかったんですけど――』

夢名抄

「光くんてさ、カワイイよね」

「え、そんなことないですよ」
「いーや、カワイイと思うわ。騎手だから小柄で線も細め。目もパッチリしてるし、メイクすれば結構化けると思うな。ちなみに女装の経験は？」
「中学の時に一度だけ。でも、似合ってなかったですって」
「へぇ、そうなんだ。見てみたかったわね。光くんの女装姿。もしよかったらメイクの仕方、ちゃんと教えてあげようか？　今後、女装する機会がないとも限らないでしょ」
「か、勘弁してくださいよぉ」
「ふふふ」
　酔いが回ったのか、千里はいつになく饒舌だった。
　もうひと口ワインを喉に流して、ミステリアスな笑みとともに千里は光に問いをかけた。
「例えばの話、もし光くんが騎手をやってなかったら今ごろ自分がどんな道に進んでいたか、想像できる？」
「おれは……どうなんでしょうか。大学とか行ってるかもしれないです。勉強自体は嫌いじゃなかったので」
「そうね。そんな気がする。サークル入って、バイトして、就活して。案外、光くんって大学に普通に居そうなカンジだもの」
「そうですか？」
「うん。で、要領はいいから単位は絶対に落とさないし、教授からも好かれるタイプ。そのまま院に上がって、助手みたく扱われちゃうかも。なーんて、大学に行ったことの無い私がこんなこと言っても説得力ないか」
　自嘲気味に語る千里だったが、光は彼女の言葉になんとなく納得していた。幼い頃に騎手という夢を抱いたものの、挫けそうになったことは一度や二度ではなかった。とりわけ競馬学校時代は何度も辞めたいと思った。寮の外の少年少女たちのように、普通の高校生として過ごしたいと思ったこともある。
　千里はさらにこう続けた。
「じゃあ、もしこの世界から競馬が無くなったら――もっといえば、も

しこの世界に競馬というものが存在していなかったら、どうだったと思う？」
「どう、って……」
「競馬がないなら騎手という職業も、調教師も、厩務員も存在しない。あるいは歴史を辿って馬に乗るという文化が地上に芽生えなかった世界線があったとしたら――、こんなふうにいうと、ＳＦ映画じみてるわね。まあ真意をいうと、最近読んだＳＦ小説で似たような題材のものがあったからつい尋ねてみたくなっちゃったのよ。そこまで深く考えなくてもいいわよ」
「あっ、はい」
　競馬の存在しない世界。
　光はちょっと考えてみたが、おいそれと想像はつかなかった。生活の基盤そのものが初めから無かったものとして世界が成立している、という状況は、確かにフィクションの世界では何度か目にしたことはあるが、やはり空想の域を出ない話だった。天変地異よりも起こる可能性が低い。
　千里はグラスを空けて、頬杖をつきながら窓ガラスから外の景色を眺めた。都市の灯りが輝きを放ち、直下に視線を落とせば歩道を行き交う人々で溢れていた。
「ねえ」と、吐息を漏らしてから、遠い思い出を懐かしむように彼女は語り出した。
「競馬じゃないんだけど……私の友達でバントをやっている子がいてね、彼女にとって音楽っていうのは生きるための糧で、音楽のためなら人生の全てを捧げてしまっても構わない。そして、その行きつく先に何もなかったとしても――人生を棒に振ってしまってもいいと言い切れるモノ。もし、それがこの世に最初から存在しなかったとしたら、ってね。似たような質問をしたことがあるの。
　そしたら、彼女なんて言ったと思う？
『アタシが〝音楽〟を発明していると思う』、そう言ったわ。その時は思わず笑っちゃったけど、言われてみたら割としっくりくる答えだった。あの子がこれまで音楽にどれだけ情熱を燃やして、打ちこんで、

苦しんで、それでももがきながら音を鳴らし続けているのを知ってたからね。
あの子、バンドがいよいよこれからっていう大事な時期に突発性難聴になっちゃってね。原因は、極度のストレスだったみたい。その時は酷い落ち込みようだったわ。それこそ、声もかけられないくらいどん底。楽器も何も触れなくなって、音楽を聴くだけで体調を崩してた。『自殺する一歩手前までいった』なんてことを、後になって教えてくれたわ。
でも、それでもね、あの子をどん底から救ったのは、やっぱり音楽だった。それくらい、あの子とは切っても切り離せないモノなの。髪を伸ばしてたと思ったらいきなり坊主にしたり、自分のだけじゃなく他の人の楽器も噛んだり、対バンで一緒になったバンドには手当たり次第ケンカ売ったり、自分のことを『ジミ・ヘンドリックスとカート・コバーンと坂本九の生まれ変わり』と言って回ってるような、変わった子なんだけどね。彼女の音楽はとっても真っ直ぐで、演奏を聴いてると不思議と涙が出てきちゃうの。音から、歌詞から、表情から、生き様が滲み出て、突き刺さって、胸を揺さぶって。
本当に”音楽”を発明してもおかしくないような子なの。仮に音楽の神様がどこかにいるとしたら、ちゃんとあの子のことを見ててくれているんだろうな、って思うと、なんだか嬉しくて――」
夜空と、街灯りと、店の照明と、夜の色と溶け合ったような千里の表情が、煙草の火に照らされていることに光はそこではじめて気がついた。
彼女が煙草を吸っているのを見るのは、初めてだった。
千里は、ばつが悪そうな表情になって、灰皿に煙草を押しつけた。
「あ、ゴメン。今のマネージャーから煙草はＮＧって言われてるから、一応ナイショでお願い」
「……煙草、吸うんですね」
「うん。初めて吸ったのは１６だったかな」
「本当ですか？」
「あの頃は、だいぶ荒れてたっていうのもあったんだけど……もしか

して、幻滅した？」
光は首を左右に振った。
「普段も滅多に吸わないんだけどね、今日は、どうしてか手が伸びちゃったの。だから、ごめんね……」
「千里さん？」
うつむいた千里の声が震えていた。光は思わず声をかけた。
付き合ってこそいるが、光は千里のことを深く知っているわけではない。踏み込んだ話題――とくに過去の傷や後ろ暗い記憶などを話せるまでの間柄ではなかった。それは、相手を想ってのことなのかもしれない。大切な相手だからこそ知りたくない／知られたくない部分もあるだろう。しかし、もし彼女が過去の悲しみや苦しみに苛まれることがあるのなら、その時は迷わず彼女の手を取って寄り添ってあげたい。時間はかかるかもしれないが――拒絶されるかもしれないが――少しでも力になりたい、と。それが光の決意だった。
そして、今がその時なのかもしれないと彼は思ったに違いない。
しかし、彼女は光を手で制して、ほんの数秒してから、再び顔を上げた。その笑顔は、彼女がテレビに映っている時と遜色がないほど明るかった。
「私は大丈夫だから」
「……」
「そうだ。デザート頼もうか。ここ、ジェラートが美味しいのよ」
光は、尋ねるのを止めた。伸ばしかけた手は、ゆっくりと宙を漂って彼の膝へと戻った。
しばらくして運ばれてきたジェラートは、林檎の味だった。口に広がる酸味と、ひんやりした食感は、光の心を徐々に落ち着けていった。
一息ついた頃、千里が再び口を開いた。
「あとね、私『馬Ｔｉｍｅ』卒業することになったの」
「えっ、そうなんですか？」
「うん。契約満了ってカタチね。次は、また別の新しい子が選ばれたみたい。まあ、私も3年近くやってきたし、制作としてもフレッシュな出演者が欲しかったらしくて、テコ入れっちゃテコ入れよね。悔し

いけど、若い子には敵わないわ」
「そうだったんですね。なんか、残念ですね……」
しかし、うなずいた千里は真っ直ぐな迷いのない瞳を光に向けた。
「でも、私もそろそろ潮時だと思ってたから、予想はできてた。むしろ、もうちょっと長くやってたとしたら私のほうからそろそろ卒業させてくださいって言ってたかも」
「それって、どういう……」
「新しいことに挑戦してみたい、と思ったの。私、これまで色んな仕事をしてきたけれど、『これだ』っていう仕事って見つけられていないの。モデルも、MCも、リポーターも、人生を賭けてもやりたいっていう仕事じゃなかった――そんなところね。ずっとこのまま続けていくのかな、と思っていたんだけど、君に会って私の中でなにかが変わったの。私は、有名になりたいわけでもスポットを浴びてお客さんを夢中にさせたいわけでもないって気づいた。私ね、誰かを応援したり支えたり、そういう方が性に合っているというか、そういう仕事をやってみたいの。具体的にどういう職業かまでは絞り切れてないんだけどね。実のところ、そこまで芸能界にもこだわりはないし」
――思い切って転職もアリかなー、なんてね。専業主婦も、もちろん候補の1つよ。
あっけらかんにそう言うと、千里は不敵に微笑んだ。

※

2人は店を出た。明日、光は休みだが、千里は朝から仕事が入っていた。
道路は渋滞していて、タクシー1台捕まえるのも億劫なほどだ。
忙しない人波の中、ふと思い出したように光はつぶやいた。
「そういえば、誕生日プレゼント買ったんですよ」
「へえ、そうなんだ。ちなみに誰の？」
「はい。えっと……」
そこまで言いかけて、光は自分の頭がぐちゃぐちゃになるような感

覚に襲われた。乗り物酔いのように、三半規管がやられてしまったような気持ち悪さ。それがジェットコースターにでも乗ってやって来たかのようだった。
「……あれ？」
「光くん!?　大丈夫!?」
突如ふらついた光の腕をパッと掴んで、千里が慌てたように口走った。慌てて身体を車道から遠ざける。通行人たちは邪魔くさそうに光の身体をかわしていく。
目を閉じて大きく深呼吸して、手のひらを開いては閉じてを何度か繰り返していると、その不快感は少しずつ収まっていった。
そうして、大きく息をついてから光が口を開いた。
「あ、平気です。すみません。なんだろう、ちょっと人に酔っちゃったのかもしれません」
「よかった。でも、あんまり無理はしないでね。若いといっても体調を崩してまで頑張ることはないんだから、帰ったらゆっくり休んでね」
「はい、ご心配おかけしてすみません」
すると、一台のタクシーがようやく止まってくれた。
「じゃあ、また今度ね。今日は楽しかったわ。ううん、今日も楽しかった、かな。ありがとう」
千里は光と恋人のハグを交わしてから、タクシー乗り込んでいった。
別れ際、光は何の気なしに聞いていた。
「あの、千里さん」
「なに？」
「誕生日っていつでしたっけ？」
「7月だけど」
「ですよねえ」
「いきなりどうしたの？」
「いえ、深い理由はないんですけど――」
「ふうん」

「――ふふふ、それならちょっと気が早いけど楽しみにしてるわね。じゃあ、おやすみ」

その会話を最後に、タクシーは夜の光の川へ流れていった。

彼女の誕生日、などという分かり切ったことをどうして聞いたのだろうか。不思議な感覚に陥りながら、光は目の前に聳え立っていたショッピングセンターの灯りに視線を向けていた。

競馬の無い世界にも、きっと自分は立っているだろう。

けれど、それを本当に自分だといえるのだろうか。

ビルの灯りはどこか現実味がない。煌びやかさの裏で無機質な感動を演出しているかのように見えた。

方情記

『フロントドールが突っ込んでくる！　前三頭固まっている！　最内からは2番のシカノメメントだが、その横でまだ粘っているヴァーチャリティ！　そしてサンアライメント！　ヴァーチャリティ！　フロントドールはここで脚が止まったか！　ヴァーチャリティ！　サンアライメント！　サンアライメントか！　二頭並んでゴールイン！』

『勝ったのは僅かに13番サンアライメント、二着には9番のヴァーチャリティが来ています。三着には最内を突いたシカノメメント。グリルシューホー、ラトレビアンがそれに続いて入線』

「ということで、中山メインは1番人気のサンアライメントが勝利しました。勝ったサンアライメントの末永長介騎手は、これが今日の3勝目。二着ヴァーチャリティの郷田ひとみ騎手は惜しくも勝利を逃しています」

映像がスタジオへと戻され、メインMCがレースについての感想を口にする。その隣には、カメラに目線を向けている千里の姿があった。

昨年の競馬シーンを振り返ってみれば、ダービーを含むGI6勝を挙げ史上初の騎手四冠に輝いた郷田ひとみをはじめとした女性騎手の席巻が一番のトピックスだろう。今年三十路を迎える八坂優花里は関西の中堅ポジションを固め、小中、柊、木津も虎視眈々とGIタイトルを狙っている。もっとも、男性ジョッキーたちは彼女たちの活躍を黙って見ているわけではない。

王子進之助、末永長介という長らく競馬界を支えて来た2人のレジェンドが開幕週からダッシュを決めた。早くも今年初の重賞勝ちも収め、リーディングの1、2位につけている。その騎乗からはこのまま老いぼれてなるものか、という気迫が伝わってくるようだった。

その後京都メインまで終了し、つつがなく番組は進行していった。そしてエンディングを迎えたところで「ここで千里さんから大事な発表があります。それでは、お願いします」と司会の男性が発した。千

里はあくまでも笑顔で、カメラの前の視聴者に向けて伝えた。
「私、新居千里(あらいちさと)は、3月いっぱいをもって、この番組を卒業することになりました。これまでの3年間、競馬を通して様々なことを学び、感じ、知ることで、私自身成長することができました。未熟な私をここまで支えてくださった共演者の方、スタッフの方にもとても感謝しています。ありがとうございました。卒業ということで淋しい気持ちもありますが、残りの2か月も皆様方に競馬の感動や情熱を伝えられるように頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします」
彼女が言い終わると自然と拍手が起こった。千里の目に涙は無く、ただ毅然としてまっすぐ前だけを見据えていた。

方情記

日経新春杯に騎乗するため、光は中山から京都へ移動しているところだった。
その日、彼はカメラロールの古い写真を眺めていた。なぜ、そんな写真を見ようと思ったのか、彼自身「なんとなく」としか説明ができないだろう。それとも自然とスマホに手が伸びて指が動いたから、とでも言うのだろうか。
光は、画面に視線を落とす。画像と共にその時の記憶が蘇ってくる。
競馬学校に入学した時の写真。
坊主頭の級友たちとじゃれ合っている写真。
卒業式の写真。
デビューしたてで緊張して顔が強張っている写真。
デビュー後に家族と撮った写真。
先輩と食事に行った時にふざけて撮らされた写真。
お世話になっているオーナーとの写真。
中学時代の友人と久々に遊んだ時の写真。
ファンフェスティバルの時の恥ずかしい写真。
初めて重賞を勝った、関屋記念の写真。

自分という人間の歴史を振り返って行くかのようなスライドショーをひとしきり終えて懐かしさに浸っていると――どうも収まりの悪い感じがした。違和感が肩にのしかかったかと思うと、急に焦燥感にも似た感情が光に降ってきた。それはあの夜、千里との別れ際に襲ってきた不快感にも似ていたが、あの時に比べれば軽度のものだった。

（なんだ……なんなんだ……？）

何度も何度も過去から現在へ写真を行ったり来たりするたびに、”何かズレている”ような感覚に陥るのだが、その正体を掴むことはできなかった。

そのうち、光は思考を止めてイスに深くもたれかかった。

ひと呼吸ついて、気休めに本でも読もうかとバッグを漁る。すると、本を取り出す際に荷物が少し溢れてしまった。ため息をつきながら、光はこぼれ落ちたタオルを再びバッグに押し込もうとした。

（妙な柄のタオルだ。ウマ？　ウシ？　ヤギかな？）

おおよそ自分の趣味ではない。

なんだこれ？

どういうことだ？

では、なぜ自分のバッグに入っているのか。自分はなぜこんなタオルを使っているのか。

『　』にあげたタオルがなぜこんなところにあるのか――

（――？）

そこまで考えて、また引っかかった。

ちょっと待った。『　』って誰だ――いや、何だ？

不意に頭に去来した空白が、光を再び思考の渦に引き戻していった。

※

（千里さんの言う通り、おれ、ちょっと疲れてるのかもな）

結局、光の自問自答はやはり違和感の正体を掴み損ねた。去来した

謎の空白に対して解答を埋めることはできなかったのだ。
（眠たい時とか、意味不明なことを考えたりするもんだから、きっとそういうものなんだろう。調整ルームに入ったらさっさと休むか）
静かに目を閉じた。
ふと、真後ろの席に座っている乗客の会話の声がはっきりと聞こえてくる。視覚を閉じたことによって聴覚が敏感になったのだ。
「誕生日に女性がもらって嬉しいものですか？」
「ああ」
「それだったら僕より女性の社員さんに聞いたほうがいいんじゃないですか？」
「いや、もちろん聞いたさ。だが、これには男性側からの意見も大事なんだ。言うなればお前の意見は『誕生日に女性に贈りたいもの』もしくは『これを贈っておけばいいだろうと思うもの』のデータのサンプルになるんだ」
「贈っておけばいいだろう、って……」
「いいから頼むよ」
仕事の話か、移動中も大変だな、と光は胸でつぶやいた。
「例えばお前、モモちゃんの誕生日には何を贈ったんだよ？」
「先輩……それ言わなきゃダメっすか？」
「なんだ、人には言えないようなモノでも贈ったのか？」
「いや、そんなんじゃないっすけど……ちょっと失敗しちゃったんで」
「成功例より失敗例のほうが得るものは多く大きい。教えてくれ」
「はい……オルゴールを贈ったんですよ。小さい、オルゴール」
「オルゴールって、あのオルゴールか。洒落てるじゃないか」
「ええ。で、曲が流れるわけじゃないですか。それを彼女が好きだったバンドの曲にしてたんですけど、プレゼントする前の日に、バンドのボーカルが覚せい剤で逮捕されちゃって……」
「あらら」
「悩みましたけど、渡しましたよ。結構値段もしたので。そしたら案の定ボロクソに言われまして。傷口に塩を塗り込むようなマネしやがって、と……」

――とんだ災難があるものだ。
その辺りで一気に睡魔がやって来た。頭の普段使わない部分を使い過ぎたせいだろうか。
「じゃあその反省を生かして、」
「そうですね……やっぱり無難に腕時計とか、帽子とか、アクセサリーとか贈りますかね」
「まあ、そうなるな」
――そうか。おれはやっぱり間違ってなかったのか。『　』に似合うといいんだけどな。

混濁した意識のまま、ゆっくりと光は暗闇の中へ堕ちていった。

※

『前世の記憶とか、生まれ変わりとか、本当にあると思う？』
『またコロコロ話が変わるなぁ』
『えへへ、どうも恐れ入ります』
『褒めてないからな』
『で、どう？　光はそういうの、信じる？』
『うーん。ネット小説とかでそういうのは見かけるけど、本当にそういうのがあるかと聞かれるとなんとも言えないかな』
『うん。うん。だよね。そうだよね』
『〇〇に転生した、みたいな作品ってとにかく母数が多いから玉石混交なんだよなぁ。出オチも少なくないし』
『えっと……よく分かんないけど、そうなんだ？』
『あ、ごめん脱線した。そうだな、おれは転生とか生まれ変わりとか言われても、正直なところよく分からない』
『……うん』
『もしそう言い張る人がいたとして、結局それが本当なのかどうなのか確かめようもないんじゃないかと思う』
『そっか、そうだよね……』

『でも、もし本当にそういうのがあって、例えば時空を超えるくらいに強い縁や絆があったとして、そんなミラクルがあるんだとしたら、それもそれでいいんじゃないのか、とも思う。まあこれはちょっと、つーか、かなりネット小説から影響を受けた意見ではあるけども』
『……』
『――だけどさ、前世のおれがどうとか来世のおれがどうとか言っても、今ここにいるのは、この”おれ”しかいないだろ。サチだってそうだろ。前世がなんであろうと、サチはサチだよ』
『光……』
『おれはさ――』
『――ありがとう』
『……なんでお前が礼を言うんだ？』
『あー、その、なんとなく？』
『そっか。でもまあ、確かにリアルでいきなり前世がどうだの言い出したらちょっと警戒されちまうかもな』
『う〃っ……イゴキヲツケマス』
『あはははは』

※

彼女を知っていた――
――私は福盛田くんのフォーム、好きだよ。
とても大事な人だった――
――あ、『サチ』でいいよ。
とても大事な人なのに――
――それで、私も『光』って呼んでいいかな？
どうして今の今まで思い出せなかったんだろう――
――じゃあまた明日ね、光。
彼女は何処だ――
――光、カッコよかったよ。
この世界は何だ――

――すごいすごい！　うわーありがとう光！
待ってくれ――
――えへへ、光。
行かないでくれ――

※

「サチ！」
気がつくと、光は布団の上に居た。
新幹線から調整ルームに来るまでの記憶がすっぽり抜け落ちている。しかし、その代わりに、彼はそれまで抜け落ちていた彼女の存在への認識を取り戻していた。
速くなっていく鼓動を感じながら、布団から這い出た。
どうすればいい？
グルグルと高速で脳が回って焼き切れそうだったので、まず彼はシャワーを浴びて頭を冷やすことにした。
お湯というよりもぬるま湯、少しだけ温かめの水を頭から被ったが、記憶の中にいる彼女の顔が幾度も浮かんできた。
（なんなんだよこの状況……悪い夢なら早く醒めてくれよ。なんて、言ってもしかたないよな）
シャワーを終え、寝間着を再び纏った光は、寝室には戻らず休憩室のほうへ向かった。非常灯のみがついた廊下を抜けて、無人の休憩室の電気をつける。娯楽設備もついている休憩室は広々としていて、それでいてカラッポだった。ペットボトルの水を口に含み、窓から京都の夜の空を眺めた。星はなく、月もなかった。
（これからどうすればいい。おれ一人で、どうにかできるのか……？）
突如として、それまで袖で見ていた舞台の真ん中に押し出されてしまったような感覚だ。三文役者以下の大根役者が、上演の最中に長台詞のある重要な役どころに急遽キャスティングされたかのような。ただし、これは舞台ではなく台本のない、彼の身に直接巻き起こっている出来事だ。

光を一気に無力感が襲った。
――朝になって、他のどんな騎手にサチのことを尋ねても、全員が全員口を揃えて「そんなジョッキーはいない」と答えるだろうということが、ありありと浮かんだ。「君野佐知子なんて人間は知らない」と。そう確信した。聞かずとも結果が分かってしまった。きっと、この世界のどこにも彼女はいないのだということを、光は感覚的に認識してしまった。
虚無を溶かしたような闇が窓の外に広がっている。光の暗い目が、それをぼんやりなぞっていた。
「……誕生日、過ぎちまったじゃねえか」
ほとんど悪態のように、彼はひとりごちた。
光は、プレゼントを渡した際の彼女の反応次第ではそのまま告白をしてしまおうと思っていた。しかし、それは実現することなく、彼女の誕生日というものは世界の暦の上から永遠に抹消されてしまったのだった。
じくじくと胸が痛み、涙が溢れた。自分だけが世界から取り残されているようだった。
どこかに走り出してしまいたい衝動に駆られ、それを押し殺して、握りこぶしを思い切り壁に叩き付けた。
自分に生身の身体があることを伝える痛みが、かろうじて光の正気を保った。

※

「アンタみたいな男に惚れられるなんて、サチも苦労してるのね」
「ッ!?」
突然、玉を転がすような声が部屋に響いた。
慌てて光は声の方向へ顔を向けた。そこには、ジョッキールームにはおおよそ似つかわしくない、深い真紅のドレスに身を包んだ美少女が、どこか不機嫌そうに腕組みをして立っていた。
光の目には、その少女の姿がどこか神々しく見えた。

（え……いつの間に……何処から……誰？）
「ヌーベルベケット」
「……はい？」
「ヌーベルベケットって馬、アンタ知ってる？」
「……」
鋭い眼光は有無を言わさぬ迫力があった。
普段であれば、調整ルームに怪しい少女が現れた時点でとっとと警備員でも呼んでくるのが正しいのだろうが、今の異常な状況において、その選択は自然と無視された。そして、なぜか彼女が信頼するに足る人物であると直感できた。
光は、恐る恐る答えた。
「な、名前くらいは……ちょっと、聞いたことがあるかもしれません。でも、詳しくは、知らないです」
「あっそ。じゃあ、サーチライトは？」
「ええと、末永さんが乗ってた三冠牝馬、ですよね？　凱旋門賞にも行った馬で――」
――帰国後に心不全で急死した馬。
「ふーーん」
「……」
「悔しいけど、やっぱりサチとアタシじゃ知名度の差がありまくりね。ぐぬぬぬ――」
「待って！」
光が大声を出したことで、少女がビクっと驚いた。
「今、サチって言ったけど、それって――」
「ええ、そうよ――」
彼女はハッキリとその名前を言い切った。
「三冠牝馬のサーチライトじゃない、人間のジョッキーの君野佐知子のことよ」
その名前を聞いて、ほとんど夢中で彼は少女の元へ駆け寄った。
「教えてくれ！　君は何を知ってるんだ！」

「ちょ、ちょっと！　近いわよ！　離れなさいバカ！」
「あ……ご、ごめん」
「まったく、変なところでアンタたちって似てるのね。まあ、いいわ教えてあげる。今、何が起こっているか。そして、あの子の、サチのことについてもね。サチのことについては、本当はあの子自身の口から伝えるのがベストなんでしょうけど、この状況じゃそんな悠長なことも言ってられないし」

探照光

「どれって言われても、どれでも嬉しいわよ？」
「じゃあ、千里さんの好きな動物ってなんですか？」
ガラス越しに陳列されたプライズは、動物を模したキーホルダーのぬいぐるみだった。
犬、猫、兎、牛、蛙、蛇、そして馬に似ているが、きっとこれは正確にいえば驢馬なのだろう。
彼女は動物たちを一瞥して、じゃ細い人さし指でまん丸い目を持つぬいぐるみを指差した。
「猫ですね。分かりました」
「うん。あ、でもここはやっぱり『馬Ｔｉｍｅ』のＭＣらしく馬って言っておくべきだったかしら？　あれ、でもこれロバよね？」
「だと思います」
おれは１００円玉をサッと投入した。３６０度自由に動かせるレバーを操作し、ターゲットに照準を合わせる。
この手のタイプの台なら小学生の頃に取り方を覚えているので、何の造作もなく狙った獲物をゲットできる。
あっという間に手に収まるサイズの三毛猫が、彼女の小さな手に収まった。
彼女は感心したように口を開いた。
「ありがとう。すごい、光くんってこんな特技があったのね」
「はい。あまり競馬とは関係ないんですけどね」
「かもね。うふふ。だけど、ありがとう。大事にするわ」
どうやら喜んでくれたようだ。
普段なら、おれもここで自然と頬が緩んでいるのだろうが、今ばかりはぎこちなくはにかむことしかできなかった。
それを見て、千里さんはくすくすと目を細めて笑った。おれが照れているのだと思っているのかもしれない。

約束の時間より三十分も早く合流してしまったので、食事を終えて店を出た時点で時刻はまだ１６時だった。
おれたちが今いるのが、そこから少し歩いたところで目に入ったゲームセンター。
小さい子どもと若い親、中学生くらいのカップル、友達同士で来たような男子大学生の集団。皆、思い思いにゲームを楽しんでいた。
ゲームの効果音、店内ＢＧＭ、笑い声、悔しがる声、何かが弾むような音。雑多な音と雰囲気に包まれる。ここでは身分も肩書きも関係ない。たとえ騎手だろうと、タレントだろうと、みんなゲームを楽しむお客さまなんだ。なぜかそんなふうに思えた。
猫の丸い目と見つめ合っている千里さんに、おれは尋ねてみた。
「千里さんって猫派なんですね」
「ええ、小さい頃に飼ってたのよ。白い猫。シルクっていう名前だったわ。私が３歳の時に家にやって来た猫でね、とってものんびり屋だったわ」
「へえ」
「寝て、起きて、食べて、寝て。起きて、たまに遊んで、また寝る。悠々自適で、こうして振り返るとちょっと羨ましい暮らしぶりね」
「かもしれないです」
「私にとってはじめてできた人間以外の友達だったわ。父も、母も、妹も、家族はみんなシルクが大好きだった」
そう言うと彼女は、台の――先程まで三毛猫がいた――空いたスペースに視線を向けた。
「私が１２歳の時に、シルクは死んじゃった。いや、本当に死んだかどうかは分からないけれど、姿を消してしまったの。でも、きっと死んでしまったんだと思うわ。猫は死期が近づくと姿を消すっていうしね」
「……」
「その頃、家の雰囲気は最悪だったわ。私の中学受験のことで両親はいつもいがみ合ってケンカしていたわ。その上、ささいなことで父が不倫しているんじゃないかって母が思い込んじゃって、ね……。それ

で、離婚したわ。私は母に、妹は父に引き取られたわ。『あれだけ仲の良かった家族が、バラバラになる時はこんなにあっけないものなんだ』って、その時に、私思ったの。もしかしたら、シルクが、私たちを見えない糸か何かでつなぎとめてくれてたんじゃないかって。不器用で不安定な私たちの幸福を、見えないところで導いてくれていたんじゃないかって、そんな風に思っちゃってね……」

「でも、逆にこうも思えたの。もしかしたらシルクは、家族の幸福がボロボロに崩れていく様を見たくなくて、家を出たんじゃないかな、って。もし私たちがずっと仲良くいられたら、シルクも最期まで私のそばにいてくれたんじゃないのか……なんてね」

切なさをこらえるように、彼女は短く鼻をすすった。

おれは、改めて自分が今からやろうとしていることの重大さを思い知らされた。

おれは、今から彼女の胸にナイフを突き立てるがごとく、残酷な告白をしなければいけないんだ。

あの真紅の彼女から言われたことを、改めて反芻する。

※

三冠牝馬の生まれ変わりだとかなんとか――

人間の脳は不思議だ。

突拍子も無い事実の連続であるにも関わらず、置かれている状況があまりにもぶっ飛んでいれば、その事実すら拒絶反応もなく受け入れることができるのだから。これも一種のつり橋効果なのかもしれない。違うのかな？

目の前の美少女は、少し憂いを帯びた表情で説明を続ける。

「サチ――君野佐知子は、存在自体が奇跡的なバランスで成り立っているのよ。あの子は、前世の記憶、しかもサラブレッドの記憶を持っているわ。それはサーチライトという馬の根幹ともいえる部分よ。でも、君野佐知子は『人間』。二足歩行をして、思考して、言葉を操りコミュニケーションを取り、人間社会の一員として生きている『人間』

なの。この『人間』、『サラブレッド』という本来は同居するはずのない2つの要素をサチは持ち合わせている。それは、あの子の魂の構造には人間的な面とサラブレッド的な面がある、と言い換えることもできるわ。それは、普通の人間では決してありえない構造よ。それが今回の世界改変を招いた一因ね」
「……」
「今回起きた世界改変は、歴史の再構築とも呼べるわ。もしサーチライト号が存命だったとしたら、末永長介はまだ騎手を続けているかもしれない。死ぬはずだった人物がまだ生きているかもしれない。ひとつの分岐において『起こらなかった側』の歴史を紡いでいった結果のひとつが、今のこの世界というワケ。アンタ、オタクの気があるんでしょ？　だったらｉｆルートっていえば早いわね。恋愛ゲーとかやるでしょ？」
「あ、はい、やるけど……」
「……ハンッ」
　おれの答えを、ヌーベルベケットは軽くあざ笑った。
「え、なんで今おれ鼻で笑われたの？」
「そんなことはどうでもいいとして、サーチライトが存命だったとして、アンタが元いた世界線と異なるいちばん大きな事象って何だか分かる？」
「どうでもいいのかよ」
「うっさい。で、どう？　元の世界とのいちばんの違いは？」
「それは……ここには、サチがいない。誰も覚えない……というより――知らない。サーチライトが生きていたら……サチという人間そのものが、いなくなるってワケなのか？」
「ええそうよ。佐知子という少女は、天に召されたサーチライト号の記憶と魂を引き継いだ存在――もっともそれを本人が自覚して覚醒したのは幼少の時だったけれどね。でも、もしサーチライト号が死んでいなかったら、記憶も魂も動かないし引き継がれない。元からそうであったように、人の言葉を発さないサラブレッドの物よ。となると、当然名牝だったサーチライトの生まれ変わりの少女もまた、この

世に現れない。ということになるの」
「そうなのか……」
「そうよ。もし同姓同名の人物がいたといても、あなたが知っているサチとはまったくの別人よ。それで」
「それで――」
――おれはどうすればいい？　どうすれば、もう一度アイツに、会えるんだ！」
おれは彼女の言葉を遮るように強い語調で言った。言ってしまった。ハッと目の前の彼女を見れば、驚いたように目を大きく開けていた。
「あ、えっと――」
「急におっきな声出すんじゃないわよ！　びっくりしたじゃない！」
「あ、ごめんなさい」
「そんな大声出さなくたって聞こえるわよ。気をつけなさい！」
「はい」
彼女は腕組みをして、おれに背を向けた。
「結論からいうと、今回の世界改変の元凶はサチよ」
「えっ……」
「あの子、この間落馬したじゃない。それがトリガーになったんだけどね」
「落馬で……ってことはもしかしてサチは――」
「いや、命に関わる怪我でないことはアタシのほうで確認済みよ」
その言葉に、おれは無意識に安堵していた。よかった。本当によかった。
「でも、肉体面よりも、精神面のショックが今回の事態を引き起こしたの」
「じゃあ……」
いくらサチといえども――名馬の生まれ変わりといえども、落馬の恐怖というのは、尋常ならざるものなのだろうか。
「いいえ。それも半分不正解よ」
「えっ？」

「むしろ逆。あの子は、実は恐怖が薄いのよ。もちろん、落馬が恐くないことはないでしょうね。どちらかというと、死への恐怖――生への執着が薄いというのが、あの子の『片一方の』本質ね。だって、〝あっち〟は一度『死』を経験しているんだもの。人が死ぬことを怖いと思う理由のひとつが、知らないことへの恐怖よ。『死んだらどうなるか』。過去に哲学者たちが散々悩んでそれらしい説を立ててはいるけれど、でも、そのひとつの答えをサチは既に得ているともいえるわ。だからきっと、『死』に対して、そこまで深い嫌悪感や忌避感が無いのでしょうね。でも、それはあくまで『片一方』の話」

「『片一方』っていうことは、もう片方は――」

「ええ。繰り返しになるけれど、〝君野佐知子〟は、人間的な部分とサラブレッド的な部分が絶妙なバランスで成り立っている存在なの。そして、その人間的な部分は、もうひとつの非人間的な面を間近で見続けた結果として、そのバランスを取るためにより〝人間らしく〟あろうとした。それは『〝非サラブレッド的〟であろうとした』と同じことよ。

で、ここからは仮説なんだけど、サチがサーチライト号の生まれ変わりとして覚醒した頃から〝本来の君野佐知子〟の人間的な面というのはあまり表に出なくなったと思うの。もちろん、あの子を形成する重要な要素には変わりないのだけれど、それ以上に表立ってサーチライト号だった時の記憶や意識に引っ張られるようになったんじゃないか、ってね。それが良いか悪いかなんて、誰にも分からないし決められないわ。ただ、それでずっとうまいこと成り立っていたし特に問題はなかった。でも、それがあの日崩れてしまった。

今まで体験したことも無いような落馬事故。その外傷のダメージ以上に、心的なショックは計り知れないほど大きかったでしょうね。もし、普通の少女として人生を送っていたら――高校を卒業して女子大生にでもなっていたら――絶対にありえないようなショッキングな体験。それに対して、君野佐知子の人間たる部分が激しい拒否反応を起こした。それこそ、自らのルーツさえ否定したくなるほどに」

――拒否反応。

プロの騎手でさえ落馬への恐怖は大きいというのに、それを〝普通以上〟に痛みに過敏な人が体験したとしたら。
「元々、馬が人間に生まれ変わるっていうミラクルを起こしてる子なんだから、いまさらこの程度のことをやってのけても、アタシはそこまで驚かないわ。ただ、とんでもないバカだとは思うけどね」
――新居千里。
ヌーベルベケットの口から、唐突にその名前が出た。思わず心臓が跳ね上がりそうになった。
「『ア　ラ　イ　チ　サ　ト』。なるほどよくできてるわね。『名前は呪。運命を縛るもの』とは言ったものだけれどね」
「そうだ。千里さんは、あの人は一体――」
「彼女は、君野佐知子が元々持っていた人間的な面から成り立っている存在。言うなれば、どこかの世界であったかもしれない〝君野佐知子〟の可能性の発露よ。もうひとりのサチ、ともいえるかもしれないけど、まったくの別人。あの子ほど能天気じゃないし、歳も離れてはいる。魂の器は同じだけど、色や柄が違うとでもいえばいいかしら。もしくはあの子が居なくなって空いた席に、彼女が座っているというのかな。まあ、なんにせよ君野佐知子の代わりに新居千里がいるのがこの世界、ということよ」
「――っ」
「で、素朴な質問なんだけど、アンタこれまで二股とか三股とかかけて、女の子を泣かせた経験ってある？　あるワケないわよね」
聞くまでもないというように彼女はそう言い切った。

※

「弘前のさくらまつりって知ってるかしら？　前に一度イベントに参加したことがあるんだけどね。弘前城のある公園内で２６００本もの桜がいっぺんに咲いてね、とってもキレイなのよ。夜にはライトアップもされて、昼に見る時とはまた違った景色が広がってるの。濠に散った花びらが絨毯のように流れ往く光景も、風情を感じるわ。出

店もたくさん並んで、とっても賑やかで楽しいお祭りなの。
まあ、ジョッキーの光くんには、弘前はちょっと厳しいかもね。でも、近いところでもいいから一緒にお花見できたらいいなって、私は思ってる」
「……」
「って、やっぱりちょっと気が早いかしら。ごめんなさいね。でも、四月からのスケジュール、前に比べたらずっと余裕があるからそういうことを考えちゃうのよね。今までできなかったこととか、見落としてたこととか、ゆっくり楽しめなかったこととか、そういう取りこぼしてしまったものを拾ってみてもいいんじゃないか、なんてね」
日暮れが一気に迫って、オレンジ色の陽が彼女を横顔を照らした。
艶のある唇が震えている。思慮深そうで優しげな眼差しが、潤んでいるように見えた。おれは目を逸らすことができなかった。
「千里さん、おれ、伝えたいことがあるんです。いや、伝えなきゃならないことがあるんです」
「……それって、楽しい話？」
おれは黙って首を左右に振った。
すると、彼女は「そう」と相槌を返して視線を逸らした。
「じゃあ、聞きたくないかな。こう言うと途端に子供っぽいわね。でも、私は聞きたくない。言わせたくない。ワガママよね」
「千里さん……」
「逆に、私の方から言ってもいい？」
気丈に振る舞う彼女と、徐々に群青に変わって夜を招いている空の色が、やけに沁みた。
「この前から薄々感付いてはいたけど、今日会ってみて確信したわ。今の光くんは、私を見てくれていない。まるで、私を通して他の誰かを見ているような気がしてならないの。そして、その眼差しがとても真剣でまっすぐなの。……責めるつもりは毛頭無いわ。むしろ、答え合わせができたみたいで、私としてはちょっとホッとしてるの」
千里さんは胸ポケットから、禁止されている煙草を取り出して、火をつけた。渦を巻いた思いが白い煙をくゆらせる。

「ごめんね。私、本当は汚くて、醜くて、酷い人間なの。今の事務所に所属できるようになったのも、お金と、枕と、媚びと、コネクション。光くんには、なるべくそういう部分を見せたくなかったから見せないように努力したんだけど、でも、やっぱりダメだったのね。

私は光くんに釣り合うような人間じゃない。光くんは、私みたいな女なんかと居ちゃダメだって。それが、私の感じていたことよ。若くて、元気があって、不器用でもがむしゃらに頑張っている光くんに、私は自分の願いを託してたのかもしれないわ。それで、仕事で距離が近くなってからは余計に勘違いするようになった。光くんと一緒にいれば、自分も同じようにがむしゃらに頑張れるようになるんじゃないのかも、なんて。そんなはずないのにね。人間なんてそう簡単に変われるはずないもの。

年上として、光くんに恥ずかしくないような女性になろうと努力してきたけれど、結局それも私の自己満足だったわ。光くんの心が私から離れていく以上に、私が光くんを分かってあげられなくなるのが恐かった。ひとの気持ちを分かってあげようだなんて、傲慢もいいところよね」

そこで彼女が手にしていたカバンから光る物を取り出すのが見えた。

ナイフだ。

「でも、こうも思ったわ。もし、光くんを私だけの永遠にすることができたら――って。そうすれば……」

彼女の瞳が赤く染まったような気がした。

おれは唾を飲み込んで意を決した。

※

ヌーベルベケットは、おれにこう忠告した。

「アンタにとってこの世界は『本来の世界』じゃないけれど、新居千里にとってはこの世界が『本来の世界』なのよ」

「もしアンタがこの世界を否定するのだというのなら、それは彼女の世界を否定することになるわ。そして、たとえほんの少し前に出来た

世界だったとしても、この世界での記憶は、偽物ではない。この世界の誰も、偽物ではないのよ。世界が元通りになってめでたしめでたし、というのは無いわ。たとえ否定されたとしても、私たちが感知できなくなったとしても、世界は続いていく。やるのは勝手だけど、誰かの願いを拒絶することの重みを、きちんと理解しておきなさい」
「こじれない別れ話なんてどこにもないわ」

——刺される覚悟くらいしなさいよ。
いよいよその時が来たんだと、息を吸い込んだ。

※

しかし、おれの覚悟はあっさりと空気が抜けて、拍子抜けする事態になった。
彼女は取り出したナイフをまじまじと見つめた後で、それをカバンにしまいこんだ。
そして、困ったように笑った。その瞳は曇ったまま揺れていた。
「そんなバカなこと、できるわけないのにね……。結局私は何も変えられないし、変わることもできない……。ここまで来て、また光くんの気を引こうとしてる自分が、哀れに思えてくるわ！」
「……」
「こんな人間になりたいわけじゃなかった。こんな女になりたいわけじゃなかった。だけど、私にはこれしかないの。この、七面倒くさい、それでいて外面ばかりは良く見せようとする新居千里しかないの。代わりなんて、どこにもないのよ！」
涙混じりに彼女は声を荒げる。
「こんなふうに、叫びたくもないの！　もっと落ち着いて、別れる時だって、クールでいたかったの！　この期に及んで嫌われたくないなんて考えてる自分に呆れ果てる！　だけど……だけど……」
「……大丈夫ですか？」
彼女は疲弊したらしく膝をついた。
おれも片膝をついて、彼女と目線を合わせた。彼女の目は何かに怯

えていた。それが、おれに対してなのか、それとも将来への不安なのかは読み取れなかった。
もっとも、おれにそんなものを読み取れるだけの器用さも経験も無かったと言ったほうが正しいかも知れない。
おれは、心に思ったことを声に出して言った。
「あの――千里さんは素敵な女性です」
「……」
「たとえ、汚くて、醜くて、酷い部分があったとしても、そんなのおれたちはみんなどこかしら持ってるものだと思うんです」
品行方正で清廉潔白なだけの人間なんて、生き物なんて、いない。
欲を持たない人間なんていない。良くは知らないけれど、みんな今より良くなりたいと思うから、何かを願ったり求めたりするんじゃないか。たとえ動機が不純だったとしても、もたらされた結果が悲劇だったとしても――汚いから、醜いから、道義に背くから――ただそれだけの理由で誰かの願いを無下に扱っていいのだろうか。
「きっと、そういう部分もひっくるめて――千里さんは見えないように隠してたかもしれないけれど――おれは、千里さんを好きになったんです」
”おれ”が千里さんと接したのはほんの一週間程度だ。だけど、これまでの彼女との日々はおれの中には記憶としてちゃんとあるし、感情も思い出せる。それを作り物の紛い物とは、思わなかった。思いたくなかった。
「千里さん、あなたが好きでした」
たったそれだけが、おれが千里さんに言える言葉――伝えたかったことなんだ。
もう、千里さんは感情を押し留めなかった。おれの肩を掴んで、涙でシャツをぐしゃぐしゃにして、言葉を紡ぐ。
「光くん……どうしてそんなに優しいの？　これからお別れをするから？　それとも……私が可哀想だから？」

「いえ、そうじゃないです」
「……そうなの？」
「今までおれは、色んな人に助けてもらったり救われてきました。だから、おれも、これまで助けてくれた人たちにしてもらったように、誰かの力になれたらって思うんです。でも、人ひとりの人生を大きく変えるほど、勇気を与えたり希望を見せたりは、きっとできないと思います。だから、せめて今目の前にいる人だけでも。たった一人だけでも、力になりたいと思うんです。それが、おれが好きになった人なら、尚更ですよ」
　言葉を口にしながら、おれは思った。おれは、優しいのだろうか。確かに優しさは持っているかもしれない。
　でも、その優しさはきっと、おれが生まれ持ったものではない。これまでに人からもらった優しさで、おれの優しさはできているんだ。
　きっとその優しさのひとつは、彼女からもらったものだ。
「そうなのね……でも、光くんは優しいわ。でも、優しさって時に残酷なのよ？　突き放してほしい時に、優しくされることほどつらいことってないのよ」
「……すみません。でも、苦しんだり困ったりしてる目の前の人を見て見ぬフリできるほど、大人じゃないんです。それは、おれのわがままかもしれません」
「そうなのね。でも、どうしてかしら、とっても光くんらしいわ。参っちゃうわね。うふふ」
　彼女の表情がほんのわずかだが緩んだ。それが、おれにとってちょっとした救いだった。
　それが作り笑顔だったとしても。
　本心じゃなかったとしても。
　千里さんは立ち上がって、脚についた砂を払って、おれのほうを向いた。
「それで、光くんの本命の子って、どんな子なの？」
「……やっぱ、言わなきゃダメですか？」
「当たり前でしょ。私だって仮にもタレントよ。私を振ってまで付き

合いたい女の子が居るっていうんだったら、気になるに決まってるじゃない」
「ですよねー」
「その子って年上？　年下？」
「同い年です――」
それからおれは、彼女の質問攻めに遭った。
千里さんは、これまで話したどんな時よりも無邪気そうだった。
それが、この世界での最後の記憶になった。

探照光（Ｓｅａｒｃｈ　＆　Ｌｉｇｈｔ）

探照幸

「ということで今週のＷＩＮ５は残念ながら的中なし、という結果でした。アリスちゃんも惜しかったねえ、最終レースが当たってたら的中だったわけでしょお」
「いやー悔しいですね。これは、まだまだ腕を磨いていかなきゃってことですね」
「はい、頑張ってね！　ということで今週の馬Ｔｉｍｅもそろそろお別れの時間になってしまいました。来週はどんな馬券が飛び出すのでしょうか。注目です。それでは司会の後藤ゴローと」
「アシスタントＭＣの綾瀬川アリスでした！」
「皆さんそれではまた来週お会いしましょう！」
「ばいば～い！」

※

君野佐知子ですっ！
落馬負傷入院生活、だいたい二週間目に突入！
脚のギプスはまだ外れないってことだったけど、上半身はかなり自由に動かせるようになってきました。全治はおよそ二か月。春のクラシックにはギリギリ間に合うか間に合わないかの微妙なライン。
ひとみさんからもらったハンドグリップで握力を取り戻し、優花里さんからもらったお笑いのＤＶＤを鑑賞し、美由さんから教えてもらったペン習字の練習をし、雪絵さんがオススメしてくれた小説を読みふけり、かれんさんの動画を観ていたら、わりとあっという間に一日が過ぎていきます。
入院生活の不満としては、やっぱり身体が自由に動かせないこと。「動かない」ことがこんなに大変だったなんて知らなかったなあ。
あとはご飯。病院食はやっぱり味気ないというか、そろそろ飽きてきました！
チエが差し入れでお菓子をくれたり、一恵さんがお弁当を持ってき

てくれたり、美景ちゃんが葉流の名産のおせんべいをくれたり、そういう食の楽しみが入院生活の楽しみになりつつあります。（もしかして：餌付け）

そして今日の本題です。

今日は光が来てくれた！

なんだか、随分と久しぶりに光に会ったような気がする。なんとなく具体的にいえば人生一回と二週間ぶりくらい。（根拠はよく分からないけど、そんな気がするかな。）

電話やＬＩＮＥでは連絡を取ってはいたけど、光のほうもだいぶ忙しかったみたいで、直接顔を合わせるのは、これが二週間ぶりかな。

光は、病室のドアを開けるなり――

「あ！　光だ！」

「サチ……」

「久しぶりだね。どう、元気――」

「サチっ!!」

「――ふぇ？」

……

……？

……!!

ハッ！

思い出すだけでもちょっと呆然としちゃうかな。

私は、光に抱き締められていた。

光はなんだか苦しそうな顔で、力強く、そして優しく、私の身体を抱きしめていた。

そりゃビックリはしたけど、真剣な光の表情と雰囲気に何も言えなかった。だから、されるがまま受け入れてた。

私は頭が真っ白になったけど、別にイヤな感じはしなかった。むしろ、その逆かな。

「大丈夫？」

「サチ……よかった……本当によかった……」

「光……」
なぜか、今にも泣き出しそうな表情だった。
やっぱり私のせいかな？
心配かけちゃったから、かな。
私は、たくさんの人に心配をかけた。
意識が戻ってから、改めて事の重大さを思い知らされた。
病室で――
チョーさんは何も言わずに頭を撫でてくれた。
ひとみさんは私のために涙を流してくれた。
王子さんからは「みんな待ってるから、早く元気になってね」とエールをもらった。
チエからは泣きながら散々「バカ」「下手くそ」なんて言われた。
お父さんとお母さんは「何があっても支えるから」と言ってくれた。
その姿を見て、私は、なんだか申し訳なくなった。
夢を叶えようと――誰かの期待に応えようとするあまり、どこかで自分自身を大切にする心をないがしろにしてきたんじゃないかと思うと、罪悪感が生まれた。
私は光に声をかけた。
「ごめんね。私――」
「いいんだ。サチ。謝らなくていい」
「――え？」
「こうしてまた会えたんだから、それでいい。とにかく、大事にならなくて良かった。ああ、うん、そうだな、ここで変に焦ったりしないでじっくり治して、また一緒にレースに出よう。メシも食おう。遊びにも行こう」
「え……」
「約束だぞ。〝君野佐知子〟」
彼――福盛田光のその声に、私はうなずいた。
「――うん。そうだね。ありがとう、光」
再び光の顔を見た。さっきまでとは打って変わって、なんだか大人びたような顔つきに見えた。

すると今度は、光がパッと身体を離す。さっきまでの表情が嘘みたいにテンパってた。ふふふ、変なの。
「あ、あのさ！」
光はそう言って小さな包みを取り出した。
「なんか色々あって、だいぶ遅れちゃったんだけどさ――これ、受け取ってくれないか？」
「え？　……あ！　プレゼント!?」
光がうなずいた。
あ～そういえばそうだった。ちょうど落馬した時期と重なってたもんなぁ。何か忘れてると思ってたけど、それかあ。
今回は私だけじゃなくチエと美由さんのアドバイスも受けて選んだわけなんだけど、まだ寮の中で眠っているんだろうなあ。
後で寮母さんに言って光に渡しておいてもらおうかな。
「私、まだ寮の中だ。ごめんね」
ペロリと舌を出して、困ったようにはにかむ。てへぺろ。
「うん。なんとなく予想ついてた」
「で、さてさて、光はどんなプレゼントを選んでくれたのかなァ！　ニヤニヤ！」
「あんまり派手なものじゃないんだけどさ、サチに似合えばいいなって思って」
「似合う？　ははーん、身につける系のやつだね。サイズ的に時計かアクセサリーの類と見た！」
クイズ番組の司会者と挑戦者よろしく、私達は顔を見合わせて息を呑んだ。
そして、こらえきれなくなった私が笑い出すと、光もそれにつられて顔をほころばせた。

ホワイトページ（まっさらなページに描くもの）

季節は秋競馬の時期。

京都競馬場の調整ルームで、佐知子はヌーベルベケット――かつての友人と旧交を温めていた。

「っていうことがあってね」

「……あっそ」

「あれ？　どうかしたの？」

「べっつにぃ～、久々にアンタに会えたと思ったら急に惚気話が始まるもんだから、もぉ～なんていうか、おめでとうございますぅ～って感じになっただけよ」

「うん。ありがとう！」

呆れたように吐き捨てるヌーベルベケットと対照的に佐知子が心から嬉しそうにお礼を言う。

ヌーベルベケットは意地や見栄を張るのもばかばかしくなった。

「アンタの彼氏も結構やるじゃない」

「えへへ！」

「まあ、やっと進之助の足元に追いついたくらいだけどね」

「私たちの世代では光が一番になるって思ってたけど、その通りになったね」

先週のメインレース・秋華賞で福盛田光は初のＧＩを制し、ＧＩジョッキーの仲間入りを果たしていた。同期一番乗りとなるＧＩ勝ちだった。さらに今年、光は勝ち鞍を量産し、全国リーディングで９位につけている状態だ。

「私は、ヘマして出遅れちゃったからなぁ……」

一方の佐知子は落馬による怪我で長期離脱を余儀なくされたこともあり、リーディング上位にその名はなかった。

「アンタだって若手にしちゃよくやってるわよ。自信持ちなさい」

「……ヌーちゃん」

「明日のメインだってそれなりにやれそうなコに乗れるんでしょ？
だったら思いっきりぶちかまして――」
「そうそう！　そうなの！」
　励まそうとするヌーベルベケットを遮って、佐知子は目を輝かせて語り始める。
　牡馬クラシック最後の一冠・菊花賞。佐知子が騎乗するのはホワイトページという馬だ。
「え、その馬ってもしかして」
「うん。私が新馬戦でやらかしちゃった時に乗ってた。入院してる時に美由さんで未勝利に出てて、もう乗れないかなーって思ってたけど、また依頼が来たんだ」
　再び佐知子の手綱で東京の未勝利を勝ち、初勝利。その後も福島、新潟と条件戦を連勝し、菊花賞トライアルのセントライト記念では8番人気ながら2着に食い込み、本番への出走権を手に入れた。
「でも、かなり怖がりなコだったんでしょ？　よくそこまで持ち直したわね」
「それはチョーさんや厩舎のひとたちのおかげかな。元々能力のあるコだったからレースに慣れてくれれば力を出せるとは思ってたんだ」
　予想の印は△や☆が多く並んでいたものの、佐知子も、長介も、確かな手応えを感じていた。
　その後も佐知子は熱っぽく話し続けた。
「それでね！」
「サチ……あんまムチャするんじゃないわよ」
「え……？」
　ヌーベルベケットの声のトーンが落ちて、佐知子は旧友の顔をあらためて見た。
　じんわりと潤んだ瞳が揺れていた。
「アンタが落馬したって聞いて……心配、したんだから！」
「ヌーちゃん……」
「サチの……バカッ！」
「ごめんね」

「バカ、バカ、バーカッ！　うっ、うう……」
「ありがと。優しいね、ヌーちゃんは」
泣きじゃくる友人が落ち着くまで、佐知子は彼女を包むように抱きしめた。

『雲の切れ間から陽の光が注いでいます。昼過ぎにわか雨があったものの、現在の馬場状態は良の発表です。３歳クラシック戦の総仕上げ、最後の一冠を手にするのはどの馬なのか。最後に１８番ミノベストロングゲートに収まります。
スタートしました。１２番のジュエルホーキンスが後ろから、それ以外は揃ったスタート。まず先手を奪うのはどの馬か。
やはり宣言通りに逃げます２番のアカデミアン。続けて外のほうからは１７番レヴォルタ。５番バインドミュウモも前へ。坂の頂上から下りへ。直後に６番ホワイトページ。内からは４番クロモリテックがいっています。半馬身切れて３番ブルベリブルー坂を駆け下ります。中段に７番エイトギース。１４番ジレッドが続きます。外のほうでは１６番のコガタンと１３番のワイヤレス。
４コーナーから１周目のホームストレッチへ。馬群の中に１８番ミノベストロング。１番のヤングアチーブ、１５番ターコイズミント並んでいます。スタンドから拍手が沸き起こっています。その後ろから１１番ロベルトサーガ。そして１番人気の８番シヴァレンズはここ、後方から３、４頭目の位置。さらに１２番ジュエルホーキンスと９番アナリティクスほとんど並んでいます。最後方追走が１０番のガンガンダンクとなりました。
先頭は変わらずアカデミアン。二馬身ほど差をつけて１コーナーカーブへ入っていきます。二番手入れ替わってクロモリテック。並びかけるようにしてバインドミュウモ。さらにその外にレヴォルタがつけています。１馬身半差でホワイトページがいます。向こう正面で、ブルベリブルーがいて、エイトギース。ここでヤングアチーブ

が一気に前に進出しようとする動き。シヴァレンズはまだ後方、後方で脚を溜めている模様です。
さあ二度目の淀の坂越え。徐々に馬群が凝縮されていきます。先頭は外から進出したヤングアチーブに変わっています。さらにアナリティクス、シヴァレンズもここで一気にポジションを上げていきます。シヴァレンズ、ブルーノ・シンガーの手応えはどうか。内のほうからはホワイトページ、さらにジレッドもこれに接近しています。
さあ第4コーナー回って直線に向きました。先頭はヤングアチーブ、リードは1馬身ですが外から襲い掛かるホワイトページ、赤い帽子が先頭。さらに外から追ってシヴァレンズ。馬場の真ん中からはエイトギースも来ている。内ラチ沿いからはブルベリブルー。
ここで抜け出したのはホワイトページ！　1馬身、2馬身！　2番手にはシヴァレンズか、エイトギースか。
先頭はホワイトページ、ゴールイン！
雨上がりの京都競馬場、勝ったのは6番ホワイトページ！
まっさらなページに、クラシック最後の冠を刻みつけました！
エスコートは君野佐知子！　先週の秋華賞に続いて、再び若い才能が大仕事をやってのけました！』

――ホワイトページ号で菊花賞を制しました、君野佐知子ジョッキーです。おめでとうございます。
『ありがとうございます』
――強い競馬でした。
『はい。入厩した頃から見てきた馬で、能力が高いことは知ってたので、きちんと引き出してあげれば大きな舞台でもやれると思っていたので、勝たせてあげることができてよかったです』
――走破タイムはレコードでした。
『あ、そうだったんですか。あー、気づいてませんでした。あはは……』

――レース前に末永調教師から何か指示はありましたか？
『前目につけたいということでした。私も後ろからよりは前のほうでレースがしたかったので、そうなってよかったです』
――君野騎手にとっては初めてのＧＩ勝利ということですが、実感はどうですか？
『ちょっと、ほわほわしてるというか、まだ実感はないです』
――検量室では他のジョッキーからも祝福されたと思いますが。
『はい。関東の方からも関西の方からも「おめでとう」と声をかけていただきました。ひとみさんからは潰れそうになるくらいギューって抱きしめられました（笑）』
――先週の福盛田騎手に続いて、同期での初ＧＩ制覇となりました。
『嬉しいです。私の中で、光は若い世代の中でいちばん上手なジョッキーだと思うので、ちょっとでも追いつけたかな、と思ってます』
――ホワイトページは今後は古馬との戦いになりますが、意気込みをどうぞ。
『はい。長距離・中距離で力を出せる馬で、今日もレコードで走ってくれた頑張り屋な馬なので、次のレースでもしっかり力を引き出してあげれるように頑張ります。これからもホワイトページを応援よろしくお願いします！』
――君野佐知子騎手、ありがとうございました。
『ありがとうございましたっ！』

明くる日、佐知子のＧＩ初勝利を祝う会がトレセンの食堂でおこなわれた。
かねてより親交のある女性騎手、関東の騎手はもちろん、関西から王子進之助や永吉真琴といったトップジョッキーが参戦したかと思えば、中央競馬への移籍の話題があがっている湖月美景の姿もあった。厩舎スタッフや記者たちも交えておこなわれた宴会はたいそう

盛り上がった。
　会がお開きになった後、佐知子は馬場を見渡すスタンドで風にあたっていた。
「サチ、ここにいたか」
「チョーさん」
「お疲れ。お前は本当によくやってくれたよ」
「ううん。私はレースに出ただけ。厩務員のみんなのおかげだし、チョーさんのおかげだよ。あとは……」
「アイツ自身の力、だな」
「うん」
　かつての相棒同士、そして今の師弟は多く言葉を交わさずとも互いに意図をくみ取っていた。
「やれやれ、ここまで来るのにいろいろあったな」
「そうだね。あっという間だった気もするし、なんだか長い旅をしてきたような気もするよ」
「……」
「ねえ、前に聞いたことあるかもしれないけどさ」
「なんだ？」
「チョーさんの夢って何？」
「……そうだな――」
　長介は被っていた帽子を外して、髪をかき上げた。
「どっかの危なっかしい弟子が早く一人前になってくれりゃあ、それでいい」
「うげっ」
「レコードタイムで走ったんだ。そのくらい把握しとけ。お前は一応ウチの厩舎の看板を背負ってるんだからな」
「はーい……」
「後は、長生きすることだな」
「長生き？　へえ、まあチョーさんらしいといえばチョーさんらしいけど――はぇ？」
　長介は自分の被っていた帽子を佐知子の頭に目深に被らせた。斜

めになったつばのおかげで、佐知子の視界は完全に塞がれていた。
長介の声が、次第に涙声になっていった。
「その……なんだ……どこぞの危なっかしい弟子の、夢が、叶うところを見届けてやりたい、と思ったからだ」
「えっ」
「お前を……」
「……」
「お前を二度も失いたくねえ……！」
長介は震えていた。
――佐知子の夢。
それは、五体満足で騎手を引退することと、結婚をすることだった。
それは、彼女がサーチライトだった時に果たせなかった心残りそのものだ。
「チョーさん……」
「無理するな、とは言わねえ。俺もお前も、どうせ勝負の世界でしか生きていけやしねえ職業なんだ。だから無理は承知だ。必ず、無事に帰ってこい」
「……」
「いいな？」
「……うん」
佐知子もまた、気づけば涙を流していた。
そのままふたりは、蹄鉄の止んだスタンドで、そっと互いの手を握り合っていた。

それからどれくらい経ったろう。
心の落ち着いた佐知子が、帽子を取って長介に被せた。
「ありがと。チョーさん」
「……ああ」
「次はダービーで、恩返しさせてね」
「お前がダービージョッキーになれるのか？」
「チョーさんがなれたんだもん。私にだってなれるよ」

「大層な自信だな……楽しみにさせてもらうよ」
「えへへっ」
佐知子はいつものように舌を出して笑った。
「でもね、実をいうと私の夢の片方は、もう叶いそう……なんだよね」
「……はっ？」
（あ、あれっ？）
長介の目つきが変わった。
「サチ、それはどういうことだ？　なんて聞かなくても分かるぜ。俺もバカじゃねえからな」
（あ、そういえばチョーさんにはこのこと内緒だったんだっけ？）

『おれたちのこと、末永先生には内緒で頼む』
『えーなんで？　チョーさん、光のことかなり買ってるよ？』
『それでもだ。いつか認めてもらえるようなジョッキーになれた暁に、末永先生にはおれの口から直接伝えたいんだ。だから、秘密にしておいてくれ』
『そっか！　わかった！』
（ごめん光……）
「どこのどいつだ？　どこの馬の骨ともわからねえ野郎だったら俺が根性を叩き直してやる」
「あ、いや、えーと、け、競馬のことならよく知って――」
「騎手か？」
「……チガウヨ」
「騎手だな？」
「んーっ！」
目を泳がせてバレバレな佐知子は、ゲート入りを嫌がりごねる馬のごとく口を堅く結んだ。
長介は目を血走らせて、かわいいサチを誑かした犯人を突き止めようとする。
「どいつだ？　若手か？　中堅か？　ベテランか？　それとも外人か？　ハッ、まさか王子じゃあないだろうな!?」

「なにもきこえませーん！　馬耳東風でーす！」
「なっ！　サチ、それが師匠に対する態度か！」
「あーもーっ！　この話終わり！　はい、帰ろ！」
「待てサチ！」